第一章

ハワイ・南北アメリカ

在ペルー浦添村人会結成20周年記念祝賀会（1953年）島袋博一提供

第一章　ハワイ・南北アメリカ

概　要　島袋伸三
第一節　ハワイ　石川友紀
第二節　アメリカ合衆国本土　石川友紀
第三節　ペルー　島袋伸三・前津政廣
第四節　ブラジル　島袋伸三
第五節　アルゼンチン　石川友紀
第六節　ボリビア　上原盛毅
第七節　南米からのデカセギ　島袋伸三

コラム　ハワイで出会ったウラシーンチュ　津波　清

第一章　ハワイ・南北アメリカ　概要

人口移動の歴史的発展からみると、北・南アメリカ大陸はヨーロッパとは大西洋の西に位置するとみることが妥当であろう。一枚の世界地図を眺めるとき、私達日本からみると北・南アメリカ大陸は広大な太平洋のはるか東方に位置している。しかし空間的配置からみると両大陸はヨーロッパから極めて近接していることが分るだろう。この両大陸を新大陸と呼んだのはヨーロッパからの発想であることは当然であろう。「新大陸」とは、つい最近人が住みついたことによる。それも西ヨーロッパからの大量の人口移動の結果であり、これら新大陸における国家の成立も新しいからである。

一方、古代の人類移動の歴史から展望すると、この新大陸には古くから南米の南端まで人類が広く居住した。それは氷河時代にユーラシア大陸と北アメリカ大陸が陸橋をつくった氷の道路を通ってユーラシア大陸の人々が大移動したからである。二～三万年前のことである。南米の南端のかつて「火の国」フエゴ島には殆ど衣服をまとわない先住民が生活していた。また一〇～十一世紀頃にはバイキングがカナダの海岸に居住していたことが考古学上広く知られている。それ以前にはグリーンランドと呼ばれるこの島は緑の草原であったのだ。かつてバイキングは羊の牧畜を行っていたことがあったという。

世界史において、アメリカの発見は一四九二年にコロンブスの航海によるものと定着している。いわゆる大陸大発見のさきがけであった。大陸発見から五〇〇年の節目になる一九九二年、アメリカ合衆国は大陸大発見五〇〇年祭を祝すべく企画したが、コロンブス以前の人類の営為を無視した発想は軽率なイベントとしていともあっさりと廃止された。

アメリカ合衆国・ハワイ

北米大陸の中央部に位置し、北はカナダ、南はメキシコに接し、東は大西洋、西は太平洋に面する。面積九六．九万平方キロメートルは日本の国土の約二三倍。ちなみに日本の面積はカリフォルニア州より小さい。一七八七年に独立した時の十三州はアパラチア山脈の東の海岸平野の地域だった。その国土面積は太平洋まで拡大、一八五七年にアラスカをロシアから購入、ハワイを合併し五〇州による合衆国となる。

ハワイ州は太平洋の中央よりやや東よりに位置し、西北から東南へ二五六〇キロメートルにわたって点在する一三〇の島々から成り立っている。ハワイは一八五〇年以降の砂糖産業の発展により、多くの労働力が必要となり他国から移民を導入した。沖縄からハワイへ渡った初めての移民は契約移民として一八九九年（明治三二）にサトウキビ耕地へ送られた二六人である。浦添からハワイへ最初の移民は、外務省の「海外旅券下付表」によると、一九〇四年（明治三七）の九人の自由移民であった。その後、ハワイへは数多くの人々が渡っていくことになる。沖縄県における移民数はハワイが最も多く、浦添市においても同様である。現在もその子孫である沖縄系の人々が多く暮らしている。

他に属領として、プエルトリコ、アメリカンサモア、グァム島などがある。一八六一年に南北戦争が起こり、一八六五年北軍の勝利となり国家統一が確立、民主主義として急速に発展し農業国から工業国へ進展。第一次世界大戦後、一九二九年に世界恐慌となるがニューディール政策で乗り切った。第二次世界大戦では連合国軍の指導国として勝利を得てついに西の強大な指導国となりソ連と対峙し長年にわたり東西の冷戦時代を経て産軍共同体の国家を確立している。しかし、朝鮮戦争、キューバ危機、ケネディー大統領の暗殺、そしてベトナム戦争で敗北した。政治は民主党と共和党の二大政党。社会的には中南米系移民の流入によりヒスパニックが増加している。冷戦時代は終わったがイスラム系社会との関係が二〇〇一年九月ニューヨークの国際貿易ビルなどの襲撃から悪化し、局地戦争からテロによる紛争にまきこまれ現在まで国際外交問題に苦慮している。

自然資源に恵まれ農業・工業の発展は著しい。巨大な消費国でもあるが特に化石燃料資源の利用が近年は安定している。

カナダ

本編では項目を設けていないが、戦前四〇三人の沖縄県出身者を含む三万五七七七人の日本人が移民したカナダについて触れておきたい。

浦添からカナダへの移民は、一九〇七年に三人、一九二二年（大正十一）に一人の渡航が見られる。四人とも男性で、字前田の出身であった。

カナダは北アメリカ大陸の北部に位置し、北は北極海、東は太平洋、北東部はバフィン湾などを隔ててグリーンランドに対している。北西はアラスカ、南はアメリカ合衆国本土に接する。面積は九〇八．五万平方キロメートルで世界第二位、日本の二七倍の広い国土を有する。全体として冷涼な気候である。最暖地は太平洋に面するバンクーバー島である。

歴史を見ると、十七世紀にはフランスがケベックに植民地を建設するが、一七六三年にイギリスの支配が確立した。一八六七年に自治領となり一九三一年に英連邦に加盟。一九五一年現国名に改称した。現在でも東部ケベック地方はフランス文化が濃厚で、国語は英語、フランス語バイリンガルである。カナダ行政区は一〇州と三準州で構成されている。そのうちヌナブット準州は、先住民の主張を受け入れて一九九九年に設立された。ヌナブットは私達の土地の意である。

広大な森林資源に恵まれており、鉱物資源も豊富である。石炭、石油、含有砂岩や鉄鉱石に恵まれ、石油はアメリカ合衆国に輸出している。農業も盛んで、良質の春小麦はアメリカ合衆国に輸出している。

ペルー

南アメリカ大陸の西部に位置し、太平洋に面している。標高五〇〇〇～六〇〇〇メートルのアンデス山脈が南北に伸びる。山脈の東はアマゾン川上流域の熱帯雨林地帯をつくる。太平洋に面する海岸は地形とペルー海流の影響で海岸砂漠を

形成しているが山地から砂漠に流れる河川が灌漑施設によって豊かなオアシスを形成し、国民の大半はこのオアシス地域に居住している。

紀元前からナスカなどの文明が栄え、十三世紀からアンデス山地のクスコを中心にインカ文明が成立。北のエクアドルからアルゼンチンまで街道を築いた。だが、スペインのピサロにあえなく征服され一五四三年にスペインの植民地支配の中心地となった。沿岸を北流するペルー海流の水域はかつてカタクチイワシが豊富で一九六〇年代までは世界最大水揚げ量を誇っていた。しかし、一九七〇年代にいたりエルニーニョが恒常化し高水温のため水揚げ量は著しく減少している。日本から南米への移民はペルーが最初の国である。

ブラジル

南アメリカ大陸の中央の東部にあり、国土は南アメリカ大陸最大で、ロシア・カナダ・中国・アメリカに次いで世界第五位で、日本の二三倍ほどの広さをもつ。ブラジルは北はベネズエラとギアナ、スリナム、フランス領ギアナと接し、北東・東・南東は太平洋に面している。南はウルグアイと、南西はアルゼンチンおよびパラグァイと、西はボリビアとペルーと、北西はコロンビアに接して長い国境線をもつ。

ブラジルの北部はアマゾン川と多くの支流からなり、国土の五分の二を占めている。アマゾン川の流域面積は広大で南アメリカ大陸全体の四〇%を占めている。河川の長さはナイル川に次いで二位だが、流量は世界第一位である。このアマゾン盆地は世界最大の熱帯雨林のセルバを形成している。ブラジルの北端にあるギアナ高地には山脈が連なり、ブラジル最高峰のネブリナ山（標高三〇一四メートル）がある。アマゾン地域の南に広がるブラジル高原は国土の約六三%を占め国民の大部分が居住。大西洋に面する海岸は低地や海岸平野が少ないが北東部の沿岸地域には細長い低地が点在し、湾状の入江がみられ主要都市が分布している。ブラジル北東の高原からサンフランシスコ川が流れる。その北にはトカチンス川がパラ川に合流しアマゾン本流の河口の南側にある河口から大西洋に注いでいる。

現在、行政区は二七州、一連邦直轄区に区分されている。一九八八年にトカチンス州がゴイヤスから分立した。首都ブラジリアは一九六〇年クビセック大統領時代に長年の首都リオデジャネイロからゴイヤス州に遷都した。

一五〇四年ポルトガル領となり、一五四九年にサルバドルに総督府を設置。一五八〇年にスペイン領となるが、一六四〇年に再びポルトガル領に戻る。一八〇八年ナポレオンに追われたポルトガル国王がブラジルに転住したが一八二一年に帰国。一八二二年に皇太子ペドロが独立宣言し皇帝に即位し、ブラジルはポルトガルから独立した。

サトウキビプランテーションが北東部において発展したが十九世紀にはコーヒー栽培が拡大し、ブラジルは世界最大のコーヒー生産国となる。世界恐慌のあとコーヒー豆の国際市場価格が下落し、政情不安を助長するが、軍部のクーデターによってヴァルガスが実権を把握、長期独裁政権は第二次世

界大戦終了まで続いた。

一九六〇年代末から経済成長が著しく「ブラジルの奇跡」と呼ばれた。世界で最大級のイタイプ水力発電所が建設され、一九七〇年代後半には当時経済活動で話題となった新興工業国群に名を連ねた。その後、アマゾン開発によるＤＮＡ改良大豆生産、牧畜の拡大などによるアマゾン開発、中央高原のサバンナ（日本政府推進のセラード開発）による農業地域の拡大、一九七〇年代から国策として推進してきたガソリン代替となったサトウキビからつくられるエタノール燃料、そして近年における大西洋沿岸部の海洋油田開発が続く。加えてミナス・ゼライス（鉱物の豊富な土地）の州名が示すように鉄鉱石、ボーキサイトなどの多様な鉱物資源に恵まれている。やがて一九八〇年代にいたると軍事政権の行き詰まりと経済面では国際収支の破綻などにより経済が停滞しインフレーションが国民経済を大きくゆさぶった。その結果日本など先進国への出稼ぎが常態化した。特に外国では最大のコミュニティを形成しているブラジルの日系社会の空洞化を誘発している。ブラジルは新しい転換期を迎えているといえるが、ブラジル社会全体としては貧困の撲滅が大きな課題である。

しかし、世界的展望からみるとブラジルは躍動の時代に突入しつつある。二一世紀初頭において大きく飛躍すると注目される国のひとつとしてブラジルが挙げられている。ＢＲＩＣｓである。その期待を象徴するかのように二〇一四年にはサッカー世界大会、二〇一六年にはオリンピックが開催される予定である。近年は政治体制もかなり安定しているようである。二〇〇三年に労働党のルーラが大統領に当選した。彼はファベラと呼ばれるブラジルの貧民窟で生まれた人物である。去る二〇一一年にはブラジル最初の女性大統領ジルマ・ルセフが出現した。

アルゼンチン

南アメリカ大陸の南東部を占め、チリ、ボリビア、パラグアイ、ブラジル、ウルグアイに接し大西洋に面する。ラプラタ川流域のパンパは広大な平原、北部のグランチャコは森林地、西部にはアンデス山脈が南北に走る。南部はパタゴニア地方と呼ばれる。

国土面積は二七八．〇万平方キロメートルと広く気候は変化に富んでいる。北部のパラグアイとの国境一帯は温帯気候で、特に夏季に高温多雨となる。パンパの平原は温帯で冬季に降雨があり、内陸および南部に進むにつれ乾燥が激しくなり、パタゴニア地方の一部は砂漠気候となっている。

チリとの境界をなすアンデス山地の北西部はインカ文明の一部であった以外はかつて狩猟民がわずかに生活する土地であった。しかし先住民の文化は多様であった。一五一六年ラプラタ河口に探検隊が到達し、一五七三年にスペインの支配が確立、一八六二年にアルゼンチン共和国となる。一九四三年にペロンらによって軍事政権を樹立。一九四六年ペロンが大統領となるが一九五五年クーデターで追放される。軍事政権が続いた。一九七三年民政移管後、ペロンが再び大統領と

なる。一九七四年ペロン死去後、妻のイサベルが世界初の女性大統領に就任。一九七六年軍部がクーデターで政権奪取、一九八二年はフォークランド戦争に敗北、その後、外交は混乱を極め軍政下において人権弾圧が発生した。一九八三年に民政移管。二〇〇三年にキルチネルが大統領に選ばれた。二〇〇七年にはキルチネル大統領夫人のフェルナンデスが当選し現在に至るが、政況はかなり安定しているといえよう。

農業生産は安定し、化石資源やその他の自然資源に恵まれている。かつて首都のブエノス・アイレスは南米のパリといわれた美しい都市である。南米では白人社会の文化を維持し教育レベルの高い国である。しかし、近年は債務返済がうまくいかず通貨が流動的である。そのため、都市近郊のスラム化が進行しつつある。

ボリビア

戦前ボリビアは日本とはなじみの薄い国であった。ボリビアは南はアルゼンチンとパラグアイ、西はペルーとチリに、北東はブラジルに隣接している。面積は一〇九．九万平方キロメートルで日本の約三倍の広さを有する。一五二七年にスペイン副王領の一部となり、古くはアルトペルーと呼ばれ鉱物資源の豊富な地域として知られた。一八二五年にペルーが独立、その後、資源や領土をめぐり隣国との戦争や紛争により領土の割譲を余儀なくされ、ついに独立当時の二五〇万平方キロメートルの国土は一〇〇余年後には半分以下に縮小し、あまつさえ太平洋の港湾と大西洋への河川水路を失い内陸国となった。海港の設置が長年にわたって渇望され、ペルーのフジモリ政権時代にボリビアの外港建設のためにペルーの南部海岸の借地が認可された。

緯度からみるとボリビアは熱帯地域に位置するが、標高はアンデス山脈では六五〇〇メートルであるがアマゾン盆地では一〇〇メートルほどしかない。この地形の多様な変化に対し気候は熱帯、冷帯、高山気候などのタイプがみられる。全体として地形は山地と低地に分けられる。高原を含む山地は国土面積のほぼ三分の一を占める。北部においてペルーとの国境にあるチチカカ湖からアルゼンチンとの国境一帯までアンデス山脈は二列の山系をつくり、その中間に標高三五〇〇メートルから四〇〇〇メートルにおよぶアルチプラノと称される高原が発達している。この高原に源をもつラパス川の谷頭に位置する都市が首都のラパス市で、市街地の標高は三六〇〇メートルである。近年谷頭一帯に急速に発達しているエル・アルト市に位置する国際空港の標高は四一〇〇メートルである。

ボリビア国土の三分の二の面積を占める東部低地はブラジルに注ぐアマゾン川の水系が発達する広大な北東部の沖積低地と南に広がるグランチャコと呼ばれる台地状の低地で形成されている。東北部の低地は熱帯雨林気候地域をつくり、かつてゴム生産が盛んにおこなわれた。日本移民が最初に移住したゴム生産地である。南部の低地は雨季（一〇月～三月）と乾季（四月～一〇月）が明瞭なサバナ気候（温帯寡雨気候）の地域である。植生は疎林と草原がつくる景観を呈し降水量は南への移行に伴い減少する。ちなみにサンタクルス市

一帯はサバナ気候の漸移地帯に相当する。標高六〇〇〇メートルの高山気候地域では高山氷河がみられる。冷涼な山地やアルチプラノではインカ文明の時代からジャガイモ、甘藷、トウモロコシなどが生産され高山動物のリャマやアルパカの飼育が行なわれている。チチカカ湖一帯はプレインカ時代から人口集中地である。鉱物資源は豊富で、石油、天然ガス、銅、鉛、亜鉛、スズなどに恵まれている。コロニアオキナワはサンタクルス州に位置している。移住地から北一〇〇キロメートルに位置するサンタクルス市は人口一四五万人で国最大の都市である。首都ラパス市の人口は七六万人。

以上日系移民の居住する主要国を挙げて概説した。そのためメキシコを初め中米と称される地域について割愛することにした。しかし地域として往々にして軽視されるカリブ地域について言及しておきたい。中米の西の海域カリブ海に広がる小島群が分布する地域がカリブ地域で、コロンブスが最初に到着した。現在はキューバ、ジャマイカ、ハイチ、ドミニカなどの他に多数の植民地小島が分布する。スペイン、イギリス、アメリカ、フランスなどの植民地であった。長年にわたる植民地時代にこの地域に独特の文化が創造された。近年文化研究において注目されているクレオール文化が栄華を極めた地域である。

西欧文明と対峙するラテンアメリカ

サミュエル・ハンチントンは一九九六年『文明の衝突』という著書を世に問い、将来のイスラム民族を中心としたテロリズムによる重大な世界的紛争の出現を預言した。彼は世界の文明について彼なりの定義と区分を行い、「さまざまな文明からなる世界（一九九〇年以後）」においてラテンアメリカ文明が存在することを提言している。ラテンアメリカ文明は西欧文明とははっきりと区別され独自性をもつ。元来、ヨーロッパ文明から生まれたにもかかわらず、特に新大陸において異なる道をたどって発展した。西欧文明は宗教改革の影響を受けてカトリック文化とプロテスタントの文化をからみ合わせてきたが、十九世紀まで資本主義は禁欲、節制、勤勉などの自己抑制のピューリタン的倫理観を基礎とした社会を形成した。歴史的にみてラテンアメリカはカトリックと共に新大陸の土着文明と混ざりあって発展したことに注目することが強調される。つまり、マックス・ヴェーバーが主張するようにラテンアメリカ文明はプロテスタントの倫理的厳しさとその結果、資本主義形成の充分な洗礼を受けていないという特徴がみられるという。さらに資本主義が健全な発展を推進するために重要な大前提をヴェーバーは強調する。それは国体において強力な官僚の存在であるという。周知のようにラテンアメリカのいずれの国家でも健全な官僚システムが確立されていない。政権が変わる毎に一族郎党が政府を管理する傾向が現存する。正常な政治経済の運営がうまくいかず、一九七〇年まで軍によるクーデターが頻発した。一九七八年六月、軽い頭痛を感じながらホテルの床についていると、夜中砲弾がこだました。その後二日間はホテルに閉じこ

められたことがあった、という個人的体験をした。

別の視点からみるとラテンアメリカ文明は西欧文明の下位文明と位置づけられることがある。特にアメリカ合衆国の影響は強大であった。政権の争奪やクーデターはアメリカ合衆国政府の操作によって頻発した。そのため、「ラテンアメリカはアメリカ合衆国の裏庭」と揶揄されてきた。勿論、アンチアメリカの動きはあった。一九五九年、数十年間アメリカ合衆国の傀儡政権に甘んじていたキューバのアゼンデ政権はカストロが奪回した。以後、ラテンアメリカの国々において植民地あつかいしつづけたアメリカ合衆国に対する反発は続いている。

近年、ラテンアメリカ諸国がかなり左傾化しつつある。特に二〇〇一年九月十一日の国際貿易センターやペンタゴンを襲撃したテロリズム事件を境に米国の南米に対する介入は目に見えて弱まる一方で、南米各国が米国の政治的制御をはねのける動向が顕著となっている。キューバのカストロに同調するベネズエラのチャベスは激しく反米体制をくずさなかった。ブラジルではファベラ（スラム）出身のルーラが大統領となり彼の後継者のルセフ大統領も同じく労働党から選出された。ボリビアでは先住民のモラレスが二〇〇六年に大統領となり二〇一四年一〇月には三選された。このように南アメリカの左傾化は現在でも動きがみられ、二〇一一年十二月には中南米カリブ諸国三三か国がベネズエラのカラカスでの首脳会議で「中南米カリブ海諸国共同体（CELAC）の設立を行い、「カラカス宣言」を採択し、共同体が正式に発足した。

ちなみに南北アメリカの国々は、北米が二か国、中米が八か国、カリブ地域が十三か国、南米が十二か国で構成されている。

以上、浦添からの移民は、南北アメリカ大陸のアメリカ合衆国本土、ハワイ、カナダ、メキシコ、ペルー、ブラジル、アルゼンチン・ボリビアの八か国・地域へはばたいていった。第二次世界大戦前、浦添から移民した一五六二人の約七七％に相当する一二〇〇人が南北大陸に移民している。そして戦後は特に南北アメリカ大陸でも南アメリカに集中して移民が送り出されている。

以下の章において私達浦添からの移民がどのように活躍したかについて詳しくみていきたい。

参考文献

・国本伊代・中川文雄『ラテンアメリカ研究への招待』新評論、一九九七年。
・田辺裕総監修『南北アメリカ』世界大百科事典三、朝倉書店、一九九九年。
・近藤健『反米主義』講談社新書、二〇〇八年。
・山本伸『カリブ文学研究入門』世界思想社、二〇〇四年。
・マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店、一九八九年。
・Preston E. James『Latin America』Third Edition, The Odessey Press, N.Y.1959
・和田昌親編著『ブラジルの流儀』中央公論社、二〇一一年。
・堀坂浩太郎『ブラジル：跳躍の軌跡』岩波書店、二〇一二年。

第一節　ハワイ

一　概　要

かつてハワイ王国として一国を維持していたハワイは、現在アメリカ合衆国の一州である。ハワイ州は太平洋の中央よりやや東よりの北緯十八度五四分から同二八度二五分まで、また、西経一五四度十七分から同一七八度三二分までの間に、西北から東南へ二五六〇キロメートルにわたって斜状に点在するおよそ一三〇の島々から成り立っている。その多くは無人島であるが、一般にハワイ諸島と呼ばれる地域は、ハワイ・マウイ・オアフ・カウアイ・モロカイ・ラナイ・ニイハウ・カホオラヴェの八島をさす。

ハワイ州の総面積は一万六七五九・三平方キロメートルであり、これは日本の四国の面積（一万八八〇一平方キロメートル）よりやや狭い。ハワイ諸島の面積をみると、大きさの順にハワイ島が一万四三三・一平方キロメートル、マウイ島が一八三三・七平方キロメートル、オアフ島が一五四六・五平方キロメートル、カウアイ島が一四三〇・五平方キロメートル、モロカイ島が六七三・五平方キロメートル、ラナイ島が三六四・〇平方キロメートル、ニイハウ島が一七九・九平方キロメートル、カホオラヴェ島が一一五・五平方キロメートルである。ちなみに、沖縄県の面積は二二七一・三平方キロメートル、その主島である沖縄本島は一二〇四・四平方キロメートルである。

ハワイの地形は噴火によって生じた島々であり、西北端のカウアイ島が最初にでき、しだいにそれより東南に延びてハワイ島にいたったものと言われる。そのため、東南寄りの島が新しく、この方面に活火山が多い。四島は山脈が縦横に走り、丘陵が起伏して山岳が多く、平野は比較的少ない。湖沼はきわめてまれであり、河川もカウアイ島に小河川が存在する程度である。活火山や休火山があるにもかかわらず、温泉の湧出はほとんど見当たらない。地質は火山岩が土壌化したものがほとんどで、農業に適し、観光にも適した景観を呈している。ビーチなど初期には手を加え、現在では自然的な観光地もワイキキの浜などよく見られる。

ハワイの気候は一年を通じて温和であり、日中戸外ではかなりの暑さを感ずるが、年中

北東から吹く貿易風の冷風に恵まれ、室内または木陰におれば快適である。すなわち、気温は一年を通じて最高が三〇℃、最低が十七～十八℃の間を上下し、水温はつねに二一℃である。雨季は十一月から翌年の四月までであるが、一年中降りつづくことはない。暴風雨もまれであるが、ハリケーンの襲来がたまにある。

ハワイの歴史をみると、世界に知られるようになったのは、一七七八年イギリスの航海探検家キャプテン・ジェイムス・クックによるハワイ諸島の発見に始まる。それ以前一五二七年スペイン船が近くで難破したという記録があり、また、十三世紀ごろから日本の漁船がしばしばハワイ諸島に漂着した形跡もある。しかし、ハワイの存在を初めて確認し、イギリス海軍卿の名にちなんで「サンドウィッチ諸島」と命名し、正式に世界に紹介した人物はクックであった。発見当時はハワイ諸島にはアジア人種を先祖とするポリネシア人であるハワイアンが二〇万人から三〇万人も住んでいたと言われる。

ハワイはこの先住民であるハワイアンにより、一七九五年以降カメハメハ一世に統一され、ハワイ王国が八代にわたり続いた。しかし、王国は一八九三年リリウオカラニ女王の時代に崩壊し、一八九三年から一九〇〇年までアメリカ合衆国の白人勢力により臨時政府の大統領サレフォード・ビー・ドールにより統治された。一八九九年にアメリカ合衆国に併合され、翌一九〇〇年に合衆国の準州（テリトリー）として発足した。以後六〇年間準州の時代がつづき、ハワイは一九五九年にアメリカ合衆国の第五〇番目の州となり、現在にいたっている。

ハワイは一八五〇年代以降砂糖産業の発展により一大発展をとげた。この砂糖産業はアメリカ・ハワイ互恵条約で、白人勢力の巨大資本により、中小工場はしだいに吸収され、砂糖プランテーションの五大財閥が形成された。その結果、ハワイでは砂糖生産が大きく伸びるとともに、世界の砂糖市場を支配するまでになった。

砂糖産業の発展により、ハワイでは多くの労働力が必要となり、他国や他地域から移民を導入した。一八五二年に中国人が最初で、ついでポリネシア人、ドイツ人、スウェーデン人が導入された。そして、一八八五年（明治十八）には、一八六八年（明治元）の「元

年者」についで、日本から官約移民が本格的な契約移民としてハワイに導入された。沖縄県出身移民は全国より約十五年おくれて、一九〇〇年（明治三三）に最初で最後の契約移民として、二六人がハワイの土を踏むことになる。

二　沖縄県出身移民の歴史

（一）沖縄県初回移民とその要因

沖縄県最初のハワイへの移民は、一八九九年（明治三二）十二月五日に那覇港を出帆し、鹿児島・神戸を経て、十二月三〇日に横浜港を出航したチャイナ号（外国船・五九〇〇トン）で、翌一九〇〇年一月八日にホノルル港に到着し、一月十六日に上陸を許可された二六人であった。このハワイへの移民の送り出しにあたっては、沖縄県と「県移民の父」と称される金武間切（村）出身の當山久三に負うところが大きかった。

表１は一八九九年（明治三二）現在の沖縄県における区・間切別第一回ハワイ移民数である。同表をみると、ハワイへの第一回移民の合計は二六人であり、これを区・間切別にみると、一位は金武間切の一〇人であり、全体（二六人）の三八．五％をも占める。二位は那覇区の六人で全体の二三．一％、三位は首里区と小禄間切の各三人で各十一．六％を占めた。以下、移民数は糸満・南風原・渡嘉敷・西原の各間切から一人ずつみられる。

ここで、明治三〇年代になぜ沖縄県から移民が出るようになったか、その要因を探ってみよう。すなわち、当時の県の政治・経済・社会的状況をみることにする。

沖縄県は一八七九年（明治十二）廃藩置県以後近代化途上にあり、旧慣が温存され、海外移民や県外出稼ぎには消極的であった。その後、徐々に日本本土の制度が実施された。このことは沖縄県にとっては改革とも呼べるものであった。

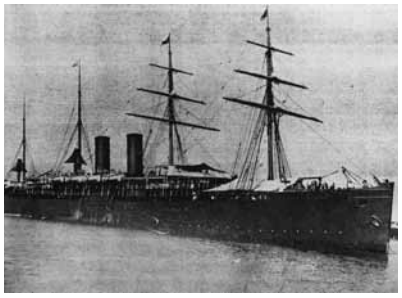
県に特別町村制が施行され、「間切」が「村」に改まったのが一九〇八年（明治四一）であった。また、初めて代議士（二人）が選出され、国政へ参加したのが全国に遅れること二二年後の一九一二年（大正元）であった。

このように、政策面で沖縄県は他府県に比べて立ち遅れたのであった。しかも、政府の

表１　沖縄県における区・間切別第１回ハワイ移民数（1899年）

区・間切名	移民数	
	実数（人）	構成比（％）
金武間切	10	38.5
那覇区	6	23.1
首里区	3	11.6
小禄間切	3	11.6
糸満間切	1	3.8
南風原間切	1	3.8
渡嘉敷間切	1	3.8
西原間切	1	3.8
合計	26	100.0

［注］資料の出所：沖縄県立図書館史料編集室（1992）『沖縄県史料』近代5・移民名簿Ⅰ、「渡航者名簿」4～6頁（石川友紀作成）



ハワイへの初回移民を乗せたチャイナ号
石川友紀提供

援助も少なく、政界・財界・教育界などの上位はことごとく他府県人によって占められ、沖縄県人の積極的意欲を阻害してきた。そのため、県人は自主性をなくし、ひいては社会を停滞させる原因となったとも言われる。

この時期はまた、沖縄県政史上最も長くその職にあり、種々批判をあびた第八代県知事奈良原繁の時代であった。かれは沖縄県から移民を出すことには当時の状況からして時期尚早であるとした。しかし、当時は自由民権思想の勃興した時代でもあり、ここに謝花昇とともにその方面の啓蒙家でもあった金武村出身の當山久三が移民推進論者として登場してくるのである。その後、當山の教え子であった同郷の「フィリピン移民の父」と称される大城孝蔵が出現する。時代は近代化のリーダーを必要としたのである。

県において土地制度の改革として、地割制の廃止が一八九九年（明治三二）から一九〇三年（明治三六）の五年間にわたって実施された。一八九八年（明治三一）十二月三一日出生者まで、村の共同体の一員として土地の配分を受けていた。一八九九年四月一日施行の沖縄県土地整理法により、県における最後の地割旧慣に従って実施された。土地整理の事業にはこのような土地所有権の決定のほかに、土地の測量、地価の査定が行われた。その結果、居住の自由も認められ、ある一定の土地に縛られるということもなくなった。すなわち、人口の移動現象がみられるようになった。そして、土地の売却や担保などにより資金の都合もつくようになると、海外への移民希望者も急増し始めるのであった。

土地整理事業以後は納税の義務として金納制が実施され、貨幣経済が村々に浸透し、それまで自給自足の生活に甘んじていた沖縄の農村社会が、近代化へと大きく発展していった。かくて現金収入を必要とする社会になるにつれ、村から出稼ぎが行われるようになった。この出稼ぎ現象で最も多かったのが海外への移民であり、沖縄県のいずれの村をとってみても、移民の母村と称されるほど、実に数多くの移民を出したのである。その効果として、海外移民からの送金や持ち帰り金により、母村の経済を潤していった。

実際城間出身の仲西蒲は、ハワイには出稼ぎとして渡航しており、一九四二年（昭和十七）には浦添に帰郷する予定であったが、戦争によりかなわなかった[1]。このような経済的

金武町にある當山久三の銅像　石川友紀提供

沖縄移民の父と称される當山久三　石川友紀提供

1　城間字誌編集委員会（二〇〇三）『城間字誌』第一巻「城間の風景」三〇六～三〇九頁、城間自治会。

成功をみるにつけ、移民が移民を呼び、周辺の村々を含めて、移民を推進させる要因ともなっていった。

（二）浦添出身移民の歴史

沖縄県からハワイへの第二回移民は、三年後の一九〇三年（明治三六）に自由移民として四〇人が送り出された。この第二回移民はすべて金武村出身の農民で構成されていた。しかも、同村出身の移民の指導者當山久三が引率した気心の知れた移民の集団であった。そのため、初回移民と同様、地縁はもちろん、血縁関係者も少なくなかった。その結果、移民同士の結束もよく、早くも郷里へ送金したことでも知られる。

一九〇四年（明治三七）になると、県下の市町村から多くの移民が出るようになった。同年、ハワイ移民が増加し、メキシコとフィリピンへの移民が開始された。翌一九〇五年（明治三八）には仏領ニューカレドニア島、一九〇六年（明治三九）には南米初のペルー移民、二年おくれて一九〇八年（明治四一）にはブラジル移民も開始される。

一九〇六年（明治三九）には沖縄県における移民の総数が史上最高の四六七〇人を記録するまでにいたる。その大部分はハワイ移民であった。この明治三〇年代から四〇年代にかけては、県内にハワイを中心とした移民のブームがみられた。その後、世界各地へ移民は継続し、大正期から昭和一〇年代までに、その大部分が送り出された。

浦添村からハワイへの移民は、外務省の「海外旅券下付表」によると、一九〇四年（明治三七）の九人の自由移民から開始される。その後、ハワイ移民は明治期と大正期に数多くみられるが、一九二四年（大正十三）の排日移民法により、日本人移民は一時帰国の再渡航者を除き、在米者の父母や養子の呼び寄せはもとより、いっさい渡米が禁止された。浦添からハワイへの移民も、一部は認められたものの、昭和戦前期には非常に少なくなった。

口絵表2は浦添村における渡航先地別・年次別海外移民数である。まず、渡航先地の欄をみると、ハワイから始まり、全部で一四の国や地域が記載されている。つぎに、年次の

1906年にハワイに移民した津波清太郎と親戚一家　津波清範提供

欄をみると、一九〇四年（明治三七）のハワイの九人から移民が始まり、一九四一年（昭和十六）のフィリピンの六人の終了まで、十四か国（地域）についての三八年間の移民数の推移が読みとれる。以下、その内容を分析してみる。

右端の合計の欄を渡航先地別にみると、移民数の一位はハワイの六〇四人であり、これは全体（一四〇二人）の四三．一％をも占め、圧倒的に多い。二位はフィリピンの三四三人で全体の二四．五％、三位はブラジルの二三三人で十六．六％、四位はペルーの一八〇人で十二．八％を占める。

以下、移民数が一〇人未満となり、メキシコの九人、ニューカレドニア（島）とアメリカ合衆国（本土）の各六人、シンガポールの五人、カナダ・英領マレー・アルゼンチンの各四人、ジャワ（インドネシア）の二人、香港とボルネオ（インドネシア）の各一人がみられ、全部で十四の移民先地に及んでいた。

この結果をみると、第二次世界大戦前浦添村における海外移民は、一九〇四年から一九四一年までの三八年間を合計すると、ハワイ・フィリピン・ブラジル・ペルーの上位四か国（地域）で全体の九七．〇％にも達し、他国（地域）への移民は少なかったことが判明した。

つぎに、同表により浦添村からハワイへの移民数について、年次別にその推移をみることにする。浦添村からハワイへの移民は一九〇四年（明治三七）の九人から開始されるが、翌一九〇五年（明治三八）に二一人と増加し、一九〇六年（明治三九年）には史上最高の一九四人を記録する。翌一九〇七年（明治四〇）にも六一人と比較的多かったが、一九〇八年（明治四一）の十三人から三年間は減少する。減少の理由は一九〇八年に日米紳士協約が締結され、日本政府が自主的にハワイを含むアメリカ合衆国への移民を制限したことによる。同年十一月以降、渡米旅券発給許否の審査を外務省で行うこととなり、アメリカ合衆国行きの移民が少なくなったのである。一九一一年（明治四四）の三〇人、一九一二年（明治四五）の五六人、一九一三年（大正二）の五〇人を記録したが、一九一四年（大正三）の十八人以後は減少し、大正期は一桁台から一〇人台とつづき、多くて一九一

1906年にハワイに移民した比嘉清貞さんの家族
比嘉武宏提供

内間出身の島袋嘉麻と妻
島袋博一提供

九年（大正八）の二五人であった。

大正末期の一九二四年（大正十三）の十七人まで、移民数は維持できたものの、同年七月排日移民法の実施により、浦添村からハワイへの移民数は、一九二五年の二人以後、翌一九二六年の四人、一九二七年（昭和二）の二人と減少し、昭和期はわずか一人の年次がみられるのみで、一九四〇年（昭和十五）の一人をもって終了する。

口絵表3は浦添村における字別渡航先地別移民数である。字名の欄をみると、牧港から始まり、最後の内間まで十四字となっている。渡航先地名の欄をみると、前記の表二にあった十四か国（地域）すべての地名がみられ、移民数の多い順に記載されている。そして、右端の欄は各字の移民数の合計となっている。

本項では、同表の内容として、ハワイ移民のみを取り上げ、その移民数の多い順に字ごとの実数と全体の比率をみることにする。ハワイ移民数の一位は城間の一三七人であり、これは全体（一四〇二人）の九．八％を占める。移民数の二位は屋富祖の九二人で全体の六．六％、三位は仲間の七四人で五．三％、四位は伊祖の七〇人で五．〇％、五位は前田の四〇人で二．九％を占める。

以下、移民数が四〇人未満となり、六位は宮城の三四人で全体の二．四％、七位は西原と内間の各三三人で各二．四％、九位は沢岻の三〇人で二．一％、一〇位は安波茶の二一人で一．五％を占める。以上のほか、移民数は牧港の十四人、小湾の十三人、勢理客の七人、仲西の六人となり、浦添村の全十四字からハワイへの移民がみられる。以上、戦前浦添村からハワイへ渡った年次ごとの移民数、いずれの字から移民が多かったかが判明した。

また、明治期以降の新聞記事よりその実態を探ることができる。たとえば、一九〇七年（明治四〇）十二月末日現在浦添村出身のハワイ移民数は二一五人で、送金高は二万五六一二円二七銭七厘であった。一九一五年（大正四）度末現在のハワイ在留者は三五六人で、九一六五円（平均二五．七円）の送金が浦添村にあった。[2]

2　それぞれ『琉球新報』明治四一年二月二七日、同紙大正五年八月三日の記事。他にも明治期以降の移民関係記事が浦添市史編集委員会編（一九八一）『浦添市史』第二巻 資料編一 浦添の文献資料に採録されている。比嘉徳著（一九一三）『中頭郡誌』中頭郡教育部会にも明治四四年十二月調の国別移民数や送金額が掲載されている。

三　移民先地での生活

本項では沖縄県出身移民がハワイに到着してのちの移民先地での生活の実態について、時系列を追ってみることにする。

ハワイにおける沖縄県系移民研究の第一人者崎原貢博士には、多くの県系移民関連の論文がある。そのうちのひとつ、「沖縄の移民たち」[3]の論文で県移民のハワイでの生活について、以下のような指摘をしている。

> 移民の生活について、ともすれば半奴隷的生活、酷使、奴隷的賃銀、粗衣粗食等と形容されたりするが、『沖縄救済論集』等に見られる当時の沖縄の農村と比較すると、それほど悪くはない。むしろ移民自身の不適格性、異境での精神的苦労や後年の向上・安定した境遇と比較することからの錯誤等がある様に感ぜられる。（二八四～二八五頁）

たしかに、一九〇〇年渡航のハワイにおける初回移民を始め、明治期から大正期にハワイのプランテーション農業を経験したかれらは、サトウキビ畑や工場で働き、苦労したことであろう。しかし、その労働に見合うだけの賃金が稼げ、郷里にいた時よりは一段とよい生活をし、故郷へ送金ができたことは、ハワイ移民は成功した移民であったと言えよう。このようなハワイ移民のよさの事例を崎原は郷里との比較でつぎのように把えている。[4]

> ハワイでは子供の養育は沖縄では夢想することもできぬほど行届いていた。食事がよいもので栄養も十分で血色もよく、元気で、皮膚病などいくら捜しても見当らない。それから教育は都会も田舎ももれなく学校へ出している。学令の子供で就学していないのは殆どいない。学校から遠い所では耕地会社が自動車で送り迎えをしているというのである。当時の沖縄ではまず考える事もできない状態である。（二二七頁）

3　崎原貢（一九八三）「沖縄の移民たち」『言語』第十二巻第四号、二八四～二八九頁、大修館書店。

4　崎原貢（一九八〇）「一九二〇年代のハワイの沖縄県人」『がじまるの集い…沖縄系ハワイ移民先達の話集』二二四～二二七頁、がじまる会。

移民した人々が子どもの教育をいかに大事に考えていたかは『浦添市移民史　証言・資料編』の証言からも確認できる。

比嘉カメ子（父は前田出身の島袋太郎、母は仲間出身のカメ）、津波清範（父津波清太、母ウシともに城間出身）、花子・レイチェル・城間（父は城間出身の與座仁松）、オトメ・宮平・サイキ（父は牧港出身の宮平安三）らは小学校に通ったことを語っている。

比嘉カメ子は、その後女学校へ進んでいる。花子・レイチェル・城間はパイナップルや砂糖を運搬する汽車でハイスクールへ通学したが、戦争の影響で学校が病院となったため、二年生までしか通えなかったと証言している。その後父の理容業を手伝うことになった。粟国亀子（父は城間出身の西原久亀）は小学校を八年まで出たが世界恐慌の影響で学校に通えなくなったという。その後はソーイングスクールで技術を身につけて、縫製工場に勤めた。

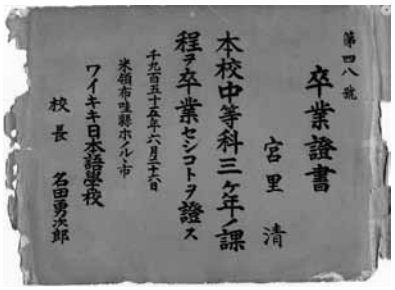
ノワキ・比嘉ジュンコの父比嘉三良（安波茶出身）は、父親の呼び寄せでハワイへ向かうが、到着時にすでに父常清は亡くなっていたため、兄に引き取られた。その際イミグレーションオフィスで、「働かせないで、ちゃんと学校へ行かせること」と書類にサインをさせられたという。比嘉三良は大学まで進み、夜間学校で移民たちに英語を教えた。

ハワイで生まれた宮城盛吉（父は伊祖出身の宮城蒲戸）は、一年生までハワイの小学校に通った後、沖縄に行き、尋常高等学校、県立二中に進んだ。弟は台湾の学校に進学した。十九歳の時にハワイに戻り、太平洋学院で英語を学んでいる。

その他多くの者が小学校を卒業後はハイスクールまで進学して、家計を支える職業に就いている。[5]

前記の「沖縄の移民たち」の論文のなかで、当時のハワイの県移民の職業について、崎原はつぎのように言及している。[6]

一九二〇年代にはまだ沖縄県人は耕地労働者が多かったが、耕地監督や請負による独立農業もふ



ホノルル市の日本語学校の卒業証書（1955年）
島袋博一提供

5　浦添市移民史編集委員会編（二〇一四）『浦添市移民史　証言・資料編』三〜二八頁、浦添市教育委員会。

6　前掲注3と同じ、二八五頁

えている。其の他ベイカリー、雑貨商、理髪業、風呂屋、自動車修理、牛肉販売等の小規模経営が増加している。出生率も高く、子供の健康衛生状態も良好で、教育も普及し、高等教育を受ける者も次第にふえている。（二八五頁）

ちなみに、大正期沖縄県移民一世の職業について、一九一八年（大正七）時点の実業之布哇社調査による『布哇之沖縄県人』中の「在布沖縄県人職業別人員表」を分析してみると以下のとおりとなった。ハワイの沖縄県移民の職業の一位は製糖耕地労働者の四〇三二人であり、これは全体（五一一一人）の七八．九％も占め、圧倒的に多かった。職業の二位は鳳梨（パイナップル）耕地日傭者の一五七人（全体の三．一％）、三位は鳳梨業者の八九人（一．七％）、四位はコックの七八人（一．五％）、五位は自動車業の七七人（一．五％）、六位は白人家庭奉公の七〇人（一．四％）であった。以下、七位は請負師及ルナ[7]の六七人、八位は商店員の五八人、九位は菜園業の五四人、一〇位は日雇働の五一人、十一位はミールメンの四五人であった。同表の一〇人以上の職業を数えると二二種、一人以上を数えるとハワイの県移民の職業は全部で五九種にも及んでいた。[8]

太田朝敷が布哇沖縄海外協会の招待により、一九二五年（大正十四）七月から翌年五月までの約一〇か月間、ハワイ各島を視察しての報告によると、上記の分析結果が実によく裏付けられている。[9]

数年前から合衆国の新移民法が実施されたので、今日では再渡航の外全く杜絶して居るが、そのかわり在留者の八九割は相当の家庭を造って居るので、年々生れる子供が少くはない今日ハワイ全島に於ける我が沖縄出身者の戸口は、正確のところは分らないが、戸数が四千内外、人口が一万七八千及至二万と推定されて居る。（十三頁）

我が県出身の在留者はどうかと云ふに、耕地労働者が多数を占めて居るが、あらゆる職業に手を出して居るので、今日では他の日本人を差別して見るやうな点は少しもない。只家族を呼寄せた年月が割合に浅い為、働き人の割合は他県の人々より少からうと思ふ。はたらきに於ては何れの人に

7　耕地の監督者

8　山里勇善編（一九一九）『布哇之沖縄県人』実業之布哇社を原典として、石川友紀（一九七七）「ハワイにおける初期沖縄県移民一世の歴史地理学的考察」『史学研究』一三六号、七四～七七、広島史学研究会に詳細にふれている。

9　太田朝敷（一九二六）「ハワイと沖縄との関係」『南鵬』第二巻第一号、十二～十九頁、沖縄海外協会事務局。なお、引用中の漢字は現代表記に改めた。

も決してひけを取らないが、まだ厄介者を割合に多く背負ってるだけは他県の人々より苦しい訳である（十四～十五頁）。

県出身者中には、医師も居れば、宗教家も居り、教員も居り、銀行会社員も居り、新聞記者も居り、雑誌の経営者も居り、商店を有って居るものも居り、土木の請負者も居り、土地の売買者も居る。独力で百六十英町（我六十四町歩）の土地を借りて甘蔗を作ってるものも居れば、百二三十英町のパイナップル畑を有って居るものも居る。（十五頁）

つい近頃まではハワイを腰掛的の出稼の地と考へて居たやうだが、今では郷里の事情もわかり、且つハワイの職業も昔とは違ひ、単なる日雇労役より請負になるものが多く、中には独立して種々の事業を経営するものも年々増加する結果、今日は永住の臍を固めたものが多数である。されば今日のハワイは単なる出稼地ではなく、我が沖縄県の延長と見るのが至当であらう。（十五頁）

浦添出身の移民一世は表２でわかるように「農業」「労働」「園丁」「請黍業（うけきび）」「鳳梨業（パイナップル）」などが多くを占め、その他の職業もみることができる。

表２　『布哇沖縄県人発展史』に見る浦添出身者の職業（人）

職業	現住島				人数の合計
	ホノルル市及びオアフ	馬哇島	布哇島	加哇島	
農業	2	8	28		38
労働	17			8	25
園丁	9	1	1	1	12
請黍業	4	3		4	11
線路係				5	5
グラージ働	4				4
鳳梨労働	1			3	4
野菜業	1	3			4
鳳梨業		2		1	3
会社員	2				2
自動車技師	2				2
大工	2				2
鳳梨工場員	2				2
理髪店主	1	1			2
馬使ひ		2			2
家庭奉公			2		2
メカニック	1				1
給仕	1				1
酒会社働	1				1
商店主	1				1
精肉店主	1				1
日語学校	1				1
乳屋働	1				1
溶接工	1				1
ミシニス			1		1
薬局主			1		1
養豚業			1		1
ポンプ係				1	1
給油所主				1	1
鉄管工				1	1
養鶏係				1	1
不明	1				1
	56	20	34	26	136

『布哇沖縄県人発展史』（加哇沖縄県人連合協会編、1941年）74-78頁をもとに作成。

城間出身の仲西蒲はマウイ島のキビプランテーションで「カチケン」と言われていたキビ倒し、水やりの作業をしていたと、息子の仲西ピーターからの証言がある。[10]

前田出身の島袋太郎は、カウアイ島のキビプランテーションで働いていたが、息子がホノルルで仕事を得ると、家族も呼び寄せられて、都市部での職業の一つであった庭掃除の職に変わった。

城間出身の津波清太は、副業が許され、収穫に応じてリース料を支払うということで会社の土地を借り受け、パッションフルーツを栽培した。津波家には当時耕地作業で使用していたランチボックスが大事に保存されている。

牧港出身の宮平安三はワイエフのキビプランテーションで働いた後、自ら農業を営み、ハス、大根、にんじん、豆を栽培した。城間出身の與座仁松はココモでパイナップルの仕事をしたあと、マカワオで理容業を営んだ。[11] 薬店を営んでいたものもいた。[12]

比嘉正範は「海外の琉球語―沖縄からの海外移住者の言語生活」（一九八三）のなかで、ハワイの沖縄県移民の言語生活について、以下のようにその特色を指摘している。[13]

> 言語的な面では、沖縄からの移住者はこれまで二重苦を味わってきた。このことは一般によく理解されていない、あるいは知られていないことである。社会言語的には、沖縄出身者の特異性は、言語的に二重の悩みを経験してきたということである。一つは、前述のように、移住先の国のことばの習得が難しく、言語的に満足できる市民生活や知的生活ができないという移住者全員に共通の悩みであった。これには、移住者が受け入れ国のことばで育つ子供や孫と充分に意志の疎通がはかれない悩みも含まれる。もう一つは、沖縄からの移住者は受け入れ国で、外国語の生活に適応しなければならないのと同時に、日本人移住者のいわゆる日系人社会で日本語の生活にも適応しなければならない悩みであった。外国に移住して、日本語のことで苦痛や屈辱を味わされることになろうとは、沖縄出身者にとって思いもよらぬことであり、皮肉なことであった。（九三頁）

浦添出身移民の子どもたちは、小学校の授業が終わると、日本語学校の授業を受けていた。[14]

農業労働者のランチボックス（2010年）
津波清撮影

10　城間字誌編集委員会（二〇〇三）『城間字誌』第一巻　三〇九頁。
11　浦添市移民史編集委員会編（二〇一四）『浦添市移民史　証言・資料編』三～二一頁。
12　比嘉武信編著（一九九〇）「県出身代表的人物」『新聞にみるハワイの沖縄人　戦前編』九九頁、比嘉武信。
13　比嘉正範（一九八三）「海外の琉球語―沖縄からの海外移住者の言語生活」『言語』第十二巻第四号、九二～九七頁、大修館書店。
14　城間字誌編集委員会（二〇〇三）『城間字誌』第一巻　三〇九頁。

四　移民先地でのコミュニティー

崎原貢はハワイの沖縄県移民の移民先地でのコミュニティー、いわゆる地域共同体、その組織づくりについて、以下のように指摘し、第二次世界大戦前には統合された沖縄県人会の組織はなかったとみなしている。[15]

> 第一回沖縄県人移民が到着したのは一九〇〇年であり、「ハワイ沖縄県人連合会」が設立されたのは一九五一年九月である。すると沖縄県人連合会が設立される迄五〇年もかかった事になる。五〇年間、一体何をしていたかというと、統合団体を作ってはつぶし、組織しては仲間割れをしていたというのが実情である。一九〇七年に沖縄県人会が組織されたが、二～三年で有名無実になった。その後、一九〇九年に「球陽クラブ」が組織され月刊機関誌『暁鐘』まで発行したが、『暁鐘』が先づ経営困難におちいり、続いて「球陽クラブ」自体も一九一三年頃自然消滅した。一九一七年には「布哇沖縄県人同志会」が発足し、毎月集会を催すなど内容も充実していた様である。ところが会員の入会資格を制限していた為に非難を受け、門戸を開放して「布哇沖縄県人会」と改称し、更に一九二五年に「沖縄海外協会」へと発展したが、約三年後消滅した。一九四〇年に玉代勢法雲と山里慈海とを中心にして「ハワイ沖縄県人会」が結成されたが、惜しい事に翌年末の日米開戦で凡て水泡に帰した。（八〇～八一頁）

しかし、崎原は沖縄県人会は創立されなかったが、早い時期から市町村人会や字人会のような下部組織は、ハワイに数多く設立されていたという。いわゆる、県人間の「ヤーグヮーチュクエー」（家づくり）である。

> ハワイ沖縄県人社会をもっと詳細に観察すると、前述したように全沖縄県人を代表する恒久的団体は戦前にはとうとうできなかったが、一方で市町村字単位の団体は非常に発達し、恒久的であることが判明する。例へば「金武村人会」などは一九〇八年に組織され、その後、太平洋戦争中戒厳令で一時停止状態にあった時期を除き、ずっと機能している。現在市町村字人会が少なくとも三九はあるが、大多数は一九一九年から一九三一年の間に結成され、戦時中を除いてずっと、活動をつ

15　崎原貢（一九八二）「ハワイ沖縄県人の団結力」『南島史学』二〇号、八〇～八五頁、南島史学会。

づけている。したがって明らかに、沖縄県人は意志薄弱故にまた共同一致の精神を欠く故に団体をつくれないのではないのである。沖縄県人移民の団結力には二つのレベルがあり、市町村字レベルでは非常に強靭な団結力を発揮するが、県人全体のレベルになると急に脆弱になるのである。（八一～八二頁）

今でこそ、ハワイの沖縄県系人はオアフ島のホノルル市を中心とした地域に大部分が居住しているが、戦前はハワイ諸島の島々にウチナーンチュの社会、いわゆるコミュニティーがあった。山里勇善編の『布哇之沖縄県人』（一九一九）の「布哇の沖縄県人と団体」によると、明治から大正時代にかけて早くも以下の四つの沖縄県人会と称する組織が創立されていることが判明した。以下、会の創設の早い順に掲載する[16]（引用者により句読点を付す）。

①**ケカハ沖縄県人会**：加哇嶋ケカハ耕地に在り。明治三十九年十一月の創立にして、當山哲夫氏を会長に、島袋章氏を副会長に、喜屋武盛著氏を書記として、同県人間の風紀改良、勤儉貯蓄の鼓吹に勤め、成績大に見る可きもの多かりしが、其後役員に幾多の変遷を来し、現役員は会長桃原牛範、書記古波蔵信正、会計仲村加那の諸氏が熱心に会務を執り居れり。（十七頁）

②**布哇沖縄県人同志会**：布哇沖縄県人同志会は布哇に於ける同県人団体中最も権威ある代表的団体と見るを得可く、其の会員は布哇各島の代表的有識者を網羅し、従来問題ある毎に指導者たる可き有識者間に意見を異にして、兄弟垣に鬩（せめ）ぐの愚を演ぜし弊を一掃し、共同一致の歩調を以て在留県人に関する諸種の問題を議し、以て同県人をして帰就に迷はしめざらん事を期し、進んでは県当局と謀りて、同県人移民の発展に貢献する目的を以て、大正六年一月二十四日に創立され、毎月一回當番幹事を推挙して、月次会を開き、一般同県人の進歩発展に資す可き事柄、其他必要なる事項を審議研究し、尚ほ、会員相互の向上を計る為めに、当番幹事の講演等あり。同会には常務幹事一名、及び毎月順次に當番幹事を推挙し、以て其の会務を執掌せしむ。現在会員は左の如し。（イロハ順）

16　山里勇善編（一九一九）『布哇之沖縄県人』「布哇の沖縄県人と団体」十六～十七頁、実業之布哇社。

當山哲夫（ホノルゝ）　當山善眞（カハルウ）
平良牛助（ホノルゝ）　田島朝明（ホノルゝ）
長田進吉（ワイメア）　仲間銀造（ホノルゝ）
上江洲智綸（ヒロ）　上里良温（ワイパフ）
上里由明（ホノルゝ）　小那覇三郎（ホノルゝ）
大城白銀（ヒロ）　山城秀正（ラハイナ）
山入端松正（ヒロ）　山城徳助（ホノルゝ）
山里勇善（ホノルゝ）　小波津幸秀（パイア）
宮里貞寛（ホノルゝ）　比嘉保徳（ホノルゝ）

而して、常務幹事上里由明、會計宮里貞寛なり。（十六～十七頁）

③**布哇島沖縄県人会**：大正六年五月の創立にして、當時の会員約五十名。会長制度を採らず、幹事制度として最初の役員は幹事大城長五郎、渡久知武福、神村盛宜、会計仲村昌廣、書記瀬底正良の諸氏にして、大正七年五月の総会に於て幹事制度より会長制度に変更す可く議決せしも、実行の運びに至らざるが如し。現在会員は約七十余名に達し、本部はヒロ市に置く。将来各館府に評議員を置き、各地同県人団体と連絡を執る方針なりと。（十七頁）

④**オーラア沖縄県人会**：同会は大正七年一月の創立にして、當時の会員百三名なりしも、目下は百二十名の多数に増加し、却々（なかなか）盛況を呈しつゝあり。最初の役員は会長神村盛宜、副会長比嘉正蒲、幹事上里宇志等の諸氏なりしも、第四回定期総会に於て役員選挙を行ひ、会長比嘉正蒲、副会長上里宇志、書記神村盛宜、会計比嘉松正の諸氏當選し、而して、各館府に幹事一名宛と九名の評議員を置き、毎月一回役員会を開き、同地同県人の為め最善の努力を尽す事に議決せりと。（十七頁）

昭和期に入り、一九三〇年代以降のハワイの沖縄県移民のコミュニティーについて、二世が台頭し活躍するようになり、太平洋戦争を経験して戦後の沖縄県人会発足にいたるまでの状況を崎原貢は、以下のように捉えている。[17]

一九三〇年代の初期からは県人子弟の間にもハワイや米本土の大学を卒業する者が出始めた。日

17　崎原貢（一九八三）「沖縄の移民たち」二八五～二八六頁

本語社会にとじこもらざるを得なかった一世に較べて、アメリカ教育を受けたこれらの二世達はより広い、英語社会に活躍し、沖縄県人社会の向上発展の先端に位置していた。

併し、沖縄県人社会に何よりも強い影響を与えたのは太平洋戦争である。要点を述べると、一、軍需景気で経済的地位が向上した事、二、二世部隊の活躍で、ハワイの社会内における日系人の地位が確立した事、三、戦時の危機感を共にする事でナイチ・オキナワの対立感がなくなった事、四、沖縄の戦災救援運動がカタルシスとなって沖縄県人社会が団結し、恒久的なハワイ沖縄県人連合会が発足した事、五、米軍政下の沖縄への援助・交流を通じて沖縄への関心が高まった事、六、戦時中日本語の公的使用が禁じられた事により、一世から英語族である二世、三世の世代へとリーダーシップ交替が促進された事等々である。（以上二八五～二八六頁）

ここで、沖縄県におけるハワイ移民の初期の歴史を振り返っておこう。ハワイへの第二回移民は一九〇三年（明治三六）三月金武間切出身の農民で構成された四〇人が送り出された。このハワイへの初回（一八九九年）および二回移民が、出稼移民として成功したことは郷里金武間切へ送金が早くも一九〇一年（明治三四）に五七六円も送られ、以後多額の送金が続いたことから証明される。その後、県からハワイへの移民数は一九〇四年（明治三七）に二六二人、翌一九〇五年（明治三八）に一二三三人、一九〇六年（明治三九）には県史上最高の四四六七人を記録するまでにいたる。

このように、明治三〇年代から大正時代にかけて、沖縄県から多数の移民をハワイへ送り出し、昭和時代に入ってからも断続的ながら日米開戦の一九四一年（昭和十六年）まで移民の送り出しは続いた。その結果、戦前県からハワイへの移民数は二万人を突破し、戦後移民と併せて沖縄県系人約五万人と推定され、広島・山口両県出身移民についで多い勢力を誇っている。[18]

ハワイの沖縄県系移民の職業についてみると、一世移民の大部分はサトウキビ耕地の労働者として出発し、パイナップル栽培の農業のほか、畜産業の養豚業や養鶏業、レストラン経営などで成功するようになった。移民子弟の二世や三世などはレストラン・スーパー

18　石川友紀（一九七四）「第三章　海外移民の展開」『沖縄県史』第七巻各論編六 移民、二〇五～二三〇頁、沖縄県教育委員会、を参照してほしい。

マーケットやコーヒー店、ガソリンスタンドなどを経営し、実業家・公務員・教育者・宗教家・芸術家などの分野にも職業が広がっていった。現在では二世・三世・四世は大学教授、・判検事・弁護士・医師・歯科医師・看護師・政治家・ジャーナリストなどあらゆる分野で活躍し、ハワイ社会の有用な人材となっている。

ハワイの沖縄県出身移民は、他府県出身移民に比べて、誠実で勤勉で忍耐強く、団結心が強いと言われる。なかでも団結心の強さは沖縄県民のもともと所有する血縁・地縁による共同体のつながりの強さと併せて、遅れてハワイ入りした後発移民が、多数派の先発移民に対抗する手段ともみなされよう。そして、今や毎年開催されるハワイの一大イベントとなった「オキナワンフェスティバル」にみられるような沖縄文化を維持・発展させてきた巨大なエネルギーをもつ琉球民族とも称すべきコミュニティーを形成してきていると言えるのではなかろうか。

つぎに、ハワイの沖縄県系人の市町村単位のコミュニティーとして、浦添出身移民に焦点をあててみよう。その前提として現在の「ハワイ沖縄連合会（Hawaii United Okinawa Association：略称ＨＵＯＡ）の組織と活動状況についてふれておこう。ＨＵＯＡは沖縄にルーツをもつハワイの沖縄県系移民によって一九五一年に設立されたＵＯＡ（United Okinawan Association of Hawaii）が一九九五年に改称したものである。ＨＵＯＡはハワイ在住の市町村字出身者とその子孫たち、オキナワンを基礎とする非営利組織である。二〇〇七年時点でＨＵＯＡは市町村団体四八組織と女性団体であるフィオラウリマや若者の団体四組織、合計五二の組織（メンバークラブ）の連合組織（組織名は省略）である。[19]

ＨＵＯＡの活動としては、英語の機関紙Uchinanchuを隔月に一万余部発行し、会館維持・管理のために、団体メンバーもち回りでボランティアの奉仕作業を行っている。そのメンバーのひとつとして浦添市人会（Urasoe Shijin Kai）が加盟している。長年会長を務めてきたのはハワイ三世のジョージ・コーゼン・宮城（みやしろ）で、市人会の会費は家族会費が年間十二ドル、個人が六ドルなどとの証言がえられている。[20]

二〇〇〇年一月にはハワイの沖縄県出身移民は一〇〇周年を迎え、盛大な祝典がホノル

ハワイ沖縄連合会が運営するハワイ沖縄センター（2010年）津波清撮影

19　佐藤万里江（二〇〇八）「ハワイのオキナワ料理の創造―女性団体出版のクックブックにみる文化変容」白水繁彦編『移動する人びと、変容する文化―グローバリゼーションとアイデンティティ』六八頁、御茶の水書房。

20　浦添市移民史編集委員会編（二〇一四）『浦添市移民史　証言・資料編』二四～二五頁

ル市で開催された。その記念にハワイ沖縄連合会は『TO OUR ISSEI…』（おかげさまで）というIssei Commemorative Bookletを発刊した。同書のIssei Listは一九〇〇～一九二四年間のハワイ渡航の一世の名簿であり、その内容は氏名・出生年・死亡年・到着年・出生地・島名・クラブコード（市町村字人会など）の順に四二市町村字クラブ名で登録されている。その基礎資料となったのは外務省の「海外旅券下付表」であり、その実態調査を行ったのは、二世・三世などを中心とした一世のルーツを探る全会員によるものであった。一世リストをみると、浦添市人会はクラブコード三八で、集計してみるとその数一一九人であった。一世移民総数が四五九二人であるので、ハワイに在住した（している）浦添村出身の一世移民は沖縄県全体の二．六％を占めていることが判明した。なお、一世移民でクラブコードがブランクで不明が少なからずいるので、一一九人よりは若干ふえる可能性はある。

浦添市人会は一九一二年（大正元）に宜野湾浦添同志会として共に互いを支えあうために創立、その後一九二二年（大正十一）に宜野湾と浦添の村人会に分かれ、現在に至っている。これについては、両市人会の一〇〇周年について掲載した『琉球新報』およびＨＵＯＡの機関紙から知ることができる。[21] 戦争の影響で日本軍の真珠湾攻撃のあった翌年の一九四二年（昭和十七）に同郷人会等は解散を余儀なくされ、浦添村人会も、ハワイ報知に次のような解散公告を掲載した。[22]

本会は時局に鑑み今回解散致し候間一般に謹告仕り候。
尚本会の基金（太平洋銀行預金）二百一弗九十二仙を米国陸海軍及び赤十字社へ寄付手続完了致し候に付き謹告仕候。
七月三十日　浦添村人会
全会員並に諸士。

その後の浦添村人会については、一九五四年（昭和二九）の邦字新聞に「浦添村人会…

21　『琉球新報』二〇一二年四月十六日　十三面　琉球新報社、『Uchinanchu』2012 March/April　一〇頁

22　比嘉武信編著（一九九四）「同郷会の解散が続出」『新聞にみるハワイの沖縄人　戦後編』二頁、比嘉武信。

内間安瑾」、一九六四年（昭和三九）のハワイ日本人移民史に「浦添村人会…又吉陽幸、一九四八年（創立）[23]、五〇名」とあり活動が確認できる。[24]

二〇一〇年一〇月にハワイ現地調査のため津波清氏（当時浦添市立図書館長）と筆者がオアフ島・マウイ島・ハワイ島を訪問し、浦添出身移民のインタビューを行った。その調査成果として、二世・三世の証言は『浦添市移民史』証言・資料編（二〇一四年刊）にまとめ、写真などの資料は浦添市立図書館で保管している。

二年後の二〇一二年三月二四日に宜野湾市人会との共催で浦添市人会の一〇〇周年記念祝典が開催された。浦添市出身でハワイ大学在学中の上間美香は、同祝賀会に出席し、「どんな苦境も乗り越えて一〇〇周年を迎えられたのは、『ゆいまーる精神』で支え合いながらコミュニティーを築き上げてきたから。（ＨＵＯＡ、市人会）これまで以上に浦添人であることに意識をするようになった。沖縄に対する熱い思いが、彼らの真剣に歴史を学ぶ姿勢、食、芸能から感じられる。また、後世にもそれを伝えようと必死に努力している。私たちも見習うべきことが沢山ある。合言葉は『Uchinanchu Aloha (Ichariba chode)』同じ浦添人としてこれからも交流を続けたい」との感想を述べている。

二〇一二年四月十六日付けの『琉球新報』社会面の記事では、ハワイの「宜野湾・浦添市人会　一〇〇周年　苦難乗り越え 支え合い」との見出しで大きく報道された。

浦添市人会のカジマヤー祝い、ヨシコ・大城さん（左端）とその姉妹たち（2012 年）UCHINANCHU 第 137 号掲載

五　アジア太平洋戦争とハワイ移民

（一）アジア太平洋戦争と沖縄県系人

一九四一年（昭和十六）十二月七日（日本では十二月八日）日本軍によるハワイ・ホノ

23　引用者により補う。
24　比嘉武信編著（一九九四）「同郷人会」『新聞にみるハワイの沖縄人　戦後編』五七一～五七三頁、比嘉武信。

浦添市人会100周年記念パーティーのケーキ（2012年）上間美香提供

ハワイのウラシーンチュ（2010年）石川友紀撮影

ルル市の真珠湾が攻撃された。ハワイの日本人にとっては寝耳に水で、日系人にとってはアメリカ国民に対して、敵性外国人となった。そのため、長年積み重ねてきた財産と職業・地位・信用など、ほとんどすべてを失うことになった。『ハワイ日本人移民史』（一九六四）の古屋翠渓「第五章第三節　太平洋戦争と日系同胞」によると、当時の現地の状況は以下のとおりであった。[25]

一九四一年（昭和十六年）十二月七日早朝、晴天のへきれき、電光石火のごとく、日本軍艦載機および潜航艇が真珠湾を爆撃し、数隻の戦艦、航空母艦、巡洋艦等を撃沈し、数千の死傷者を出したのである。

米国側でも驚愕はしたが、ろうばいはせず、即時応戦態勢に入り、同日午後四時頃から深夜にかけて、ＦＢＩと警察、憲兵隊が大活動を起こし、あらかじめ用意されていたブラック・リストおよび写真により、日本人有力団体の幹部、宗教家、日本語学校の校長、総領事館取次人等、指導的人物と目されていた人々数十名は、一夜にして一網打尽に逮捕され移民局に監禁された。

十二月九日、午前午後にわたって、約百名の同胞が砂島（サンド・アイランド）へ移され、米国陸軍三十五連隊の管轄下に抑留された。

その後、十二月十五日から翌年二月までに二百数十名の同胞が続いて逮捕された。これらの人々は、約二ヵ月半、砂島において言語に絶する苛酷なる取扱いを受けた。

一九四二年（昭和十七年）二月十七日、日本人百七十二名とドイツ人二十九名、捕虜第一号といわれた坂巻和夫海軍少尉も加わり、砂島からいったん移民局へ移されて準備をし、軍用船グラント号に乗船、二月二十日大陸へ向かって出航した。（一八七～一八八頁）

崎原貢は「ハワイ移民史神話」（一九九一）のなかで、太平洋戦争と戦中・戦後の沖縄県人の動静について、以下のように記述している。[26]

さらに、太平洋戦争のハワイ、米本土、沖縄への影響を比較してみたい。まず米本土では太平洋戦争勃発と共に日系人十二万六九四八人のうち、実に八九％にあたる十一万二五八〇人が西部沿岸

25　ハワイ日本人移民史刊行委員会編（一九六四）『ハワイ日本人移民史』ハワイ官約移住七五年祭記念、一八七～一八八頁、布哇日系人連合協会（代表者仲嶺真助）。

26　崎原貢（一九九一）「ハワイ移民史神話」『沖縄文化研究』十七、三一九～三三七頁、法政大学沖縄文化研究所。

州から追放され、強制収容所に監禁され、彼らは長年に亙って営々として築いた財産を一朝にして失った。沖縄では一九四五年の沖縄戦で沖縄本島が戦禍にあったのみならず、全人口の十五％にあたる凡そ十五万人が犠牲になった。それに比較すると、ハワイでは当時の日系人総人口十五万九五四人の一％にも満たない、わずか一四四四名の指導的地位にある人たちが抑留されただけである。のみならず、ハワイは全太平洋戦域の大兵站基地として軍需景気に沸き立った。月給生活者も相応に潤ったが、殊に必需物資生産者（農業や畜産業を含む）はみんな一躍成金になったといってもよいほどだった。ここで想起して欲しい事はナイチに比較して沖縄県人は遅く来布したため、第一次産業である農業や養豚、養鶏など、またレストラン業に圧倒的に多かった。所が皮肉にもそのお陰で、互いの相対的地位が交替し、砂糖耕地からいち早く都会に脱出したナイチから、オキナワ　ケンケン　ブタ　カウカウと馬鹿にされた沖縄県人の地位が比較的急速に向上し、ナイチに追い付いてしまった事である。（三二七～三二八頁）

この差別については、前田出身の父を持つ比嘉カメ子は兄に呼ばれて移り住んだホノルルで、日本語学校からの帰りにヤマトゥンチュの三歳くらいの子どもに「沖縄ケンケン豚カウカウとバカにされた、これは親が教えている。カウアイ島は小さい島だからこんなことはなかった」と語っている。[27]

島田法子はその著『戦争と移民の社会史』（二〇〇四）のなかで「オキナワンの戦争体験―オキナワンの差別と解放―」のテーマの第八章をもうけ、現地の新聞なども利用して、多くの示唆に富む移民研究者の立場からみたハワイの沖縄県系人について論述しているので、以下取りあげてみる。[28]

島田の第八章の内容構成をみると、前置きから始まり、①ハワイにおけるオキナワンの歴史、②沖縄からの移民に対する差別、③解放をもたらした戦争、④繁栄をもたらした戦争、⑤沖縄救済運動とオキナワンの連帯、⑥救済運動と沖縄文化のリバイバル、の章立てとなっている。

上記②「沖縄からの移民に対する差別」の項で、島田はつぎのような指摘をしている。

27　浦添市移民史編集委員会編（二〇一四）『浦添市移民史　証言・資料編』四頁。

28　島田法子（二〇〇四）『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争―』二二五～二五一、現代史料出版。

戦前、ハワイ カウアイ島で生まれた比嘉カメ子さん姉妹　比嘉カメ子提供

戦前のオキナワンとナイチの子どもたちが相互にけなし合った「はやし言葉」は有名である。ナイチの子どもたちはリズムをつけて「オキナワ・ケン・ケン・ブタ・カウ・カウ」（ケン・ケンは「県」、カウ・カウは、ハワイ語で「食べる」のことで、沖縄県人は豚を飼ったり食べたりする不浄な人だ、の意味）とはやしたて、オキナワンの子どもたちは仕返しに、「ナイチ・チガナイ」（ナイチは血がない）と言い返した。あるオキナワンの学生が書いているように、オキナワンの若者のあいだでは、「ナイチは自分たちのほうが上だと思っている」とか「ナイチは僕らを下に見ている」というような言葉をよく耳にしたのである（二二九頁）

島田は③「解放をもたらした戦争」の項で、以下のような戦後の沖縄県人の立場を説明している。

戦争はハワイのオキナワンに差別からの解放をもたらした。日系人のなかでも強制収容されるオキナワン指導者が比較的少なかったことが幸いした。そして日本の敗戦が、日本人移民のなかで最底辺に位置付けられ差別されたオキナワンを、精神的に解放したのである。祖国日本を瓦解させた戦争によってむしろ解放されたのは、歴史の皮肉といえよう。『ホノルル・スターブレティン』紙は、「第二次世界大戦が沖縄を日本の支配から解放した。数十年前日本は沖縄を侵略し征服した。それ以降沖縄人は日本人として分類されたものの、日本人は彼らを見下してきたのである」と述べている。オキナワンにとって、日本はアメリカの敵であるだけでなく、ハワイのオキナワンを間接的に抑圧してきた存在でもある、という二重構造をもっていたようである。戦略情報局の報告書は、戦争勃発が多くのオキナワンを解放し、優越感をもたらしたことを指摘している。（二三一頁）

島田はまた、④「繁栄をもたらした戦争」の項で、ハワイにおける戦中・戦後好景気の際に沖縄県人が経済的基盤を築いたと、つぎのように記述している。

戦争はオキナワンに繁栄をもたらした。日米関係が緊迫化するにつれてハワイのおける兵力は急

速に膨張し、また軍事労働者も流入してきたため、人口の膨張に伴ってハワイ経済は拡大を続けた。戦前から真珠湾を中心にハワイは要塞化され、大艦隊が集結し、何万人もの水兵と兵士が上陸した。この賑わいは、特にオキナワンの養豚業とレストラン業に好景気をもたらし、彼らが経済的基盤を築く絶好のチャンスとなった。（二三六頁）

前記島田が指摘したオキナワンの養豚業とレストラン業のうち、ハワイにおける沖縄県人のレストラン業について安慶名・ポール・良信の「ハワイにおけるレストラン業界」（一九七四）からその実態を取りあげてみる。[29]

戦前までハワイのレストラン業は沖縄人系の独占事業と言われていたが、終戦後米大陸からの資本家と日本からの食堂経営者の進出によって、いつの間にか沖縄人系の独占事業とは言われなくなった。

沖縄人でレストラン業界の先駆者は、元アメリカン・カフェーの主人、小禄出身の高良牛であった。アメリカン・カフェーは町の中心にあったので各国人種から大人気を博したものだ。先見に敏な高良氏は不動産に投資し、今ではレストラン業から引退しているが、沖縄人系では財界屈指の成功者にあげられている

戦前からのレストラン経営者は大小の差はあるけれどもほとんど経済的に成功している。特に不動産に投資した者が断然伸びている。戦前にレストラン業界で花を咲かせた老兵達は今やレストラン業から消えて行きつつあるけれども、時勢の流れを見るに敏な先輩諸兄が、一歩進んだビジネス界に進出し揺ぎなき基盤をかためつつあるのを見ると実に力強く感ずる。

左記のレストラン名と経営者の名前は戦前のものである。また現在では営業されていないレストラン名もある。また一部のレストランは、新しい経営者となっているが、最近は株式会社が多くなっているので、一々主人名をあげるのが困難であるがその点御了承を乞う。（註）新しいレストランの主人名は確認難のため省略します。また調査もれもあると思いますのでご諒承を願います。（二六二～二六五頁）

29　ポール・安ゲ名（一九七四）「三　ハワイにおけるレストラン業界」比嘉太郎編著『移民は生きる』二六二～二六五頁、日米時報社。

アメリカン・カフェー	高良牛
アラケヤ・グリール	沢岻蒲戸、比嘉繁
アロハ・グリール	照屋清光、ハバット照屋
チキン・グリール	大城ジョージ
ビーチ・センター	平安名次郎
ベレタニヤ・カフェー	照屋太郎
コロンビヤ・イン	金城源太郎兄弟
カレジ・ウオクダイナー	大城正一
カレジ・イン	瀬永レイモンド
デンバア・グリール	真喜志康輝
ダーダアク・カフェー	名幸蒲戸
エバ・グリーン	上原正義、金城春男
イリマ・ドライブイン	上原政次
ホノルル・カフェー	比嘉樽栄、安慶名良信
ジエット・バーガー・ドライブイン	宮里盛光
ハワイアン・カフェー	上原正一
ハレナニヤ	照喜名明昌兄弟
ハレ・カイ	宮平常喜
K、C、ドライブイン	安里次郎
ケワロ・イン	上原正義
カイムキ・イン	高良牛
カピオラニ・グリール	照屋三郎、上原蒲戸
カメハメハ・グリール	安里繁一兄弟
クヒオ・グリール	宮城亀盛
リケリケ・ドライブ	名幸蒲戸
マーケット・カフェー	大嶺亀太郎、大嶺源信
マッキンレイ・グリール	金城金盛
メルテン・パアト	沢岻蒲戸
メイフラワー	上原正義
モーリス・カフェー	島袋真栄（前主人）
ニュー・イーグル	呉屋、島袋亀千代、翁長助義
ニュー・アラケヤ・グリール	中原
オリンピック・グリール（アラモアナ）	湧川勝三、宮城亀盛
ルーズベルト・カフェー	宮平常喜
ローヤル・カフェー	天願三郎、安慶名勇雄
カフェー・スカイラーク	天願三郎
スマイル・カフェー	上原正雄（サム）
タイムス・グリール	照屋武雄、上原亀（前主人）
ヴァイオレット・グリール	幸地克盛（前主人）
ワイキキ・ダイナー	玉城テッド権助

一九七二年五月十四日（日本時間では五月十五日）沖縄が日本復帰した際、ハワイにおいても沖縄祖国復帰記念祝賀会が開催された。その時祝賀会に参加した比嘉正範が比嘉太郎編著『移民は生きる』（一九七四）のなかに「四　ハワイのオキナワ」と題して、ハワイのウチナーンチュとナイチ（日本本土）人との差別や偏見、アイデンティティの問題、また沖縄・日本本土・ハワイ・米本土の関係性などを記述した論文がある[30]。以下、同論文の一部を紹介してみよう。

ハワイの日系人社会では、ヤマトから来た移民をナイチと呼び、沖縄出身者をウチナンチュと呼んでいる（沖縄の方言では、ナイチャーとウチナーンチュになる）。この二つの呼称が二世の英語の中でまで日常化されていることは、「内地人」と「沖縄人」の区別意識と対立感情を如実に物語っている。復帰問題の話になると、必ずといっていい程、沖縄出身者も彼らの二世も、彼らがウチナンチュとしていかにナイチに差別されたか、いかにばかにされたか、情ない思いをさせられた

30　比嘉太郎（一九七四）『移民は生きる』四八～五九頁、日米時報社。なお、同比嘉正範論文は大田昌秀・大江健三郎編『沖縄経験』一九七二年第四号より転載とのこと。

かを具体的に例を挙げて、果てしなく説明するのである。（五〇頁）

皮肉なことには、養豚業に従事していたために、戦時中肉の需要が大きくなった時、大金持になったウチナンチュがいる。まさに、豚サマサマになったわけである。戦後は、日本でもハワイ日系社会でも豚肉に対する偏見がなくなり、ウチナンチュといわずナイチといわず豚肉を食べるようになったので、「オキナワケンケン　ブタカウカウ」は意味がなくなり、この文句も歴史のなかに葬られてしまった。豚肉に対するナイチの偏見がなくなった戦後のハワイでは、ウチナンチュに対する偏見も急速度でうすれてきた。しかし、ハワイの社会史や社会小説には必ずといっていいほどナイチのウチナンチュに対する偏見がとりあげられている。この偏見がどれほど強いものであったかがこのことからもうかがえる。（五二頁）

沖縄独特の姓も偏見を増進させたようである。ハワイで聞く耳馴れないウチナンチュの名前は、いかにウチナンチュがナイチ化することに努力したかを物語っている。儀武をヨシタケ、山城をサンキ、喜屋武をキヤタケまたはキヤブ、安次富をアジフ、津嘉山をツカヤマ、桃原をモモハラとハワイでは呼んでいる。

戦時中から戦争後にかけて養豚業がウチナンチュにとって経済的に有利に展開したのと同じように、沖縄独特の名前も劣等意識を脱却し、ウチナンチュに自信と誇りを与えるようになってきた。大変な変化である。ハワイ州の最優秀男子高校生にチネン何とか、女子高校生にマエシロ何とかが選ばれたとか、州の教育視学にミヤサトが任命されたとか、というニュースが発表されると、名前だけでウチナンチュであることがわかる。前述のように、政界、財界、実業界、教育界における日系人の「成功者」の中に沖縄独特の姓が目立つので、ウチナンチュは自ら能力と努力に誇りを感じている。（五三頁）

日本国の沖縄県とハワイのオキナワは今面白い対照をなしている。復帰が実現して、復帰を熱望した沖縄で心理的にも経済的にも混乱がおこり、復帰には反対だったハワイのオキナワは平静を取り戻し、太平洋のかなたから新沖縄県の発展を祈っている。そして、沖縄の同胞が一日も早く「復帰してよかった」と言えるようになるのを待っている。（五九頁）

ハワイの沖縄県系移民について、社会学・マスコミ学の分野から調査研究をつづけている白水繁彦はその著『エスニック・メディア研究』（二〇〇四）のなかで、ハワイのウチ

ナーンチュを以下のように捉えている。[31]

沖縄県人は、明治初期の「琉球処分」以来、国内にあっても海外にあっても他県人（ナイチ）に差別され続けた。労働の場や教育の場で隣り合わせになるナイチの人間から差別された。それは筆舌に尽くしがたい屈辱であったに違いない。ハワイのウチナーンチュは、第二次世界大戦前に個別に存在した字人会や村人会などの郷友会を大戦後、「母県」沖縄の援助のために大同団結し、Hawaii United Okinawan Association（ＨＵＯＡ）を結成した。一九五一年のことである（のち、OkinawanをOkinawaに改称）。以後、ハワイのオキナワ・コミュニティ全体を集団の範囲と設定し、村民や町民ではなく、ウチナーンチュというアイデンティティを確立すべく努力してきた。八〇年代にはそれが大きく実を結び、巨大な県人会館「ハワイ・オキナワセンター Hawaii Okinawa Center」の建設計画を発足させ、ハワイ随一のエスニック・フェスティバルと言われる「オキナワン・フェスティバル」をスタートさせた。そして、Uchinanchuという英語の機関紙（隔月刊、一万二〇〇部）とCATVのOleloに週一回のオキナワ番組『Hawaii Okinawa Today』を制作放送するまでになった。

現在のハワイのオキナワンはもはや差別の対象ではない。むしろ誇るべき出自となっている。しかし、だからこそリーダーたちは団結を訴え、ウチナーンチュ・アイデンティティの次代への継承を唱えなければならない。なぜなら、一般のウチナーンチュ、特に三世、四世にとってウチナーンチュの団結はさほど「必要」だとは思われない事柄になりつつあるのだ。二〇〇一年度のＨＵＯＡ会長であるジェームズ・イハが「ユイヌ　ククル」（結の心）というウチナーぐちをメインテーマに、「ウチナーンチュのこころを一つにしよう、われわれの将来のために」というフレーズを同連合会の年間の努力目標として、機関紙に掲げたのも、その努力の一環である。（四三頁）

（二）沖縄戦災救援運動

終戦直後の疲弊した沖縄県及び沖縄県人に対し、戦災救援運動と称して、ハワイを中心とした海外各国の沖縄県系人より、生活必需品としての物資、すなわち、食料や衣料のほか豚や山羊など多くの援助が寄せられたことが、戦後の沖縄の復興にとって大いに貢献を

31　白水繁彦（二〇〇四）『エスニック・メディア研究―越境・多文化・アイデンティティ』四三頁、明石書店。

した。同運動は海外在住の一世が、郷土の再建という共通の血縁的義務と民族的使命を痛感して立ち上がったもので、一九四五年から四九年までのほぼ五年間も続いた。それ以後においても、琉球大学設立のための支援など、一九五一年頃まで沖縄復興への援助が続けられた。

海外のウチナーンチュの戦災救援運動の団体をみると、一九四五年にハワイ、四六年にアメリカ合衆国本土、四八年にブラジル・ペルー・ボリビア、アルゼンチン、カナダ・メキシコなどに沖縄救援機関がつくられた。そして、多くの救援資金と救援物資が集められ、沖縄への輸送はその大部分をララ（アジア救済公認団体・ＬＡＲＡ）が受けもった。

救援物資の種類を挙げてみると、以下のように多種多様で、戦禍をこうむった沖縄現地で緊急に必要とされるものであった。

衣類・寝具類・食料・種子油・粉ミルク・ビタミン剤・石鹸・ノート・鉛筆・白墨・色紙・野球やソフトボールやテニスなどの運動用具・印刷用原紙やインク・ピアノ・オルガン・ミシン・工作用具・理科学実験用具・辞典などの書籍、サントニンなどの医薬品・靴・玩具・漁具・乳山羊・豚・豚疫予防ワクチンなど。

つぎに、ハワイの沖縄県出身移民が、戦後の沖縄の悲惨な状況を救済するために立ち上がった、現地の団体や個人の役割とその貢献について取りあげることにする。

崎原貢は「ハワイ移民史神語」のなかで、沖縄戦災救援運動のために、ハワイの全沖縄県系人が立ち上がったことを、以下のように指摘している。[32]

一九四五年に沖縄が戦禍にあい、その救援運動は小さい市町村単位では不可能で、全沖縄県人が一丸とならなければならなかった。それに又県人のみならず、ナイチも他人種の人たちも全力をあげて参加してくれた。こういう共同体験が小さい差別をなくし、大きく固まるのに役に立ったようである。

戦後沖縄が無期限的米軍占領統治下にあり、ハワイの沖縄県人社会が沖縄の救援その他の問題で有効に機能するには全沖縄県人を代表する機関が不可欠だったことも、沖縄県人連合会結成とその

集められた救援物資（1945年12月）
沖縄県公文書館所蔵

32　前掲注26に同じ、三三二頁。

継続、支持に強い影響があったといえる。（三三二頁）

比嘉武信は編著書『ハワイ琉球芸能誌』（一九七八）のなかで、「沖縄救済運動の顚末」と題して、新聞記事資料等より、初期のハワイにおける沖縄戦災救援運動の団体の成立と、その活動状況を以下のようにまとめている。[33]

①衣類救済運動　戦禍の沖縄から一九四五年九月ハワイに帰還した比嘉太郎一等兵の悲惨な現地報告を聴取した内外人有志により沖縄救済衣類運動会が組織され、安里貞雄氏を会計として多量の衣類を集めて、一七六九箱で一五一屯の衣類を米海軍の厚意で沖縄へ送られ、多数の戦災民を喜ばせた。これはその後続出した日本救済に先がけて行われた。

②沖縄救済更生会（原典では沖大と留学生）　有志により沖縄救済更生会が組織され、沖縄大学（仮称）の建設案を発表したが、軍部で琉球大学の計画があり、一九五〇年四月首里城跡に琉球大学が建設開校（実際は同年五月二二日に開学）された。沖縄大学と相並んで更生会では海外留学生派遣方を計画、一九四八年八月研究生として島袋文一、瀬長浩、留学生端山敏経、伊芸諒寛、長嶺文雄の五名がホノルル到着、アメリカの大学に給費派遣したのは空前の盛事として賞讃を受けた。その後沖縄進駐軍政府は多数の留学生を米国へ派遣するようになった。これは更生会の唱道実行したのを琉球政府がならうようになったものである。

③連合沖縄救済会　一九四七年十月、沖縄に豚を送るためハワイ連合救済会が組織され、一九四八年四月までに四七、〇九六ドル募金、豚五五〇頭を米本土で購入し軍用船で沖縄に輸送した。付添い人として山城義雄、仲間牛吉、渡名喜元美、安慶名良信、島袋真栄、上江洲安雄、宮里平昌の七名が沖縄へ同行した。次いで薬品、野菜の種子を飛行機で空輸、綿の種子も便船で送った。

④基督教後援会　一九四八年セブンスデー・アドベンチスト教会有志信徒が沖縄に乳山羊輸送の急務を痛感、沖縄復興ハワイキリスト救援会を組織し、会員から四万ドルを募金の上八百頭の乳山羊を二隻の輸送船に積み、第一班に山城松、外間盛安、屋比久孟吉、具志保男、天仁屋弘、第二班に沢岻徳一、安里周規、佐喜真彰、知念三良、城間次郎の十名が付添い、沖縄に安着、乳山羊を畜産課に引渡し、八月ハワイに帰着した。

⑤レプタ会　一九四六年七月、山城秀正医師のみさ夫人がレプタ会を創立。おかずを買った残り

33　比嘉武信（一九七八）『ハワイ琉球芸能誌―ハワイ沖縄人七八年の足跡―』、二八九～二九二頁、私家版、印刷製本：ハワイ報知社。

の金を貯めたのを集め、沖縄の夫人達に救済物資として衣類、書籍、文房具品、裁縫ミシン及び付属品一切、布地、謄写板及び付属品一切、理髪用器具一切、ランテン、食用油、種子、老眼鏡、自転車、蓄音機、オルガン、靴、玩具、キャンデー等を沖縄へ輸送した。

⑥医療救済連盟　一九四八年一月、沖縄の惨状を聞くに忍びず、ハワイ全島の同郷人、医師、歯科医師及び薬剤師らを網羅して沖縄医療救済連盟を組織し、不幸な沖縄人のために薬を送る大衆運動に着手し、同年三月約一万ドル価格の薬品を沖縄に輸送した。第二回も約一万ドル価格の薬品を輸送した。役員は会長平真輔、副会長新垣広、稲嶺盛栄、会計金城満二郎、仲松正雄、書記津波実直の諸氏である。

⑦沖縄復興連盟　一九五〇年三月沖縄相撲協会の島袋清、新里勝市、沖識名、新垣平三、上原正慎らの斡旋で、既存沖縄救済団体（ハワイ沖縄救済更生会、ハワイ連合沖縄救済会、沖縄復興ハワイ基督教後援会、医療救済連盟、レプタ会）の代表者五人づつを招待し、統一団体組織について懇談、三月十五日、ハワイ沖縄復興連盟が誕生した。各団体代表者は次の諸氏。（いろは順）

当山哲夫　金城善助　嘉数亀助　金武朝起[34]
玉代勢法雲　沢岻蒲戸　平真助　高江洲善英
仲嶺真助　上原与吉　上里文吉　上原ウシ
大城長亀　山城松十　山城松　山城義雄
小波津幸秀　天願保永　新川善繁　安里貞雄
新垣広　喜屋武盛条　儀間真福　宮里平昌
比嘉静観（二八九～二九一頁）

森本豊富は「第一〇章　沖縄と「県系人」との紐帯―移民と郷里のトランスナショナルな繋がり」（二〇一二）で、沖縄戦災救援運動の歴史的背景とその実態について、以下のようにまとめている。[35]

戦前の海外県系人の貢献は主に送金であったが、郷里支援事業として特筆すべきは、第二次世界大戦末期の三カ月余の地上戦で灰燼に帰した郷里への救済運動であった。沖縄救済運動の発端はハワイ在住の比嘉太郎（中城村島袋出身）による救援活動であった。日系二世で構成された第一〇〇

34　原文では「金城」となっているが明らかな誤りなので「金武」に改めた。ちなみに、「キン」ではなく「カネタケ」と読ませている。

35　森本豊富・根川幸男編著（二〇一二）『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化―過去から未来に向って―』第一〇章、一八八～二〇二頁、明石書店。

大隊の兵士としてヨーロッパ戦線で戦い、二度の負傷後米国本土にもどされた比嘉は、再志願して沖縄に向かう。沖縄の惨状を目の当たりにし、戦災民救援運動を海軍、国際赤十字、ハワイ日系有力者にはたらきかけて救援運動を開始し、全米一一カ所に委員会を置く在米沖縄救援連盟が組織された。カナダや中南米までも同じような組織が結成された。ハワイでは、ハワイ沖縄救済更生会、ハワイ連合沖縄救済会、沖縄復興ハワイ基督教後援会、レプタ会、ハワイ沖縄復興連盟が結成された。ペルーではペルー沖縄救済委員会、翌年にはニューヨーク沖縄救援連盟、ロサンゼルス・ソーテル委員会、カナダ沖縄救済連盟、ブラジル沖縄救済連盟、アルゼンチン沖縄救済連盟などが次々に結成された。救援物資は「ララ＝アジア救済連盟（ＬＡＲＡ）」を通して行われ、衣料品、医薬品、食料品、学用品などが送られた。具体的には、野菜の種子、漁業用具、豚や山羊と豚の予防注射液などが必要に応じて輸送された。一九四八年頃からは校舎復興資金、留学生呼び寄せ費、琉球大学図書館などの文化事業の援助などに重点が置かれるようになり一九四九年まで続いた。ハワイ救援協会としての活動は一九五〇年に終わっているが、「沖縄復興連盟」が一九五二年に解散して以降も、市町村単位で小学校への寄付などは続いた。例えば佐敷小学校には一九五一年にオルガン一台、図書や運動用具などの購入用の寄付金、一九五五年には「布哇村人会有志寄贈による校門竣工」という記録が残されている。学校では、ララ物資による学校給食が実施されていた。一九五三年以降は「リバック物資」に移行した。（以上一九二～一九三頁）

ここで、戦後ハワイから浦添村へ送られた戦災救援物資の事例をみてみよう。浦添初等学校および浦添中学校の『学校沿革誌』から記述を拾いだしてみる

浦添小学校へ送られた品々[36]

一九四七年四月二二日　ハワイ村人会ヨリ慰問学用品アリ
一九四七年五月二四日　ハワイ同胞ヨリ学用品届ク（二回目）
一九四七年六月十七日　ハワイ村人会より学用品の配給
一九四八年三月一〇日　ハワイ沖縄救済会よりノートの配給
一九五〇年二月一〇日　ハワイ村人会より左記学用品寄贈あり

36　資料出所：浦添初等学校編『西暦一九四六年以降学校沿革誌』

沖縄へ義援金を送るためにハワイで開かれたチャリティーイベントで琉球舞踊を踊る比嘉カメ子
比嘉カメ子提供

ノート一四九三冊、鉛筆一五一三本、ゴム九五三二、便箋四一、
バット二本
一九五〇年一〇月二一日　ハワイ村人会より、オルガン一台、柱時計一個寄贈さる
一九五二年四月二一日　ペルー在浦添村人会より義援金二万一〇六二円送金あり

浦添中学校へ送られた品々[37]
一九四九年三月三日　ハワイより帳面の寄贈あり
一九五〇年二月十一日　ハワイ村人会より学用品の寄贈あり
ノート（六二九冊）えんぴつ（六三八本）バット一本
消ゴム（四〇六）便箋（一七）

ハワイの沖縄県出身移民が郷里へ、戦後戦災救援運動として物資を送ったという証言は、二世の比嘉カメ子（大正六年生）さんから次のとおり得られた。[38]

戦後は沖縄の学校の生徒は鉛筆がない、紙がないってハワイの新聞に載っていたからね。だからハワイの人がお芝居して、私も「伊江島ハンドー小」したのよね。あのときの利益は全部アメリカの会社に送って、鉛筆とか帳面とか送って沖縄の学校に寄付したの。

37　資料出所：浦添中学校編『学校沿革誌　自一九四八年（昭和二三）四月一七日至一九八〇年（昭和五五）三月三一日』

38　浦添市移民史編集委員会編（二〇一四）『浦添市移民史　証言・資料編』五頁

第二節　アメリカ合衆国本土

一　概　要

二〇一二年現在アメリカ合衆国は、面積が九六二万九〇〇〇平方キロメートル、人口が三億一七五〇万五〇〇〇人であり、人口密度は一平方キロメートルあたり三三人である。合衆国の首都はワシントンD．C．で、二〇一一年現在郊外を含む人口は五七〇万四〇〇〇人である。[1] このアメリカ合衆国の面積は、ほぼヨーロッパ全体の面積に匹敵し、アフリカ大陸の三分の一に近い。これを日本の面積（三七万八〇〇〇平方キロメートル）に比べると二五．五倍となり、アラスカ一州で四．六倍、テキサス州で二倍、太平洋をはさんで日本と向かいあっているカリフォルニア州の一州にしても、日本より一〇％も広い面積を有している。

本項では日本人移民の多いカリフォルニア州の自然環境について記す。カリフォルニア州はアメリカ合衆国西部に位置し、面積が四〇万余平方キロメートルもある。沿岸にそって南北に走る海岸山脈と、併行してつらなるシエラネバダ山脈・カスケード山脈にはさまれたサンホアキン川の流れる低地グレートセントラルバレーとよばれる長さ七〇〇キロメートル、幅七〇キロメートルにも及ぶ沖積平野が北西から南東に伸びている。その中央に立てば、一枚四〇ヘクタールの田畑がつぎつぎとつづき、地平線や屋敷林に消えていくほど、広い大平原が見渡せる。同州は環太平洋造山帯に含まれ、日本と同様地震の多い地域である。州の南部から西部にかけて約一三〇〇キロメートルも続くサンアンドレアス断層の活動の影響で、毎年州の各地で大小あわせて何千回もの地震が発生している。

カリフォルニア州の気候は、地中海性気候である。海岸山脈の西側の海岸地帯は海洋の影響をうけて、各地とも内陸に比べて涼しい。また、緯度的に北部から南部に下るにつれて暖かくなる。ロサンゼルス市の八月の平均気温は二二．〇℃と東京の二四．六℃より低く、湿度は五九％で東京の七九％よりも空気が乾いている。同市の日較差は平均十一℃、年較差は九．三℃である。また、夏の最高気温は二六．六℃、最低気温は十五℃であり、最高気温で三二℃を超えるのは年間十四～十五日といわれる。サンフランシスコ市は同緯

1　矢野恒太記念会編（二〇一三）『世界国勢図会』二〇一三／一四年版、一五頁、三二頁、五七頁、八七頁、矢野恒太記念会。

度の他の地方に比べて、一般に冬暖かく夏涼しい。同市の平均気温は十四．六℃であり、日較差・年較差ともに七℃を示し、年中よく似た気温である。

このようなアメリカ合衆国の風土のうえに生活をつづけるのが、世界各地からきた移民とその子孫である。当然そこには人種的民族的な多様さがあるし、風俗・習慣・文化などともいろいろな差異がある。また、州というある程度の独立性をもつ制度を採用しているこの国では、その歴史的背景も州によって違う。

二　日本人移民の歴史

日本からアメリカ合衆国本土への移民は、一八六九年（明治二）在日オランダ人（一説ドイツ人）スネールが、福島会津藩の武士・大工など約二〇人を伴い、カリフォルニア州に若松コロニーと呼ぶ新しい植民地建設をしたのが始まりである。幕末から明治初年にかけては「外国人召連（めしつれ）」で合衆国本土へ渡航する者が少なくなかった。これについで、留学を目的とする書生の渡航が盛んな時期があり、出稼ぎ目的の労働者の渡航が目立つようになったのは明治二〇年代に入ってからである。

一八八二年（明治十五）アメリカ合衆国は中国人移民排斥法を制定し、中国人移民の入国を禁止した。その結果、それ以後合衆国西部地方の鉄道工事やカリフォルニア州を中心とする農園地帯に労力の欠乏をきたしたため、日本人移民を導入するようになった。

一八八五年（明治十八）に本格的に再開されたハワイへの契約移民（官約移民と称した）と並んで、一八八九年（明治二二）頃から日本から合衆国本土への自由移民の渡航が増加し始めた。一九〇〇年（明治三三）にハワイにおいて契約移民の入国が禁止されると、以後自由移民として日本人の渡米が盛んに行われるようになった。さらに、一九〇三年（明治三六）頃からハワイに在住している日本人移民のサンフランシスコへの転航（転住）が盛んとなり、日露戦争後に合衆国本土転航の全盛時代を形づくった。そのほか、北はカナダ、南はメキシコからも、合衆国本土へ入国してくる日本人移民も相当な数にのぼった。

一九〇七年（明治四〇）頃には日本人移民の基礎もようやく固まり、土地と密接な関係を有し、出稼ぎ労働者より進んで、定着時代に入った。また、カリフォルニア州の一部においては、さらに歩を進めて、企業経営時代に入った観もあった。しかし、日本人移民が増加するにつれ、太平洋沿岸、とくにサンフランシスコにおいて日本人に対する反感が強まり、一九〇六年（明治三九）末には一触即発の危機をはらむようになった。そして、ついに一九〇八年（明治四一）二月日米紳士協約が締結し、日本人移民の渡米は以後日本側において、自主的に制限するようになった。それでも、在留者の呼び寄せによる移民は許可されていたので、比較的多くの渡米者がみられた。そのなかでも、とくに妻や嫁の女性移民の呼び寄せが多く、大部分が写真結婚であった。

一九二四年（大正十三）はアメリカ合衆国へのすべての東洋人の移民が停止された年である。すなわち、合衆国はいわゆる排日移民法と呼ばれる帰化不能外国人移民入国禁止条項を含む「移民入国割当法」を一九二四年七月一日より実施し、日本からの移民は一四六人を許可するのみとなった。その結果、日本からアメリカ合衆国への移民は、以後まったくと言ってよいほど閉ざされることになった。

その後の日本政府の移民統計をみると、一九三五年（昭和一〇）一〇月一日現在アメリカ合衆国本土在住の日本人移民は約十一万二〇〇〇人を数え、うち八九．三％の約一〇万人が太平洋岸諸州に分布していた。その職業構成をみると、首位は農業で有業者四万人の約半数を占め、ついで商業が約九〇〇〇人、家事使用人が約三〇〇〇人の順であった。漁業に従事している者も、南カリフォルニア州のサンペドロ付近に約一〇〇〇人みられた。[2]

三　沖縄県出身移民の歴史

（一）沖縄県移民の歴史

沖縄県からアメリカ合衆国本土へ直接渡航した移民は、一八八九年（明治二二年）に那覇区字西出身の河（川）津恵三がカナダ経由で、カリフォルニア州に入ったのが最初と言われている。その後、一八九六年（明治二九）に比嘉統熙、一八九八年（明治三一）以降

2　石川友紀（一九七四）「第三章　海外移民の展開、二アメリカ合衆国本土」『沖縄県史』第七巻・各論編六、移民、二三〇～二四三頁、沖縄県教育委員会。

に西銘徳太・百名朝興・名護朝助・安元実徳らがカリフォルニア州に上陸している。

沖縄県出身移民が最初にハワイから合衆国本土へ渡ったのは一九〇一年（明治三四）（一説一九〇二年）である。金武間切出身の當山又助と宜野座牧助の二人の青年がサンフランシスコに着いた。両人は一八九九年（明治三二）に沖縄を出発し、翌一九〇〇年（明治三三）にハワイへ到着したハワイ初回移民二六人のメンバーであった。かれらはハワイでサトウキビ耕地の労働に従事したあと合衆国本土へ渡ったのである。この両人はその後サンフランシスコを離れ、鉄道工夫として内陸部で働いた。その後、當山又助はブドウの苗木栽培などの農園を経営し、七八歳で亡くなるまでカリフォルニア州フレスノ市に住んでいた。[3] それがきっかけとなり、ハワイから合衆国本土へ向かう沖縄県出身移民がふえることとなった。その理由はハワイよりも合衆国本土の賃金が高かったからである。

このように、合衆国本土への沖縄県移民は最初から、契約移民ではなく自由移民であった。その理由はアメリカ合衆国において、一八八五年（明治十八）に「外国人契約労働者禁止令」により外国からの契約移民の入国を、すでに禁止されていたからである。沖縄県の移民統計によると、県からアメリカ合衆国本土（当時、北米合衆国、北米、米国の名称が使用されていた）への移民は一九〇三年（明治三六）の五一人から始まる。これは集団移民ではなかったので、かれらが合衆国本土へ渡航していたという新聞記事は見当たらない。外務省の「海外旅券下付表」をみると、旅行（渡航）目的は「修学」がほとんどで、「学術研究」「農業視察」などとも記されているが、その大部分は出稼ぎ労働者であった。個人として渡航した沖縄県出身移民は、自由移民としておもに西部開拓に伴うカリフォルニア州を中心とした農園耕作や鉄道工事などの労働者として雇用されたのである。

沖縄県から合衆国本土への初回移民の五一人について、渡航があったかどうか疑問に思い、筆者が外務省外交史料館（東京在）で「海外旅券下付表」（分類番号三・八・五・八）を検索した結果、四四人の氏名（略）と属性が以下のとおり判明した。[4]

この合衆国初回移民四四人はすべて男性であった。全員に共通する事項は「旅行地名」は米国が大部分であるが、北米合衆国、米国桑港（サンフランシスコ）もみられた。「旅

3　石川友紀（一九七六）「沖縄県国頭郡金武村における出移民の社会地理学的考察」『琉球大学法文学部紀要』史学・地理学篇、第十九号、六〇～六一頁、琉球大学。

4　石川友紀（一九八七）「海外沖縄移民社会の歴史と実態―概説をかねて―」『海外おきなわ最新情報』二三～二四頁、沖縄タイムス社。

行目的」は移民ではなく、大部分が修学となっていたが、学術研究、商業、商業視察、農業視察、英語研究、英語並酒製造研究、漫遊の目的の事例もあった。

かれら四四人の合衆国への旅券「下付月日」は、一九〇三年（明治三六）四月から同年十二月までの八か月間に外務省から交付されたものであり、これにより集団ではなく、個人意志による自由移民であったことが判明する。また、四四人の「本籍地」をみると、沖縄本島の首里区・那覇区の都市出身者が多く、国頭・中頭・島尻郡出身者も、鹿児島県から寄留している者もみられた。ちなみに、同移民の本籍地を出身区・間切別にみると、一位は首里区が十八人で圧倒的に多かった。二位は那覇区が五人、三位は羽地間切が三人であり、以下、今帰仁・名護・中城の各間切が二人、本部・宜野湾・豊見城・玉城の各間切が一人と伊江島が一人であり、鹿児島県川辺郡東加世田村が六人、同県日置郡伊作村が一人であった。

かれら四四人の渡航時の「年齢」をみると、最年長は四二歳、最年少は十六歳四か月、平均年齢は二五歳二か月であった。この渡航時年齢を世代別にみると、二〇代が最も多く三〇人を占め、一〇代が七人、三〇代が六人、四〇代が一人の順であった。四四人の「族籍」をみると、士族が二二人、平民が二二人であり、その比率は五〇％対五〇％であった。また、「身分」（続柄）についてみると、戸主が十五人、非戸主が二九人と非戸主が多く、非戸主の場合、戸主との続柄をみると、長男が十一人、弟が一〇人であり、この両者が大部分を占め、次男が四人、養子が三人、孫が一人みられた。

この分析結果を要約すると、一九〇三年（明治三六）沖縄県からアメリカ合衆国への初回自由移民は、首里区・那覇区の士族が大部分を占め、中でも首里区出身者が四四人中十八人と全体の四〇．九％にも達していた。当時県在住の寄留商人と思われる鹿児島県に本籍をもつ者が七人もみられた。渡航時年齢は二〇代が多く、平均年齢は二五歳で男性のみで妻帯者が多かったと思われる。また、身分は戸主と非戸主の長男・弟が多く、士族と平民が半々であった。

沖縄県の移民統計によると、その後県から合衆国本土への移民は一九〇六年（明治三

九）の九二人となっているが、これは誤りで、実際は〇人である。同年の九二人は県からメキシコへの移民である。県やその後の引用者が原典としている『南鵬』第一巻第一号（創刊号）（一九二五）の「外国渡航許可人員調」の書き移しの間違いであろう。その原典からアメリカ合衆国本土（米国）への県移民数をみると、一九〇三年（明治三六）の五一人の初回移民につづき、翌一九〇四年(明治三七)に三人、一九〇八年（明治四一）に二人、一九一一年（明治四四）に五人となっている。合衆国本土への移民数は大正期に入り、一九一二年（大正元）の十五人から一九二四年（大正十三）の五九人までの十三年間分は県移民統計と『南鵬』創刊号統計は一致する。[5]

振り返って、沖縄県からアメリカ合衆国本土への大正期以後の移民数の推移をみておこう。合衆国本土への県移民数は一九一二年（大正元）の十五人以後二桁台を維持し、一九一八年（大正七）には九〇人と史上最高を記録する。移民数は翌一九一九年（大正八）の八〇人も多かったが、一九二〇年（大正九）には三五人と減少する。その後、二五人、三八人と推移し、一九二三年（大正十二）の六一人と翌一九二四年（大正十三）の五九人は大台を記録する。しかし、一九二四年の排日移民法の実施により、かけこみ移民も加わり、同年までは移民数が多かったが、翌一九二五年（大正十四）の四人以後は、一桁台に落ち、〇人の年次もあった。しかし、合衆国本土への移民数は一九三六年（昭和十一）に十六人、一九三七年（昭和十二）に二一人、一九三八年（昭和十三）に三六人と回復に向かったが、昭和期は全般にふるわなかった。

外務省の移民統計によると、一八九九年（明治三二）から一九四一年（昭和十六）までの四三年間の日本全国からアメリカ合衆国本土への移民数の合計は八万七八四八人であった。このうち、沖縄県出身の移民数は七二四人であり、これは全体の〇．八％を占めるに過ぎなかった。戦前直接県から合衆国本土への移民は、ハワイなどに比べて、大きな勢力とはならなかった。[6]

第二次世界大戦後、沖縄県からアメリカ合衆国本土への移民は、呼び寄せなどにより相当数あったと思われるが、その統計がみつからない。また、戦後軍人花嫁として合衆国本

5　沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課（二〇一二）『国際交流関連業務概要』平成二四年三月、一八四頁、沖縄県。又吉康和編（一九二五）『南鵬』創刊号、一〇三～一〇四頁、沖縄県海外協会。石川友紀（一九七四）「第三章海外移民　二アメリカ合衆国本土」『沖縄県史』第七巻、移民、二三八～二四二頁、沖縄県教育委員会。

6　国際協力事業団（一九九四）『海外移住統計』平成六年一〇月、一二七頁、国際協力事業団。

土へ渡った県出身者も多かったと思われるが、その実数は不明である。この合衆国本土には軍人花嫁も含めて県出身移民が広範囲に分布している。その最大の組織を誇るのはロサンゼルスの北米沖縄県人会であり、県人会の組織はサンフランシスコ・シアトル・アトランタなどハワイを含めると、二〇一二年現在、海外沖縄県人会名簿によると大小四七もあり、沖縄県系人の団結力の強さを示している。

（二）浦添出身移民の歴史

口絵表2は戦前の浦添村における渡航先地別年次別海外移民数である。同表をみると、浦添村からアメリカ合衆国本土への初回移民は一九一九年（大正八年）の一人である。その後、二回目が翌一九二〇年（大正九）の二人、一九二二年（大正十一）の一人、一九二四年（大正十三）の二人であった。その結果、戦前浦添から合衆国本土への移民数は合計六人であり、大きな勢力とはならなかった。

口絵表3は戦前の浦添村における字別渡航先地別移民数である。同表の渡航先地名欄をみると、浦添村からアメリカ合衆国本土への移民は、字西原から五人、字仲間から一人である。上記六人の合衆国本土移民を『浦添市移民史』証言・資料編（二〇一四）より拾いだしてみると、六人の氏名・身分（続柄）・本籍地・年齢（生年月日）・旅行（渡航先）地名・旅行（渡航）目的・（海外旅券）下付年月日は以下のとおりである。

①内間安綱：安亀長男・字西原二〇八八番地・十五歳五か月・米国（アメリカ合衆国本土）・父の呼び寄せ・大正八年五月十五日。（二七七頁）

②内間安珍：戸主安瑠□子男・字西原二〇八六番地・三二歳一〇か月・北米合衆国・再渡航・大正九年五月九日。（二八〇頁）

③内間ハル：安珍妻・字西原二〇八六番地・十八歳六か月・北米合衆国・夫と同行・大正九年五月九日。（二八〇頁）

④宮城高牛：戸主高亮三男・字仲間一五六番地・三六歳七か月・米国・再渡航。大正十一年四月七日。（二八二頁）

⑤比嘉常知：戸主常良長男・字西原十五番地・明治二〇年十一月十一日生・北米合衆国・商業の為め再渡航・大正十三年三月二五日。（二八三頁）
⑥比嘉サヨ：妻・字西原十五番地・明治四〇年二月二六日生・北米合衆国・夫と同行・大正十三年三月二五日。（二八三頁）

字西原出身の内間安珍は、一九〇五年（明治三八）に十五歳で父アンゼンと共にサンフランシスコに移民した。翌一九〇六年四月十八日に起きたサンフランシスコ地震を経験している。それから一年後、安珍はニューヨークに移り住み、ハウスボーイや有名な漫画家の家でコックとして働いた。安珍は一九二〇年（大正九）に一度沖縄に戻り、中城村出身の儀間ハルと結婚し同年再び渡米した。夫妻は最初、カリフォルニアのストックトンに住んだ。一九二一年、長男安理が生まれた。ストックトンからサンガーに移り、一九二三年二男の安松が誕生した。さらに南カリフォルニアのコビナに移り住み、一九二五年に三男の珪が誕生。またさらにストックトンの南にあるボールドウィンパークに移って、野菜やイチゴを栽培していた。イチゴ栽培で成功した内間家族は、農業をやめてロサンゼルスのダウンタウン地区にあるリトルトーキョーに移った。そこで小さなホテルを経営するが、ホテルを売り払って雑貨店を営むようになった。一九三一年（昭和六）家族はロサンゼルスの南西部に移住し、一九三六年に四男のフランクリンが誕生した。

戦争が終わり一九四六年（昭和二一）になると、内間家族は再びロサンゼルスのダウンタウンで小さなホテルの経営を始めた。この年、四男のフランクリンが病気のためわずか九歳で亡くなった。

長男の安理は一九四〇年（昭和十五）に日本に留学した。早稲田大学の建築学科を中退後、独学で絵画と木版画を学んだ。しばらく日本で創作活動を続けた後、一九六〇年（昭和三五）に帰米し活動拠点をニューヨークに移した。彼の作品は国際的に高い評価をうけ、彼の展示会は世界各地で開催されている。

二男の安松は一九四六年（昭和二一）、軍隊に志願し、朝鮮戦争の北線や日本にある米

家族記念写真（1933年）
『Seinan Southwest Los Angels』2010年

内間安松の小学生の頃の写真
内間安松提供

内間安珍・ハル夫妻とアメリカで生まれた安理・安松・珪
内間安松提供

軍基地でＣＩＣの任務についた。一九五一年（昭和二六）に除隊後、大学院で修士号をとり民間の会社に勤めた。退職後はロサンゼルスの日系人に関する歴史をまとめる執筆活動に取り組んだ。

三男の珪は、ＵＣＬＡを卒業、南カリフォルニア大学法科を修了し、弁護士として活躍した。北米沖縄クラブ（旧名称は在米沖縄救援連盟、北米で組織された沖縄県人会）の副会長も務めた。

戦後、安珍は郷土沖縄の復興を支援するため、在米沖縄救援連盟（のちに北米沖縄クラブ）の活動に積極的に参加し、ハルも北米沖縄クラブ婦人部の設置に際には役員として名を連ねている。[7]

ハルは一九六二年（昭和三七）に六〇歳で、安珍は一九七六年（昭和五一）に八六歳で、安瑆と珪は二〇〇〇年（平成十二）にこの世を去った。安松は健在で、二〇一〇年（平成二二）の浦添市移民史調査の際に協力いただき、その証言は『浦添市移民史 証言・資料編』に掲載されている。[8]

二〇一四年九月には沖縄県立博物館・美術館で沖縄ルーツシリーズ二として「色彩と風のシンフォニー／内間安瑆の世界」展が開催された。その際には安瑆の息子である安樹・洋子夫妻も来県している。

宇仲間出身の宮城高牛（一八八五年生）は、一九〇〇年（明治三三）に浦添尋常小学校高等科を卒業した後、沖縄県で土地整理事業に従事した。一九〇二年十八歳のときに単身ハワイへ渡航した。[9] ハワイで四年ほど働き、一九〇六年二二歳のときにアメリカ合衆国本土へ移った。ネブラスカ州の缶詰会社に勤め、翌一九〇七年にはシアトルでコックの修業をして一流ホテルのコックとして十三年間働いた。その後はアラスカ州へ移り船のコックとなった。一九二七年（昭和二）、四三歳のときに沖縄に戻り、字港川出身の女性と結婚、子宝に恵まれた。一九四三年（昭和十八）には家族で青雲開拓団として満州に渡ったが一九四五年に引き揚げた。満州では妻を失った。戦後は、米軍施設で通訳として働いた。[10] ボリビア移民の募集の話を聞くと、今度はボリビアへ行こうと長男の高進を誘った

キャベツの植え付け、デンバーにて。
内間安松・珪兄弟　内間安松提供

7　北米沖縄人史編集委員会編（一九八一）『北米沖縄人史』北米沖縄クラブ

8　浦添市移民史編集委員会編（二〇一四）『浦添市移民史　証言・資料編』三一―三二頁、浦添市教育委員会

9　「海外旅券下付表」によると、宮城高牛に最初に旅券が下付されたのは一九〇四年六月二八日で、目的地はハワイである。『浦添市移民史　証言・資料編』二三七頁。

10　宇仲間誌編集委員会編（一九九一）『字誌なかま』浦添市字仲間自治会、四二四―四二六頁

が、反対されてあきらめたという。[11]

四　移民先での生活

（一）日本人移民の生活

海外に在住する日本人移民について、筆者の見解を示しておこう。一世は日本国籍のまま、あるいは移民先国の国籍を取得していても、日本固有の生活と文化を維持し、日本人・沖縄人としてのアイデンティティを保有していると考える。現地生まれの二世は移民先で生活し、教育を受けているので、一世とは異なり、そのよって立つ基盤が違うため、現地中心の思考・行動様式をとり、つぎの二つのパターンが考えられる。そのひとつは一世の人生を見習い、親の職業を継ぐなど、一世側の世界に生きる例である。二つ目は親に反発し、言葉も不自由しないので、二世中心の広い世界で活躍し、移民先国の有用な人材となる例である。三世になると、二世とは異なり、移民先の国民としてのアイデンティティをもつようになる。そして、父母の二世よりも祖父母の一世に親しみを感じ、自己のルーツに興味をもつようになる。

このように、日本人移民の一世・二世・三世の思考・行動様式には大きな差異がある。そのため、移民先での生活や暮らしのなかでも、世代による相違が現れてくる。本項では一世紀以上の長い歴史をもつ日本人移民の移民先での生活に主体をおくが、二世・三世をも含めて、以下現地在住の移民研究者の研究成果を取りあげる。

日系二世のユウジ・イチオカ（市岡雄二）の『一世』（一九九二）によると、アメリカ合衆国の初期の移民の生活は、最下層の労働者から出発し、苦闘の連続であったと、以下のように記している。[12]

> 日本人移民の歴史は労働史でもある。南北戦争後の産業資本主義の急成長期に、非英語圏からの移民、おもに東欧・南欧からの移民がアメリカ産業界の要求する不熟練労働者階級を補充した。アメリカの西部では、日本人移民が都市のサービス業、農業、鉄道業、鉱業、林業、漁業に従事し

11　宮城高進の聞き取り調査により得られた情報である。

12　ユウジ・イチオカ著、富田虎男・粂井輝子・篠田佐多江訳（一九九二）『一世―黎明期アメリカ移民の物語り―』刀水書房。

た。都市でサービス業に従事したものを除き、日本人移民はすべて人夫請負という契約労働制の下で働く一般労働者として出発した。そして、減少し高齢化する中国人労働者にとってかわっていった。人夫請負制の中では、日本人移民労働者請負人は労働者と雇用者の仲介役を果たした。この人夫請負制は、日本人労働移民流入の最多期に盛んとなり、労働者を犠牲にして請負人と雇用者に利益をもたらした。人夫請負制の下では、日本人移民労働者の生活は辛苦と苦闘と犠牲の連続であった。（二頁）

また、ユウジ・イチオカは十八世紀末の合衆国本土の日本人移民労働者の日常生活を、つぎのように述べている。

世紀転換期以前に農業労働キャンプは粗末な状態であった。人夫請負人は配下の労働者団を引き連れながら、キャンプ地を転々とまわった。農場から果樹園までの長い距離を徒歩で行く場合もたびたびあった。男たちはたいてい、ベッド代わりに毛布を担いだ。「ブランケ担ぎ」とは文字通り毛布、すなわちブランケットを担ぐ人を指すが、渡り農業労働者を意味する日本語である。フレズノのキャンプが一番ひどかった。（九二～九三頁）

開国百年記念文化事業会編の『日米文化交渉史』第五巻・移住編（一九五五）は、外務省が外交文書などを活用して実証的にアメリカ合衆国の日本人移民史を詳細にまとめたものである。以下、合衆国における初期の日本人移民一世の生活の実態をみることにする。[13]

大都市でも農村に囲まれた小都市においても、日本人は場末の一地域に集って、日本人町を形成する風が強かった。初期に渡米した日本人が、サンフランシスコなどに上陸して、そこの古い借手もないような粗末な家屋を借りて住む。そうすると後から日本人が、その附近に住居をかまえる。近所の白人は日本人を嫌って次第に遠ざかる。白人住宅のなかに入って住宅をもとうとしても、いろいろの圧迫を受ける。というような次第で、日本人同士が次第に一区域に集って住むようになった。サンフランシスコでもそうであったし、ロスアンゼルスでもいわゆる小東京（Little Tokyo）

13　開国百年記念文化事業会・永井松三編（一九五五）『日米文化交渉史』第五巻・移住編、洋々社。

と呼ばれる日本人町が繁栄した。地方の小都市においても同様であった。（一九九頁）

家具や装飾もアメリカ風に近代化され、服装なども美しくなった。食事も、朝はコーヒーにトースト、それに卵やハムなどを加えたもの、昼は主にサンドウィッチ、そして夜だけが日本食をとるという家庭が多かった。朝から米飯の日本食をとるものは少なかった。休日など来客と会食する場合は、比較的安くて多人数が家庭的に会食できる支那料理店がよく利用された。サンフランシスコやロスアンゼルスには、日本流のすき焼や、すし・天ぷら・うどん・そばに至るまで街の食堂で食べられ、天ぷらの専門店などは、日本に住んだことのある白人の客も出入する有様であった。（二〇〇～二〇一頁）

同書は合衆国の都市における職業として、商業やサービス業としての旅館業・食堂・洗濯業が早くからみられ、庭園業としての庭師の状況、日本式の建築様式や造園技術などについても、以下のようにふれている。

日本人の商業としては、旅館業・食堂及び洗濯業がもっとも早く発展し、これについで食料品雑貨店・切花店などがある。ロスアンゼルス及びシアトルの旅館は、日本人よりもむしろ白人相手のものが多かった。

日雇労働者として特異な存在は庭師である。日本におけるとび職のように、一人の親方の下に幾人かの輩下があって、かれらは得意先の家庭を自動車で廻って、庭の植木の手入れや造園などの仕事をした。これは日本人の得意な仕事の一つで、白人間にも歓迎され、各都市で繁栄した。ことにオークランド、バークレー、サンフランシスコ、ロスアンゼルスなどの富裕階級の住宅地では、日本人の造園技術は高く評価されて歓迎された。また、日本人の建築業者は日本の様式をとり入れた家屋を建て、日本趣味をもつ白人に喜ばれた。日本人移民の渡米によって、日本式の建築様式や造園技術、あるいは天ぷらのような日本流の食生活などが導入されて、それがアメリカ人の生活の中にも浸透し、かれらの生活をそれだけ豊かにしたといえよう。（以上二〇一頁）

つぎに合衆国本土における日本人移民の農村の生活について、以下のような日本の農村

とは異なる広範囲の移動をし、きびしい労働にあけくれていたことが知られる。

農園専門の日本人労働者は、毎年まず二月ごろから始まるサクラメント及びスタクトン方面のアスパラガス農園の労働に従事し、それが四月ごろに終ると、ヴァカヴィル地方の桜桃が熟して、その摘採に移る。六、七月には、サクラメント河流域の梨や桃が出はじめる。それが終るとメロン類が熟するころになり、労働者はカルフォルニア州の中部から、遠く南部のインペリアル・ヴァレイまで下り、盛夏の苦しい労働に従事する。その仕事をすましたころには、中部カリフォルニアで、残暑のきびしいなかで葡萄の摘採がはじまる。これが大体十月ごろに終ると、次にはオレンジの実が熟しているという風に、農園の仕事は次から次に続いて、その間には大豆・トマト・馬鈴薯などの収穫もあり、働き口がなくなるということは、ほとんどない。

しかしその生活は、日本で想像するよりもかなり苦しいものであった。果樹園などのキャンプでは、寝台の設備のあるのは珍しい方で、床や荒板作りの箱のような寝床に枯草を敷いて、その上にカンバスを敷き、毛布をかぶって寝るのである。カンバスは、夜具などを包んで労働者が持ち歩いたものである。ときには、牛馬の飼料を入れてある納屋の片隅や、屋外の木の下などに寝なければならなかった。（以上二〇四頁）

最後に、アメリカ合衆国本土において、出稼ぎ傾向が強かった漁業移民の例をみてみよう。

農園労働者は金をためて故郷に帰るか、さもなければ土地を借り、あるいは買い入れたりして、土地に根をおろして生活し、都市では商店などを開いて、そこに生活の根拠を見出して定着して行った。しかし、漁業移住民については、ほとんどすべてが単なる出稼ぎに終った。

アメリカは賃銀がよく、まじめに数年間働けば相当の蓄財ができた。それをもって日本に帰ることが希望であり、理想であり、それが渡米決意の決定的な動機であったといえよう。故郷に帰って煉瓦造りの家を建て、荒れ果てた先祖の墓を立派にし、人手に渡った田畑を買戻し、村の学校にも若干の寄附をする。人生の快事これに過ぎるものはないと考えたものも多かった。もちろん、これは漁業移民だけでなく、アメリカ大陸への移住者のすべて、否ブラジルなどへ行った日本人移住民

の場合でも例外ではなかった。この点はヨーロッパ人の移民が、定着を考えて行ったものが多かったのに対して、日本人移住者の性格的な相違であった。（二〇九頁）

アメリカ合衆国本土における日本人移民の生活がよく記述されている書籍に、二世のハリー・H・L・キタノの『アメリカのなかの日本人』（一九七四）があげられる。そのなかから日本人移民の一世・二世・三世の特色について、以下拾いだしてみる。[14]

大部分の一世は農業労働者としてか、あるいは、小企業に職を得たが、それも、他の日本人に雇われるか、あるいは、自分で小規模な店を設立するかのいずれかであった。農業、小企業のいずれに従事した人たちにも、自家経営、ならびに、他の日系人との相互依存という傾向があった。

一世の子、つまり、二世は、大体において一九一〇年から一九四〇年迄の間に生まれており、一九六〇年代には、三〇歳から五五歳に達していた。この人等は、教育に対する親の態度の影響で、アメリカにおける教育の便益を十分に活用した結果、親である一世よりはるかに「アメリカ的」になった。しかし、この人等の就職の機会は、多数者集団による偏見と敵意のために、第二次世界大戦後に至るまでは大幅に制限されていた。（以上十三～十四頁）

一世は、一九六〇年代で大部分の者が七〇歳以上という年齢層に入るが、変ったと言っても、年齢が進むことによるあの避け難い方向以外は、今世紀初頭にアメリカへやって来て以来、一部の面でわずかに変っただけである。彼らは、今では失われている日本の時代の産物で、同調的で、勤勉で、集団ならびに家族志向型で、古風な価値、慣習、目標に執着してきたが、これらのことは、現在でも変らない。（二六五頁）

大部分の一世は、自分等の目先きの願望を満足させることよりも、子供等の将来の方に重きを置いて考えたので、今日の二世の成功は自分等の成功として評価しており、また、二世も、彼らの置かれた、日本文化とアメリカ文化の間の過渡的立場が困難なものであったという事実にもかかわらず、親の払った犠牲には報いているのが普通である。二世の学童などは、自分が多くの点で白人の学童と同じで、残りが日系人の親と同じだと考えていたが、アメリカの同輩からは「日本人」だと思われ、また、親からは無理解にもアメリカ人だと思われていた。（二六八頁）

二世は、専門職ならびに教育の分野で目ざましい業績をうちたてており、アメリカの多数者社会

14　ハリー・H・L・キタノ著、内崎以佐味訳（一九七四）『アメリカのなかの日本人　一世から三世までの生活と文化』東洋経済新報社。

の水準に匹敵するか、あるいは、これをしのぐものである。このことは、ともすれば階級差を招来しがちであるが、まだ無視し得る程度のものである。造園家、公認会計士、医師は、ゴルフのスリーサムといって差し支えなかろう。社交界にデビューする三世娘の父親は弁護士ばかりでなく、苗木仕立業者であることもあるが、これを、困った成り上りだと感じる人はほとんどいない。（二六九頁）

三世の場合、逸脱的行動の僅かな増加を示唆する根拠があるけれども、これまで二世について言えたことは三世にもあてはまる。無論この説明は、文化変容の大部分の判定基準によれば、三世は完全に白人の集団と同一視できるという事実に立脚している。三世対象のテストの結果、業績ならびに関心にみられる傾向、社会的価値、といったものは、典型的にアメリカ人のそれである。少年野球リーグ、男子学生の社交会、女子学生の社交会、その他アメリカのものをモデルにした組織に所属しているが、成員の大部分は日系人である。しかし、このような社会構造上の障壁さえも崩壊しつつある。三世の大学生は、日系人以外で構成される社交会にも今では時折参加しているし、また、異人種間の結婚も増加している。と言っても、やはり大半は、依然として同人種同士の結婚を望んでいる。しかし、一般的に言えることは、三世のものの考え方と行動は、典型的なアメリカ人のそれだということである。（二七〇～二七一頁）

（二）沖縄県出身移民の生活

崎原貢は「沖縄の移民たち」（一九八三）で、アメリカ合衆国本土における沖縄県出身移民について、その歴史と実態を以下のようにまとめている。[15]

一九〇一年に当山又助と宜野座牧助がハワイからサンフランシスコへ転住したのが北米移民の始まりといわれているが、又助が兄の久三宛にホノルルから出した前出の手紙は一九〇二年三月付である。従って北米移民の開始は早くても一九〇二年四月という計算になる。ともあれ、初期の北米移民はハワイからの転住が多く、約五〇人がサンフランシスコ地区にいた。ハワイと違う点は、最初から自由移民であり、職業も鉄道工夫、農園労働、コック、帝国平原での蔬菜栽培等多様である。またこれらの労働移民が行く前にすでに幾人かの留学生や商業移民がいて特色をそえ、仲村権五郎の如き人物が出ている。

15　崎原貢（一九八三）「沖縄の移民たち」『言語』第十二巻第四号、二八四～二八九頁、大修館書店。

一九〇六年のサンフランシスコ大地震では沖縄県人も焼出され、殆んどロスアンゼルスに移住した。そこへ同年メキシコから約三〇人の県人が合流し、以後同地が北米沖縄県人社会の中心地となった。併しカルフォルニアでは人種問題が激しく、一九〇六年のサンフランシスコ日本人学童排斥問題はハワイからの日本人移民の転航禁止に発展し、更に一九一三年の排日土地法に続き、一九二四年には排日移民法が成立した。そういう状況とあいまって沖縄県人にインテリが割に多かったせいか、左翼的進歩思想を抱く者がいた。それが一九二一年の黎明会運動となり、また一九三二年のロングビーチ共産党事件では沖縄県人青年五名が検挙されている。

排日移民法等のためか北米の沖縄県人移民人口の増加もゆるやかである。一九三四年の推定によると、一、二世合わせて約千人で、一九五五年の北米沖縄クラブの調査によると、一三六九人である。但し、多数にのぼると思われる所謂戦争花嫁やハワイからの移住者は含まれていない。またペルーから太平洋戦争中に北米に送られ、戦後定住した人々が含まれているかどうか不明である。同調査で興味深いのは一世の職業が二九種しかないのに比較し、二世の職業は五五種もあり、ホワイトカラーへの進出が目立つ事や全米に散らばる傾向が見られる事である。（以上二八七頁）

崎原が上記で人物名をだしている仲村権五郎は、アメリカ合衆国ロサンゼルスで日本人移民社会でも重要な地位につき、弁護士として活躍し、沖縄県人のリーダーの一人であった。かれが『南鵬』創刊号（一九三五）で「海外移民の選択」と題して、沖縄県出身移民一世の初期の実態を取りあげ、海外出発前の移民の生活で改善すべき点を指摘し、移民講習所の設置を訴えている。その意見は現在でも通用する点がある。[16]

不幸にして過去に於ける県出身の移民は其の教養に於いて他府県出身の移民に比し遜色があった。恐らく今日と雖（いえど）もさうであらう。我県移民の多数の中には無礼なる言動を敢てして恬として恥ない者があった。又誠に不体裁極まる服装や変な動作の為め啻（ただ）に外人に奇異なる印象を与へしのみならず、同胞移民よりも擯斥（ひんせき）され、侮蔑を受ける者もあった。其の甚だしいものになると他人より軽侮されても何等の痛痒を感ぜない者があった。此れも大悟徹底して居ることであるならば或は賞讃に価するかも知れないが、全然無智の致す所であると云ふことを知るに至っては唖然たらざるを

16　仲村権五郎（一九二五）「海外移民の選択 過去の失敗に鑑みて教養ある移民を望む」沖縄県海外協会・又吉康和編『南鵬』創刊号（第一巻第一号）二七～三二頁、沖縄県海外協会事務所。なお、原文中の漢字は引用者により現代表記に改めた。難読漢字にはルビを、句読点も適宜付した。

得ないではないか、否寧ろ憫然の至りである。此の如き醜態を演じられては甚だ困る。他の県人は非常に迷惑をする。何んとかせねばならぬ。只拱手して傍観して居るに忍びないとは、よく心ある県人の異口同音に言ふ所のことである。されど唯口に唱へるだけでは何時までたっても実蹟は少しも挙らない。唯徒らに彼等を責め、悲憤慷慨するに止らず、彼等の朦を啓き、彼等の向上発展を期すべく親切に指導する所があらねばならぬ。（以上三〇～三一頁）

それは移民講習所の設置である。是れは何も別に新しき場所に講習所の場所を設ける必要はない。那覇市と相談して小学校々舎を借用するか。又は官衙を利用して移民の為めに講習会を催す事である。是れは容易に実行の出来ることである。講習科目の如きも理想を云へば其の数が極めて多い。又講習期間も欲を云へば長い程それだけよい。然してそれには実行難が伴ふ。故に私は差当り極めて僅かの講習科目を選定し、移民出発一週間前に四五日間教授する事を慫慂したい。今左に私の必要と思ふ数種の科目を列挙して見ませう。

（一）精神講話　元来沖縄人は意思が頗る薄弱であって、小成に安ずる弊があり、相互に信用し、共同一致の精神に欠けて居る。今日流行の言葉を借用して言ふならば、所謂共存共栄の精神に欠けて居る。故に然るべき宗教家、若しくは社会教育家に依頼して精神修養の必要を力説して貰ふ事は極めて大切のことである。

（二）服装　特に婦人の服装には注意を与へること。

（三）礼儀作法及び正しき言語の使ひ方。

（四）姓名、生年月日、原籍及父母の姓名と職業を教へること。

而して右の講習をして最も有効のものたらしめんには、多少の干渉を試みる必要がある。凡て海外に渡航せんとする移民には或る程度の学校教育を受け居らざる者は必ず講習を受けせしむる事である。尤も第一科目は凡ての者に適用すべきもの。而して講習終了後、修業証書見たやうなものを授与し、それを所持せざる者には外国旅行券を下附せざる事、斯くの如きは個人の自由を束縛するやうなものだが、此れ即ち彼等自身の為めであり、同時に県人移民の価値を直接間接に高める所以であるから、決して非難すべき事ではない。（以上三一～三二頁）

前記仲村権五郎氏の一九二五年（大正十四）の移民講習所設置の提案は、前年一九二四年（大正十三）に沖縄県海外協会が官民合同で創設された時期にあたり、その後、開洋会

館が那覇市に一九三四年（昭和九）に設立され、海外移民のための教育や訓練が行われたことに結びついたと考えられる。また、海外移民子弟のための教育機関として、私立開南中学校（初代校長志喜屋孝信）が一九三六年（昭和十一）四月に島尻郡真和志村字与儀樋川原（現在の那覇市開南）に開校されたことも、県や県民の海外移民の重要政策がうかがえる。[17]

北米沖縄人史編集委員会編の『北米沖縄人史』（一九八一）は、第二次世界大戦前から戦後までのアメリカ合衆国本土における沖縄県出身移民の歴史と実態を詳細にまとめたものである。同書より戦前の沖縄県移民の県人会の設立状況と組織を拾いだしてみる。[18]

県人会の創立　その頃北加には桑港を中心として約五十名の県人が散在してゐたので、明治三十五年西銘、仲吉等の斡旋で桑港に北米最初の県人会が創立された。

県人会は彼等初期移住者に取っては、彼等の生活上の必要に駆られて産み出された最も適切な団体であった。其事務所は現今の様な単なる事務所と言はんよりは寧ろ彼等の合宿所と言った方が適当であった。彼等は之の合宿所を中心として仕事にも出掛け、失業しては舞戻り、夜になれば其の働き先きから恰も恋人にでも会いに行く様に数哩の道も遠いとしないで集って来た。得意話も出るし、失敗談もやった。英語やクックの講習もしたし、討論演説会も催した。而して、亦偶に日本から新来の客があると、彼等は亦此處に迎へて一切の世話を見てやり、夜は枕を並べて徹夜懐郷の話に耽った。（五〇頁）

れいめい会　前述（略）の如く県人青年は労働者として抜群の観があったが、彼等は亦、世界文化の変遷時代思潮等に対しても決して無関心で居ることが出来なかった。

当時欧州大戦終局を告げ、人類は其政治、哲学、芸術等文化の再清算をなすべき一大転換期に立って居た。殊に北欧ロシアに於てソビヰエート連邦の出現は確に全世界プロレタリアートに一大警鐘となり、プロレタリア運動、プロレタリア文化建設の思想は実に全世界を揺り動かして居た。こう言ふ世界思潮は亦移民地に於て意義ある生活に憧がれて居た敏感な県人青年労働者の心にも浸潤して来ずには居なかった。

17　第二次世界大戦前の沖縄県における海外移民教育・開洋会館・開南中学校などについての詳細は、以下の論文を参照してほしい。①石川友紀（一九七七）「第二次世界大戦前の沖縄県における海外移民教育について」沖縄県高等学校海外教育研究協議会編『海外教育』第六号、十一〜三九頁、同協議会。②石川友紀（二〇〇三）「九章昭和初期の沖縄県移民の特色と教育」小島勝編著『在外子弟教育の研究』二八八〜三一五頁、玉川大学出版部。③石川友紀（二〇〇五）「第五章沖縄県の移民教育」吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』一三九〜一六六頁、日本図書センター。

18　北米沖縄人史編集委員会・若夏社編（一九八一）『北米沖縄人史』北米沖縄クラブ。原文中の漢字は引用者により現代表記に改めた。難読漢字にはルビを、句読点も適宜付した。

羅府県人青年には又吉淳、屋部憲傳、幸地新政等を先輩として、喜屋武[19]盛條、照屋忠盛、松田仁吉、大城善貞、渡久地政郷、同政信、仲村幸輝、山端大佐、宮城與徳等の青年達が居ったが、彼等の中で屋部は一人妻帯し家庭を持って居たので、彼等青年も自然其の家庭を中心にして集る様になった。屋部の家は外観一見空家の如く、中には室を飾る家具もなく、只パーラーには中央に素朴なテーブルをかこんで数脚の木のチェアーを置き、食堂との間には彼等の唯一の自慢であった與徳の描いた『死の曲』と題する大きな油絵の幕を下げ、食堂には軍用品のお下がりの鉄のカットベットを四、五台並べて寝室とした。

彼等はそこで良く読み、良く論じ以て一年中の知識欲をよく冬期間に満たして居たが、然し農園働きの豪の者達も市内労働にはサッパリ要領を得ず、為めに其の共同生活は経済的には頗(すこぶ)る惨胆たる処があった。

一九二一年、之等の青年を中心として羅府にれいめい会を組織した。毎週土曜日の晩、バンニング街玉城長四郎経営のホテルに会合して、哲学、宗教、科学、芸術、社会問題等を研究した。（以上六七～六八頁）

在米沖縄青年会の設立　れいめい会が全然青年独自の発意に由る団体であったのは当時県人会先輩の反感を買う事になり、茲に両団体は漸次相反目する事になった。之はやがて思想的衝突にまで発展し、彼等は危険視され、不良視された。而して県人先輩でも上間清[20]十郎、安仁屋政修等は時々れいめい会にも出席して講演等をした事があったが、県人会の幹部であった又吉倫祥、太田蒲戸等は極力之を異端視し、そして県人青年の思想善導と言ふ見地から、最近日本から渡米して彼等が最も堅実で理想的青年だと信頼して居た新垣武久を推して、在米沖縄青年会を設立させた。

かくて青年会は県人会の後援の下に、県人先輩の希望通りに発達すべく期待されて居たが、其後県人会が解散し、新に沖縄海外協会南加支部が設立されるに及び、協会は青年会にも合同を提議したが、青年会は断然之を拒絶したので其の反感を買ひ、茲に亦海外協会と青年会とは、以前県人会とれいめい会が対立して居た様に融合し難いわだかまりを持って平行線を描いて進んで行った。（以上六九～七〇頁）

海外協会の設立　一九二二年（大正十一年）羅府に於て県人中心人物であった太田蒲戸、奥武朝道の両人が同伴して母国を訪問した。彼等は帰朝して善く県下を視察し、県社会、県民生活の窮状を目の当りに見て之を海外にある同胞の生活と比べて考へて、其の惨胆たる有様を黙過する事が出

19　引用者により「武」を補う。

20　「精」が正しい。

来ず、大いに海外発展の必要を認め、その為めには、県移民政策の確立、移民地の組織的研究、及び海外移民統一機関の設置の急務を痛感して、茲に海外協会設立を広く県官民有志に計ったが、未だ具体的運動までに到らないで帰米した。

太田は再渡米後も尚其の志を忘れず熱心に海外協会設立を期し、普く加州県人を遊説して在留県人の署名を求め、連署して県当局に請願した。

偶々其の翌年一九二四年ブローレーにありし平良新助が母国訪問の為め帰朝する途次、出羅するや太田は早速平良に会って在会設立使命を托した。

元より新助、曾ては県下で謝花、上間、當山等と共に知事奈良原の秕政（ひせい）の下に呻吟して居た県民を救済しやうとして同志を糾合して決然血判命を賭して奮闘した為に、官憲に瞰（にら）まれ遂に海外に亡命した熱血児、如何にして狐疑（ためら）う事が出来やう。直に諾（だく）し熱い握手を交はして別れた。

かくて新助は帰朝後協会設立の使命を帯て東西に奔走、熱誠、人の肺腑を突き、自らも亦千金を投じて必死、其の設立の為に奮闘したので遂に成功。大正十三年十一月十七日（一九二四）県会議事堂に於て沖縄海外協会は設立された。（以上七〇～七一頁）

沖縄海外協会創立の報に接するや、南加沖縄県人会では直に評議員会を開いたが、議事一決先ず県人会を解消して海外協会支部を設立する事を可決し、一九二五年五月南加沖縄県人会は其の最終の総会を召集したが、満場一致で同会解消、同時に海外協会南加支部設立を可決し、太田蒲戸を挙げて第一期支部長とし、屋部憲傳を幹事に選んで、更に新しい陣容を整へて、海外発展の為に奮闘する意気を示した。

之と同様帝原県人会に於ても、一九二六年二月県人会を解消して海外協会帝原支部を設立するため最後の総会が開かれ、同四月二十四日支部発会式を挙げた。

其日は帝原在住全県人が比嘉金表農園セードに参集し、総会旁旁大園遊会を催し、羅府よりも太田、奥武、中村（仲村渠信義）、屋部、海協を代表して出席したが、山なす珍味、芝居手踊等の余興中々其粋を見せて盛会を極めた。

嘉手苅善栄[21]選ばれて第一期支部長となった。（以上七一～七二頁）

在米沖縄県人会創立　在米沖縄青年会の名称変更の件は、一九三十年九月二十日の新旧幹部会に於いて初めて提案、討議された。事が重大である為、其の後も数度問題になったがまとまらず、延び延びになって居た。

21「善英」が正しい。嘉手苅はのちに中谷に改姓した。

愈々機が熟し、一九三四年八月二六日の定期総会に於いて、幹部会案通り「在米沖縄県人会」と改称する事を決議した。その運動を確実に進めて行く為の実行委員として屋部憲傳、仲村信義、幸地新政、比嘉隆、松田仁吉、玉城重盛、山川喜太郎の七名が選出された。

右七名は評議を重ね、全県人を会員にする事を目標に活動を始めた。（九九頁）

北米沖縄協会創立　一九四一年六月六日に発会式を開催し、目出度く「北米沖縄協会」が創立されて全県人が仲良く、相互扶助、福利増進、日米親善を目的とする自主独立の親睦団体が誕生した。

此の両団体の合同を押し進めて行くのに一つの大きな原動力となったのは、とりもなおさず海協青年部の山城兄弟（ジョージ、ジャッキー）、安里盛吉、金城ジョー、当山清吉等、県人会青年部の仲真良之輔、具志堅ジョージ、小橋川次郎、緒方一夫等両青年部諸君の協力で、一般県人の間に合同について積極的に確信を持って猛運動を展開した事であり、特に海協青年部が理解と確信を以って立ち上って活動して呉れた事は、海協の先輩諸氏や時の幹部諸氏に合同の時機が熟している事を認識させた故にこそ、合同が成功したのであって、彼等の活動なしには恐らく両団体の対立は解決を見ず、気まずい思いをして、吾々県人は転住所入りしたに違いなかったであろう。

新らしく出来た沖縄協会の幹部は左の通り。

会長＝奥武朝道、副会長＝山川喜太郎、幹事＝仲村信義、書記＝比嘉隆、会計＝大城善貞、松本亀三郎、山端太佐、監査＝渡慶次道秀、池原徳静、金城磯吉、顧問＝太田蒲戸

県人両団体の合同が成立し「北米沖縄協会」が創立されたので、在米沖縄県人会では六月十日にエリシャン公園で総会を開き、在米沖縄県人会を「北米沖縄協会」に発展的解消する事を満場一致で採決した。続いて解消記念写真を撮影し、合同達成の祝賀ピクニックに移り、楽しい時を過して五時頃閉会。

新らしく創立された北米沖縄協会では、全沖縄系人を網羅した合同祝賀大園遊会を開催。

一九四一年五月十二日、合同に反対し海協支部の存続を希望する人々は左の陣容で継続する事になった。

会長＝上間精十郎、副会長＝内間安興、会計＝渡久地政郷、会計監査＝上原徳寿、新垣太郎、幹事＝比嘉朝信、顧問＝嵩原安綿、平敷安正（以上一五一～一五二頁）

1960年に開催された北米沖縄芸能保存会の演芸会　内間安松提供

五　アジア太平洋戦争と日系人強制収容

アジア太平洋戦争により日本人は軍人・民間人併せて三〇〇万人余が犠牲になったと言われている。アメリカ合衆国においては、ハワイを除き、戦争の被害は少なかったものの、敵性外国人となった日系人は、「日本人」という理由で強制連行され、強制収容所に留め置かれることになった。以下、太平洋戦争勃発後アメリカ合衆国における日系人が強制収容にいたるまでの状況など、その実態を捉えてみる。

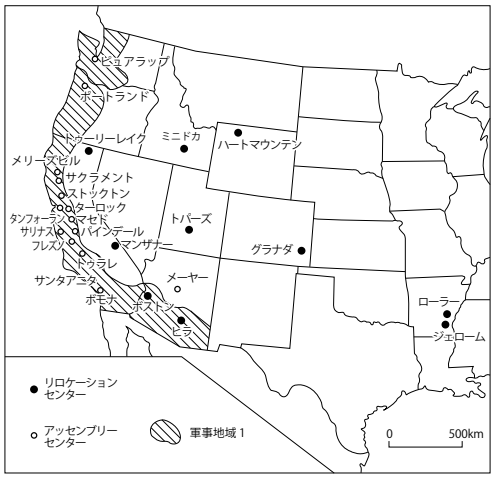
明石紀雄・飯野正子著『エスニック・アメリカ―多文化社会における共生の模索』（第三版二〇一一）によると、太平洋戦争中、合衆国在住の日系人の居住地からの強制立退きと強制収容について、以下のようなまとめをしている。[22]

第二次世界大戦中の日系人の体験はアメリカ社会での日系人の位置に大きな影響を与えるものであり、他のエスニック集団の歴史には見られないものであった。一九四一年十二月七日、日本軍がハワイの真珠湾を奇襲した。アメリカ政府の対応は敏速であった。即日、日系人社会の中心的人物が拘引され、司法省管轄下の抑留所に入れられた。一世の預金は凍結された。そして翌年二月、フランクリン・D・ローズヴェルト大統領が行政命令第九〇六六号に署名した。これは、必要があれば国内に軍事地区を指定し、そこに住む者で国防を犯すと認められる者には強制立退きを命ずる権限を、陸軍省に与えるものであり、実質的には、西部防衛司令部司令官ジョン・L・ドゥウィット中将がそれを実施することになった。その対象には市民権をもたないドイツ人やイタリア人も含まれていたが、実施にあたって適用されたのは日系人（市民権の有無にかかわらず）だけであった。

そして三月、ドゥウィットは第一軍事地区を定め、そこから日系人の自発的立退きを勧告するが、このときに立ち退いた約一万人の人々は移動先で抗議や妨害に遭い、この計画は中止となる。そこで政府は、日系人を保護するためとの理由を加えて、強制立退きの実施に踏み切ったのである。立退き者の管理を任せるため戦時転住局（ＷＲＡ）も設置された。政府内部からの批判もあったが、すでにこのとき、「軍事上の必要性」は何ものにも優先した。この名目で、ワシントン、オレゴン、カリフォルニアの三州に居住する日系人約十一万人の強制立退きが実施に移されたのである。日系人は一世も二世も、家や家財道具を二束三文で手放し、または政府や友人に託し、職を捨

22　明石紀雄・飯野正子著（二〇一一）『エスニック・アメリカ 多文化社会における共生の模索』第三版、有斐閣。

図１　第二次世界大戦中における軍事地域と日本人強制収容所



矢ヶ崎典隆（1993）『移民農業』古今書院203頁をもとに宮内久光作成

てて、住み慣れた土地を離れることとなる。それまで長年かかって築き上げた生活が音を立てて崩れたのである。

彼らはまず、ワシントン、オレゴン、カリフォルニア、アリゾナ諸州の計十五カ所に設けられた仮収容所へ集められ、そこから転住所（政府はこう称したが、ナチ強制収容所の連想から「強制収容所」と呼ぶ人たちもいた）に向かった。仮収容所となったのは競馬場の厩舎や農産物品評会用地内の建物で、悪臭に辟易したとの感想は立退き者の多くに共通している。

転住所はユタ、アリゾナ、コロラド、ワイオミング、アーカンソー、アイダホ、カリフォルニア諸州に計一〇カ所急造されたが、いずれも砂漠や荒地で気候の変化の激しいところであった。鉄柵に囲まれ、監視塔の見張りの下、日系人はそれまでの苦難とはまったく異なった苦難を体験することになる。（以上一八一～一八三頁）

一方、強制収容されなかった人もいた。アマチ収容所が置かれたコロラド州知事のラルフ・ローレンス・カーは、強制収容がアメリカ市民権を持った日系人まで対象とするのはアメリカ合衆国憲法に反するとして州知事クラスの政治家として唯一反対の意思を表明し、日系アメリカ人を受け入れるよう呼びかけた。[23]

日本へ留学していた長男安瑾を除く内間安珍の家族は、コロラド州リトルトンにいる沖縄出身者を頼ってデンバーへ移住し、収容されずに済んだ。そこではニンジンやキャベツを栽培して生計をたてていた。[24]

東栄一郎は「日系アメリカ人史概略」（二〇〇二）のなかで、「太平洋戦争と日系アメリカ人」のテーマで、アメリカ合衆国における太平洋戦争中の日系人の強制収容と二世の行動について、以下のようにまとめている。[25]

一九四一年十二月の日本による真珠湾攻撃は、一世と二世にとって非常に厳しい社会状況をもたらしました。ハワイではただちに戒厳令が敷かれ、「危険敵性外国人」とされた移民指導者たちは、ＦＢＩにより身柄を拘束され監禁状態に置かれました。この結果、既存の一世による指導体制

23　大谷康夫（一九九七）『アメリカ在住日系人強制収容所の悲劇』明石書店、アダム・シュレイガー（二〇一三）『日系人を救った政治家ラルフ・カー』水声社を参照。

24　『浦添市移民史　証言・資料編』三一頁

25　東栄一郎（二〇〇二）「日系アメリカ人史概略」アケミ・キクムラ＝ヤノ編、小原雅代訳『アメリカ大陸日系人百科事典 写真と絵で見る日系人の歴史』三七〇～三八九頁、明石書店。

の崩壊に伴い、在米日本人社会はまだ年若い二世のリーダーシップに頼らざるをえなくなりました。アメリカ本土でも状況は変わらず有力な一世は軒並み逮捕され、ハワイ一世およそ一四五〇人とともに家族からも隔離され、司法省特別収容所で戦時中を過ごすこととなりました。（中略）

アメリカ本土の二世は、強制収容のためアメリカ市民としての基本的権利と自由を奪われた極限的状況にさまざまな反応を示しました。一九四三年の冬から、アメリカ陸軍と戦時転住局は全収容所で悪名高い「忠誠登録」を実施し、「忠誠的」日系人から「不忠誠者」を選別・隔離しようと試みました。この際、忠誠と判断された二世に対しては、同時に陸軍従軍資格を与えたのでした。二世のなかには、彼らの公民権を無視し日系人強制収容を継続しながら、一方で従軍を迫るアメリカ政府の欺瞞性を問題にする者も現れましたが、逆に自らの忠誠心を証明するまたとない機会だとして志願兵となる二世も少なくありませんでした。大部分の二世兵は第四四二大隊に属し欧州戦線で戦いましたが、なかには日本語力を生かして通訳兵として太平洋戦線に派遣された者もいました。それらの二世兵の忠誠心と武勇は日系人全体の名誉を回復するのに大きく貢献し、戦後、収容者が一般社会に復帰する過程で大きな助けとなりました。しかし従軍の有無にかかわらず、たとえどのような形で強制収容や忠誠登録という困難な状況に対応したとしても、ほとんどの日系人はアメリカにおける自らの、そして家族の将来をより良いものにするために最良と思われた選択を行ったのでした。（以上三八三～三八五頁）

矢ケ崎典隆はその著『移民農業』（一九九三）の「第七章　強制収容と日本人農業」のなかで、アメリカ合衆国本土における日本人移民の強制収容と、その経済的基盤を始め日本人社会に与えた影響の大きさについて、以下のように記している。[26]

この強制収容は、収容された日本人に対して経済的、社会的、そして心理的に多大な影響を与えることになったし、彼らの分布パターンに著しい変化をもたらす要因となった。なかでも経済的影響はとくに大きく、日本人はすべての経済活動を一時中断し、それまで一世たちが苦労して築き上げた経済基盤を放棄せざるを得ない状況となった。こうした収容とそれによる経済基盤の崩壊は、戦後における日本人の就業構造を著しく、そして恒久的に修正することになる。

カリフォルニアの日本人にとって、今世紀に入ってから太平洋戦争の勃発まで農業は最も重要な

26　矢ケ崎典隆（一九九三）『移民農業―カリフォルニアの日本人移民社会―』古今書院。

経済活動であり、彼らはさまざまな困難を克服しながら著しい発展を経験してきた。強制収容は日本人農業に大きな打撃を与えたばかりでなく、戦後の展開に根本的な構造的変化をもたらす要因となった。（以上二〇〇頁）

十二月八日に日本に対して宣戦布告が行われると、大統領令八三八九号のもとに定められた規則にしたがって、日本人および日本国の財産と銀行預金が凍結された。これによって日本人の農業活動はほとんど即刻制限を受け、日本人社会は深刻な経済危機に直面することになった。横浜正金銀行や住友銀行の支店は、カリフォルニア州銀行監督官（California superintendent of Banks）により閉鎖され、清算手続きがただちに開始された。これらの銀行は本来外国為替業務を目的として設立されたものであるが、多くの日本人は円あるいはドルによる預金を行っており、円預金を行っていた者はとくに大きな損害を被ることになった。（二〇一～二〇二頁）

一九四二年三月に始まったこの収容事業は八月八日に完了した。強制的に立ち退いた日本人が残した不動産、個人財産、および商品は二億ドルにおよんだとＷＲＡ（一九四三）は推計した。

このようにして、都市と農村を問わず、軍事地域1から日本人の姿は消えることになった。日本人の集中が顕著であったサンフランシスコやロサンジェルスの伝統的な日本人地区は居住人口を失ったが、そうした空白は流入人口によってまもなく埋められることになる。彼らの大部分は、拡大の著しい軍事関連産業に職を得るために西海岸に移動してきた黒人たちであった。（以上二〇二～二〇三頁）

六　米兵花嫁として

第二次世界大戦後、日本の敗戦により米軍を主体とする占領軍が日本を統治した際、軍事基地関連で働いていた日本人女性が、アメリカ合衆国などの軍人と結婚した場合を、戦争花嫁あるいは軍人花嫁と称した。オーストラリアなどの軍人との国際結婚の事例もあったが、米兵花嫁の事例が圧倒的に多かった。本項では前半で日本本土と沖縄県の戦争花嫁、米兵花嫁について、文献資料より探ってみる。

黒川聖子はコラム「戦争花嫁」（一九九七）で、日本における戦争花嫁の実態を、米国の資料などを参考に以下のように捉えている。[27]

27　黒川聖子（一九九七）「コラム八　戦争花嫁」移民研究会編『戦争と日本人移民』三二七～三二九頁、東洋書林。

第二次世界大戦後、一九五四年までに一万五千人の日本人女性が米軍関係の男性と結婚し（シュネップ&ユイ論文）、その大多数が渡米したといわれている。しかし、現地での生活はなかなか厳しいものであった。言語や文化の違いや夫の経済力の低さに苦しみ、離別する女性も多かった。アメリカ社会の実態をよく知らないままに日本を発った女性が多い、というのが実情であった。（中略）

また、戦前から日本人の移住は一九二四年の移民法により厳しく規制されていたが、戦争花嫁も移民として規制の対象になった。一九四五年の公法二七一により戦争花嫁の入国は可能になったが、これは当初はアジア人には適用されなかったのである。日本人戦争花嫁の結婚・入国が合法化されるのは、その後制定された公法四七一（一九四六年）、公法七一七（一九五〇年）による。とはいえ、小説『マディソン郡の橋』（一九九三年）のフランチェスカのようなヨーロッパ系の戦争花嫁と、日本からの花嫁とでは、受け入れ体制がかなり異なっていたので、戦争花嫁のケースにも、移民受け入れに関するアメリカ社会の差別的な姿勢をがうかがわれる。（中略）

一九五二年六月、アメリカでは上記の公法七一七の失効三カ月後に新移民法が制定され、それまでのアジア人排斥の歴史に終止符がうたれた。日本人戦争花嫁は、後のアジア諸国からの戦争花嫁に道を切り開いたともいわれている（カタオカ論文）。当時はただただ必死に生き続けた戦争花嫁達は、従来、主に労働者として考えられてきたアジア系移民に対するアメリカ社会に、少し違う流れが形づくられることに寄与したといえるのではないだろうか。（以上三二七～三二九頁）

戦後沖縄の米兵花嫁について、その歴史と実態を明らかにした書籍として澤岻悦子著『オキナワ・海を渡った米兵花嫁たち』（二〇〇〇）があげられる。以下、海外移民との関連のある部分を含めて、要点を抜粋してみよう。[28]

第二次大戦後、沖縄には巨大な米軍基地が置かれ、県民は米軍基地と隣り合わせの生活を余儀なくされた。占領者（米軍）と被占領者（県民）という関係の中で、米国人と県民との関係は必ずしも良好なものではなかったが、戦後、沖縄では多くの女性が米軍人と結婚、米国へと太平洋を渡っていった。米国にある沖縄県人会員は、これらの女性たちを中心に組織されているところが多い。

戦後、日本に駐留した米軍人と結婚した日本人女性を、「戦争花嫁」と呼ぶ。米軍の日本（本

28　澤岻悦子（二〇〇〇）『オキナワ・海を渡った米兵花嫁たち』高文研。

土）占領は、サンフランシスコ平和条約の発効とともに一九五二年四月で終了したが、沖縄は逆にこの条約により日本本土から法的に分断され、米軍による統治は一九七二年五月までの二七年間に及んだ。日本復帰後も大きな米軍基地が残り、終戦後から現在まで県人女性と米軍人との結婚は続いている。その意味で、沖縄の場合は「戦争花嫁」とは状況が異なる。

ふつう沖縄では、県人女性と米軍人との婚姻を、「国際結婚」と呼ぶ。この国際結婚について、『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社・一九八三年）は広大な米軍基地の存在が、沖縄で国際結婚が多い大きな要因であること、結婚に際しては思想調査や身体検査、所属部隊長の許可など事前のチェックがかなり厳しく行われるが、「言語・風俗・習慣の違いから破綻するケースも少なくない」こと、米兵の妻子置き去りや、遺棄などから派生する問題が多いことなどを指摘している。

さらに同事典は、「（国際結婚）は年間四百組をこえると推定される。（中略）夫婦そろって渡米しても外国での生活にたえられずに、子どもをかかえて帰国する女性たちも多い。なかには、カリフォルニアの日本人街で、悲惨な生活を送っている人たちも多いといわれるが、実態調査はまったくなされていない」と、その問題点をあげている。（以上八～一〇頁）

各市町村史では移民の調査も盛んで、県民の海外への移民は苦労ではあったが偉業として評価されている。しかし、もう一つの海外への県民の移住、すなわち米兵花嫁についての調査や記述はほとんどない。これは、これら県人女性たちの存在に県民の関心がないからなのか、あるいは、彼女らの婚姻は県民が触れたくない戦後史だからなのだろうか。（十七頁）

沖縄からの米兵花嫁たちは、戦勝国、経済大国、未知の国、そして夫の故国である米国に不安を抱きながら、第一歩を踏み入れた。東アジアの小さな島からやってきた沖縄の女性たちを、米国はごく普通の戦後の新しい移民グループとして受け入れた。時には温かく、時には冷たく、そして大部分の場合は無関心に。（一八七頁）

沖縄は一九七二年に日本復帰し、日本の一県となった。しかし、今もって沖縄には広大な米軍基地が存在し、二〇〇〇年現在、軍人・軍属とその家族を含め五万人のアメリカ人が住んでいる。復帰後、国際結婚は一時期減少したが、現在は年間約二百件と言われ、一九九〇年代に限ってみれば増加の傾向にある。日本全体での日本人女性と米国人男性の婚姻件数は、一九九七年で見ると一三七四件、うち沖縄は二〇六件である。つまり、日本全体の「夫が米国人で妻が日本人の国際結婚」の約十五％を、沖縄が占める。沖縄県の人口が日本全体の約一％であることから考えれば、米人男

性と沖縄県人女性の結婚がいかに多いかがわかる。

かつては米兵の圧倒的な経済力や、文明の香りのする洗練されたマナーに女性たちは惹かれた。しかし沖縄の経済も発展、アメリカが圧倒的な経済力を持つ国ではなくなった。それでも、沖縄は、先の統計からも明らかなように、今でも米国人男性との国際結婚率がきわめて高い。背景にはもちろん、在日米軍基地の七五％（専用施設）が沖縄に集中しているという事実がある。（以上二〇五頁）

実際、米国軍人と結婚してアメリカ合衆国へ渡った浦添出身の女性の体験は、次のようである。

国吉・ロビンソン・みどり（一九五九年生）は城間出身の母と米国軍人の父の間に生まれた。昔のハーフはいじめられるケースが多くていやな思いをしたこともたくさんあった。仲西中学校を卒業後、集団就職し東京新宿のレストランで働いた。当時五万円の給料から三万円を実家に仕送りした。一年間働き、十七歳の時、結婚して神奈川県本厚木へ、その後東京の江戸川区に家を買い移り住んだ。離婚後、ジョージア出身の夫と出会い結婚した。横須賀に十四年住んで、一九九六年（平成八）にアメリカに渡航した。現在はシアトルに住んでいる。国籍は日本で、グリーンカードは一〇年ごとに更新があるので、「アメリカ人になったら」という人もいるが、「私はウチナーンチュ」という思いがある。もし主人に何かあったら、沖縄に帰りたい。子どもは四人で、下の二人は日本とアメリカの両方の国籍を持っている。沖縄の人とお付き合いをするようになったのは最近からである。同じように米国軍人と結婚したウチナーンチュ六人で模合をしているという。食事をしたりして情報交換している。ワシントンの沖縄県人会にこれから入る予定である。[29]

キリアン・山城・ヨシ子（一九三六年生）は字屋富祖の出身である。父興善は召集され、戦争で亡くなった。戦後、兄の興喜は単身ボリビアへ移民し、家族を呼び寄せている。妹の春枝もボリビアへ移民した後、アルゼンチンに移った。首里高校を卒業後すぐに幼稚園で幼児の教育に一年ほど携わった。その後、軍関係の事務所に勤め、牧港補給基地

29　二〇一〇年一〇月、ＵＳＡワシントン州シアトル市にて実施した聴き取り調査による。

勤務の陸軍兵士と知り合い、結婚することになった。ボリビアの兄の所へ行く予定だったため、親戚には反対された。アメリカに渡ったのは一九六二年（昭和三七）十二月、二六歳のときである。夫はオレゴン州ポートランド出身のウェイン（一九二八年生）である。勤務地がワシントンＤＣ、インディアナ州、コロラド州デンバー、韓国と異動した。その後ワシントン州に移り現在に至っている。子どもは二人である。県人会へは一九八〇年発足のときから入っており、会計を担当していた。民謡やらサンシンなどのサークルで楽しんでいた。今は語らいの場として模合を友人グループ八名で行なっている。[30]

ノブコ・グレイヴス・新垣（一九三四年生）は浦添市宮城の出身である。屋号はクシアラカチである。父は末っ子で財産がなく苦労人だったが、戦前、フィリピンに出稼ぎに行きマニラ麻で財を築いた。現地の人も雇うほど成功して多くの人を援助した。父の最初の妻はフィリピンで産後熱で亡くなり、私の母とは再婚である。マニラ麻の成功で資金を貯めた父は帰省して屋敷と畑を買い、裕福に暮らしていた。屋敷にはバナナやみかんなどいろいろな果樹も植えていた。よく城間の青年たちが石垣の垣根越しにみかんをもぎ取りに来ていた。しかし宮城の古い自宅は米軍基地にとられた。現在のキャンプキンザーの司令部の近くに昔の地形が残っており、そこを眺めると昔の宮城の景観を思い出してとても懐かしくなる。ロサンゼルスのニューヨークライフに勤務している金城義男さん[31]は親戚である。戦後、隣にハワイ帰りのおばさんがいて住み込みの家事手伝いを頼みに来て、母も賛成したのでメイドとして働いた。十六歳から三〇歳までは米軍の家庭で働いた。基地に働いている女性はフィリピン人と結婚する人が多かったが、マサチューセッツ出身で十七歳年上のリチャードと結婚した。一九六四年（昭和三九）頃、アメリカに戻っていた主人と結婚するために、一人で旅行ビザでアメリカに渡った。一九九五年（平成七）に癌で亡くなった夫は、とてもやさしかった。子どもは一人である。現在、沖縄県人会には入っていない。[32]

ツル子・宮城・ヴァンキャンプ（一九四〇年生）は仲間出身である。市民権を取る時、名前について質問された。その際ミドルネームに宮城を残した。

波之上宮前神宮会館で撮影されたキリアン・好子・山城さん（前列中央）の花嫁姿（1962年）
キリアン・好子・山城提供

30　『浦添市移民史　証言・資料編』三七―三八頁

31　『浦添市移民史　証言・資料編』三四―三七頁

32　二〇一〇年一〇月、ＵＳＡワシントン州シアトル市にて実施した聞き取り調査による。

夫との結婚は反対されていた。一九六八年（昭和四三）、那覇からロサンゼルス経由でアメリカに渡航した。一九八五年（昭和六〇）には市民権を取得している。夫はタコマの大きな基地に勤務しており、自らもメスホールで働いていた。ダイニング・フセルティ・アテンディングの仕事である。子どもは男三人である。模合（ユレーグヮ）は三〇〇ドルで二口入っている。沖縄へはたびたび帰っている。

以上、米兵花嫁として、日本本土の「戦争花嫁」とは異なり、沖縄県の場合は戦後二七年間も米国の統治下におかれていたため、その数も多く、米国本土で居住し、生活している実態がこの四人の証言により垣間見られたと言えるのではなかろうか。差別や偏見に対して立ち向かった沖縄女性のたくましさを感ぜずにはいられない。

第三節　ペルー

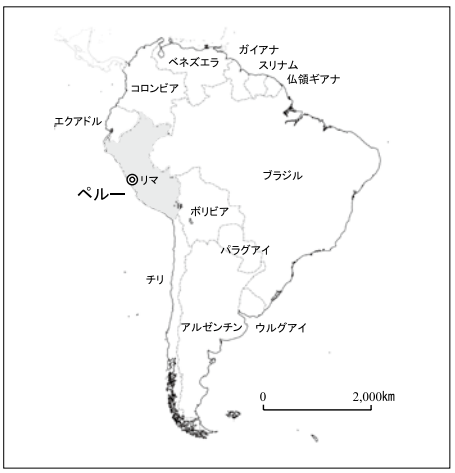
一　ペルーの概要

南アメリカ大陸の西部に位置し、南緯〇・二度から一二八・二一度にまたがり、太平洋に沿ってアンデス山脈に平行して南北約二〇〇〇キロメートルの国である。面積は一二八・五万平方キロメートル、日本の国土の約三・四倍の広さを有する。北はエクアドルとコロンビア、東はブラジルとボリビア、南はチリに国境を接する。地形からみるとペルーの背骨をなすアンデス山脈は東コルディエラと西コルディエラが南北に平行して走る。山地はシエラと呼ばれ標高五〇〇〇から六〇〇〇メートルで山岳氷河が存在する。国境にあるチチカカ湖から南の山地の中央に四〇〇〇メートルのアルチプラノと呼ばれる氷河による中央高原が発達し、ボリビアからアルゼンチンに延びている。シエラは国土の二八％を占める。アンデス山脈の東斜面からアマゾン低地はセルバといい国土の六〇％を占める広大な地域である。

太平洋沿岸部には幅六〇キロメートルから八〇キロメートルの細いコスタと呼ばれる砂漠地帯が延びる。アンデス山脈から一〇〇余条の河川が砂漠に流れる。ペルーは低緯度に位置しているため山岳氷河がゆっくり融解し砂漠に流れて伏流するが、高度の水利技術をもつインカの末裔は河川一帯を灌漑し広大なオアシスを建設し綿花や多くの農業生産を行ってオアシス文明を築いた。リマ近郊のパチャマルカや北のトルヒーヨのチャンチャン文明がよく知られている。他に礫砂漠のナスカには地上絵の文明がある。高い山地と海岸低地の沿岸と北流する寒流が低地の寡雨気候を形成している。高い山地が朝日を遮り気温の断熱により海岸に霧が形成され、更に昼の間高温となった低地寒流から冷気が流れこみ夕方にも霧がみなぎる。リマの年間降水量はわずか三・三ミリメートルである。

領有する島嶼部では、海岸に堆積した海鳥の糞石でグアノと呼ばれる肥料が採掘される。ペルー海流（フンボルト海流ともいう）は多くの恵みをもたらしており、ペルー料理では魚介類を使ったスープや、レモンで和えた「セビーチェ」がよく知られている。一九六〇年代までペルーは世界一のアンチョビ（かたくちいわし）の水揚げ量を誇った。[1]だが

図１　南米大陸におけるペルーの位置



宮内久光作成

1　『ペルーを知るための六六章』第二版　二〇一二年　明石書店

一九七〇年代からエルニーニョと呼ばれる温暖化により水揚げは激減した。一九七八年カヤオの漁港の陸上で多くの漁船が放置された風景があった。このエルニーニョがはるか西太平洋の日本の気象に大きな影響を及ぼしていることは近年広く知られるようになった。コスタは国土の十二％の広さだが人口の大半はこのコスタのオアシスに居住している。

シエラに戻ると、急峻な山地に五〇〇〇メートルほどの高さが斜面にへばりついている。リャマやアルパカを飼育するのに高地で生活する先住民のアイマラ族やケチュア族は原産地のジャガイモや甘藷、トウモロコシを食物とし広く利用する。庭でジャガイモを夜間に凍結させ、昼間の太陽で解凍したものを踏みつけて脱水する。数回くり返すと石膏のように白く軽くなった「チューニョ」ができる。これを水にもどし料理をする。インカ文明の知恵である。インカ文明は厳しい山岳で栄えた。マヤ文明やアステカ文明と同様である。特にインカ帝国はエクアドルからアルゼンチンにまたがるアンデス山脈にインカ街道を構築した高山文明である。十三世紀に現在のクスコにインカ帝国が創立するが一五四三年にスペインにより征服される。スペインは南米統治すべくリマを中心に管理を開始した。リマは南米で最も古い都市であり、サンマルコス国立大学はハーバード大学より創立は古い。

長年のスペイン植民地時代から一八二一年に独立。一九六八年、軍事政権によって農地改革、資源の国有化、外国企業の接収など民族主義的改革が進められた。一九九〇年には日系のフジモリ政権が成立。三選はできないと定める憲法の改正により二〇〇〇年まで大統領を務めた。しかし、現在でも経済開発はうまくいかず債務国として努力している。フジモリ政権は国の発展は教育の充実が根源であるという理念のもとに「月に一校」設立の運動を推進した。沖縄も大田知事時代に「エスコーラ　オキナワ」を献呈した。

第二次世界大戦前の移民の推移をみると、ハワイ、フィリピン、ブラジルに次いで第四位で、沖縄からは一万一四六一人を送り出しているが、戦後の移民数はわずか七三三人である。[2] 大戦中、日本移民は厳しい扱いを受けたことはよく知られている。だがペルー移民はおしなべて稼ぎがよく、沖縄県移民ではハワイの移民と共に恵まれた経済活動を行って

リマ市の風景。現在もスペイン統治時代の建造物が多くみられる。（2009年）
前津政廣撮影

リマ市の最も古いカテドラル（2009年）
前津政廣撮影

2　『国際交流関連業務概要』沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課、二〇一二年、一八四～一八五頁

いるといえる。ハワイ移民で財をなした者は帰ると赤瓦屋根を建築した。地方にはかつて家号の他にニックネームで「ハワイヤー」という家が多かった。人々のあいだでは「ハワイドゥヤル」という感嘆詞がはやった。だがペルー移民にはこれに相当する表現は見当たらない。（島袋伸三）

二　ペルー移民の歴史

（一）日本のペルー移民送出の歴史とその背景

ペルーでは、古代アンデス文明からインカ帝国時代にいたるまで、土地は平等に分け与えられ、管理されていた[3]。しかし、スペインの支配下で伝統的な土地の利用から封建制度へと変化していった。

ペルーは、十六世紀から十九世紀までの長い間スペインの南アメリカ植民地統治の中心国であったため、当初は、アフリカから多くの黒人奴隷を受け入れ、綿花やサトウキビを栽培するプランテーションで働かせていた。しかし、一八五四年に奴隷制が廃止され、黒人奴隷が解放されると、ペルーの指導者は、コスタのプランテーションで働く労働者を移民に求めた。はじめの頃は、中国人の苦力（クーリー）が導入された[4]。

当時、ペルーでプランテーション農園のことをアシェンダと呼び、その地主はイギリスやドイツ、イタリア系白人の大土地所有者が大多数であった。ペルーの海岸地帯の農地を独占し、その多くは不在地主であった。その後、ペルーの砂糖産業の不況により、経営者はプランテーションの一部を契約により小作させたが、これを小作農（ヤナコン）と称し、日本人移民の一部にはこのヤナコンを行うものもいた。

その後、共和国の時代に移ると、土地所有の著しい集中が行われ、一〇〇ヘクタール以上の大農園（ラティフンディオ）と五ヘクタール以下の零細な農園（ミニフンディオ）に分かれた。一九六〇年代には土地所有者全体の一・三％を占めるにすぎなかったラティフンディオの大地主が、全農地面積の八三・二％を所有していた。逆に農地所有者の八三・二％はミニフンディオの零細農で、所有する農地面積は全体の五・五％に過ぎなかった。

3　このような中央の権威で地形的高度差を利用した再配分方式で統括する形態は、垂直統御とも呼ばれ、アンデス文明の特徴であった。

4　その数は、一八五〇年から一八六〇年までの一〇年間に一〇万人を超えたといわれている。

一九六八年にペルー革命がおこり、翌一九六九年に布告された農地改革法によって、海岸地帯のサトウキビプランテーションや綿花耕地の大農園が収用された。収用農地は、共同組合など集団的生産単位に再編成された。これらの改革により、伝統的大地主はその支配基盤を失い、寡頭支配を支える内外の経済基盤の多くが変容した。

（二）戦前の日本におけるペルー移民の歴史

日本からペルーへの移民は、日清戦争後の一八九九年（明治三二）二月二八日に日本郵船の佐倉丸で横浜を出港し、四月三日にリマの外港であるカヤオ港に着いた、七九〇人の契約移民が最初であった。[5] 彼らは海岸地帯のプランテーションが行われていたカサブランカやサンタバルバラ、サンニコラスなど十一のプランテーション農地に配耕された。[6]

移民事業関係者の期待と注目を集めたペルーへの初回契約移民は、自然環境の厳しさや不慣れな耕地労働などのために多くの犠牲者を出すなど就労早々に紛糾し、ペルーにおける日本人契約移民の歴史は苦難の幕開けとなった。[7]

日本からペルーへの第二回契約移民は、初回移民の契約期間満了直後の一九〇三年（明治三六）七月二九日に九八一人がカヤオ港に到着している。妻帯者が多かったこともあり、配耕地での定着率は比較的よくなった。[8] 第三回契約移民は、一九〇六年（明治三九）に七七四人が送りだされた。労働条件は次第によくなっていった。

第一回、第二回の移民契約期間が四カ年というのが永すぎるというので、第三回から大幅に短縮して、労働契約期間を六カ月とした。この期間は一九〇九年（明治四二）までの三年間続いた。それ以降は一年となり、一九二三年（大正十二）の日本移民自主制限まで続いた。

一方、ペルーの経済事情は、第一次世界大戦を境に急激に変化した。特に、サトウキビ価格の下落から綿花栽培に転換した為、移民の需要にも大きな変化をきたした。様々な理由から、契約労働移民は廃止されることになった。

ペルーにおいて契約移民が廃止される一九二三年十一月までに、八二航海以上にもわた

5 この日本最初のペルーへの移民は、田中貞吉の努力が大きい。一八九七年（明治三一）にサトウキビプランテーション農園の資本家と以下のような移民雇用契約を交わし、森岡商会を通して募集した契約移民であった。
一　労働契約期間を四カ年とする。
一　日給一ソール二十仙とする。
一　日本からペルー国の上陸港までの渡航費及びその附帯費用は、日本側が負担する。
一　ペルーの上陸港から雇用契約地までの旅費、食費は一切雇用主の負担とする。
一　移民受入に必要な住居、医療施設、労働に要する必要な器具等は、雇用主側で整備する。

6 このペルーへの初回移民（七九〇人）の出身府県別をみると、最も多いのは、新潟県の三七二人（四七．一％）、続いて山口県の一八七人（二三．七％）、広島県一七六人（二二．三％）、岡山県五〇人（六．三％）と続き、東京府四人、茨木県一人となっている。

7 第一回のペルーにおける日本人社会契約移民の在留四年間で一六二人の死亡者を出したと云われている。これは全体（七九〇人）の二〇．五％に当たり、ペルー初回日本人移民の消耗率は七九％にも達していたという。特に、リマ市の南方約一五〇キロメートルにあるカニエテ耕地（カサブランカ耕地など大小いくつかの耕地より成り立ち、セロアスル港を持つ）は、マラリアの一種である間欠熱などの風土病や赤痢、脚気などにかかり犠牲者の多かったプランテーションであった。現

り約一万八〇〇〇人もの日本人が渡航した。以後自由移民の時代となるが、ペルーへの日本人移民は、第二次世界大戦前の一九四一年（昭和十六）までに三万三〇七〇人を記録している。

（三）戦前の沖縄県におけるペルー移民の歴史

沖縄県からペルーへの移民は、全国に遅れること七年後の一九〇六年（明治三九）であった。これは南米での移民数が最も多いとされているブラジルより二年も早いことになる。

一九〇六年一〇月十六日、三六人が日本の第三回航海の契約移民七七四人の一員として巌島丸で横浜港を出発。十一月二一日にカヤオ港に入港している。沖縄からペルーへの移民初年となる一九〇六年にはこの三六人を含む一一一人に海外旅券が下付された。その後、ペルーへの移民は継続的に渡航し、多数の移民が輩出されている。

初期ペルーへの渡航形態は男子単独か夫婦による出稼ぎ移民であった。一九二三年（大正十二）までは契約移民の制度が残っていたため、約一年間は契約移民としてサトウキビ耕地などのプランテーションで労働者として働き、その後は都市へ出て、自由移民となるのが常であった。そして、移民の大部分が郷里への送金を怠らなかった。ペルー移民は、南米移民の中でも郷里への送金を頻繁に行ったことでもよくしられている。送金額もハワイ移民についで多かった。郷里沖縄では、一般に「ハワイ帰り」と同様に「ペルー帰り」も成功者が多いといわれ、社会的には羽振りをきかせたものであった。[9]

ペルーにおける沖縄県出身移民の初回移民三六人の耕地は、リマ市の北方四四七キロメートルのチンボテ市近郊約二五キロメートルのサンタ川畔のサンタクララ耕地であった。その後、同耕地はカーサグランデ耕地となり、現在はペルーの農地改革により、住民経営の共同組合「コペラティバ・ワダルピート・L・T・D・A二一〇」となっている。

一九八一年（昭和五六）に、「沖縄移民第一航海者三六名入耕地記念碑」が建立された。

沖縄県からペルーへの契約移民は、一九〇六年（明治三九）の第三航海の三六人から一[10]

在でも同地に建立されている慈恩寺には、かつて亡くなった多くの日本人移民の無縁仏が祀られている。

8　しかし、外務省への現地領事館の報告によると、滞在期間は三年八カ月で一四九人もの死亡者をだしている。これは全体（九八三人）の十五．二％にも相当し、その悲惨な実態は初回契約移民とあまり変わらなかったことになる。

9　他市町村の証言集による。

10　契約満了後に三人が死亡、二三人が契約を全うした。

リマの外港、カヤオ港（2001年）
石川友紀提供

九二三年（大正十二）第八二航海の二五人まで、十七年間に三六九四人を記録する。これはペルーへの日本人契約移民全体の二〇．八％に相当する。特に沖縄県出身の契約移民は一九一七年（大正六）以後増加し始め、翌一九一八年からペルーにおける契約移民廃止の一九二三年まで、全国的にも主要な移民送出地域を形成していくことになった。ペルーの契約移民時代における沖縄県出身移民の多くはリマ県カニエテ郡のカニエテ耕地とリマ県周辺の耕地やその北部の海岸地帯のアンカシュ県やリベルター県などに入植している。

また、ペルーへの日本人移民に占める沖縄県出身者の割合を各年で見てみると、一九一八年には五〇％を超え、以後六〇から七〇％台へと増加した。最高は一九三六年（昭和十一）で、七九．四％にまで達している。その結果、一九四〇年（昭和十五）には沖縄県出身移民の在留者数は一万七一七人を記録し、在留国別ではブラジル、ハワイに次いで三番目に多い国となった。

（四）戦前の浦添村におけるペルー移民の歴史

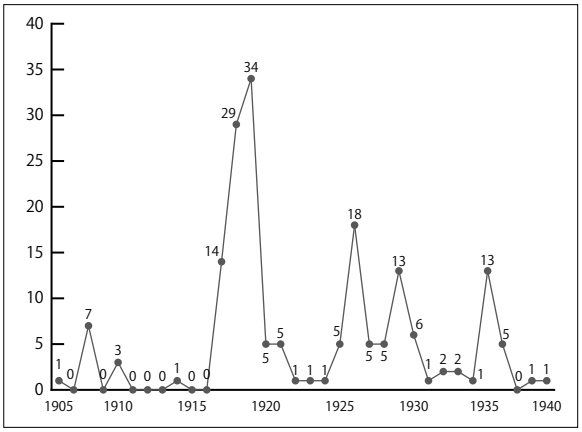
浦添からペルーへ渡ったのは、一九〇六年（明治三九）十二月二六日に契約移民として海外旅券が下付され、明治植民合資会社の斡旋により渡航した又吉亀壽に始まる。一九〇八年（明治四一）には七人に旅券が下付された。

ペルー移民の道が開かれると浦添からの移民も着実に増加していった。特に一九一七年（大正六）に十四人、翌一九一八年には二九人、一九一九年には最高の三四人を記録している。一九三九年（昭和十四）までの三三年間に浦添の移民数は一八〇人を記録し、在留国別ではハワイ、ブラジル、フィリピンについで四番目に多くの移民を輩出している。

浦添からペルーへは、沖縄県内と市町村と同じように、男子単独か夫婦での渡航形態であった。そしてかれらは短期間で出来るかぎり多くの金を儲けて帰国することを目的とした出稼ぎ移民であった。

ペルーの契約移民時代における浦添出身移民の入耕地は、カニエテ、ラ・ベガ、ローマ、サンタバルバラ、パラモンガ、アンダワシ、エスキベル、ウマヤ、タンボレアル、ビ

グラフ１　浦添からペルーへの渡航年別移民数



前津政廣作成

ラカワラ、サンニコラス、チクリン、サンハシントなどである。

一九〇六年（明治三九）から一九三九年（昭和十四）の三三年間の移民数を字別にみると城間が最も多く三五人、次に伊祖の二九人、西原と屋富祖がそれぞれ二二人、沢岻十六人、仲間十五人の順となっている。

また、同期間の字別の移民形態をみると、初期の頃は契約移民が多く、以後呼寄移民となっている。契約移民は、屋富祖と西原、城間、伊祖、仲間が多い。呼寄移民は、伊祖、城間、沢岻、西原、仲間が多い地域となっている。中でも沢岻と西原、伊祖は半数以上が呼寄となっている。

同期間の字別の斡旋会社は、森岡移民会社が七七人と最も多く、次いで海外興業の二〇人、森岡眞の七人、東洋移民合資会社の六人、明治植民合資会社の一人、その他六九人となっている。

（五）浦添村における字別の移民の状況

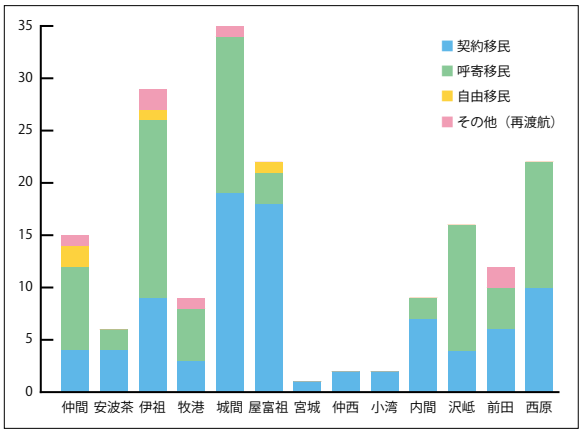
①仲　間

字仲間は全体として十五人のペルー移民を輩出している。

仲間からの移民は、浦添村内では比較的早い方で、一九一〇年（明治四三）に第十四航海の武洋丸で宮城安良と宮城良保の二人が農業移民として渡航し、ラ・ベガ耕地に配耕されている。斡旋会社は東洋移民合資会社であった。一九一七年（大正六）には一人が森岡移民会社の斡旋で契約移民として渡航、ローマ耕地に配耕された。続いて、一九一九年（大正八）にカニエテ耕地へ一人、翌年一九二〇年には同じくカニエテ耕地へ二人が配耕された。

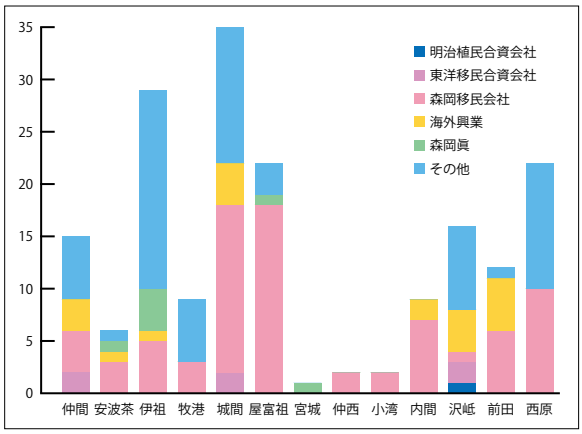
なお、一九二三年（大正十二）でペルーへの契約移民は廃止されたため、一九二四年以降は、すべて再移民、呼寄せ移民、同伴移民のいずれかになる。仲間は呼寄せ移民の出現も早く、一九二四年から始まっている。一九二四年に一人、一九二九年に五人が呼寄せで渡航した。一九三六年（昭和十一）には再渡航の宮城良續が長男と弟を伴って移民してい

グラフ２　字別形態別移民数



前津政廣作成

グラフ３　字別斡旋会社



前津政廣作成

る。

②安波茶

安波茶は六人の移民を輩出している。

一九〇八年（明治四一）に、第五航海、巌島丸で宮城加那が契約移民として、サンタバルバラ耕地に配耕されている。斡旋会社は森岡眞である。以降一九一八年（大正七）には三人が移民し、パラモンガ耕地に二人、アンダワシ耕地に一人が配耕されている。一九二六年（大正十五）、一九二八年（昭和三）にそれぞれ一人が呼寄せにより渡航している。

③伊祖

伊祖は全体として二九人の移民を輩出し、城間に次いで二番目に多い。

一九〇八年（明治四一）に、第五航海、巌島丸で豊里嘉目ほか三人が契約移民として、サンタバルバラ耕地に配耕された。斡旋会社は森岡眞であった。一九一九年（大正八）には五人が移民し、エスキベル・ウマヤ・アンダワシ耕地に配耕された。斡旋会社は森岡移民会社であった。

呼寄せによる渡航は、一九二二年（大正十一）に一人、一九二五年に一人、一九二六年には四人、一九二八年（昭和三）に三人、一九二九年に二人、一九三〇年には三人、一九三五年に一人、一九三九年に一人が見られた。また、一九三四年（昭和九）に一人、一九三五年には三人（同伴の妻と長男を含む）、一九三九年に一人が再渡航している。

④牧　港

牧港は全体で九人の移民を輩出している。

一九一八年（大正七）に、第五八航海、安洋丸で銘苅亀ほか二人が契約移民として、アンダワシ耕地一人とパラモンガ耕地に二人が配耕された。斡旋会社は森岡移民会社であった。

続いて、一九二五年（大正十四）、一九二六年、一九二九年（昭和四）、一九三二年、一九三九年に各一人、合わせて五人が呼寄せで渡航している。一九三〇年（昭和五）には、一九一八年（大正七）に渡航した仲宗根山戸の再渡航が見られる。

在秘浦添村人会創立満5周年記念撮影（1938年）島袋幸正提供

⑤城　間

城間は全体で三五人と、浦添村内で最も多くの移民を輩出している。

城間からの移民は、村内でも比較的早い方で、一九一〇年（明治四三）に、第十四航海、武洋丸で仲西池安が契約移民として、ラ・ベガ耕地に配耕されたのが最初である。続いて、一九一四年（大正三）には一人が移民し、タンボレアル耕地に配耕された。いずれも斡旋会社は東洋移民合資会社であった。一九一八年（大正七）には、パラモンガ耕地に六人、アンダワシ耕地に一人の計七人が配耕されている。翌年一九一九年（大正八）には、エスキベル耕地に一人、カニエテ耕地に一人、サンアグスティン耕地に五人、ウマヤ耕地に二人、兄の呼寄せ一人の計一〇人、一九二一年に一人が移民している。

一九二五年（大正十四）からは呼寄せ移民で、同年に三人、翌一九二六年に四人が渡航している。以後一九二七年（昭和二）に一人、一九三〇年（昭和五）に一人、一九三一年に一人、一九三五年には二人、一九三六年に一人が移民している。一九三五年には、一九二六年に兄の呼寄せで移民した與座仁明が、妻のエイを伴って再渡航している。

⑥屋富祖

屋富祖は全体で二二人と、城間・伊祖に次いで三番目の移民を輩出している。

一九〇八年（明治四一）に、第五航海、巌島丸で宮城甚昌が契約移民として、ニヤニヤ耕地に配耕された。斡旋会社は森岡眞であった。一九一七年（大正六）には一人が、サンニコラス耕地に配耕された。斡旋会社は森岡移民会社であった。一九一八年は、屋富祖では最も多くの移民を輩出した。サンニコラス耕地に一〇人、エスキベル耕地に二人の計十二人が渡航している。翌一九一九年には、アンダワシ耕地に二人、カニエテ耕地に一人、ウマヤ耕地に二人の計五人が渡航している。

その後、呼寄せ移民で、一九二六年（大正十五）、一九二七年（昭和二）、一九三五年（昭和一〇）にそれぞれ一人が渡航している。

⑦宮城・仲西・小湾

宮城（一人）・仲西（二人）・小湾（二人）の三字は、ペルー移民は少ない。

在秘浦添村人会結成20周年記念祝賀会（1953年）島袋博一提供

宮城からは、一九〇八年（明治四一）に、第七航海（船名は不明）で喜舎場宗善一人が契約移民として、カニエテ耕地に配耕された。斡旋会社は森岡眞であった。

仲西からは、一九一七年（大正六）に、第五三航海、静洋丸で當山寛亀・ント夫婦が契約移民として、チクリン耕地に配耕された。斡旋会社は森岡移民会社であった。

小湾からは、一九一九年（大正八）に、第六一航海、安洋丸で比嘉栄松・カメ夫婦が契約移民として、ウマヤ耕地に配耕された。斡旋会社は森岡移民会社であった。

⑧内　間

内間は九人の移民を輩出している。

一九一九年（大正八）に、第六二航海、静洋丸で島袋亀江ほか六人が、契約移民としてカニエテ耕地に配耕された。斡旋会社は森岡移民会社であった。

一九二六年（大正十五）には呼寄せ移民で二人がカニエテ耕地へ渡航している。

⑨沢　岻

沢岻は全体で十六人と、浦添村では比較的多くの移民を輩出している。

沢岻からの移民は村内で最も早く、一九〇六年（明治三九）に又吉亀壽が契約移民として渡航しているが、配耕地は不明である。斡旋会社は明治植民合資会社であった。その後、一九一七年（大正六）には三人が移民し、チクリン耕地などに配耕されたようだが、特定できない。斡旋会社は東洋移民合資会社と森岡移民会社であった。

その後は呼寄せ移民で、一九二一年（大正一〇）に二人、一九二六年（大正十五）に三人、一九二八年（昭和三）に一人、翌一九二九年に一人、一九三二年に一人、一九三五年に三人、一九三六年には沢岻で最後の一人が渡航している。

⑩前　田

前田は全体で十二人の移民を輩出している。

一九一八年（大正七）に比嘉太良と石川眞位の二人が契約移民として渡航しているが、配耕地は不明である。斡旋会社は森岡移民会社であった。その後、一九一九年（大正八）には四人が移民し、カニエテ耕地などに配耕された。一九二一年（大正一〇）に二人、サ

1919年に渡航した内間出身の島袋順吉（右）・亀江（左）兄弟
島袋幸正提供

ンアグスティン耕地へ配耕された。斡旋会社は海外興業であった。

一九二六年（大正十五）からは呼寄せ移民で、同年に一人、一九二九年（昭和四）に二人、一九三〇年に前田で最後の移民一人が渡航している。

⑪西　原

西原は全体で二二人と、屋富祖と同数の移民を輩出している。城間・伊祖に次いで三番目に多い。

一九一七年（大正六）に、第五一航海、紀洋丸で内間安禄ほか六人が、契約移民としてローマ耕地に六人、カニエテ耕地に一人が配耕された。翌一九一八年には二人がチクリン耕地に、一九二〇年（大正九）に一人がサンハシントに配耕されている。いずれも森岡移民会社の斡旋であった。

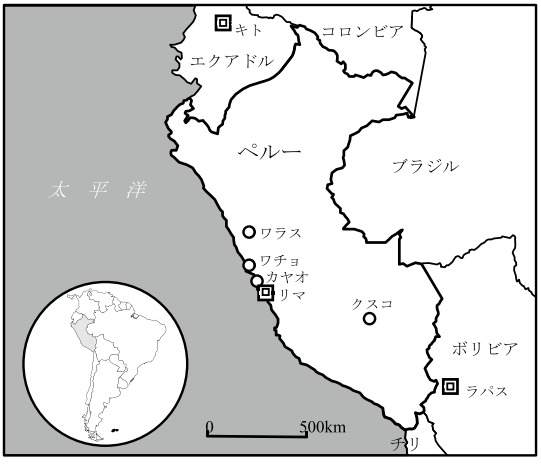
西原は呼寄せ移民が早く、一九二〇年（大正九）には二人、一九二三年に一人、一九二六年に一人、一九二七年（昭和二）に三人、一九二九年に二人、一九三三年に二人、最後は一九三五年に一人が渡航している。（前津政廣）

三　移民先での生活

（一）戦前のペルーにおける日本人移民の生活

第二次世界大戦前、ペルーにおける日本人移民は、当初サトウキビ及び綿花のプランテーションへの契約移民として渡ったが、当時大地主制下にあった為、どんなに懸命に働いても独立して農業を営むことはできなかった。結局、農業移民として必ずしも成功したとは言えなかった。そのため、彼らは、名目上は契約移民としてペルーへ渡ったが、契約終了を待たず、あるいは契約終了後すぐに首都リマ市を中心とした都市へ進出し、飲食店や雑貨店、理髪店を構えるものが多くなり、都市型の商業移民として転職するようになった。

図２　ペルーの主要都市



宮内久光作成

転業・逃亡移民の続出

一九一〇年（明治四三）当時、カニエテ地方またはその周辺の耕地では風土病が発生し、多くの死者を出した。特に、カサブランカ耕地などでは一日に十数人の死者を出す日もあったという。監督の命令は厳重で仕事はきつく、賃金は安い、あるいは栄養失調や医療施設の不備などで多くの死者を出すなど、実に悲惨な状況であった。

当時、契約耕地から逃亡した移民たちの状況を、八木宣貞[11]は「五〇年前後の思い出」の中にこう記している。

そのため逃亡移民が続出した。二名三名、あるいは七、八名という風に、二、三日食うや食わずやで逃亡する。途中で追剥に会い、婦女子は暴行されて着物まで取られるという誠に言語に絶するいやな時代があった。かくして逃亡移民は、ルリンの私の家に収容し、食を与えて休養させ、最初はチョリョスまで馬で送った。病人は慈善病院に世話した。その後汽車が通うようになってからは汽車で送り、元気な者には仕事を与えた。（中略）

しかし、一九一八年頃からは団体逃亡移民が多くなって、少い時が十五人、多い時には二五人ほども来るようになった。これでは、私一人ではやり切れないので森岡商会と領事館へ行ってその保護方法をお願いしたが、全く馬耳東風で取りあってくれない。森岡商会の社員の如きは、解約金を持って来いという始末である。私は、人道上の問題だと大いに憤慨した。ともかくも事態が多数の移民であるから、十人や二十人私の所に宿泊はさせるが、食事代位は受け取りますからと都合をつけて引き下った。（中略）

カニエテ逃亡移民は、みな私の家に寄られたので移民の苦難時代、その実情を余りにも詳しく体験した。殊にカニエテには実情視察にも数回行ったことでもあり、私の記録は間違いはないと自信を持っている。その実情は、到底書き表せないほどの惨たるものであった。[12]

一九〇六年（明治三九）の第三回移民の期間が六カ月に短縮され、契約期間のきれた移民は、その後の生活の糧を求めなければならなかった。中には夏は氷かき売り、冬は飴売りなどの商売を始める者もあらわれた。また、半年か一年ほど見習いすると小さいながら

在秘露チョリーヨス日本人会ビーヤ支部創立10周年祝賀会記念撮影（1939年）　島袋博一提供

11　「逃亡移民の父」と呼ばれた八木は、首里の尚家の家系に生まれ、高等学校を卒業したのち一九〇六年（明治三九）ペルーへ移民している。

12　八木宣貞「五〇年前後の思い出　その二」（『雄飛』第三九号、沖縄県海外協会、一九八三年、十二～十三頁）

も床屋を開業することができたので、リマ市はじめ周辺都市部でそれに転業するものも多数でてきた。

耕地と都市部との生活環境、経済的にも格差がありすぎたことも逃亡を助長した大きな原因であった。医療施設の不備で耕地では安心して働けないことや日給一ソール二〇仙で都会の労働に比して安い。身体を酷使されるより都会で働けば、身体は楽で、将来の見込みも希望もあること、都市に出れば、給料も多く貰えるということになれば、誰でも都会に出向くのが自然であり、逃亡移民を促す要因であった。

八木は、こうした逃亡移民を助ける為に、床屋組合や沖縄青年会を組織した。沖縄青年会は、「第一にリマに集まる移民の宿泊所、第二に病院への入院の世話、第三に仕事の世話、第四に言語不通のための面体を維持する」[13]ことなど、救済事業を主な目的として組織運営された。

このように、都市部では逃亡移民や契約終了した移民が都市部へ流れていったことは、契約移民を受け入れていたプランテーション農園側では、大きな損失であった。

ペルーの排日暴動

大正初期から六、七年頃になると日本から来る移民の数が多くなり、種々雑多な方面に進出していった。その中で特に目立ったのが、理髪店・日用雑貨・食糧品店・古物店・洋食店・喫茶店といった商売である。どこの都会でもかならず日本人が店を出していた。それが相当繁盛していたから見様見真似で店を出す。それと同時に今までの店も人手が足りないから、店員を、見習いを、弟子をと誘い、リマへリマへと移動して行く循環を促した。

以後、日本人移民が極端に都市に集中し、特定の職業に偏ったため地元ペルーの人々の反感を買い、一九四〇年（昭和十五）にはついに日本人移民を排斥する排日暴動にまで発展していった。[14]

ペルーのリマ市をはじめ周辺都市部では、どこを見ても日本人の店舗であり、電車に乗

13　八木宣貞「五〇年前後の思い出」（『雄飛』第三八号、沖縄県海外協会、一九八二年、七一頁）

14　世界恐慌後厳しい状況が続きペルー人の失業問題も深刻になると、経済的に成功を収めている日系人はペルー人の敵意にさらされた。一九四〇年五月十三日、リマ市内の学生たちが排日スローガンのプラカードを掲げて市内を行進、これに群衆が加わって日本人に対する襲撃や財産の破壊・強奪が始まった。暴動は隣のカヤオ市に飛び火し、さらに地方の都市へも波及した。暴動は二日間で収まったが、財産を破壊された日系の六二〇家族のうち八〇％に相当する五〇〇家族が沖縄人だった。

れば日本人同士が日本語で喋っている。日本人の店ができたからペルー人の商売はあがったりだと嘆く。ペルー国は、日本人移民を受け入れて何の利益を得たのか、ただ彼らに職を与え、飯を食わせ、金を儲けさせ、さっさと日本に帰っていく。後には何も残らないではないかと嘆くペルーの人々がいた。これが日本人移民の排斥の一因といわれている。

日本人移民は勤勉で誠実であり、農業及び商業に進出し、かつ発展してきたことは一定の評価を受けたが、一方、一部ペルー人との間に摩擦が生じた。また、ペルーの国家主義的な気運の増大とも重なり、排日感情が生じ、一九三六年（昭和十一）には、「移民及び営業制限令」が公布され、日本人移民は他国移民に比べて著しい差別待遇をうけるようになった。さらに、一九四〇年（昭和十五）には、排日暴動が発生し、多数の日本人移民の商店・住居の掠奪や焼き討ちが行われ、甚大な損害を被った。そして、翌一九四一年（昭和十六）には太平洋戦争が勃発し、ペルー政府は、対日断交すると同時に、日本人を敵国人とみなした。その結果、在留邦人の有力者多数を逮捕し、うち約一八〇〇人をアメリカ合衆国へ強制送還し、また、枢軸国人の事業収用令を発して、一切の日本人事業をペルー人に移譲させた。[15]

戦前のペルー[16]における日本人移民の特色

戦前のペルー移民は、南米移民のなかでも最も早く、一八九九年（明治三二）の契約移民から開始された。初期移民は、多くの犠牲を出すなど永い間苦闘の歴史を持っている。しかし、その誠実性や正直性、勤勉性をもった日本人移民一世の努力が実り、多くのペルー国民から尊敬の目でみられ、親近感をもたれ、信用をえるようになった。

また、ペルーの日本人移民は、当初は農業移民から出発したが、その後は商業、工業、サービス業などへ転職している。第二次世界大戦前からはリマ市・カヤオ市を中心に、また地方都市やその近郊において、第二次・三次産業を主体とする都市型職業に従事してきた。

さらに、戦前の日本人移民は、母国や母村への送金や持参金が多く、当時の日本経済を

15　『南風原町史第八巻　移民・出稼ぎ編　ふるさと離れて』二〇〇六年、一〇〇～一〇一頁

16　日本とペルーの国交は、一八七二年（明治五）に当時、清国のクーリー（苦力。中国人奴隷）をペルーへ運んでいたマリアルス号が日本へ寄港した際、その奴隷を解放した事件を契機として、翌一八七三年八月に日秘和親貿易航海仮条約を締結したことに始まった。一八九〇年（明治二三）一月には、高橋是清が銀山採掘のため、鉱山技手・坑夫ら一七人をつれてペルーへ渡るが、事前調査が雑だったこともあり、この計画は失敗した。その九年後の一八九九年（明治三二）四月に日本からペルーへの第一回の契約移民が到着して、移民の形態をとおした両国間の国際交流が始まった。それ以前一八九七年（明治三〇）五月には駐メキシコ公使の室田義文がペルー駐在公使を兼務するようになる。このように人的交流とともに日本とペルー間には輸出入など貿易を通した物的経済的交流も戦前から続いていた。

底から支えていた。

（二）沖縄県人会の活動

戦前までの沖縄県の人口は、約八〇万人の人口を擁し、資源や産業が乏しく、財政が厳しく、海外移民に大きな期待をかけていた。また沖縄県民は、万国津梁の意を持ち、海を恐れず、海を家とし、海を庭として海外進出の冒険心と勤勉にして貯蓄心に富み、一度信ずればすべて万難を辞せざる信念のもと、ペルーに進出していった。

一九〇九年（明治四二）七月三〇日、八木宣貞の主唱で、主として日本人移民の救済事業を目的に沖縄青年会を組織した。リマ市カルメン・バーホ街の又吉野菜店内に会場兼事務室を設け、会費五〇仙を徴収したという。その後、八木はボリビアのゴム林地帯へ入ったので、大正初期に「沖縄県人会」と改称して、特に青年の心身両面の進歩向上に努力し、運動部、弁論部、図書部を設けるなど、沖縄県人会の活動は活発であった。

一九一九年（大正九）母県の海外協会発足に伴い、従来の県人会を「沖縄県海外協会ペルー中央支部」と改称した。

しかし、言語・風俗・習慣などの相違が他の在住日本人との誤解摩擦の原因となったことも多々あった。全在住日本人の六割を占める沖縄県人は、同じ日本人というのに、他県人から暗に非難や苦情があった。時の日本領事館の春日領事は、沖縄県人に限り差別的呼寄制限を加えようとしたことから、沖縄県海外協会ペルー中央支部と正面衝突をした。沖縄海協ペルー中央支部内の内紛もあり、問題は益々こじれ、ほとんど一カ年有余の対立抗争を続け、ペルー中央日本人会がこれに介入して沖縄海協ペルー中央支部の公認停止等の愚策を取った為に益々紛糾し、遂に春日領事は未解決のまま帰国した。しかし、後任の藤村領事の努力によって円満解決することになった。

ペルーにおける日本人移民の発展は、沖縄県人を除外しては語ることができないほど大きな勢力を持つようになっていた。沖縄県人は、在住日本人の六割から七割以上を占め、日系移民を代表している。現在、日系移民の活動は、ペルーにおける沖縄県人と日本人の相互

理解と認識とによって運営がなされている。今後なお一層の密接な連携が要求される。

（三）「逃亡移民の父」と呼ばれた豊里牛

ペルーの沖縄県移民は、はじめは契約移民として農場で働いていたが、当時のペルー社会の封建制度の大地主制度のもとでは土地を求めて独立することはできなかった。その為、契約が終了すると耕地を手にいれることを諦めて都市へ仕事を求めて転職する者が続出した。中には過酷な労働に耐えきれず、逃亡する者も多く出た。

そうしたなかで、伊祖出身の豊里牛（一八九〇～一九六〇年）のような「逃亡移民の父」と呼ばれるような人物も現れた[17]。

豊里牛は、一八九〇年（明治二三）、父陳善、母カマドの二男として字伊祖の農家で生まれた。屋号は後豊里（クシトヨザト）である。伊祖は戦前、浦添のなかでも耕地が少なく、多くの海外移民を輩出した地域であった。豊里は、一九〇七年（明治四一）二月二九日、十七歳の時、ペルーの日本人第四回契約移民として、カニエテ地方のサンタバルバラ耕地に入植した。四年間の過酷な契約期間が切れると、少しばかりの貯えを活かして、マーラ町で理髪店と日用雑貨商を営んだ。経営は順調で特に綿花の買付け、売買が当たり、五～六年で実業家としての地位を築いた。豊里は、当時頻発していた逃亡移民をよく自宅に保護したり、救済した。その献身的な活躍はカニエテ移民の間ではよく知られており、その名を知らない者がいないほどであった。しかし、晩年はさびしい生活であったと聞く。一九六〇年（昭和三五）、七〇歳のときナスカの町で世を去った。（前津政廣）

四　太平洋戦争による移民社会の混乱[18]

太平洋戦争の日米開戦となった一九四一年（昭和十六）日本軍によるハワイの真珠湾攻撃により、親米政策をとっていたペルー政府は日本に対し、国交断絶を宣言し、ペルー国内にいる在住日本人の国内移動を禁止するとともに営業権の掠奪、五人以上の集会の禁止など日本人への弾圧の法令を次々と発令した。そして、日本人会はじめ各団体は解散を命

豊里牛の子孫、豊里陳盛が伊祖城趾内のお宮の改修のために寄付金を贈った記念碑（2009年）

17　日本人移民の「逃亡移民の父」としては八木宣貞（前掲）が有名であるが、豊里牛（宇志と表記される場合もある）もまたそう呼ばれた。「浦添の人物」（『浦添市史第五巻 資料編四』浦添市教育委員会、一九八四年、五三三頁）参照。

18　『ペルー　太平洋とアンデスの国　近代史と日系社会』増田義郎・柳田利夫著、中央公論新社、一九九九年二三七～二四八頁参照。

じられ、当時約三〇校もあった日本人小学校も閉鎖された。さらに日本人所有の多くの資産が敵性財産として接収された。在ペルー日本公領事館詰めの外交官と秘露中央日本人会の会長はじめ有力商店主、教育者、新聞社主などは身柄を勾留され、一九四二年（昭和十七）四月から次々と北米へ強制送還された。以後一九四五年（昭和二〇）二月に至るまで、十五回にわたり、一八〇〇人近い邦人有力者とその家族が、北米のクリスタル・シティなどの収容所に送り込まれた。このため、秘露中央日本人会や各地の日本人会、職業別の各種組合、県人会、郡人会、村人会、さらには資本を融通しあうための頼母子などの互助組織に至るまで事実上ほとんどがその活動を停止していった。

邦人資産の凍結

一方、一般の在留邦人に対しては、集会禁止が通達され、無許可の旅行も禁止された。また、一九四二年（昭和十七）四月一〇日には、敵性資産管理法が発布された。これに基づき日本人所有資産の凍結が実施された。そのため日本人が経営する商店の大部分は大きな打撃を受けることになった。

一九三五年（昭和一〇）に与座仁明と結婚してペルーへ移民した仲西出身のエイさん（一九一六年生）は、一九四二年（昭和十七）頃に綿畑を没収された。一九二六年（大正十五）にペルーのワラルに生まれた宮城アントニオ幸太郎さん（父が屋富祖出身）は、働いていたリマ市の衣料品店（羽地出身者が経営）が没収された。その後勤めたパン屋（本部出身者が経営）も没収された。父の宮城加真さんがワラルで営む豆腐屋も没収され、兄たちとともに茶店を始めた。[19]

地方の耕地と日系社会の様子

リマ郊外や地方のアシェンダでも、事情は大きく変わらなかった。日本人の所有に帰していた耕地が凍結されたことは言うまでもないが、小作や借地契約を一方的に破棄されるケースが頻発した。このため、地主側につけ込まれ、不当な条件での借地契約に甘んずる

19　『浦添市移民史 証言・資料編』浦添市教育委員会、二〇一四年、四一～四三頁

か、あるいは、反日感情の少ない農地を求め、住み慣れた土地を後にするかの選択を迫れた日本人も少なくなかった。結果的に、多くの日本人家族が、日本人に対して寛大な農園主を求めて耕地を離れていった。

日本人学校の閉鎖

一九三〇年代初めころには、ペルー全国で三〇を超える日本人学校が維持されていたが、児童数や設備などの点でペルー文部省の基準に準拠する必要から、領事館や秘露中央日本人会が仲介となって統廃合が進められ、日米開戦期には二〇数校にまとめられていた。しかし、開戦を機に日本語そのものの教育はもとより、それまで二割までは認められていた日本語による授業もいっさい禁止されることになった。日本人教師も多くが北米へ送還されため、学童数が激減し、一九四〇年（昭和十五）には一六〇〇名を誇り、日本文部省在外指定校でもあった里馬（リマ）日本人小学校も閉鎖に追い込まれた。そのほか、ペルー各地の日本人会所有の小学校もまた、閉鎖ないし没収の処置を受けほとんど壊滅状態に陥った。幼い日系二世たちは日本人小学校の閉鎖に伴い、公立の小学校に転校せざるをえなくなった。これまで日本式の厳粛な規律で教育されてきた彼らは、勝手の違うペルーの学校に困惑するとともに、時にはあからさまな差別に苦しむこともあった。（前津政廣）

五　戦後のペルー移民

（一）第二次世界大戦後のペルー[20]

日本の敗戦

日本敗戦のニュースは、日本・ペルー両国の報道から、否定できないものとして在留邦人のうえに重くのしかかった。

日本からの特別の放送があるという情報は、日本人社会を駆け抜け、短波受信機の前で多くの日本人が固唾を飲んで放送の開始をまっていた。八月十四日の夜（日本時間八月十五日正午）、流れてきたのは、ポツダム宣言を受諾し、連合国に降伏することを伝えた

20　『ペルー　太平洋とアンデスの国　近代史と日系社会』二四八～二六五頁を参照。

「玉音放送」であった。日本の敗戦は、たちまち日本人社会全体に伝わった。その晩「大日本帝国と運命をともにする」と自殺を遂げる若者がいたり、やり場のない憤りからリマ市の中心街にある大統領官邸に突入し、中央のポールに日の丸を掲げようと真剣に議論する血気盛んな若者もいた。大多数の在留邦人は、呆然自失しながらも、苦渋のうちに敗戦の事実を受け入れてゆかざるを得なかった。

ブラジルのように「勝ち組」が「負け組」を襲い、殺人事件まで引き起こすといった凄惨なことはなかったが、ペルーでも日本の敗戦を信じない「勝ち組」と敗戦を認める「負け組」が生じていた。安座間平敷テレサ房子さん（一九三一年カヤオ生　両親が当山出身）の父や舅も、「日本は負けない、今まで負けたことないから絶対に負けてない」と譲らなかったという。[21]

敗戦の報道と相前後して「愛国同志会」「共同連盟」「大和民族連盟」「（大正）皇道連盟（会）」「桜組」などといった勝ち組グループがリマで次々に誕生していった。地方でも開戦時一〇〇〇人近い日本人が居住していたアンデス高原の町ワンカヨでは、「報国同志会」という名の勝ち組が誕生していた。

その後も「勝ち組」は、リマの中心街にあった和菓子屋で集まりを重ねていたが、排日の原因となるような不穏な行動をとることはあまりなかった。

敗戦後しばらくは、大多数の日本人はまさに呆然自失の状態であった。やがて、戦後日本の悲惨な状況が伝わると、在留邦人の過半数を占めた沖縄県出身者のあいだで、いち早く沖縄救援連盟会が作られ、救援基金の募集がはじめられた。その他の在留邦人もまた、苦しい生活のなかから、自分たちの出来る範囲で故郷の親族へ慰問品を送付することを怠らなかった。浦添村人会からも義援金が送られている。[22]

新移民の渡航

戦前のペルーには、多くの日本人小学校が開かれていたが、日本人のための中・高等教育機関は、女子の家政学校を除き、皆無であった。経済的な余裕があり、日本で面倒を見

21　『浦添市移民史　証言・資料編』四六～四七頁

22　『浦添市移民ビジュアル版その一　世界に羽ばたいたウラシーンチュたち』浦添市教育委員会、二〇一一年、四三頁

てくれる親族がいるような場合には、教育のため子弟を日本へ送り出すことが積極的に行われていた。しかし、日米戦争前に日本に送られたペルー生まれの二世は、開戦とともに両国間の国交断絶によって帰国の道を閉ざされた。戦争が終結し、国交が回復した後でも、ペルー政府はペルー国籍を持つ彼らの帰国を認めようとはしなかった。その為、ペルーの有力者と個人的な関係を持つ者は、一九五〇年（昭和二五）代のはじめから徐々に家族・子弟の帰国を実現させていたが、二世たちに対する一般的な帰国の許可を得ることは困難であった。この為帰国を焦る者のなかには、農業開拓移民団の名目でボリビアに入国し、そこからペルーへの密入国を企てる者も現れたが、それがペルー政府の知るところとなり、かえってペルー政府の態度を硬化させる結果になった。

一九五七年（昭和三二）になってようやく日本で生活していた二世たちの帰国が公式に認められるようになると、堰を切ったようにペルーへ帰国してきた。しかし、すでに日本で家族もでき、定着していた二世の中にはそのまま日本に残る道を選択する者もまた少なくなかった。

現在当山に住む安和良盛さん（一九五〇年　ペルー、カヤオ生）は帰秘二世である。父良徳さん（一八九七年生）は、一九二〇年（大正九）にペルーへ渡航し結婚、四人の子宝に恵まれた。子どもたちの教育を考えて、一九五九年（昭和三四）に帰国したという。[23]

ペルーから帰国した二世は、一般に帰秘二世とよばれた。帰秘二世たちは、一世ともまたペルーで教育を受けて育った二世とも異なった経験と意識を持ち、独特の存在となった。中にはペルーで家族との折り合いがつかず、再び日本へ戻っていくケースも少なからず生じていた。しかし、一方で二世でありながら日本語に堪能な彼らは、その後、日本との関係が深まるにつれ、日系社会と日本とを繋ぐ重要な役割を担ってゆくようになった。

一九五八年（昭和三三）には、近親者の呼寄せも限定付きながら認められるようになった。このため、一九六〇年代に入ると主に米軍の統治下に置かれていた沖縄から、親族呼寄せによる新移民がペルーに渡航してくるようになった。

第二次世界大戦後、ほかの南米諸国が民族主義的な工業化政策を積極的に進めるなか、

ペルー在住の浦添村人会の集まり（1961年）
宮城フアン提供

23　二〇〇九年八月十一日に浦添市内で実施した聞き取り調査による。

ペルーでは一九五〇年代に入ってもなお、外国資本の徹底した導入を図り、農・鉱産物の輸出に特化した政策を推し進めていたが、一九五〇年代半以降に台頭した改革勢力によった改革が行われ、国家機能の強化や拡大、工業化、農地改革などの諸改革が進められていった。さらに、一九六八年（昭和四三）のＪ・ベラスコ将軍のペルー改革により、約十二年間は軍政下におかれた。一九八〇年（昭和五五）以降は再び民政に移管している。

戦後ペルーの日系人移民は、その大部分がリマ市及びその周辺の都市部に住んでおり、残りが地方に分散して住んでいる。出身県別にみると沖縄県が最も多く、全体の七〇％（約六万人）を占め、ついで熊本、福島、広島、山梨、鹿児島、山口の諸県の順となっている。

職業別にみると商業が最も多く、六〇％以上を占めている。次いで農牧業に従事している者が多い。しかし、最近は工業方面へ進出する者も多く、また二世のなかには国家公務員・技師・弁護士・会計士・医師などの職業分野への進出も盛んとなっている。

日系人は、各界に進出し、最近は経済的にも社会的にもしだいに改善されつつあり、その自信の回復と生活の安定とともに、ペルー社会へととけこみ、日系人の社会的地位も高くなってきている。一九九〇年（平成二）の日系二世のアルベルト・フジモリ大統領の誕生は、ペルーの日系人の確固たる地位を示す象徴的な出来事であった。

今日、ペルーにおいて日本人移民が渡航後すでに一五〇年を経過したが、日系二世のフジモリ大統領の誕生を機に、古い日本の風俗・習慣・伝統などが保存され、日系人の精神的風土が戦前の日本人の性質を堅持しているようにもみうけられる。

（二）日本からの戦後ペルー移民

一九六〇年（昭和三五）、ペルー在住の日本人移民の直系家族に限り一五〇人の入国を許可する法律が出され、ペルーへの移民が再開された。しかし、第二次世界大戦後のペルーへの移民は、戦前に比べるとまったく振るわなくなった。現在は、一世の高齢化・死去にともない、二世・三世、さらに四世・五世へと世代の中心が移っている。

ペルー沖縄県人会（2009年）　島袋伸三撮影

ペルー沖縄県人移住九十周年記念絵皿
田中千恵子提供

ペルー沖縄県人移住九十周年記念カレンダー　田中千恵子提供

現在でも両国間では、政治経済・学術文化など多方面にわたり交流が展開されている。具体的には、留学生の受け入れや学者・研究者との交流、文化的展示会などの開催、各界議員連盟の結成などがみられる。また、日本からペルーへは経済援助や科学技術などの協力が行われている。たとえばルリンの地上衛星受信施設の建設などはじめ、フジモリ大統領の訪日前後に日本政府は、一九八九年（平成元）に約一〇億円、翌一九九〇年には三五億円の無償資金供与を行っている。

ペルーには、出身都道府県人会を統括するペルー日系人協会があり、その施設として日秘文化会館・移民史料館・日秘診療所、レストランなどを有し、日本語教育や各種講演会などが毎日のように開かれている。二〇〇〇年（平成十二）には日本人ペルー移住九〇周年を記念して、多目的使用の総合会館や娯楽センターなどが建設された。また、日系人のための神内センタービル[24]も完成した。二〇〇九年（平成二一）のペルー現地調査の時も与座エイさんをはじめ多くの高齢者がデイサービスやサークル活動を楽しんでいる姿を拝見することができた。

現在、ペルーには約九万人の日系人が在住している。中流階層以上の生活レベルを維持し、たえず母国・母県との交流が盛んに行われている。

（三）沖縄県からの戦後ペルー移民

第二次世界大戦開戦後、ペルーを含めた南米への移民は終戦まで停止していた。しかし、沖縄県は戦前から多数の移民をペルーへ送り出していたので、戦後に移民が再開されると、いち早く呼寄移民が始まった。戦後初めての沖縄県出身移民として一九四八年（昭和二三）に一人がペルーへ送られた。その後増加し、一九九一年（平成三）までの合計七三三人がペルーへ渡航した。

ペルーにおける沖縄県出身移民は、一九八一年（昭和五六）には七五周年をむかえ、新県人会館や総合運動公園の建設などがなされた。また、一九八六年（昭和六一）には移民八〇周年記念式典が一九九六年（平成八）には九〇周年式典、二〇〇六（平成十八）には

24　神内センタービルは、全日系人の高齢者向けに一九九一年（平成三）八月、日秘文化会館内の敷地に神内良一氏によって建設された。初代所長に小波津エレーナ美千代さんを迎えてオープンした。センターは、日ごろ一人で過ごしている高齢者を招き、レクリエーションなどを通して生活を楽しんでもらう目的で運営されている。現在約三〇〇人の高齢者が月曜日から金曜日まで日替わりでセンターに通っている。

神内センタービル（2009年）前津政廣撮影

多くの県系人と県民によって一〇〇周年式典がリマ市で開催された。

（四）浦添からの戦後ペルー移民

浦添からの戦後移民は、残念ながら確認できない。しかし、戦後沖縄に引き揚げたものの再びペルーへ戻った安座間平敷テレサ房子の事例はある。[25]

二〇〇九年（平成二一）に浦添市がおこなった現地調査によれば、浦添出身移民の戦後居住地は、リマおよびカヤオ周辺に集中している。また、職種も多岐にわたり、農業を営んでいるのは一家族のみであった。

現在、ペルーにおける浦添出身移民は、活躍の中心も二世・三世の世代に移ってきている。しかし、ペルーでは、ここ一〇年ほど失業やインフレなどによる不況が続いており、就職も難しい状況が続いている。こうしたなか、日本への出稼ぎのため、国を離れる二世・三世も増えている。浦添出身移民の「デカセギ」はおもに神奈川の建設業や愛知や静岡の車関連事業に就いている。

浦添出身者の集まりとしては、一九三四年（昭和九）にペルー浦添村人会が結成された。初代会長を内間三良[26]が務めた。その後、「ペルー浦添同志会」へと改称し、与座仁明、平敷兼朝、内間安善、島袋佳良らが会長を歴任した。[27]近年は、二世・三世が会長を務めるようになった。

同志会は、毎年一回の定期総会を開催し、会員相互の親睦連携を図っている。また、青年部、婦人部の組織の強化を図り、敬老会、演芸会、学事奨励会、ピクニック、慰霊祭、運動会、母村訪問者の激励送別会等多くの行事を盛大におこなっている。特に、郷里沖縄、浦添からの訪問団がある毎に、会をあげて歓迎し、浦添市の記念行事にも協力して、連携を深めている。

戦前移民として唯一健在の与座エイさん（仲西出身）は、与座仁明（城間出身の与座仁徳の四男、一九三五年に渡航）の呼び寄せ移民として、同年渡航している。戦前移民の苦労話や戦争中の収容所の話、子供の教育など貴重なお話をお聞きした。現地調査時は九三

ウラシーンチュ二世が運営する学校・野口英世学園の児童（2009年）前津政廣撮影

在ペルー浦添市同志会のカレンダー

25 『浦添市移民史　証言・資料編』四六～四七頁

26 ペルー浦添市同志会の情報提供による。

27 「浦添の人物」『浦添市史 第五巻 資料編四』五五六～五五七頁

歳のご高齢であったが、かくしゃくとして、記憶もしっかりし、週二回のデイサービスを楽しんでいた。

屋富祖出身の二世、マルコ宮城みつお氏は、ペルーの国際テロリストのグスマンを逮捕した業績により、ペルー国の国防警察関係の最高の地位（日本の警察庁長官に相当）に就いていた。また、上原仲宗根千恵子氏は、牧港出身の二世で、女性で唯一、ペルー国家警察大佐に就いた方である。さらに、戦前移民の両親が開拓した耕地に、ヒデヨ・ノグチ学園を創設し、私費で学園を経営している屋富祖出身の宮城ファノユキエ校長など、多くの浦添出身者が活躍していた。

現地ペルー国での二世・三世の多くは、戦前移民の一世の祖父母に対しては厳しい反面優しいイメージを持っていた。しかし、二世の両親については、家事より勉学に励むよう強く言われた。それは、戦前移民の厳しい労働や排日運動、戦時中の収容所など親の苦労体験、日系移民に対する見えない差別（例えば大学での単位取得や就職時に受ける）を目の前にして、親が自分の子には同じ経験をさせたくないという強い気持ちから出たことだろうということだった。ペルーでは、医者、弁護士、大学教授など高学歴が多いことも関係しているかも知れない。

ペルーでも多くの二世・三世が「デカセーギ」を経験している。また、国籍をペルーと日本の二重国籍を有する方が多かった。言語は、家族間ではスペイン語が話されていたが、中には方言を話せる方もいた。日本の情報は日本語の『ペルー新報』や『ニッケイ新聞』などがよく読まれていた。ほとんどの方が「ペルー浦添同志会」に加入していた。

模合についても家族模合や同級生、ラジオ体操会、沖縄県人会など、親睦を兼ねた模合が行われていた。浦添の市人会のみなさんは、ゴーヤー、トーフチャンプルー、イリチャーなど何でも食べる、沖縄料理大好きという声をよく耳にした。

経済的には比較的恵まれた生活で、ほとんどの家庭に仏壇やお墓があり、一日（ツイタチ）・十五日（ジュウゴニチ）のお供えや盆・正月には親戚一同が集い、お互いの絆を確かめ合うなど沖縄の風習が根強く残っている印象を受けた。（前津政廣）

ペルー浦添市同志会のピクニック（2012年）
ペルー浦添市同志会提供

表１　ペルー浦添市同志会歴代会長

氏　名		在職期間
与座　仁明	Jimmey Yoza	1988 年
内間　安彦　アウグスト	Augusto Yasuhiko Uchima	1989 ～ 1999 年
宮城　幸太郎　アントニオ	Antonio Kotaro Miyashiro	2000 ～ 2005 年
宮城　フアン	Juan Miyashiro	2006 ～ 2014 年

ペルー浦添市同志会の情報提供による。
近年の在職期間が判明している分に限り掲載した。

第四節　ブラジル

一　ブラジルの概要[1]

ブラジルは南アメリカの中央部に位置し、大陸の約半分（四七．三％）を占める。面積は八五四．七万平方キロメートルでロシア、カナダ、中国、アメリカ合衆国に次ぎ第五位で、日本の約二三倍の広さをもつ国である。ブラジルはエクアドルとチリを除き全ての南米大陸諸国と接している。国名の由来は、ポルトガルの探検隊が「パウ・ブラジル（Pau.Brasil）」と呼ばれる赤や紫の染料の原木を発見し、後にこの原木名のブラジルが国名になったという。パウ・ブラジルは乱伐によって著しく減少し現在では絶滅危惧種に指定され、北東部地方のパライバ州連邦立パライバ大学のキャンパスでみることができる。

ブラジル国土は全体の約四〇％を占めるアマゾン川流域とその南に広がるブラジル高原に大別される。ナイル川に次ぐ世界第二位の長さをもつアマゾン川は水量では世界第一位である。アンデス山脈の東に位置するアマゾン低地は世界最大の熱帯雨林地（selva）をつくっている。アマゾン川の北端のギアナ高地にブラジル最高峰のネブリナ山（標高三〇一四メートル）がそびえる。

アマゾン川流域の南には九〇〇メートルの山地や高原がひろがる。北東のバイア州から南のリオグランデ・ドスール州にかけての高原の間には渓谷と山地が入りくんだ地形をつくっている。大西洋岸には海岸低地は発達していない。沿岸一帯には細長い低地がみられ、湾入や入江に主要都市が立地している。初期探検隊は河川の入江とみまがい、リオ・デ・ジャネイロと地名を付けた。大西洋にサンフランシスコ川やトカンチンス川があり、その流域に多目的ダムが建設されている。ブラジル中央高原の南部地方を流れるパラナ川には多数のダムが建設され水力による電力を供給している。ブラジル・パラグァイの国境を流れるパラナ川に両国の協力によりイタイプー発電所が一九九二年に建設された。世界最大規模の三峡ダムより発電量は多い。ブラジルとボリビアにまたがる広大なパンタナール湿原から源流するパラグァイ川はパラナ川に合流しラプラタ川となり大西洋に注ぐ。ブ

図１　ブラジル略図

宮内久光作成

1　ブラジルの歴史及び地理的概要は、以下の資料を参考にした。
記念誌編纂委員会編『ブラジル日本移民戦後移住の五〇年』ブラジル・ニッポン移住者協会、二〇〇四年。
西澤利栄（ほか）著『アマゾン　保全と開発』朝倉書店、二〇〇五年。
日本語編集委員会編『ブラジル沖縄県人移民史　笠戸丸から九〇年』ブラジル沖縄県人会、二〇〇〇年。
和田昌親編著『ブラジルの流儀』中央公論社、二〇一一年。
堀坂浩太郎著『ブラジル　跳躍の軌跡』岩波書店、二〇一二年。
松本栄次著・撮影『写真は語る　南アメリカ・ブラジル・アマゾンの魅力』二宮書店、二〇一二年。
田辺裕総監修『世界地理大百科事典三　南北アメリカ』朝倉書店、一九九九年。
『データブックオブ・ザ・ワールド二〇〇九　世界各国要覧と最新統計』二宮書店、二〇〇九年。

ラジル、パラグァイ、アルゼンチンが接する合流地域には世界三大瀑布である幅四キロメートルのイグァスの滝がある。

気候についてみると、ブラジルは大半が熱帯雨林気候からサバナ気候の地域である。アマゾン盆地は典型的熱帯雨林気候地域で年中スコールが降る。その南に広がる高原台地は亜熱帯気候からサバナ気候となり、南部の高原の一部は温帯に属し、時には降雪もみられる。

ブラジルの気候は日本とは反対である。春は九月中旬から十二月、夏は十二月下旬から三月にかけてである。日本で最寒気温を記録する二月上旬はブラジルではカーニバルが催される季節である。世界三大美港のひとつで、カーニバルで知られるリオデジャネイロやサンビセンテ、サントスの海岸リゾート都市は、夏は高温多湿で沖縄の夏の気候に酷似している。一方、サントスから七〇キロメートルの内陸にあり八〇〇メートルの台地に位置するサンパウロ市は比較的乾燥しているので夏でもかなりしのぎよい。

南米でポルトガル語を国語とする唯一の国であるブラジルは、一五〇〇年以来、オランダ・フランスと領土争奪や勢力争いのなかで、カリブ海から拡大したサトウキビプランテーションを推進し、北東海岸から南西内陸へ開拓を行った。一八二二年にはポルトガル王室から分離しブラジルの独立宣言を行った。一八三〇年代に入るとコーヒー生産がリオデジャネイロ州からサンパウロ州に拡大、一八八〇年代にサンパウロ州がコーヒー生産の中心地として地位を確立した。奴隷労働によるプランテーション経営は世界の趨勢にさからえず一八八八年奴隷制度を廃止した。ペードロ一世・二世による帝政を廃し、一八九一年に連邦共和国制度を採択した。

ブラジルは自然資源に恵まれた国である。一九五八年日本・ブラジル合弁で設立されたウジミナス製鉄所を建設し工業化が飛躍的に発展してきた。ミナスゼライス州（Minas Gerais 鉱物が豊富である州）はその州名にたがわず多種の鉱物資源に恵まれている。鉄鋼製品の輸出を目ざし一九八〇年代初にはリオデジャネイロの北の海岸のヴィトリアに巨大な臨海立地の製鉄所を建設し欧米に製品を輸出している。

一九六七年にアメリカの製鉄会社と共同によりアマゾン河口近くのパラ州で巨大な埋蔵量を有する鉄山が発見された。カラジャス鉄山である。一九八〇年代から本格的に稼働した露天掘りの鉱山である。鉄鉱石はブラジルの外貨獲得の主要輸出品となり、大西洋岸のサンルイスまで九〇〇キロメートルの鉄道で出荷されている。他にニオブ、マンガン、ボーキサイトなどの多様な鉱物資源が豊富である。

ブラジルは近年までに化石燃料資源の埋蔵は皆無とされていた。石炭埋蔵は乏しい。そのため古い日本移民は木炭生産に従事した事例がよく報告された。一方、石油埋蔵は近年発見された。一九六〇年代から国策として進められたサトウキビからのエタノール生産は近年その重要性が少し薄められた。二〇〇〇年にサントス・リオデジャネイロの沿岸で海底油田が発見され、続いて、二〇〇一年には北部沿岸でもカンポ油田が発見され、ブラジルは現在石油資源などによる燃料は自給できるまでにいたっている。

豊かな水資源のおかげでブラジルの水力発電は電力消費の七四％を占め、火力は二三％となっている。原子力発電はわずか二％弱である。

サンパウロ州は工業においてブラジルの牽引車とよくたとえられる。あらゆる工業がサンパウロに集中している。日本であまり知られていないが中小型ジェット旅客機の製造は有名である。エンブラエル社の製品で、世界ではカナダのボンバルディアを凌ぐ販売力をもつといわれる。

これまで長い間ブラジルは農業生産国であった。現在でも、コーヒー、サトウキビ、オレンジ生産は世界第一位を誇る国である。ついで牛肉、大豆、キャッサバは第二位、他にトウモロコシ、バナナ（三位）、パイナップル（四位）、カカオ（五位）、綿花（八位）などの農業生産を行い、欧米に肉迫してアグリビジネスの活動もみのがせない。一九七〇年代から日本政府によって推進されたセラド開発によるブラジルの小麦の生産も著しい。今世紀初頭に最も急速に発展すると予測されているＢＲＩＣｓ（ブラジル、ロシア、インド、中国）のひとつがブラジルである。多国籍穀物メジャーのカーギルは二〇〇三年にアマゾン川のサンタレンに大豆やトウモロコシなどの穀物の出荷ターミナルを建設した。

ブラジル連邦共和国は二七州と連邦区（首都）による行政的構成をもつ。首都ブラジリアは一九六〇年にクビシェック大統領の政権時代にリオデジャネイロからブラジリアに遷都した。ブラジルの人口一億九九八八万（二〇一三年）は世界第五位である。人種構成は白人五三．七％、混血（ムラート）三八．五％、黒人六．二％、アジア系一．六％となっている。ちなみに、先住民は約三〇万人と推定されている。主要都市をみると、サンパウロ（一一八二．〇万人）、リオデジャネイロ（六四三．〇万人）、サルヴァドル（二八八．四万人）、ブラジリア（二七九．〇万人）、フォルタレーザ（二五五．一万人）、ベロホリゾンテ（二四七．九万人）、マナウス（一九八．二万人）、ベレン（一四二．〇万人）などがある。都市人口率は八五．二％だが二〇一四年世界サッカー大会、二〇一六年オリンピック開催において多くの都市周辺をとりまく貧民層地区（ファヴェラ）の解消が大きな課題となっている。

二　ブラジル日本移民の概要

ブラジルにおける最初のプランテーション活動は南米大陸の北東に隣接するカリブ海地域から導入されたサトウキビプランテーションで、アフリカからの黒人奴隷労働によって行われた。一方、十九世紀末期から労働者の移民は労働条件によりアメリカ合衆国に転向し南米への移民は減少した。さらに世界の趨勢の影響をうけブラジルは一八八八年に奴隷制度の廃止に追いやられた。この時代から日本移民のハワイ・アメリカ本土への送り出しが厳しい状態に迫られた。最初は一八九九年（明治三二）のペルー移民であった。ブラジルは自国の植民地があるマカオからクーリー（cooly：苦力とは中国の人夫の下役労働者）を移民として送り出そうとしたが輸送手続に不備が発覚し中止となった。中国移民にとってかわって日本移民が注目された。サンパウロ州政府は日本移民の受け入れに際して船賃の補助を移民会社の皇国殖民会社と締結した。一九〇八年（明治四一）の笠戸丸による第一回の移民のはじまりである。コーヒーファゼンダ（コーヒー農場）における契約労働の条件は次の通り家族移民の形態を前提とした。

海外興業株式会社のポスター（2008年）
前津政廣撮影

皇国殖民会社ハ農業者ニシテ農事労働ニ適スル者三人乃至一〇人ヨリ成ル家族ヲ組織セル日本移民三千人ヲサントス港マデ輸送スル業務ヲ有ス。但シ、一二歳以上四五歳マデノ男女ヲ労働ニ適スルモノト見做ス州政府ハ次ノヨウニ移民ニサントス港マデノ船賃ヲ補助スル

一二歳以上　一〇ポンド
七歳～一二歳　五ポンド
三歳～七歳　二ポンド一〇志
三歳以下　ナシ

契約期間ハ一農年トス
各ファゼンダニハ通訳一人ヲ配置スル[2]

前述のように家族構成をみると、家族移民の構成人数は一〇人程度を上限としていた。しかし、家族構成はかなり作為的な手続きをとり急遽、家族を構成するという事態がみられた。若い男性が急いで結婚し、戸主となって弟兄や従兄弟を加えて家族を構成する。このような「つくり」の家族がみられた。沖縄方言の「ちくい」家族である。このように多くがにわかにつくられた構成家族であったため、のちほど耕地に入植した際経営者との間で問題が惹起する事態が発生した。おまけに、初期ファゼンダ入植者からあまりにも厳しい労働条件に耐えられずに夜逃げする者が出現した。移民はこれを「脱耕」と称して苦しい時代をなつかしがった。

ブラジルの日本移民はコーヒーファゼンダで契約労働者として働くことをコロノをしたという。これは広くみられる用語で元もとは奴隷を意味する。そして特にブラジルのコーヒーファゼンダ地域では賃金労働者の一形態で、強制労働者であった「奴隷」に対するひとつの概念でもある。一般にはコーヒーファゼンダにおける契約賃金労働者をいう。コロノは家族単位で契約され採取期には採取したコーヒーの量により能率給で支払われる。この際には子女も皆総出で参加し、採取の総量に対してたとえば月単位で支払われる。

コーヒーの樹の管理は千本単位で一年間の管理者が定められ、体力・希望・家族の大き

サンパウロ市にある移民宿泊所跡、現在は移民博物館（2009年）島袋伸三撮影

2　香山六郎編著『移民四十年史』香山六郎、一九四九年、二三ページ。但し、契約期間はすぐに一農年から二農年に改められた。

さで分担本数が定められる。現地調査中、移民は耕地に入ると家族で八千本、一万本など契約本数を告げたものだ。支払いは月ごとであったり、隔月であったりいろいろであった。コーヒーの樹の管理や草取りは毎日よく監督され、仕事開始、仕事仕舞いの時間は一定していた。つまり厳しい監視の下に働かされた。長屋の住居は無料で提供された。その他に、いろいろな附帯的条件があるのがふつうである。耕主の命令あるいは要請にしたがって諸雑用、道路工事、牧場の仕事などにでると、別に一定の日当が支払われた。

日曜や祝祭日は休みである。この時を私用して自家用の農作物や家畜の世話をすることは認められた。コーヒーの若樹の間に作物を植えることを許可される場合、日本移民は「間作」と呼び、有閑地を私用させてもらう場合は「余作地」あるいは「外作地」という言葉をあてていた。おそらく日本移民独特の造語であろうが、移民は現地調査のなかでなつかしそうに語っていた。移民のなかには自家消費をはるかに越えて、それでかなりの収益をあげることができる場合もあった。近隣の沖縄出身の方から豚肉をいただき、おかげさまで病身の家族が元気となり大変お世話になったと、ある本土出身の移民の方が調査者にこっそり語ってくれたことを思い出す。

移民の言葉に「一農年」というのがある。ポルトガル語からの直訳である。コーヒー耕地労働者の生活に直結し、よく移民用語として定着したものである。それは単純な一年ではなく、一定の終わりの時期があり、生活のリズムが変わり、けじめのつく時期であるといえる。一般に九月に収穫が済み、採取開始の時に「山立て」で盛った土地を散らす「山崩し」をもってその整理がつき、一年間の賃金と借金の総決算をした時である。それは同時に、他に移動するか、残留して再契約するか、将来の生活を決定する時でもある。契約は一農年単位で行われるが、移民の到着する日が毎年一定しているわけではない。コーヒーファゼンダの労働は主として収穫とコーヒー樹の管理に二分される。これは主に草取りである。一農年は、コロノにとって採取期（五か月程度）の或る時に始まり、収穫を済ませ、樹の管理の時期を経て、つぎの採取期を終えれば完結することになる。[3]

一六五家族七三三人、独身四八人、自由移民十二人を含む第一回ブラジル移民は亜熱帯

再現された移民列車（2009年）　島袋伸三撮影

3　前山隆著『非相続者の精神史―或る日系ブラジル人の遍歴―』御茶の水書房、一九八一年、七六～七七ページ。

気候風土における労働適応を配慮して沖縄・鹿児島の両県から集中して募集が行われた。沖縄からの移民は三二五人（四九家族）で全体のなかで最大の四一・六％を占めた。県内各地からの送り出しをみると、国頭郡は羽地村、今帰仁村、名護村、久志村から、中頭郡は美里村、勝連村、北谷村、中城村、西原村から、市域では那覇市から送り出された。島

表１　日本からブラジルへの年次別・男女別移民数（1908～1941年）

［単位：人］

年　次	移民会社の移民名簿による日本移民数			『日本移民発展史』による日本移民数	伯国労働商工省移民局調査による日本移民数
	男	女	計		
1908（明治41）年	617	180	797		830
09（明治42）	-	-	-		31
10（明治43）	515	391	906		947
11（明治44）	-	-	-		28
12（大正１）	2,011	833	2,844	18,800	2,909
13（大正２）	3,290	3,028	6,948		7,122
14（大正３）	2,100	1,397	3,497		3,675
15（大正４）	-	-	-		65
16（大正５）	7	6	13		165
17（大正６）	2,549	1,499	4,048		3,899
18（大正７）	3,445	2,458	5,903	5,903	5,522
19（大正８）	1,768	911	2,679	2,679	3,022
20（大正９）	693	289	982	982	1,013
21（大正10）	564	359	923	923	840
22（大正11）	281	247	528	965	1,225
23（大正12）	284	232	516	891	895
24（大正13）	2,199	2,786	4,985	3,705	2,673
25（大正14）	2,903	2,009	4,912	4,638	6,330
26（昭和元）	4,252	3,387	7,639	8,192	8,407
27（昭和２）	5,476	4,574	10,050	9,152	9,034
28（昭和３）	5,657	5,155	10,812	11,231	11,162
29（昭和４）	5,718	5,797	11,515	14,897	16,648
30（昭和５）	7,307	5,293	12,600	13,091	14,076
31（昭和６）	3,033	2,299	5,332	5,462	5,632
32（昭和７）	10,136	4,887	15,023	15,021	11,678
33（昭和８）	11,520	9,480	21,000	23,152	24,484
34（昭和９）	14,640	7,062	21,702	22,832	21,230
35（昭和10）	3,880	2,520	6,400	5,648	9,611
36（昭和11）	2,850	2,523	5,373	5,298	3,306
37（昭和12）	2,542	2,100	4,642	4,642	4,557
38（昭和13）	1,667	885	2,552	2,555	2,524
39（昭和14）	676	618	1,294	1,303	1,414
40（昭和15）	844	712	1,556	1,556	1,471
41（昭和16）	734	616	1,350	-	1,883
総　数	98,790	80,531	179,321	183,518	188,309
引用者による修正総数	104,788	74,533	179,321	183,518	188,308

［注］１）資料の出所：香山六郎編著（1949）『移民四十年史』日本移民入伯数　428。
２）原典には、大正９年迄のイグペ植民地入植数として、女子に689人、総数に1744人が追加されている。
３）原典注：『日本移民発展史』による日本移民数の項の1908年より1917年迄は海外興業株式会社創立前の渡伯人員合計である。

尻郡からは真和志村、豊見城村、玉城村、大里村、南風原村、具志頭村からであった。浦添村からの初回ブラジル移民は後述するように一九一七年（大正六）から始まる。

表１の統計をひとまず総括して時代に伴う移民総数をみてみよう。一九〇八年（明治四一）に始まったブラジルへの移民は一九四一年（昭和十六）の真珠湾事件で戦前移民は終わる。総数十八万八三〇八人の戦前移民のうち沖縄からの移民一万五七一四人は全国の約十二％を占める。沖縄県移民の中で比較するとハワイとフィリピンに次いで三位を占める。表１の統計をみると初回移民から一年後は皆無となり、さらに一九一一年（明治四四）にも移民が送り出されていない。移民の送り出しはこのように不安定な状態で推移している。このことはコーヒーファゼンダによって日本移民の管理に混乱が惹起したことによる。移民は厳しい労働条件に耐え難くファゼンダからの脱耕者や夜逃げなどが各地でみられた。労働者管理にうまく対処できずファゼンダはついに船賃の供与を一九一四年（大正三）に打ち切った。しかし第一次世界大戦の勃発によりヨーロッパ移民が減少したことなどで日本移民への船賃補助が一九一六年（大正五）から再開された。だが、世界大戦による不況などでサンパウロ州政府の船賃補助は完全に打ち切られた。一九二四年（大正十三）のことである。一九二四年はしかし日本の移民政策のターニングポイントの年であった。日本の軍国主義的行動に対し米国は敵対的工作を打ちだし、ついに対日移民禁止法の制定を決定し、ハワイ、米国本土（カナダを含む）への移民は廃止された。この事態において日本政府は移民の送り先地域を検討した結果、南米への移民に対し政府による渡航費援助を推進することを決定した。表１にはその推移が明確に表れていることがうかがえよう。その後、しばらくは移民の送り出しは活況を示す。やがて第二次世界大戦の暗雲が濃くなると米国は南米諸国の連合国同盟に圧力を加えてきた。一九三〇年（昭和五）に大統領となりその後十五年間も政権を得、独裁体制をしいたゼツリオ・ヴァルガスは一九三四年（昭和九）に日本移民制限を強固に実施した。翌一九三五年（昭和一〇）から日本からの移民は著しく減少していることを表１は示している。

海外興業株式会社のポスター（2008 年）
前津政廣撮影

三　コーヒーファゼンダと植民地における生活

一九〇八年（明治四一）六月十八日ブラジルに到着した移民はサンパウロ移民収容所に滞在し、配耕地（カフェザール又はコーヒーファゼンダを耕地と呼んだ）の手続きをとり、鉄道路線にある耕地に送られた。沖縄出身移民はサンパウロ市から北に走るモジアナ鉄道のイトゥ駅に近接したファゼンダ・フロレスタに送られた。やがて労働条件などの理由で各配耕地において紛争が発生した。かなり初期において慣れない生活環境で移民は苦労煩悶した。「日本外交文書」によると、一九一九年（大正八）三月十九日、在サンパウロ日本総領事は、外務省宛次のような文書を打電している。

沖縄県移民ハ概シテ素質劣悪ナル上ニ偽造家族多ク成績極メテ不良　本邦移民ノ声価ニ影響シツアリ此際取締ヲ厳重ニシ優良ナル家族ノ渡航ヲ許可セサル様御取計相成タシ

他に、モジアナ鉄道線にあったリベロンプレート日本領事館分館主任から、

当地方ニ於ケル沖縄県移民ハ成績不良ニシテ耕主側ニ排斥ノ非アルニ付キ厳重ニ人選御取締リノ上渡航者ヲ制限アリ度シ

これらに類似した文書が各耕地からも報告された。特に沖縄出身移民は「素質劣悪」、「他県移民との意思疎通の悪さ」、「衛生思想の低さ」など日本移民の評価をそこなうと一度ならず指摘された経緯がある。かなり類似した報告や伝聞がハワイや南洋においてもあった。特に日本移民のなかで沖縄移民が差別された理由の一つに相互の意志疎通がうまくかみあわなかったことはよく聞かされた。日本国民になったとはいえ、義務教育も十分に受けずに移民すると、沖縄移民は日本語がうまく聞けない・話せない状況にあった。沖縄移民は方言しかできない集団であったことに留意する必要がある。そして、沖縄移民は劣等不良移民呼ばわりされながらブラジルの大地でしたたかに生きぬいてみせたのであ

てんぷらなどの屋台が並ぶブラジル沖縄移民 100 周年前夜祭（2008 年）　石川友紀撮影

ブラジル沖縄移民 100 周年前夜祭で披露されたエイサー（2008 年）　前津政廣撮影

る。

初期日本移民はサンパウロ州のモジアナ地方がコーヒー生産の全盛期にモジアナ鉄道沿線のファゼンダに配耕された。やがて、コーヒー生産地は西漸（せいぜん）しアララクアラ一帯に拡大しながら、一方では南下しソロカバナ鉄道沿線一帯に拡大していった。泉靖一編著『移民』[4]（一九五七）のアンケート調査によると次のようにコーヒーファゼンダにおける移民の空間移動の展開が明らかとなっている。最初の日本移民の配耕地はモジアナ線三〇・〇%、ノロエステ線二三・六%、ソロカバナ線十七・〇%、ソロカバナ奥地八・〇%、アララクアラ線三・五%となっており、コーヒー栽培地がサンパウロ州の東部から西部の奥地に拡大していった。このようにプランテーション作物であるコーヒーが連作を続けながら絶えず新しい土地を求めて移動し、それにともなって鉄道施設が新設延長されていった。だが、コーヒー栽培地域の拡大はプランテーションであるファゼンダのみが新しい地域に拡大しただけではなかった。開拓前線として日本人やその他の機関が植民地を開拓したことがサンパウロの奥地への移動と密接にかかわっている。これらの動きは国営鉄道であるノロエステ鉄道に加え、パウリスタ延長線、ソロカバナ線の建設、そしてサンパウロ州から隣州への鉄道の拡大である。

「日本移民がファゼンダでの義務を果たした後は、州政府がセントラル線に植民地を造って土地を年賦で分譲、入植させる」という一項が、サンパウロ州政府の農務長官との契約書に含まれていたという。[5]ブラジル日系社会で初期移民は自らの日系社会をコロニア社会という。このことは一世移民を中心にブラジルの土地で生活した空間はファゼンダでなく植民地であったことを意味し、いみじくもコロニア（Colonia）が一世移民がブラジルの農村社会で生活した基盤であったからである。ファゼンダにおける日本移民の生活は決して楽しいものではなかった。きつく不自由なファゼンダの契約から解放されると、稼ぎのよい鉄道工夫やサントスでの港湾における沖仲仕（港湾労働者）となって働いている。ノロエステ鉄道やジュキア鉄道の工夫に多くの人々が従事している。鉄道が建設されると沿線には多くの植民地が創設された。日本人はこの新しい農地へと移り住んだ。そし

コーヒーの収穫　JICA横浜海外移住資料館提供

4　泉靖一編『移民　ブラジル移民の実態調査』古今書院、一九五七年。

5　外山脩著『ブラジル日系社会　百年の水流』改訂版、トッパン・プレス印刷出版、二〇一二年、九二ページ。

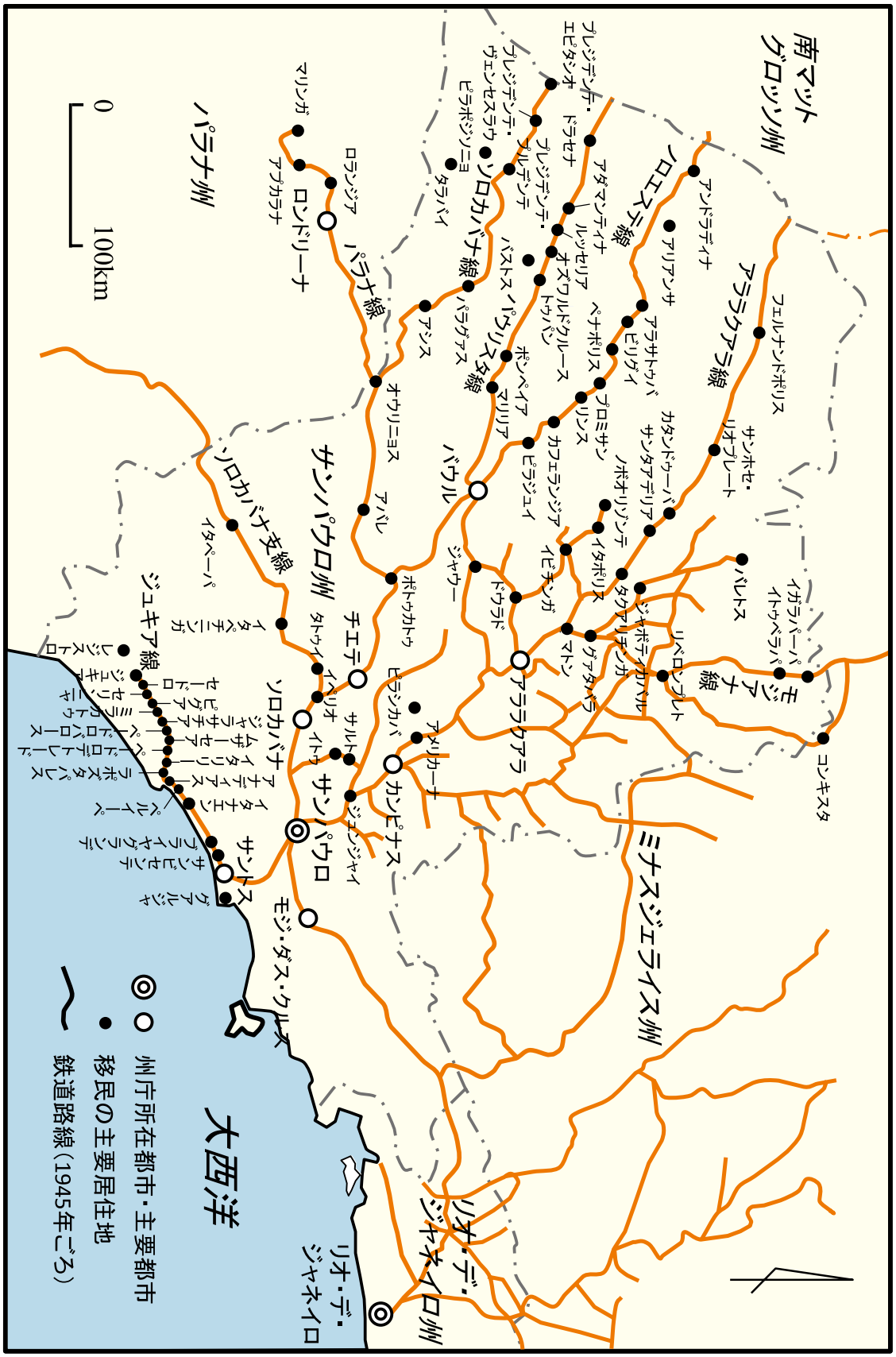


図２　サンパウロ州の主要鉄道と移民の主要居住地（島袋伸三原図）

て植民地への入植はファゼンダにおけるコロノからの開放を意味した。

植民地とは、営農団地であった。前述したように鉄道が敷設されると土地会社は工事中にその沿線の原生林を買収し、駅ができると、ロッテアメント（区画割）分譲した。原生林であるから土地は肥沃で作物がよくできたという。他にコンセッソンとは条件つき譲渡のことで、国内外の企業や実業家が国や州から広大な土地を無償あるいは低価格で譲渡を受け、植民地を造り、さらに商工鉱業その他の各種事業を興した。地域開発事業である。

植民地の形成過程とその類型について『ブラジル日本移民八十年史』（一九九一）によれば五つの型がある。[6]

（一）自然発生的に移民がある地域に小集団を形成し、次第に土地を購入し、入植する移民が増加しやがて大集団地（植民地）を形成するに至ったものである。サンパウロ近郊に位置するスザノ、モジ、コチア、カシオエイラなどが挙げられる。同じように、サンパウロ州南部沿岸地域のジュキア鉄道沿いに沖縄県出身移民が集団形成した地域はサントスを起点とする鉄道建設の工夫として移動し（工期一九一二～一四）、鉄道が完成するとイタナエン、アナディアス、ペードロ・デ・トレード、イタリリー、ミラカトゥ、ビグア、セードロ、ジュキアの各駅を中心として沖縄県出身移民が入植した。国から払い下げられた植民地となった地域である。鉄道で連結されていないが、ジュキアに隣接するレジストロも日本人が定着した植民地で、日本茶の生産地として今日でも広く知られている。

他に沖縄県人による集団形成地域として挙げられるのが一九七九年（昭和五四）にマットグロッソ州から分州した南マットグロッソ州の州都カンポグランデ市を中心とした地域である。カンポグランデ市を経由してボリビア国境に至るノロエステ国営鉄道建設工夫として地域に集まり始めた。初期移民でアルゼンチンに転住した者、アンデス山脈を越えてペルーから転住した移民も加わってカンポグランデ市周辺に定住した。なお、マットグロッソは一九二〇年代に国境警備のための軍事基地が建設されて都市化が進行したことも都市発展の主要な理由となった。そしてカンポグランデ周辺の植民地に入植したのは主に羽地村を中心とした名護出身の移民が大半を占めていたという特異な集団形成地となっ

6　日本移民八十年史編纂委員会『ブラジル日本移民八十年史』移民八十年祭祭典委員会、一九九一年、五一～五二ページ。

沖縄県によって建てられたカンポグランデ入植70周年記念碑（2009年）　島袋伸三撮影

た。他に大里村出身の移民も多い。

（二）移民はコーヒー生産の前線地帯を奥地と称した。サンパウロ州とマットグロッソ州の境界をなし、パラナ州に至る北西から南西地域に隣接するパラナ州北部において開発が拡大し、広大な原始林の分割売り出しが行われた。大地主から分割譲渡権を取得すると、それぞれの資力に相応して一〇アルケール（二五ヘクタール）から五〇～一〇〇アルケールあるいはそれ以上の土地を確保し開拓を行った。このようにしてサンパウロ州の奥地とパラナ州北部では一九二〇年代には多数の植民地が出現した。かつて通訳であった平野運平による平野植民地や東京植民地などがある。

（三）日本民間資本が土地を購入、あるいはサンパウロ州政府から無償譲渡を受け、これを希望する移民を入植させた植民地である。事例として、海外興業株式会社によるイグァペ、ブラジル拓殖会社によるバストス、チエテ、アリアンサなどの植民地がある。この植民地への入植は計画移民の形態をとって入植者はブラジルへの定住を覚悟して入植したという。なお、一九二九年（昭和四）の世界恐慌が原因となってコーヒー価格は暴落し、過剰生産が明白となり、一九三二年（昭和七）からサンパウロ州におけるコーヒー新植は禁止となった。

（四）厳密な定義では植民とはいえないが、一九三六年（昭和十一）以降綿花栽培が隆盛を極めた時代に、移民が集団で借地して植民地的様相を呈した地域が出現した。土地所有はなかったので綿花の好況、不況、地力の減退などで離散消滅が早かった。ソロカバナ、パウリスタ本線、アララクアラ線、ドウラデンセ線などの沿線に多く分布したという。

（五）連邦政府あるいは州政府の造成した植民地へ入植して日本人の集団地を形成した植民地をいう。第二次世界大戦前にソロカバナ線セルケリア・セザール駅の第一・二モンソン植民地がある。大戦後になって造成されたマットグロッソ州のドゥラードス植民地をはじめ、バイヤ州ウーナ、イタベラーやアマゾン流域のベラ・ビスタやアクレなどが挙げられる。

上記の植民地のいずれの形態に属するか判明しかねるが、初回移民を手がけた皇国殖民

綿摘み　JICA横浜 海外移住資料館提供

カンポグランデの住宅街のようす（2009年）
前津政廣撮影

会社の水野龍社長は自ら水野植民地を設立しており、皇国殖民会社業務代理人の上塚周平はノロエステ線プロミソンに一四〇〇アルケールの土地を獲得し一九一八年（大正七）に上塚植民地を設立し、移民の苦難を自らの苦難と受けとめて終生を共にしたことは広く知られている（一九三五年死去）。沖縄出身移民によって造成された植民地として佐敷村富祖崎出身の屋比久孟盛が設立したノロエステ線リンスの屋比久植民地は現地調査の際に移民の口をついて報告された。他に玉那覇植民地についても報告された。

近年、植民地は時代の変化にともない『移住地』と称することが一般的となっている。それにしても移民は植民地において移民生活を過ごしたことがよく分かる。半田知雄編著『ブラジル日本移民・日系社会史年表』[7]（改訂増補版、一九九六）によると、植民地の割譲は一九一一年（明治四四）から始まり、以後一九四〇年代までに多様な形態の植民地がサンパウロ州を中心に造成されたことが詳細に記録されている。そして一九四〇年代の日本移民が生活した植民地（入植地）は二〇〇ヵ所から三〇〇ヵ所まで増え続けたという。[8]

広大なサンパウロ農業地帯で日本移民はファゼンダからファゼンダへ、そして植民地から植民地へとより収益の良い土地を求めて移動した。この移民の行動は懸命に自らの社会上昇を目ざした努力にほかならない。この行動が彼らをして農地から農地へと移動をつき動かしたのである。移動の毎に自らの地位を高めていった、コロノから歩合作・小作へ、そして自らの農地を持ち労働者を使用する自作農へと努力する。同時にいろいろな栽培作物ともかかわりを体験した。他方では地方都市あるいはサンパウロやサントスなどの都市に転住し都市的職業に転ずる者もでた。しかし、やはり大半の移民は広大な農村地域を転住した場合が多かった。とにかくブラジル移民は頻繁に空間移動を行っている。このことは筆者がブラジルの各地で現地調査している際に強く興味を抱いたことである。よく働きよく移動した。あまりにも頻繁に動くとよい収益は得難いと思えてならなかった。このことは沖縄出身移民だけでなく日本移民全体の行動パターンであった。宮尾進（二〇〇二年）によれば、移民の引越し回数は一戸当たり「六回半」にも及ぶという。[9]このことは当時のサンパウロ農業の実態とは決して無関係でないことはうなずける。宮尾の説明による

7　半田知雄編『ブラジル日本移民・日系社会史年表』改訂増補版、サンパウロ人文科学研究所、一九九六年。

8　外山脩著『ブラジル日系社会　百年の水流』、一四四ページ。

9　宮尾進著『ボーダレスになる日系人ブラジルの日系社会論集』サンパウロ人文科学研究所、二〇〇二年、二一ページ。

移動回数はあくまでも平均回数であろう。筆者が実施したブラジルにおける沖縄出身移民のみに限ると、頻繁な空間移動は勿論のことその頻度はむしろ沖縄出身移民においてより多かったという印象を強くする。五〇キロ、あるいは一〇〇キロの移動はごく一般的の距離で、たまには駅のない地点で、そこは単に距離を提示する「一二〇キロ」という駅で下車したこともあった。時にはサントス海岸に近いジュキア地域から一〇〇〇キロ奥地のカンポグランデに移動することも報告された。そして沖縄出身移民は著者の調査経験では一〇回から十五回も移動した事例が告げられた。日系移民全体の中で沖縄出身移民はより頻繁に空間移動したのではないかと推測する。

移民初期はファゼンダでコロノとして働いた。しばらくすると移民の口からカマラーダという働き口がよく口をついてでた。ポルトガル語のCamaradaとは、農業の臨時雇いのことをいう。つまり日雇いの労働者である。移民が農地から農地へ移動する際、予定した農地を決定するまである程度の日にちを考える。友人あるいは知人の農地で世話になる滞在期間中日雇いをすることがよく行われた。無為に滞在するのでなく働きながら次の農地への移動を行った。移民は移動の毎に各地の農地でカマラーダをしながら移動した。このように、兄の農場で、知人の農地で、あるいは義父の農地でカマラーダをしたとよく報告した。その期間もさまざまで一か月から半年ほどの期間が一般的であった。

なお、第二次世界大戦前のブラジルにおける日本移民在留者は表2に示す通りである。

表２　ブラジルにおける出身道府県別男女別日本移民在留者数（1940年）

道府県名	在留者数			左計の構成比（%）	道府県名	在留者数			左計の構成比（%）
	男（人）	女（人）	計（人）			男（人）	女（人）	計（人）	
北海道	6,315	5,476	11,791	6.1%	大　阪	1,736	1,496	3,232	1.7%
青　森	410	363	773	0.4%	兵　庫	1,199	1,013	2,212	1.2%
岩　手	1,219	1,075	2,294	1.2%	奈　良	513	430	943	0.5%
宮　城	1,961	1,670	3,631	1.9%	和歌山	2,178	1,902	4,080	2.1%
秋　田	1,219	988	2,207	1.1%	鳥　取	833	737	1,570	0.8%
山　形	2,032	1,604	3,636	1.9%	島　根	735	618	1,353	0.7%
福　島	5,706	5,032	10,738	5.6%	岡　山	3,078	2,699	5,777	3.0%
茨　城	1,077	873	1,950	1.0%	広　島	6,901	6,082	12,983	6.7%
栃　木	554	466	1,020	0.5%	山　口	3,115	2,594	5,709	3.0%
群　馬	959	775	1,734	0.9%	徳　島	591	497	1,088	0.6%
埼　玉	456	392	848	0.4%	香　川	1,365	1,253	2,618	1.4%
千　葉	395	364	759	0.4%	愛　媛	1,988	1,768	3,756	1.9%
東　京	1,753	1,396	3,149	1.6%	高　知	2,469	2,058	4,527	2.3%
神奈川	434	343	777	0.4%	福　岡	9,347	8,351	17,698	9.2%
新　潟	1,314	1,119	2,433	1.3%	佐　賀	1,966	1,764	3,730	1.9%
富　山	787	704	1,491	0.8%	長　崎	1,484	1,238	2,722	1.4%
石　川	816	703	1,519	0.8%	熊　本	11,348	10,134	21,482	11.1%
福　井	595	453	1,048	0.5%	大　分	1,100	985	2,085	1.1%
山　梨	724	555	1,279	0.7%	宮　崎	842	749	1,591	0.8%
長　野	2,255	2,098	4,353	2.3%	鹿児島	3,270	2,842	6,112	3.2%
岐　阜	988	830	1,818	0.9%	沖　縄	8,802	7,485	16,287	8.4%
静　岡	1,941	1,613	3,554	1.8%	樺　太	39	23	62	0.0%
愛　知	1,934	1,595	3,529	1.8%	朝鮮・台湾	−	−	−	−
三　重	1,124	993	2,117	1.1%	不　詳	379	315	694	0.4%
滋　賀	545	489	1,034	0.5%	総　数	103,514	89,642	193,156	100.0
京　都	723	640	1,363	0.7%					

（注）資料の出所：外務省調査局（1943）『昭和十五年海外在留本邦人調査結果表』第9表本籍地別内地人，568ページ。

四　ブラジルにおける浦添からの移民

（一）戦前移民

戦前移民について説明を始めることにする。口絵表2によると、浦添から十四か国・地域への送り出しがあった。時代的には一九〇四年（明治三七）から一九四一年（昭和十六）にまたがっている。なお、移民のみの統計であるので香港、フィリピン以外の東南アジア諸国・地域、朝鮮、中国、台湾、南洋への移住は除外されていることに留意しなければならない。最も古くかつ最大の移民数を誇るハワイ（六〇四人）についで、ブラジル（三九三人）、フィリピン（三四三人）、ペルー（一八〇人）の四か国・地域は全体（一五六二人）の九七％を占める。その中でもハワイ移民は極めて突出していることが分かる。年別の送り出しをみると、一九〇六年（明治三九）が二〇二人送り出し、次いで一九一八年（大正七）一六五人、一九一七年（大正六）一〇七人を送り出している。大半の年には一〇～五〇人が送り出されている。

ブラジル移民は浦添全体では、ハワイに次いで第二位の移民数を示す。字別では、伊祖（八〇人）、城間（五五人）、沢岻（四八人）、内間（三〇人）が多く、以下、小湾（二九人）、安波茶（二九人）、屋富祖（二八人）、前田（二四人）、牧港（二一人）となっている。

筆者と故中山満琉球大学教授の二人は、一九七九年（昭和五四）から一九八〇年にかけて約三か月間にわたりブラジルにおける沖縄出身戦前移民の現地調査を行った。面接調査票は五〇〇件ほどであった。今回、改めて面接調査用紙をめくってみると、筆者による調査九件、中山教授による調査三件が確認され、合計十二件の浦添出身移民の情報があることが判明した。加えて、二〇〇九年に二件（カンポグランデ市）がある。移民年代をみると一九一〇年（明治四三）から一九二〇年代が八件、他に一九二九年（昭和四）から一九三四年（昭和九）までに六件があった。そのうち一〇人が構成家族による移民であった。既婚者はわずか二人で他は一〇代の未婚者であった。大半が困難な移民生活を送り、二世、特に三世時代からは大学を卒業し、弁護士や医者を輩出している。二〇〇九年（平成

1926年に息子安林の呼寄せで移民した内間カメの旅券　内間安一郎提供

1919年にブラジルに移民した伊祖出身の内間安林の旅券　内間安一郎提供

二一）に調査した粟国重信は五歳、内間清三は三歳で家族と移民しているので調査当時健在であった。

戦前移民の証言①

古い戦前移民の証言として、一九七九年（昭和五四）十二月に筆者が面接調査した宮城仁王（におう）[10]のブラジルの生活についてみてみよう。一九〇三年（明治三六年）一〇月に屋富祖で三男として出生。小学校在学中、親戚の宮城蒲夫婦と三人で構成家族をつくり、一九一七年（大正六）に小学校を中退しわずか十四歳で出稼ぎのため家長について来た。一九一八年（大正七）モジアナ線モンテーロ駅のファゼンダグァタパラに配耕された。六〇〇〇本のコーヒー樹の管理から始まった。しかし、労働があまりにもきつく逃亡した。知人をたよって近くのアララクアラ線のピントラマ駅の植民地で米をつくった。雨がよく降り豊作が続いた。一九二二年（大正十一）に契約が満期になり、ノロエステ線のプロミソンに移動し植民地で五アルケール（一アルケール＝二．五ヘクタール）を購入しコーヒー栽培を行う。一九二六年（昭和元）に妻を呼び寄せ結婚（二三歳）して独立し、近くの植民地に移動し一〇アルケールを購入しコーヒー栽培をするが、予想に反して生産がかんばしくなく、一九三〇年（昭和五）に別の植民地に移動し五アルケールを借地して綿花栽培を行った。一九三八年（昭和十三）には契約が切れ別の植民地に移り三アルケール借地して綿花栽培に従事、しかし思い通りにうまくいかないので、一九四〇年（昭和十五）に近くのファゼンダで三アルケール小作し綿花を生産するが、一九四五年（昭和二〇）にはさらに奥地のアラサトゥバに移り〇．五アルケールを小作し野菜生産を始めた。一九五〇年（昭和二五）には同じノロエステ線のビリグイ駅の近くで一アルケール購入し野菜生産に従事。一九五五年（昭和三〇）には夫が戦死した妹家族（三人）を呼寄せる。しかし、子供達の強い意見に従い土地を売却しサンパウロ市に移動し、靴屋を商うがもうからない。一九六一年（昭和三六）にはリオ・デ・ジャネイロに移動し、知人の製菓業の従業員として働いた。一九六四年（昭和三九）にはサンパウロ市に移動し、多くの県人が働いている

10　外務省の「海外旅券下付表」によると、宮城仁王は浦添村字屋富祖に本籍のある家長宮城嘉間の甥で、十四歳七か月のとき家長嘉間、その妻ウサとともに大正六年十一月一日にブラジルへの旅券が下付されている。

フェイラで菓子専門に商うようになった。

生活はやや安定し住宅を購入、しかしサントアンドレ市に移転して一九六九年（昭和四四）に愛妻が死去。一九七二年（昭和四七）から仕事を息子たちにまかせ隠居している。一九一八年（大正七）に移民しこれまでよく働いたものだ。子供は四男二女に恵まれ、今では十七人の孫に囲まれ長男家族と共に余生をゆったりと送っている。サントアンドレ県人会の支部に属している。妻のために仏壇があり墓地もある。模合はもう息子にまかせている。永住の決意は妹家族を呼び寄せた一九五五年（昭和三〇）だった。一九七四年（昭和四九）に沖縄再訪をはたした。住めば都だ。今にして移民してよかったと幸福をかみしめている。

一九八〇年（昭和五五）一月にサンパウロ市で内間蒲[11]を調査。内間蒲は一九〇二年（明治三五）二月に城間で出生。三男。仲西尋常小学校卒業。母が徴兵をおそれ、次兄家族を中心にいとこを加え四人で構成家族をつくり、一九一八年（大正七）九月に移民。モジアナ線ビーラコスチーナ駅のファゼンダに入耕し、四人で八〇〇〇本のコーヒー樹の管理から始まった。無事二年の契約満期を終え、一九二〇年（大正九）にアララクアラ線のファゼンダ、カンブイに入耕するが、いとこは自立し別の土地に移動。六〇〇〇本の管理を完了し、一九二二年（大正十一）に自立してサントスへ移動し港湾作業に従事することわずか一年で終わり、翌一九二三年（大正十二）ジュキア線のイタリリーで山林伐採作業のカマラーダをする。翌年サンパウロ市近郊のシャーカラ（小規模農場）でカマラーダとして働いた。一九二五年（大正十四）には知人をたよってノロエステ線のアラサトゥバの町で理髪業を自営。一九二九年（昭和四）パウリスタ延長線のマリリアに移り理髪業を続ける。一九三六年（昭和十一）に結婚、三四歳、妻十九歳。一九四一年（昭和十六）再度ノロエステ線アラサトゥバの兄の農場に戻り、五アルケールを借地して綿花栽培を行った。もうからず一九四八年（昭和二三）パウリスタ延長線のイラセーヌに移動して同じく綿花栽培に従事するがうだつがあがらない。思い切って一九五三年（昭和二八）にはリ

11　外務省の「海外旅券下付表」によると、内間蒲は浦添村字城間に本籍のある家長内間亀の弟で十六歳六か月のとき兄亀、その妻ウト、ウトの従弟仲西真才とともに大正七年四月一〇日にブラジルへの旅券が下付されている。

オ・デ・ジャネイロに移動し、ゼルニア農場で一アルケール借地しシャーカラを行った。一九六一年（昭和三六）にサンパウロ市に移動しフェイラで穀物類の商いをはじめ現在に至っている。ビーラ・プルデンテに住居を構え九人家族の生活を送っている。子供は六男三女に恵まれた。仏壇・墓地はない。新聞はサンパウロ新聞を購読、県人会には参加している。模合は親睦と資金調達のため同字出身中心で行っている。子供は皆ブラジル人だ。ここが永住の地と思っている。でも日本人である。戦前戦後沖縄には送金した。沖縄訪問は一九六八年（昭和四三）と一九七六年（昭和五一）の二回。移民して大変満足している。

戦前移民の証言②

浦添出身の戦前移民についてはさらに『在伯沖縄県人五十年の歩み』[12]（一九五九）、『浦添市移民史　証言・資料編』[13]（二〇一四）および前津政廣「南米（ペルー・ボリビア・ブラジル）移民調査概要報告」[14]（二〇一〇）より要約して述べる。

知念亀次郎[15]（屋富祖出身）は一九一七年（大正六）にモジアナ線サンタベルジャナ耕地に配耕され、二年間の契約を終了してコーヒー栽培の作業を身につけた。知人の紹介でパラナ州カンバラ駅バルボーザ耕地に入耕。ここの契約を終えノロエステ線モンテバールに移り、その後現在のリンス駅管内のアリアンサ区に移る。ここも四年の契約を終えて、ジェツリナにて十五域（コーヒー二万本）を所有した。

金城亀江[16]（内間出身）は一九一八年（大正七）にモジアナ線のグワタパラー耕地で二年間の契約労働を完了後、三角ミナスで米作を試みるがマレイタに冒され失敗する。病後にパラナ州バルボーザ耕地に住む島袋氏を頼ってコロノ生活を三年間送る。ノロエステ線カフェランジア駅のコロノを稼ぎながら転々とし、コーヒー育成の四年契約を請け負う。そしてパウリスタ線マリリア駅パルミツタール耕地でコロノを二年稼ぎ、結婚を機にマリリア市郊外で野菜作りに転業する。

12　城間善吉編著『在伯沖縄県人・五十年の歩み　日本移民五十周年記念』城間善吉、一九五九年、四〇一～五八六ページ。

13　浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史　証言・資料編』浦添市教育委員会、二〇一四年、四九～八八ページ。

14　『よのつぢ　浦添市文化部紀要　第六号』浦添市教育委員会文化部、二〇一〇年、三～十七ページ。

15　外務省の「海外旅券下付表」によると、知念亀次郎は浦添村字屋富祖に本籍のある戸主次志の弟で、十九歳三か月のとき大正六年十一月一日にブラジルへの契約移民として旅券が下付されている。

16　外務省の「海外旅券下付表」によると、金城亀江は本籍浦添村字内間で、大正六年十一月十一日にブラジルへの契約移民として旅券が下付されている。

宮城二良[17]（屋富祖出身）は一九一八年（大正七）にリベイロン・ブレット市ビーラマリヤ耕地に配耕となる。二年契約を経てノロエステ線ビーザ駅バレーロ耕地でコロノ生活を二年、同線シンシナート・ブラーガ駅タビアーノ・ピーザ耕地に二年、妻カマとともに築いた財産でリンス駅ゼツリーナ町上塚第二植民地に四域の土地を購入し五〇〇〇株のコーヒー植樹を行った。その後農園を広げ八域、コーヒー一万三〇〇〇株より収益を上げている。

宮城好道[18]（小湾出身）は一九一八（大正七）にモジアナ線ビラクステナ耕地に配耕され、続いてアララクアラ線アンマラ耕地、ノロエステ線サンタマリヤ耕地で働き、同線アリアンサ耕地の四年契約の完了をまってそれまでの蓄財を投じて五域を購入し、自作農となりコーヒー一万六〇〇〇本を植え付けその後も土地を購入し事業を広げた。

親富祖誠吉[19]（前田出身）は一九一七年（大正六）移民収容所を経由し、パウリスタ線サンマルチン耕地に配耕された。ここでコロノとして二年間働いた。子供が病気になったが、薬を買いに行くにも遠く時間がかかり、手遅れとなり亡くなってしまった。ノロエステ線プロミッソン駅ゴルゴアヅール植民地に土地を買い、コーヒーを栽培した。ここには沖縄県人は一人もいなかった。その後隣接地のコーヒー園も購入して、二九年間続けた。戦後は沖縄救援会を結成すると、支部を結成して移民物資の送り出しに力を注いだ。一九五六年（昭和三一）、地方生活を切り上げサンパウロへ移った後、長男は薬局を開店して繁盛した。

島袋仁和[20]（内間出身）は一九一七年（大正六）にパラーナ州カンバーラ駅のバルボーザ耕地に配耕された。四年間のコロノ生活でお金をため、付近の邦人四人とともに各自コーヒー三〇〇〇本を植え付ける予定で一〇〇アルケールの耕地を借りた。二〇アルケールの原始林を伐採してミーリョ（トウモロコシ）やフェジョン（豆）や米を植え付けたが失敗に終わる。再びコロノ生活に戻り資金をつくり、シャバンテで米作を始めて儲けた資本でコーヒー樹の育成に六年契約をして一万二〇〇〇本のコーヒーを植えた。コーヒーの値段が暴落したために契約完了後コーヒー園を耕主に渡すと手元に残らない有様であった。今

17 外務省の「海外旅券下付表」によると、宮城二良は本籍浦添村字屋富祖で、二七歳十一か月のとき大正六年十一月一日にブラジルへ契約移民として旅券が下付されている。

18 外務省の「海外旅券下付表」によると、宮城好道は本籍浦添村字小湾で家長として妻マツ、二男好二、妻の姪外間ウトとともに三四歳六か月のときに大正七年六月十五日にブラジルへ農業目的で旅券が下付されている。

19 外務省の「海外旅券下付表」によると、親富祖誠吉は浦添村字前田に本籍のある戸主■松の長男で、妻カマト、甥度加とともに二三歳七か月のときに大正六年四月二〇日にブラジルへの契約移民として旅券が下付されている。

20 外務省の「海外旅券下付表」によると、島袋仁和は本籍浦添村字内間の戸主仁王の長男で、二八歳九か月のとき大正六年四月二〇日にブラジルへの契約移民として旅券が下付されている。

度は、「メイア[21]（歩合作）」で三年間働き、同時に砂糖キビを作ってピンガ（サトウキビの酒）を製造して収入を得た。その頃ソロカバーナ線のプレシデンテ・プルデンテに良い土地があると勧められ、子供の教育のために日本人の多い同地に三アルケールの原始林を買って、三〇アルケールの地主となった。

島袋有彦[22]（前田出身）は、一九一八年（大正七）に渡伯、レジストロ植民地に入植。同植民地は水利の便がよく、ジュキア線の延長計画により水陸の便のあることから米作地として絶好の条件にあるためモーロ、アルト第五区に米作移民として入植したが、天候に左右される原始農法で米作だけではいけないと、第十区に甘蔗を植え製糖を始めた。蓄えができたのでまとまった土地を買った。甘蔗の病気発生により養豚業へ転向した四年後、副業で始めた米作が当たり利潤があがったので第十区を売り、ラゴノアーバへ移った。米作に従事して貯えた現金をもってレヂストロで二五年間茶を栽培した。一八〇域の土地にバナナ二万本、茶の製造工場など大財産を所有した。

佐久川昌助[23]（当山出身）は一九二〇年（大正九）呼寄せでブラジルに渡った。ノロエステ線トレス・ピーザ駅のファッカ耕地で一年間働き、また同線のモンテ・バーデ駅で一年ほどコロノを稼いでいる間に結婚した。その後リンス駅近くに移りコロノ生活三年の後、コーヒーの「メイア」を八年、契約農を二回と、コーヒーに打ち込んで経験を積んだ他、当時はやりの綿花も栽培したがうまくいかなかった。ようやくパウリスタ線ツピー駅の奥五〇キロのノーヴァ・マリリアで十五アルケールの土地を買い一万株のコーヒーを植栽し、二万五〇〇〇株までにもなった。（以上『在伯沖縄縣人五十年の歩み』）

粟國誠介（城間出身）は一九三三年（昭和八）に家族八人で渡航。最初の耕地はモジアナ線のファゼンダオタビックのコーヒー農場であった。二年後同じモジアナ線のイスペラーバ・アグーストに移動し五アルケール借地で綿花を栽培したが、うまくいかなかった。ノロエステ線のバウルに移り、洗濯業に仕事を変えた。

内間カメ（城間出身）は一九三五年（昭和一〇）ごろブラジルに渡航。四男の清三の記憶によると、ノロエステ線のアラサトゥーバで綿花栽培に従事したという。その後南マッ

21　地主から栽培管理を請負って収穫を半分分けにする制度。

22　外務省の「海外旅券下付表」によると、島袋有彦は本籍浦添村字前田の戸主島袋英慶の三男で、二八歳五か月のとき大正六年十一月二十七日にブラジルへの契約移民として旅券が下付されている。

23　外務省の「海外旅券下付表」によると、佐久川昌助は本籍浦添村字西原の戸主佐久川昌大の弟で、十九歳五か月のとき佐久川昌政の呼寄せにより大正九年六月二八日にブラジルへの旅券が下付されている。

トグロッソ州のカンポグランデへ移り三アルケールの土地で野菜を栽培した。

内間安林（伊祖出身）は一九一九年（大正八）に呼び寄せでブラジルに渡った。息子の内間安一郎の証言によると、最初にノロエステ線のリンス耕地に入ったが、ファゼンダ農園の暮らしが厳しくて一九三三年（昭和八年）にジュキアへ転住して二四ヘクタールの土地を開拓した。炭焼き、バナナ生産栽培に従事した。彼はジュキア沖縄県人会に自分の耕地の一割のおよそ二・四ヘクタールを寄贈し、県人会館の建設に貢献した。また、百年前の工工四教本をブラジル沖縄会館に寄贈した。（以上『浦添市移民史　証言・資料編』・「南米（ペルー・ボリビア・ブラジル）移民調査概要報告」）

（二）戦後移民

戦後移民について説明することにする。浦添市作成の統計では戦後移民数は四〇五人で戦前移民（二九三人）より多い。在伯沖縄県人会編の『ブラジル沖縄移民名簿』[24]（一九八七）によれば、年代別にみると、初期の一九五五年（昭和三〇）には極めて少なく、徐々に増加し、一九五八年（昭和三三）には七四人が送り出され、一九五九年（昭和三四）には一二〇人に至っている。以降、減少するが一九六二年（昭和三七）七二人が移民し、一九六三年（昭和三八）の七人でブラジル移民は終わっている。また、字別の出身地からみると、城間が最も多く、次いで牧港、沢岻、西原、屋富祖の順位となり、おしなべて各地域（字）から移民が送り出されていることが判明した。

移民の形態についてみると、次の四形態の分類がみられる。戦後の移民はおしなべて呼寄移民が最も多い。浦添からは全体の八八％を占める。計画移民の南米拓殖移民が約八％で、ついでボリビアからの転住者と産業開発青年隊（四人）がみられる。[25]

ここで、南米拓殖移民について説明しておく。戦後まもなく、沖縄本島中部地区で軍用地として土地を接収された地主を中心に移民を計画し、中部地区の市町村の首長が発起人となって一九五七年（昭和三二）に設立されたのが南米拓殖移民会社である。事業推進を目ざし事務所をサンパウロと那覇市に開設し入植地の選定を行い株券も発行した。一九五

内間安林が沖縄会館に寄贈した100年前の工工四教本（2009年）前津政廣撮影

那覇港にて出港前の記念撮影（1958年10月）
宮里文子提供

24　屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』在伯沖縄県人会、一九八七年。

25　なお、同時代の類似した「カッペン移民」があるが浦添からの参画がないので記述について割愛する。

26　浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史　証言・資料編』四九～八八ページ。

八年（昭和三三）二月に先発隊を送り出し、第二次・第三次まで入植した。しかし、具体的統計は見当たらないという。入植地はかつて笠戸丸で渡航した沖縄移民二四家族が配耕されたカンピナスの西に位置するファゼンダ・フロレスタに近い土地であった。南米拓殖移民で入植し開拓にたずさわったのはわずか十三家族だけであった。移民のなかには農学者も参加していた。だが、結果は失敗に終わった。『浦添市移民史　証言・資料編』[26]において移民を熱意をもって推進した経緯を複雑な気持ちで評価しているのがうかがえる。同書に掲載されている戦後の移民者について要約して紹介する。

親富祖政吉（一九三七生　前田出身）は、生後二か月で徴兵された父が戦死し、小学生のころに母を、沖縄戦で祖母を失っている。父の弟に引き取られて育った。首里高等学校の定時制を卒業した後、農業をしていたが、一九五八年（昭和三三）に第四次開発青年隊の一員として単身でルイス号でブラジルに渡った。旅費は琉球政府の移民金庫を利用した。トッパンで二年間働いて、リンスで綿を栽培した。その後何度か職を変えたが、トッパンで土地を購入して綿を栽培した。同じ浦添出身の宮城信義さんが早く街に来るようにと言ってくれたので、サンパウロに移った。カーサベルデでは、初めは縫製業に就き、次にタクシー運転手となった。一九七〇年から「ダブルオーコウギョウ」という会社で再び縫製の仕事に従事して二〇年間勤めた。帰化はしないが、永住権をリンスで取得している。浦添市郷友会の会長を七年間務めている。

仲西盛幸（一九四一年生　屋富祖出身）は一九五八年（昭和三三）に、前年にブラジルに移民していた兄盛徳を頼って渡航した。大阪商船のあるぜんちな丸であった。神戸移住斡旋所でブラジル事情等の講義を受けた。身体検査は那覇の保健所で受けた。呼寄せ人であった知念亀次郎さんのいるアリアンサ植民地のコーヒー農園で働いた。持参したお金で土地を買い、現地の人を雇ってコーヒーを栽培した。そのほかに豆やマンジョッカ（キャッサバ芋）も植えた。九年間コーヒーの栽培をしたが、お金が貯まらないと、そこを売ってサンパウロ市内に出てきた。最初はフェーラ（露店市）で果物を売った。その後

移民青年隊の訓練所のようす　親富祖秀美提供

第６次移民青年隊でブラジルへ渡航した親富祖政吉　親富祖秀美提供

南米拓殖移民会社株券　外間弘提供

兄の妻が縫製の仕事をしていたので、ミシンを増やしてビーダジャルジュンビラソラマーザで縫製の仕事を開業した。国籍は日本である。永住のつもりというより、父と一緒に来ているのでそういう考えはなかった。妻が三世なので沖縄語とポルトガル語で会話するが、家族間ではポルトガル語である。

宮城信吉（一九三九年生　牧港出身）は、首里高校二年の時に、兄の信一が南米拓殖会社の先発隊としてブラジルに行った。いずれ自分も行くと約束していた。一九六〇年（昭和三五）に財産を処分して両親、兄の妻、弟妹と共にさんとす丸でブラジルへ移民した。三重城（ミーグスク）の移住センターで身体検査をして神戸へ向かった。兄のいるサルト・デイ・イトウに行き、五アルケールの土地を購入した。これは南米拓殖会社とは関係のない土地である。南米拓殖会社がうまくいっていないと兄信一から聞いていた。信吉と信一が農業で生計を立て、弟妹を街の学校に通わせた。一九六三年（昭和三八）にパウリスタ農業組合から資金援助をうけて養鶏業を始めた。多いときで三〇〇〇羽育て、週に三回トラックに一トンずつ卵を出荷していたが、出荷すればするほど赤字となり、組合を通さずに卵を売ることにした。この土地を処分してサンパウロ市のカーサベルデに出てきた。フェーラで卵や果物を売り、その後土産物、一九九一年（平成三）にはスーパーマーケット、肉屋、花屋を営んで、今は隠居している。国籍は日本だが、最初から永住のつもりで移民した。ブラジルで大地主になるという夢もあった。妻とは沖縄方言で会話し、家族とは日本語とポルトガル語である。

喜屋武義雄（一九三三年生　牧港出身）は、戦時中は宮崎へ疎開した。沖縄に残っていた家族は沖縄戦の犠牲になることはなく無事でいた。終戦直後に父が亡くなり、食べることに精いっぱいのくらしであった。一九六一年（昭和三六）二七歳の時に家族十一人でブラジルへ移民した。旅費は神戸からブラジルまでは日本政府からの援助があった。那覇から鹿児島へ行き、熊本まわりで神戸へ向かった。チサダネ号に乗船した。当時は軍作業に行き、土地もなく南米拓殖の関係で来た。余計に株券を持っていれば現地で多くの土地を貰えると夢を抱いていた。南米拓殖がつぶれて頭が真っ白になった。ブラジルではおばがいるアラサツーバに行き、サンパウロのカーサベルデでクストゥーラ（縫製）の仕事を三

渡航前の送別会　内間(旧姓仲西）ツル子と生徒たち（1958年）仲西正勝提供

表３　ブラジル浦添市郷友会歴代会長（郷友会創立1985年3月31日）

	氏名	Nome	在職期間	出身字
初代	又吉哲雄	Tetsuo Matayoshi	1985年	牧港
２代	内間清晃	Seiko Uchima	1986～1993年	城間
３代	銘苅成二	Seiji Mekaru	1994～1995年	仲間
４代	赤嶺盛行	Seiko Akamine	1996～2005年	城間
５代	親富祖政吉	Seikichi Oyafuso	2006～2014年	前田

〇年ほど続けた。最初から永住のつもりで来た。仏壇もお墓もある。

ブラジルへ移民する当時、移民の皆さんはどのような生活を送っていたであろうか。高齢者では軍隊からの帰還者がいた。家庭の生活を続ける農家、いろいろな軍作業員、ホームメイドがいた。琉球大学卒業者、役場吏員、高校卒業生や移民するために中高校中退を余儀なくされた生徒などであった。母親は子供の面倒をみながら不安と希望を抱きつつ夫と共に移民したであろう。

移民した浦添の人びとはどこに定着したのだろうか。当然、日本の本州とほぼ同じ広さをもつサンパウロ州の各地のそれぞれの呼寄せ人の場所に最初は到着したことがうかがえる。そして農村ではコーヒー、綿花、蔬菜生産を行い、都市近郊ではシャーカラ（小規模経営）で蔬菜作りに従事し、都市では露天市でフェイラを営んだ。一九七〇年代に至ると人びとは地方都市、サンパウロ市や近郊に移動し、多くの沖縄県出身移民が従事したフェイラやクストゥーラ（縫製業）などを中心に都市的職業に従事したことが知られている。そして戦後移民は戦前の先輩移民に比較して身変わりが早いことも指摘されている。

厳しく苦しい生活のなかで、日系移民は教育熱心であったことは自他共に認める文化的特徴である。よく「日本移民は集団ができると、学校を造る」、「ヨーロッパ人は教会を建てる」といわれて来た。ブラジル人口でわずか数％しか占めない日系人はブラジルの最高学府であるサンパウロ州立大学（ＵＳＰ）の合格率は十五％強を誇るという。高学歴が多いせいか日系人は男女とも他民族との結婚率は高い。戦後の若い世代の職業は医学、法学、会計学、情報工学、エンジニアや薬剤学へと上昇多様化している。しかし、最近は韓国系の若者の進出が目立ちはじめている。

五　太平洋戦争による移民社会の混乱

ヨーロッパにおける第二次世界大戦の勃発（一九三九）と前後してブラジル政府は移民社会に対して強く圧力を加えてきた。日語学校が閉鎖、一九四一年（昭和十六）のパールハーバー襲撃の後は邦字紙は一斉廃刊となり、ついに一九四二年には日本大使館の国外退

1957年にブラジルに移民した米田正吉（2008年）宮里文子提供

コーヒー農園にて
宮里文子提供

去となった。サントス近郊の日本人居住者は奥地二〇〇〇キロメートル立ち退きを命ぜられた。そして一九四五年（昭和二〇）六月に日本に対して宣戦布告したことは移民に全く知らされていなかった。このような「空白の時代」にいたり、正確な情報が全く欠落し混乱した状況下で、神国日本戦勝を信ずる移民が集団化した。この結成された戦勝集団は、数名の陸軍退役軍人の活躍により団体組織の強化拡大が推進された。情報は捏造され、多くの移民はこれを妄信し、かつての既成組織の機能は弱体化していった。各地の移民集団地には不安がつのり、様々なデマが流布され、流言蜚語のもとに移民同士の誹謗強迫が各地で多発した。日本の降伏は晴天の霹靂のごとくブラジル移民社会に伝わって、敗戦は戦勝となってデマのニュースが流布されていった。移民分布の多いカンポ・グランデ、ノロエステ、パウリスタ延長線、ソロカバナ線、サンパウロ、ジュキア線で戦勝への機運が高まった。そしていつしか戦勝を信ずる組織が集結して「臣道連盟」となって活動がより活発化していった。

やがて大戦の実態が内外から明らかとなると、実態認識の活動が活発となった。認識派あるいは敗組の台頭である。これに対し、臣道連盟（勝組の中心的組織）は各地区の支部組織を通じ敗組を非愛国者と名指し、これらの撲滅のためテロ暗殺事件へとエスカレートしていった。ジュキア線の沿線地域で指導的地位にあった羽地出身の花城清安に対して墓標をつきつけて脅迫した。沖縄県出身団体では殺害事件は発生しなかった。しかし、結婚前に子供までできた夫婦の家族が勝組・敗組にわかれて敵対し、ついに若い二人の結婚は破綻に追いやられた事件が発生した。勝組の間には異常な犯罪事件が起きた。このために日本人百数十人が国外追放の重刑をうけた。このような血なまぐさいテロや暗殺事件をブラジル政府は「ファナティコ（狂った）日本人」[27]と厳しく非難した。

やがてこの事件は変質し、日本降伏後は愛国運動を偽装した詐欺事件に転じた。いわくブラジル移民は棄民と化し、実態のない大東亜共栄圏のアジアに移民すべきであると宣伝し、東南アジアで使用されていた日本軍票を純朴な移民に売りつけだますなどの悪質な事件が各地で発生した。サンパウロ市営市場で日本人で最初に売場を得た田場ウシは、サン

27　太平洋戦争前後の勝組・敗組の騒動については、宮尾進著『臣道聯盟』（サンパウロ人文科学研究所、二〇〇三年）や高木俊朗著『狂信』（朝日新聞社、一九七〇年）に詳しい。

トスに待ち受けている日本に帰る移民船に乗船すべくすべての金を軍票に換えだまされた人物である。一体勝組・敗組という名称は、かの毒舌で名高い大宅壮一の造語であるという。勝組・敗組の対立は現在に隠然として存在する。ブラジルの県人会の意見では県系人の九〇％は勝組であったという。大城立裕による沖縄移民のこのテーマを題材にした小説に『ノロエステ鉄道』と『ジュキアの霧』がある。

六　沖縄県出身移民のコミュニティ形成

ブラジルにおける初期移民はきびしい生活環境で、相互扶助の目的で在伯球陽協会が組織されたのは一九二六年（大正十五）であった。

第二次世界大戦後、未だに移民社会が混乱しているなかで、地上戦により悲惨な状態にあえぐ沖縄同胞の救援は対立をこえて一九四七年（昭和二二）に在伯沖縄救援連盟が設立された。戦後の組織活動の始まりであった。まもなく沖縄救援委員会と改め、一九五〇年には沖縄文化救済協会に組織替えした。一九五三年に同協会と全伯沖縄県人会（一九五〇年頃設立）とを解消して新たに全伯沖縄海外協会を設立した。一九五五年に在伯沖縄協会、一九七七年に在伯沖縄県人会、一九九八年（平成一〇）にブラジル沖縄県人会と改称し、健全で活発な組織活動を行っている。ブラジル沖縄県人会は地域主義に依拠し、地域の支部によって成立している。組織数が成立当初より減少しているのは、移民がかつての農村地域より都市地域へ移動したことによる。

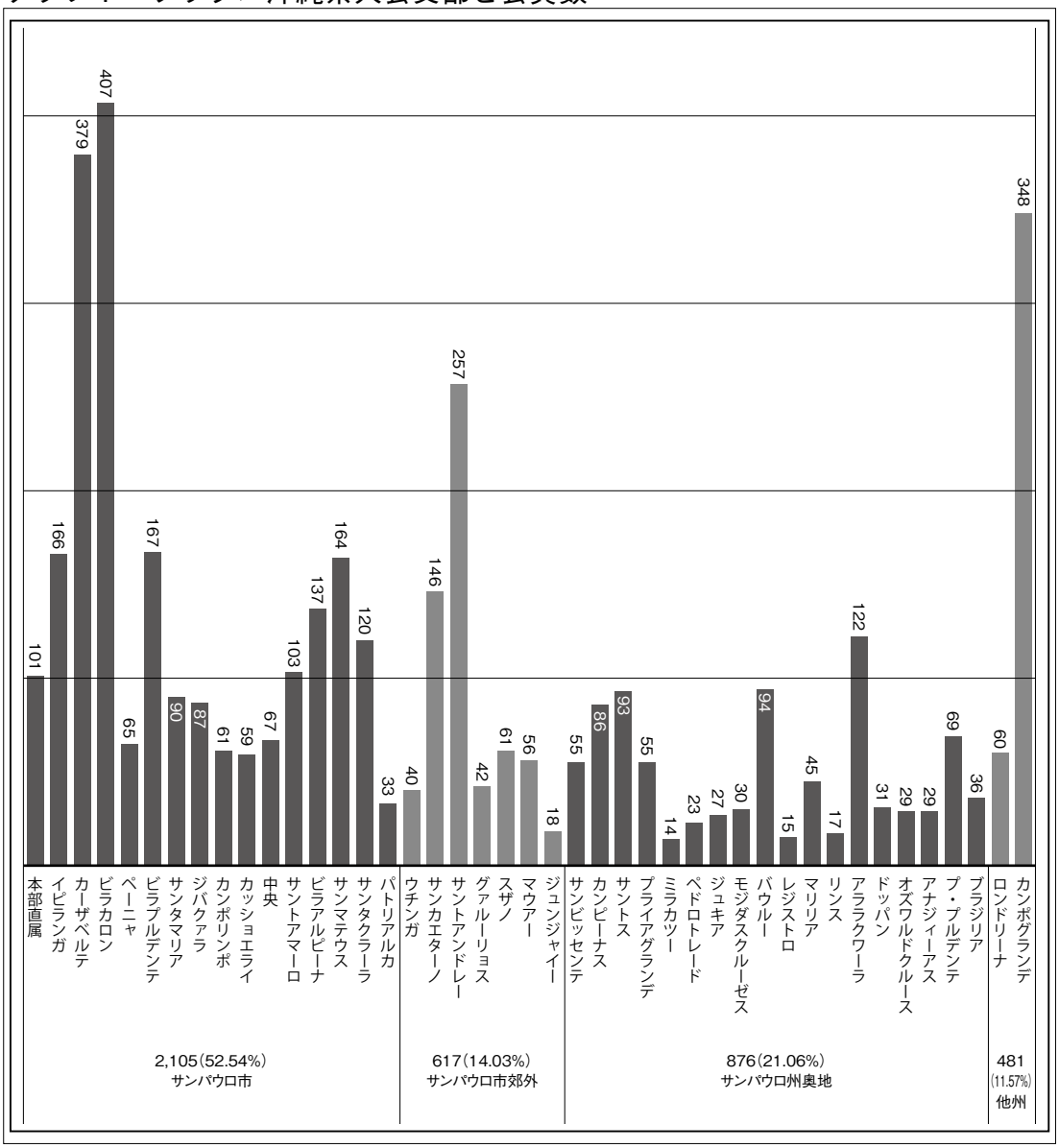
グラフ1は一九九八年現在のブラジル沖縄県人会の支部と会員数の分布を示している。現在、ブラジルの日系人総数は約一六〇万人と推定されており、その一〇％が沖縄県系人といわれている。サンパウロ市とその近郊に全体の六六．五七％が集中していることがわかる。浦添出身はサンタバーバラ支部に集中しているといわれている。現在は鉄道は殆ど消滅しているが、かつての鉄道沿線の支部は健在である。カンピーナス、アララクアラ、バウル、リンス、マリリア、トゥパン、オズワルドクルース、プ・プルデンテの支部である。サントスからジュキアにいたるジュキア線は沖縄県系人が集中している地域として特

カンポグランデ沖縄県人会（2009年）
前津政廣提供

サンパウロ市のブラジル沖縄県人会（2008年）
石川友紀撮影

記してよい。他にブラジリアの支部がある。他州の集中地区は南マットグロッソ州都のカンポグランデ市とバラナ州のロンドローナが挙げられる。（図2を参照のこと、島袋原図）なお、他に故花城清安氏を中心に設立された「ブラジル沖縄センター」がある。

グラフ１　ブラジル沖縄県人会支部と会員数



資料の出所：「ブラジル沖縄県人会広報」（1998）10ページ

第五節　アルゼンチン

一　概要

二〇一二年現在アルゼンチン共和国は、面積が二七八万平方キロメートル、人口が四一〇八万七〇〇〇人であり、人口密度は一平方キロメートルあたり十五人である。アルゼンチンの首都は、ブエノスアイレス市で、二〇一〇年現在郊外を含む人口は一三〇四万七〇〇〇人である。[1]

アルゼンチンはラテンアメリカにおいて、面積からみてブラジルにつぐ大国であり、南緯二二度から同五五度にわたって南米大陸の南部の大半を占め、その面積は日本の約七・四倍に相当する。同国は南米大陸の南部にあり、南北の長さが約三七〇〇キロメートル、東西の最大の幅が約一五〇〇キロメートルもある。アルゼンチンは北部をボリビアとパラグアイ、東部をブラジルとウルグアイ、西部をアンデス山脈をはさんでチリに接し、五か国と隣接し、東南部一帯は大西洋に面している。南端にはマゼラン海峡を隔ててフエゴ島があり、チリとは南北の直線で国境が定められている。

アルゼンチンの地形はアンデス地方の西部、亜熱帯平原の北部、パンパス地帯の中央部、パタゴニア地方の南部と四つの地域に分けられる。西部はチリとの国境をなしているアンデス山脈地帯であり、同山脈は大西洋または太平洋に注ぐ河川の一大分水嶺となっている。アンデス山脈には標高六九六〇メートルのアコンカグア巨峰などの連山がそびえる。北部の亜熱帯平原は概して低地で、大部分がグランチャコと呼ばれる湿地帯をなし、一部は密林地帯をなしている。すなわち、西はアンデス山麓、南はパンパまでの広大かつ肥沃な森林地帯であり、雨量も多く、農牧業や林業の好適地である。この地域は生産物の多様性に富み、豊富な自然資源に恵まれている。

アルゼンチンの中央部はパンパと呼ばれる大平原地帯であり、平坦かつ肥沃で農業と牧畜業が行われ、経済的に同国の再重要地域をなしている。「世界の穀倉」と称される地域である。南部のパタゴニアとはネグロ川から大陸の最南端に及ぶ全地域を含む半砂漠地域をいう。パタゴニアは低い海岸沿いの平原から西方へ一連の高原へとつづき、たえず強い

図１　アルゼンチン略図

宮内久光作成

1　矢野恒太記念会編（二〇一三）『世界国勢図会』二〇一三／一四年版、三四頁、五八頁、八八頁、矢野恒太記念会。

西風が吹く不毛の地ではあるが、同国の最も重要な羊の産地であるとともに、石油資源地帯としてアルゼンチン経済に重い比重を占めている。また、多数の氷河期の美しい景観のため、避暑地や観光地としても知られる。アルゼンチンにはラプラタ川・パラナ川・コロラド川などがあり、ブラジルとパラグアイとの国境地域には、高さ八〇メートル、幅四キロメートルにわたる熱帯の滝、イグアスの大瀑布がある。

アルゼンチンの気候は、地形が南北に長く伸びているため、熱帯気候から氷雪気候まで、すべての気候帯が含まれているが、平均して温和である。同国の北部および北東部は気候の変化の少ない熱帯地域であり、暑気もはげしく湿度も高く、四季の区別がほとんどない。首都ブエノスアイレス市を中心とするパンパの平原地域は温暖で住むのに適した地域と言われている。ちなみに、ブエノスアイレス市の夏季の平均気温は二五℃、冬季は十二℃である。南部のパタゴニア地域は、コロラド川から南はたえず強風が吹きつけ、空気は乾燥し、一部は砂漠気候となっている。最南端のフエゴ島は寒冷地域であり、寒風・降雪・あられ・降雨がはげしく、夏季でも一〇℃以下の気温である。

アルゼンチンの歴史を振り返ると、一五一六年スペインの探検家がラプラタ河口に到達し、一五七三年スペインの支配権が確立して、一七七六年にはスペインの副王領になった。一八一六年に「ラプラタ連合」として独立を宣言した。一八五三年に連邦国家となり、大統領制を施行した。その後、先住民インディオをパンパから駆逐し、その広大な土地を完全に白人支配下に治め、大農園エスタンシアが形成された。

こうして、スペインを宗主国としたラテン系の白人国となったアルゼンチンは、その後、イタリア・スペイン・オランダ・ドイツの順に、ヨーロッパから大量の移民を受け入れた。その結果、アルゼンチン政府の移民統計によると、一八五四年から一九六四年までの一一〇年間に、アルゼンチンが受け入れた移民の数は二六四八万人にも達し、同期間の出国数二〇九一万人を差し引いても、なお五五七万人が移民の在留者として定着したことになっている。

その後、二〇世紀初頭に日本人移民も入国するようになるが、その時期にはアルゼンチ

ブエノスアイレス市にある国会議事堂
石川友紀提供

ンはすでに完全な白人国となっていたのである。このように、アルゼンチンは南米においてチリやウルグアイと並んで白人の国と言われ、ヨーロッパでもスペイン系とイタリア系で全体の九五％、また、ドイツ・フランス・イギリスなどの白人系も合わせると九七％にも達する。その他には中近東や日本などアジア系移民も含まれ、また、先住民であるインディオが北西部のチャコ地方や南パタゴニアにわずかにみられる。

最近はアルゼンチンへ近隣諸国のパラグアイ・ボリビア・チリ・ペルー・ブラジルなどからの出稼ぎ労働者が増加し、二〇〇三年時点ではアルゼンチンの外国人人口は全体の四．二％の一五三万人も在住していることが、アルベルト松本の『アルゼンチンを知るための五四章』（二〇〇五）から、以下のように知られる。

二〇〇三年現在、アルゼンチンの外国人人口は全体の四．二％で一五三万人である。そのうち九〇万人は近隣諸国（パラグアイ人が三二万人、ボリビア人が二三万人、チリ人が二一万人、ブラジル人が三万人）からで、九〇年代に入ってからはペルー人出稼ぎ労働者が極端に増えている（九万人）。全体の半分近くはブエノスアイレス市郊外と州内に居住しており、ここでも正規のビザを持っていない者が多い。ただ、定期的に特例措置で合法化したり、期限を設けて滞在許可手続きを認める仕組みが以前から定着している。今は、ボリビア人がいなければブエノスアイレスではレタスもトマトも栽培する人がいないというぐらい、外国人移民なしでは、一部の業種は成り立たない状況になっている。[2]

アルゼンチンはとくに人口の都市への集中が激しく、首都ブエノスアイレス市とその近郊に総人口の約八〇％が集まっている。各都市の生活様式はまったくヨーロッパ的であり、すべての面でヨーロッパ諸国のしきたりや伝統を強く引き継いでいるようにみえる。首都のブエノスアイレス市が「南米のパリ」と称されるゆえんである。しかし、最近は高層ビルやショッピング・モールも立ち並び、同市は世界の大都市の発展と軌を一にしている。

スペイン植民地時代をしのばせる建物　石川友紀提供

2　アルベルト松本著（二〇〇五）『アルゼンチンを知るための五四章』三三一頁、明石書店。

一方、地方都市に行くと、初代開拓者の出身地により、それぞれスペイン・イタリア・イギリス風の様式が守られていて、大牧場や畑地を有する大農園主も多い。また、北部地方では今でも、先住民インディオの風俗・習慣等が伝統として残っている地域もある。

アルゼンチンの公用語はスペイン語であり、国民の約九〇％はカトリック教徒である。また、同国は南米で最も教育が普及していて、大学進学率も高い。アルゼンチンは芸術活動も盛んであり、一九世紀初頭における田園生活を背景としたガウチョ（牧童＝カウボーイ）文学や、庶民の間に生まれたタンゴやミロンガ、先住民と関わりのあるフォルクローレ（民謡）などの音楽や舞踊は世界的に有名である。

アルゼンチンは最近工業化を進めているが、農業や牧畜業が依然として国家経済の主軸であり、世界有数の大牧畜国である。すなわち、パンパの大平原地帯から南部へかけて、牛や羊の大群が放牧され、食肉生産は世界的であり、アサード（焼肉料理）とワインは有名である。農産物は小麦・大豆・トウモロコシ・綿花・ヒマワリなどの栽培が盛んである。果実類では、中西部のメンドサ州はブドウ、南部のリオネグロ州はリンゴとナシの名産地である。

二　日本人移民の歴史

アルゼンチンにおける日本人移民の歴史を振り返ると、個人としては一八八六年（明治十九）牧野金蔵がブエノスアイレス市に上陸し、その後三〇年余コルドバ市に住みついた事実をもって、日本人移民の最初とみなされる。集団移民としてみると、アルゼンチンへの日本人移民は一九〇八年（明治四一）ブラジルへの第一回移民、すなわち、笠戸丸移民の一部がアルゼンチンへ転航（転住）したことによって始まる。賀集九平はその著『アルゼンチン同胞八十年史』（一九八一）のなかで初回ブラジル移民からの転航者について、以下のように記述している。

笠戸丸七百八十一名の移民のなかで、アルゼンチンに転航したもの百六十九名で、その先駆けを

なしたものは福島県人星清蔵夫妻であった。配耕されたズモント耕地は、コーヒーの結実極めて少なく、そのうえ採集不慣れで収入高は予想の四分の一にも達しなかった。労働過重、生活不安に不満をいだき入耕二ヶ月で耕地を逃亡、アルゼンチン転航を企て、笠戸丸アルゼンチン転航組のナンバー・ワンとしてアルゼンチンの土を踏んだのは一九〇八年の十月であった。同転航者組は、ズモント耕地の福島県人星清蔵、星ノイ、熊本県人山中助次郎、山中ミドリ、サンマルチニョ耕地の鹿児島県人右田納助、フロレンス耕地の沖縄県人仲里新忠、知念政次の諸氏七名であった。この星ノイ夫人と山中ミドリ夫人こそ、アルゼンチン国に入国した最初の日本婦人と思われる。[3]

外務省の移民統計によると、日本からアルゼンチンへの移民は一九〇七年（明治四〇）の一人から開始され、一九〇九年（明治四二）にも一人と明治時代は一桁台にすぎなかった。一九一二年（大正元）の十六人から増加し、翌一九一三年（大正二）には一〇三人と急増した。かれらはすべて自由移民であり、その多くは中学校卒業以上のインテリ青年であった。外務省の「海外旅券下付表」の渡航の目的をみると、商用、視察、研究などであった。その後、アルゼンチンへの移民数は一九一六年（大正五）の一三五人以降一〇〇人台となり、一九一九年（大正八）には一七四人とピークを形成する。

当時、自由移民としてアルゼンチンへ入国したため、渡航後ただちに就職口を探さなければならなかった。かれらの職業についてみると、移民の初期において日本人移民が多く就職したのは、工場労働者、家僕、園丁、野菜師などであった。そして、数年間苦労しながらアルゼンチン事情に通じ、若干の蓄財ができるようになると、ようやく小規模ながら事業の独立経営へと転換していった。その結果、一九二〇年（大正九）頃には、早くも牧場、農園、花卉園、果樹園の借地経営を行う者が現れた。また、主としてブラジルからの転航者によるコーヒー店経営も盛んになり、洗染店を経営する者がでてきたのもその頃からであった。

一九一〇年代から一九二〇年代にかけて、日本人移民の職業は、製糖・冷凍肉・羊毛・羊皮・木工場などの工場労働者、家内労働者、港湾の荷揚人足、コーヒー店の給仕人、タ

3　賀集九平著（一九八一）『アルゼンチン同胞八十年史』九～一〇頁、六興出版。

クシーの運転手、蔬菜栽培などと多様化していった。白人の得意とする牧畜業に従事する者は少なく、サービス業や製造業など都市的職業と近郊農業に従事する者が多数を占めていた。

一九三〇年代になると、日本人移民の職業は農耕・園芸・畜産労働者、洗張・染色・洗濯業に従事する者が多くなる。一九五〇年代から一九七〇年代になると、アルゼンチンにおける日本人移民の職業は、洗染業、花卉栽培、蔬菜栽培の三つの職種に特化するようになる。[4]

三　沖縄県出身移民の歴史

沖縄県からアルゼンチンへの移民は、日本人移民と軌を一にし、一九〇八年（明治四一）ブラジルへの初回移民二人が転航（転住）したことによって始まる。この両人とは首里生まれ那覇区出身の知念政実（または政次、三良）と今帰仁間切出身の仲里新忠である。その一人知念については、ブラジルの初回笠戸丸移民の名簿には、知念政実（政次）の名はなく、知念三良の名前で記載されており、前身は沖縄芝居の役者であったと言う。この初回ブラジル移民のなかに沖縄県出身者が三二五人（全体七八一人の四一・六％）と最も多かった関係上、以後転航（転住）などによるアルゼンチンへの移民のなかで、県出身移民の比率が高くなる。また、遠くペルー・チリ・ボリビアなどからも陸路、砂漠やアンデス山脈を越えて、アルゼンチンへ住みついた県出身移民も少なくなかった。[5]

沖縄県からアルゼンチンへの公式文書として、外務省の「海外旅券下付表」による移民の記録は一九一三年（大正二）の十四人から始まる。その後、県からアルゼンチンへの移民は毎年つづき、一九四一年（昭和十六）までの二九年間の移民数が三〇〇二人となる。その間の移民数の推移を表１「沖縄県からアルゼンチンへの年次別移民数および全国比」でみることにする。

4　アルゼンチンにおける沖縄県出身者を含む日本人移民の職業と職業構成の変遷については、石川友紀（一九八三）「アルゼンチンにおける沖縄県出身自由移民の職業構成の変遷について―分析と考察を中心に―」『琉球大学法文学部紀要』史学・地理学篇、第二六号、七一～一一八頁、明治期アルゼンチンにおける日本人移民の職業、大正期首府ブエノスアイレス市における日本人移民の労働者の賃金については、石川友紀（二〇〇三）「第二次世界大戦前南米ペルー・ブラジル・アルゼンチン・ボリビア・チリへの日本人移民の渡航経過と職業構成（Ⅱ）」『琉球大学法文学部人間科学科紀要 人間科学』第十二号、一九五～一九六頁、二〇七～二一二頁を参照してほしい。

5　知念政実などブラジルからアルゼンチンへの転航者については、アルゼンチンのうちなーんちゅ八〇年史編集委員会編『アルゼンチンのうちなーんちゅ八〇年史』（一九九四）十五～十六頁、五〇～五四頁、在亜沖縄県人連合会に詳しい。

沖縄県からアルゼンチンへの移民は、二回目の一九一四年（大正三）の三人から一九二五年（大正十四）の九五人までは、一桁台から二桁台で一〇〇人未満であった。しかし、翌一九二六年（大正十五）の一三〇人からは急増し、一九二九年（昭和四）には二四五人となり、翌一九三〇年（昭和五）には史上最高の三一〇人を記録する。移民数はその後も、一九三三年、三四年の六二人、八三人を除いて、一〇〇人台から二〇〇人台を推移し、一九三六（昭和十一年）の二三一人はいまひとつのピークを形成する。一九四〇年（昭和十五）の七三人から減少し、翌一九四一年（昭和十六）の六六人をもって、戦前県からアルゼンチンへの移民は終了する。その結果、一九一三年から一九四一年までの二九年間の沖縄県からアルゼンチンへの移民の総数は三〇〇二人を数え、同数値は戦前全国総数五三九八人の五五．六％をも占め、出身府県別では一位であった。

つぎに、同表の移民数の右端の全国比、すなわち、沖縄県からアルゼンチンへの移民数の全国移民数に対する比率を、以下分析・考察してみる。

全国比を年次別にみると、一九一三年（大正二）の十三．六％から開始し、一九一六年（大正五）の五．九％までは低かった。県の全国比は一九一七年（大正六）の二七．六％

表１　沖縄県からアルゼンチンへの年次別移民数および全国比

年　次	移　民　数		
	（A）全　国（人）	（B）沖縄県（人）	全国比 B／A×100（％）
1907（明治40）年	1	－	－
1908（明治41）	－	－	－
1909（明治42）	1	－	－
1910（明治43）	2	－	－
1911（明治44）	2	－	－
1912（明治45）	16	－	－
1913（大正２）	103	14	13.6
1914（大正３）	41	3	7.3
1915（大正４）	33	5	15.2
1916（大正５）	135	8	5.9
1917（大正６）	127	35	27.6
1918（大正７）	134	76	56.7
1919（大正８）	174	50	28.7
1920（大正９）	42	21	50.0
1921（大正10）	53	28	52.8
1922（大正11）	52	28	53.8
1923（大正12）	66	52	78.8
1924（大正13）	58	71	122.4
1925（大正14）	121	95	78.5
1926（大正15）	182	130	71.4
1927（昭和２）	262	160	61.1
1928（昭和３）	387	183	47.3
1929（昭和４）	430	245	57.0
1930（昭和５）	489	310	63.4
1931（昭和６）	362	225	62.2
1932（昭和７）	239	130	54.4
1933（昭和８）	135	62	45.9
1934（昭和９）	112	83	74.1
1935（昭和10）	201	149	74.1
1936（昭和11）	349	231	66.2
1937（昭和12）	307	171	55.7
1938（昭和13）	288	189	65.6
1939（昭和14）	187	109	58.3
1940（昭和15）	183	73	39.9
1941（昭和16）	124	66	53.2
総　数	5,398	3,002	55.6

〔注〕（A）全国は国際協力事業団（1991）『海外移住統計』平成３年10月。
（B）沖縄県は安里延（1941）『沖縄海洋発展史』と1939年～1941年は外務省の「海外旅券下付表」より集計す。
（石川友紀作成）

以降高くなり、翌一九一八年（大正七）には早くも五六．七％と過半を占めるほどになった。その後も沖縄県の全国比は一部を除き、五〇％台から七〇％台まで占め、最高は一九二三年（大正十二）の七八．八％であった。

四　浦添出身移民の歴史

外務省の「海外旅券下付表」により、戦前浦添村からアルゼンチンへ渡航した移民数を、口絵表２の浦添村における渡航先地別年次別海外移民数から検索すると、一九三一年（昭和六）の一人が最初であることが判明する。その後、移民数は一九三三年（昭和八）に一人、一九三九年（昭和十四）に二人みられ、戦前浦添村からアルゼンチンへの移民数の合計は四人であり、大きな勢力にはならなかった。

つぎに、口絵表３の浦添村における字別渡航先地別移民数をみると、戦前アルゼンチンへの移民の字別では牧港から三人、前田から一人渡航していることが知られる。この戦前移民の四人について、『浦添市移民史』証言・資料編（二〇一四）の戦前海外移民名簿の「海外旅券下付表名簿」より拾いだしてみると、四人の氏名・身分（続柄）・本籍地・年齢・旅行（渡航国）地名・旅行（渡航）目的・海外旅券下付年月日の順に、以下のとおりである。

①佐久田朝信・戸主朝盛[6]ノ長男・字前田一四〇四番地・十八歳十一ヶ月・亜爾然丁・農業ノタメ・昭和六年五月十八日。（二九七頁）

②又吉三良・戸主・字牧港一〇四番地・二一歳六ヶ月・亜尓然丁・店員・昭和八年一月二〇日。（二九七頁）

③又吉三良・戸主・字牧港一〇四番地・二七歳六ヶ月・亜爾然丁・再ビ（再渡航）と農業・昭和十四年一月二三日。（三〇四頁）

④又吉オト・三良妻・字牧港一〇四番地・二二歳二ヶ月・亜爾然丁・夫ニ同行・昭和十四年一月二三日。（三〇四頁）

右記外務省の「海外旅券下付表名簿」をみると、戦前浦添村からアルゼンチンへの移民

6　『浦添市移民史』証言・資料編では文字不鮮明のため■とされているが、聞き取り調査をもとに「朝」を補った。

コロネルプリングレスでランドリー店を営んでいた又吉三良・オト夫妻（1944年頃）根路銘・又吉ジョランダ提供

は、昭和期に入り一九三一年（昭和六）五月以後渡航の字前田出身の佐久田朝信が、農業の目的で、独身と思われる十八歳十一ヶ月で、ブエノスアイレス港へ到着したのが最初である。しかし、明治末期から大正期にも多くの沖縄県出身移民が、ブラジルから転航（転住）した事実があるので、そのなかに浦添村出身者が存在した可能性はある。

また、前記の名簿で留意すべきは、②と③が又吉三良で同一人物である。外務省の移民統計にでてくる海外渡航の移民数は、「海外旅券下付表」から算出し、同一人物を除外せず延べ数としているので、本名簿作成でもその通りにした。戦前浦添村から二回目のアルゼンチン移民又吉三良は、一九三三年（昭和八）一月に二一歳のとき単身で初渡航をし、六年後に字牧港の郷里から妻オト（二二歳）を伴って、農業の目的で再渡航したことが判明する。[7]

又吉三良（一九一一～二〇〇〇）・オト（一九一六～一九九八）夫妻はともに牧港の出身である。又吉三良は小学校を卒業するとフィリピンへ出稼ぎに出て（一九二七年に海外旅券下付）、一度浦添に戻っている。一九三三年（昭和八）、二二歳のときに一人でアルゼンチンへ渡航した。[8] 後に妻となるオトは沖縄で待っていたという。[9] 当時のアルゼンチンは景気が良く、他国から多くの移民を受け入れており、仕事も多く、移民のためのビザの制限もなかったことからすぐに渡航ができた。日本人も多かったが、ヨーロッパなどからの移民も多く、イタリアとスペインからの移民が一番多かった。又吉三良は六年後の一九三九年（昭和十四）に沖縄に戻り結婚して、妻オトを伴い再度アルゼンチンに渡航した。[9]

前田出身の佐久田朝信（一九三一年に海外旅券下付）[10]は、戦前浦添村長を務めた佐久田朝盛の長男である。戦後、弟の朝政をアルゼンチンに呼び寄せている。[11]

現地資料として、在亜沖縄県人連合会編の『アルゼンチン沖縄県人移民一〇〇周年記念碑用移民名簿』（一九〇八年～二〇〇八年八月三〇日）が発刊された。そのなかに、アルゼンチン浦添市民会代表の伊舎良（旧姓又吉）初子さんがまとめた一〇〇周年記念碑用の出身市町村別移民名簿があるので、浦添市民会会員十

表２　『アルゼンチン沖縄県人移民100周年記念碑用移民名簿』に収録された浦添市民会名簿

又吉　宜幸	Matayoshi　Giko
又吉　次郎	Matayoshi　Jiro
又吉　カマド	〃　Kamado
又吉　憲一	Matayoshi　Kenichi
〃　和代	〃　Kazuyo
又吉　憲二	Matayoshi　kenji
〃　勇	〃　Isamu
〃　勝	〃　Masaru
又吉　三郎	Matayoshi　Saburo
〃　ウト	〃　Uto
佐久田　朝憲	Sakuda　Choken
〃　静子	〃　Shizuko
佐久田　朝政	Sakuda　Chosei
〃　キク	〃　Kiku
〃　カマ	〃　Kama
佐久田　朝信	Sakuda　Choshin
〃　ヨネ子	〃　Yoneko

『アルゼンチン沖縄県人移民100周年記念碑用移民名簿』73頁をもとに作成。

7　「又吉三良・オト」については、後年浦添市民会名簿等で「又吉三郎・ウト」と記載されるようになる。
8　浦添市移民史編集委員会編（二〇一四）『浦添市移民史』証言・資料編、浦添市教育委員会、二九七頁。
9　『浦添市移民史』証言・資料編、三〇四頁。又吉三良・オトの渡航の詳細については、その孫にあたる知名・根路銘マリア（平成十八年度の浦添市南米移住者子弟研修生）が母ジョランダ（三良の長女）から聞いた話による。
10　『浦添市移民史』証言・資料編、二九七頁。
11　二〇〇八年、アルゼンチンでの現地調査時に、浦添市民会作成「在亜沖縄県人移民一〇〇周年祝典移民史編纂委員会作成資料」の閲覧により得られた情報である。

七人の日本語とローマ字氏名を表２に記す。

アルゼンチンの浦添市民会では、定期的に会員名簿を作成している。アルゼンチン在住の浦添市民会の一世二世等を含めた家族単位での全員の名簿『アルゼンチン名簿二〇一三―二〇一四』（Registro Poblacional Urasoe Shiminkai 2013-2014）は、原本はスペイン語で記載されている。以下日本語に訳して同名簿を全体として分析・考察してみる。全員への記載事項の様式は前記の在亜沖縄県人連合会の名簿作成の用紙を利用しているようである。すなわち、姓名・続柄・生年月日・本籍・亜国入国年月日・死亡年月日・職歴・学歴・現住所・電話の順である。

名簿の内容を統計的に処理してみると、男性が六六人、女性が七七人、計一四三人である。この男女の比率は男性が四六．二％、女性が五三．八％であり、女性が七．六％も比率が高い。同名簿の職種を表３でみると、以下の二六の職種に及んでいることが知られる。なお、続柄・年齢（生年月日）・学歴等の分析も可能かと考えたが、不明の空欄が多く、断念した。名簿の完璧を期することが、いかに困難であるかが判明した。

五　移民先での生活

（一）日本人移民の生活

最初に、アルゼンチンにおける日本人移民の生活、職業を含めた特色についてみることにする。アルゼンチン・ブエノスアイレスで日本人移民の研究をしている小那覇セシリア（ラプラタ大学教授）の『日本アルゼンチン交流史』のなかの「第一章　戦前の移住者の流れ」（一九九八）の「おわりに」を取りあげることにする。[12]

アルゼンチンでは日本人移住者の受け入れは奨励されなかったが、同時に歓迎された。その理由は二〇世紀初めのアルゼンチンの外交政策にあったと思われる。

一方、日本政府は反日感情が発生しないようにアルゼンチンへの渡航を奨励しなかった。しかし、日本人移住者は、アルゼンチンが比較的良い目的地になってから、まず隣国から入国した。そ

表３　在アルゼンチン浦添市民会名簿にみるウラシーンチュの職種

Ama de Casa	主婦	Jubilado/Jubilada	退職者
Abogada	弁護士	Lic.Analista.Sist	システムアナリスト（学士）
Arquimica	建築家	Lic.en Administracion	経営学士
Bioqumica	生化学	Lic.comer.Exterior	外国貿易学士
Comerciante	商人、商店主	Lic.Economia	経済学士
Contador	会計係、会計士	Lic.Turismo	観光学士
Diseno Grafico	グラフィックデザイナー	Masajista	マッサージ
Estudiante	学生	Masoterapeute	マッサージセラピスト
Empleado	従業員、職員	Ninera.Docente	幼児教育
Emp.Adinist/Empleada adm.	行政採用（公務員）	Tecunica Oputica	眼鏡技師
Floricultor	花卉栽培	Traductora Publica	翻訳家
Independiente	自営	Psicologa	心理学者
Ingerniero Mecanico	機械技師	Universitario	大学生

『アルゼンチン浦添市民会名簿2013-2014』をもとに作成。

12　小那覇セシリア（一九九八）「第三部　移住関係　第一章　戦前の移住者の流れ」日本アルゼンチン交流史編集委員会編『日本アルゼンチン交流史―はるかな友と一〇〇年』二〇八～二二二頁、日本アルゼンチン修好一〇〇周年記念事業組織委員会、日本アルゼンチン協会。

の後親戚や同地域出身の友人を呼び寄せ、日本人移住者の数は少しずつ増加した。

そして、商業に従事した人々は別として、大多数は農業移住者として入国したが、結局都市移住者になってしまった。彼らはブエノスアイレスとその周辺及び国内の主な都市でサービス業（喫茶店・カフェバーや洗染店）や蔬菜・花卉栽培に従事した。特に後者は、アルゼンチンでのこの産業分野の発展に重要な貢献をした。その理由はアルゼンチンの独特な経済発展にあって、二〇世紀前半の上・中流階層に向けての産業だったからである。

アルゼンチンに渡航した日本人の身分や社会的地位は低くなかったと思われる。教育水準も同様で、アルゼンチンの中・上流階層にサービスを提供し、日本人はアルゼンチン社会に適応した。

第二次世界大戦は友好関係の強さを試した。敗戦直後、早速日系アルゼンチン人の帰国を支持し、呼び寄せ制度が再開された。

以上述べた様々な出来事を通して、やはり日ア友好百周年史では日本人移住者の役割や貢献は小さくなかったと言えるだろう。国際関係が具体化するのは両国の国民が出会っている時、両政府が条約を調印する時は勿論、日常生活のレベルで、相手国の人間と付き合っている時、自国の文化を紹介し、分かち合う時にも実現する。この百年間で、アルゼンチン社会の中で調和の日常生活を送ってきた移住者は信頼を獲得した。この長い友好関係は軽視することができない要因ではないかと思う。（以上二二一頁）

アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編集の『アルゼンチン日本人移民史』第一巻・戦前編（二〇〇二）は論文・証言・資料などを含むA四版の三九五頁にも及ぶ大冊で、崎原朝一責任編集長を中心として時間と労力をかけた内容の充実した移民史である。そのなかからアルゼンチンにおける戦前の日本人移民の職業の変遷など、生活の実態が把握できる記述の部分を抜粋してみよう。[13]

同書の「第三章　初期の労働と生活」では、冒頭概説として、アルゼンチンにおける戦前の日本人移民の職業変遷をまとめている。

最初に戦前の日本人の全体的な職業傾向をみてみよう。石川友紀（琉球大学）が整理した外務省

13　アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編（二〇〇二）『アルゼンチン日本人移民史』第一巻・戦前編、在亜日系団体連合会（FANA）。

統計資料を参照して、職業変遷を表（引用者により**表４**とした）にした。

この表をみてみると、まず一九一〇年代から一九二〇年代半ばまでは工場労働と家庭奉公が職業の中心だったことがわかる。一九一四年時点でも一九二〇年時点でも工場労働が最も多く、それについで家庭奉公が多い。この時代は日本人がさまざまな職業を転々としている流動期だった。そして一九二〇年代半ばから洗濯店、カフェ店、農業が増加してきた。なお表ではカフェ店は旅宿・飲食店・娯楽に入っていると思われる。そして一九三〇年代に戦前の日本人の三大職業である洗濯店、カフェ店、近郊農業（野菜と花）が確立した。（六九頁）

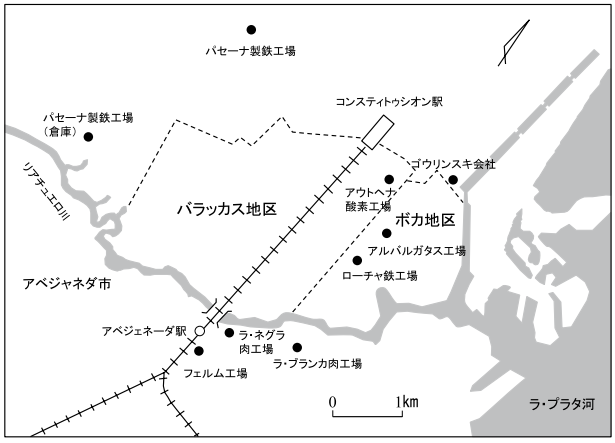
日本人移民が到着しはじめた頃のブエノス・アイレスはすでに大都市に成長していた。この大都市で日本人が暮らしたのがボカ地区とバラッカス地区の境あたりである。ラ・プラタ河に流れこむリアチュエロ川がブエノス・アイレス市とその南のアベジャネダ市の境界になっているが、そのブエノス・アイレス市側の地域である。日本人は長屋に暮らし、そこから近くの工場に働きにでた。

工場での働き口は知人が斡旋してくる場合もあれば、独力で見つけねばならないこともある。独力で働き口をみつけるには、朝早く起きて工場の門前の長い列にならべばよい。その中から工場監督が選ぶのだが、日本人が優先的に採用されることも多かった。また朝早く起きて、「アオラ・ノー・アイ・トラバッホ?」（いま、仕事ありませんか）と念仏のように繰り返して工場から工場へと巡り歩くこともあった。（以上七四頁）

しかし、いくら工場を訪ねても働き口がみつからない時もある。とくに第一次世界大戦後の不況時代には工場の前に失業者の群れがあふれかえり、働き口をみつけるのも容易ではなかった。一九二三年にアルゼンチンに来た仲宗根文盛がこの失業地獄を手記に書いている。《来る日も来る日も、日課のごとくに歩き回った。市内の目ぼしき工場は無論のこと、市の南部の町外れ、どす黒い流れを湛えたあのリアチュエロ淵に沿ってたった諸工場やアルシーナ橋近くの辺境に散在する諸工場の門前に憐れみをこう乞食のごとくに立ちん坊をつづけながら、当てもなくうろつきまわった。夕方になれば暗い悲しい思いに疲れた足を引き摺りながら、悄然とあのコンベンティージョ（長屋）へ帰りゆくのが常だった。》（七五頁）

白人社会のアルゼンチンにおいて、上流階層のアルゼンチン人の家庭奉公の職も、初期の日本人移民にとっては重要な職種であった。「第三節　家庭奉公」のなかの日本人家庭

図２　日本人が就労した工場の位置



『アルゼンチン日本人移民史』第１巻・戦前編74頁をもとに宮内久光作成。

表４　アルゼンチンにおける日本人の職業構成の変遷

		1914年	1920年	1928年	1936年
家庭奉公		162	238	134	132
工場労働		339	642	433	332
農牧	農耕・園芸・畜産	29	15	162	250
	同労働者		186	346	830
洗濯業		-	22	234	812
会社員・店員		39	131	63	113
旅宿・飲食店・娯楽		-	8	555	684
自動車運転手		3	21	123	110
上記以外		111	764	1,416	2,641
総数		683	2,027	3,466	5,904

（「日系移民資料集　南米編別巻」より作成）

奉公とアルゼンチン社会をみることにする。

初期時代において工場労働についで多いのが家庭奉公だった。インタビューやアンケートでも、多くの戦前移民がアルゼンチンに着いて最初の数ヵ月間は家庭奉公をしたと語っている。他国の日系社会と較べても、アルゼンチンは家庭奉公をした人の割合が高い。一九一七年に古川大斧（一九〇四年に農商務省海外実業練習生として来亜）がアルゼンチンの家庭奉公について記している。

《家庭奉公なるものが、いかなる理由からか非常に日本人の取付きやすい仕事である、北米に行われたスクール・ボーイに倣ったからというでもあるまいが、とにかく日本人に一番早くできる仕事は家庭奉公である。しかし同じ家内労働でも、主人附専属ボーイと食堂ボーイと料理人とだけは、そう誰にでも出来るとはいかぬ。門番もまずそうである。ただ家内掃除役とコックの下働きにいたっては、大抵どんな新来の日本人でも間に合わぬものはないと言ってよろしい。もとより多少の素養を要するのは申すまでもないが、一度住み込んで落第する人は珍しい方であろう。料理人は奉公人には違いないが、料理という立派な職業を持っている人であるから、まず給料もよい。一番安いので四〇ペソ、普通六〇から七〇ペソ、上等で一三〇から一四〇ペソ、日本人の料理人は一夜漬けが多いので大抵五、六〇ペソばかりであるが、日本か北米あたりで修業したことのある人達に一〇〇ペソ以上の給料を得ているものがある。ただしコックには多くの場合給料以外に買出しの口銭が得られる。この手伝いなるもの即ち俗に言う「芋の皮剥き」は二〇ペソから三〇ペソどまり。》（「海外」第三巻）（八四頁）

家庭奉公とその後の日本人社会の関係で重要なことは、清潔、親切、勤勉、利口、正直といった日本人のイメージを確立したのは、おそらく家庭奉公をしていた日本人だったことである。このイメージが後に日本人の中心職業となる洗濯店やカフェ店の経営を有利にした。そしてラ・ラソン紙の記者が心配していた「黄色人種の脅威」は杞憂に終った。（九二頁）

日本に自動車が普及する以前、ヨーロッパ諸国なみの先進国であったアルゼンチンにおいては、すでに自動車が活躍する時代であった。そのため、ブエノスアイレスなどの都市で日本人移民には、タクシー運転手などの職業も多かった。以下一九二〇年代に入ってか

ら増加していったタクシー運転手の職業についてみることにする。

一九二〇年代に入ってからブエノス・アイレスの日本人のあいだで自動車運転手が流行した。一九一〇年代はまだ日本人運転手は数えるほどしかおらず、富豪のお抱え運転手が多かったが、一九二〇年代に入ってからはタクシー運転手が急増した。初期の運転手として記録に残されているのは、中原栄吉、山口喜代志、秋葉新一、武田敏美などである。さらに徳元佐助と新垣亀が一九一五年にタクシー業を始めたとの記録が残されている。徳元佐助はバセーナ製鉄工場の社長車の運転手をしていたこともあって、制服制帽に皮のゲートル姿で働いていた。（九二～九三頁）

一九二〇年には「在亜日本人自動車運転手協会」が設立された。初代会長は中原栄吉である。中原栄吉は一九〇八年にペルーに渡り、そこからボリビアに入ってゴム採取に従事していたが、一九一一年にアルゼンチンに転住してきた。自動車学校を卒業して、最初は富豪の運転手をしていた。一九一八年に日本公使館が開設されると中村巍公使の運転手を務めた。中原はタクシーやバスなど終始一貫して運転手をした人だった。

一九二二年二月から運転手協会の機関紙「わだち」が刊行されている。この頃、ブエノス・アイレス市の自動車運転手は一万五〇〇〇人ほどで日本人運転手は六〇人ほどだったが、ラ・プレンサ紙には“Prefiero Japonés”（日本人求む）という日本人運転手を求める広告がよく出ていた（「わだち」第五号一九二二年）。またこの仕事で一番問題になるのは事故や負傷である。とくに警察や裁判所とのやり取りは言葉の不自由な日本人には大変だった。運転手協会では通常の資金貸付に加えて、警察に拘引された人には在監手当、さらに病気手当、裁判費用貸出、嘱託弁護士、後には保険事業も行った。（以上九三頁）

同書の「第四章　カフェ店と洗濯店の発展」の項で、アルゼンチンの日本人移民の職業が初期の工場労働者、家庭奉公人、タクシー運転手から都市のカフェ店と洗濯店に変遷していくようすが捉えられる生活の実態を、以下でみることにする。

工場労働、家庭奉公、タクシー運転手など、初期の日本人はさまざまな分野で働いていた。その

頃は日本人がアルゼンチンにきて自分たちに向いた仕事を探していた流動期だった。やがて都市の職業はカフェ店と洗濯店に集中していく。これらの職業は同業者のいないところでこそ成功する。つまりカフェ店と洗濯店の繁栄は、日本人がアルゼンチン全土へ進出していくことにほかならなかった。

戦前、日本人経営のコーヒー喫茶店がたくさんあった。日本人移民はこれを「カフェー」あるいは「カフェ店」と呼ぶ。本書では「カフェ店」と呼ぶことにしよう。また以下で「カフェ東京」などと店名を紹介するが、これは日本語では「喫茶店東京」といったような意味である。ただし、日本の喫茶店とアルゼンチンのカフェ店はかなり異なっており、その背景にはアルゼンチンの深いカフェ文化がある。また以下では「コンフィテリア」という言葉がでてくるが、これは甘菓子の製造販売と喫茶店を兼ねた商売のことである。（以上一二一頁）

そして厳しい工場労働をやめてカフェ店に移っていく男性が多かった。佐賀県出身の井上啓行は一九一三年にブラジルに渡り、サンパウロ近くのサンタ・エルネスティーナのコーヒー耕地で三年間にわたって厳しい労働に従事したが、あまり金も儲からないので脱耕して、一九一六年にアルゼンチンにやってきた。その頃の仕事を語っている。《アルゼンチンに来た当時は、あまり仕事もないしな。家庭奉公しておりましたよ。その頃、貝原さんがコーヒー店を開いておったんだ。そこに皿洗いに行った。安い給料だったけど、ブラジルよりいい生活だったからな。貝原さんがすでにこっちでコーヒー店をやっていたから、我々ブラジルから出て来た者は助かったんですよ。それまではバラッカスのローチャの工場の釜のサビ落しくらいの仕事しかなく、八時間労働で二円か二円五十銭くらいしかもらえなかったですよ。みんなやっていましたよ。沖縄県の人が多かったがな。二円の安い給料でも、それがないと食べられないから、みんなガッタン、ガッタン（ハンマーでサビを叩き落とす音）して体中真黒になってサビ落ししたんですよ。私の場合、貝原のカフェ店が開店していましたから、そこに行って五、六年おりましたよ。》（以上一二一～一二二頁）

つぎに、現在は少なくなったが、アルゼンチンにおける日本人移民の職業を代表するのが、以下に取りあげる洗濯店である。戦後もある時期までは染色も兼ねていたので、日本の移民統計では洗染業とでてくる。同書の「第四章第二節　洗濯店の発展」から抜粋してみよう。

「センタクヤ」、「ティントレリア（洗染店）」という言葉には、おおくの一世がなつかしみを感じるのではないだろうか。いまなおブエノス・アイレスの街角には洗濯店「東京」などの看板がかしこに見かけられる。洗濯店のきめ細やかな仕事をとおして日本人の定評がこの社会に根づいていった。洗濯店を引き継ぐ二世は少ないといわれるが、都市における日本人社会のいしずえをつくりあげたのは洗濯店をいとなんだ日本人たちだった。

はじめて洗濯店をひらいた日本人は小谷初太郎と中村ツタである。小谷は鳥取県出身で、サンパウロに笠戸丸の来航以前から暮らしていた。サンパウロではホテル・ロテセリで料理人の下働きをしていたといわれる。一九一〇年に未亡人となっていた島村タジュと一緒にアルゼンチンに渡り、一九一二年に洗濯店をバラッカス地区のイトゥサインゴー街六三四番に開店した。最初の総合日本人団体である大正会の活動にも参加しており、創立祝賀会は小谷初太郎の裏庭で開催されている。小谷は一九一八年に日本に帰国した。

中村ツタも、同じく一九一二年に洗濯業をはじめた。ツタは一八八〇年に熊本県で生まれ、一九〇八年に笠戸丸移民として兄の中村半次郎とブラジルに渡った。金のなる木といわれたコーヒー労働の夢がやぶれた二人は一九〇九年にアルゼンチンに来た。中村ツタがブエノス・アイレスで洗濯業に進んだきっかけは、カフェ・パウリスタの経営者オクタビアノ・アルベス・デ・リマの家で女中になったことだった。女中をすること数年、リマの援助をうけてリマの家庭やカフェ・パウリスタからでる洗濯物をあつかう小さな洗濯業を始めた。一九一九年のブエノス・アイレス週報によると、中村ツタの洗濯店はラバジェ街四一八番になっている。（以上一三九頁）

洗濯店の増加は一九三〇年代に入っても続いていたが、同時にアルゼンチンが不況にあえいだ時代でもあった。とくに一九三〇年前後には若い日本人の従業員達は給料なしでも寝泊り食事つきであれば文句をいわずに働いたという。戦前には、従業員が洗濯店経営者に頼んで店に居候させてもらい、ゴロゴロしているわけにもいかないから働いているというようなことも少なくなかった。（一四七頁）

最後に、第二次世界大戦前のアルゼンチンにおける日本人移民の生活史としての職業の変遷について、外務省の移民資料を中心に、筆者によりまとめてみると、以下のとおりと

14　石川友紀（一九八三）「アルゼンチンにおける沖縄県出身自由移民の職業構成の変遷について―分析と考察を中心に―」『琉球大学法文学部紀要』史学・地理学篇、第二六号、七一～一一八頁、琉球大学法文学部に詳細にふれている。

なる。[14]

（一）アルゼンチンにおける日本人移民の時代区分をつぎの五つに区分した。①移民開拓時代（一九一〇年代）、②移民活躍時代（一九二〇～一九三〇年代）、③移民中断時代（一九四〇年代）、④移民再開時代（一九五〇～六〇年代）、⑤移民停滞時代（一九七〇年代以降）。

（二）移民開拓時代一九一四年（大正三）時点のアルゼンチンにおける日本人移民の職業をみると、工場労働者が全体の約五割、家内労働者（家庭奉公人）が約二割五分を占め、二大職業であった。一九二〇年（大正九）時点になると、この二大職業に農業労働者が加わってくる。沖縄県出身移民の場合も同様であるが、工場としては製糖・冷凍肉・羊毛（皮）・木工場などがあげられ、港湾の荷揚人足、カフェ店の給仕人、タクシーの運転手、蔬菜（野菜）栽培業なども現われてくる。

（三）移民活躍時代の一九二八年（昭和三）から一九三六年（昭和十一）までの時点の日本人移民の職業構成は、かつて優位であった工場労働者と家事被傭人が減少し、代わって農耕・園芸・畜産労働者と洗張・染色・洗濯業の進出が著しくなる。一九三〇年（昭和五）時点では、上記の職種以外に、旅館・下宿屋・料理店、飲食店等ノ女中、給仕人、料理店・飲食店、貸席業、置屋（おきや）業主も増加する。沖縄県出身移民の職業は、一九三六年（昭和十一）時点で洗染業が六割以上、蔬菜栽培業が二割五分を占め、これが二大職業となる。

（四）移民再開時代一九五三年（昭和二八）時点の日本人移民の職業構成は、洗染業、花卉栽培業、蔬菜・果樹栽培業が優勢となり、三大職業となる。一九六〇年、一九七〇年代になると、洗染業が増加し、ロサリオ市の日本人移民の職業では、これが八割近くを占めるようになる。沖縄県本部町出身移民の一九五五年（昭和三〇）から一九六五年（昭和四〇）までの時点の職業構成をみると、花卉栽培業、洗染業、蔬菜栽培業が三大職業となる。しかし年次を経るにつれ、洗染業が大幅に増加し、蔬菜栽培業が減少していく。

（五）移民停滞時代一九七七年（昭和五二年）時点の日本人移民（二世等を含む）の職業

構成は、洗濯業、花卉栽培業、蔬菜・果樹・マテ茶等栽培業が三大職業となる。その構成比率をみると、洗濯業が五割近くを、花卉栽培業が二割近くを、蔬菜・果樹・マテ茶等栽培業が一割弱を占める。沖縄県本部町出身移民の一九七三年（昭和四八）時点の職業構成をみると、洗染業が約六割、花卉栽培業が約三割を占め、この両者が二大職業となる。（以上一一六～一一七頁）

（二）沖縄県出身移民の生活

在亜沖縄県人連合会がアルゼンチンにおける沖縄県人移住八〇周年の記念事業（一九八九年に八〇周年記念祝賀式典を開催）の一環として発刊した『アルゼンチンのうちなーんちゅ八〇年史』（一九九四）は、戦前・戦後の沖縄県出身移民の歴史と実態が五二〇頁にも及び詳細に記録されている。同書の特色は編集方針が「編集後記」（四八三頁）に、「当時の事実をあるがままに」「万人（うまんちゅ）が主役」、「事典的な読み物」「テーマの背景を探る」「編集委は沖県連から独立して存在」と記されているように、広大なアルゼンチン国の二三州を四年の歳月をかけ約五万キロメートルにわたり県系移民の面接聞取調査を、編集委員長の松堂リカルド氏（元『沖縄タイムス』通信員）と同副委員長の新垣善太郎氏（元『琉球新報』通信員）の両人が行った。その国内取材調査の成果を含め、論文・随筆・コラム・資料・年表など、ユニークな筆致による実証的読み物的な移民史となっている。以下、アルゼンチンにおいて日系移民の約八割を占める沖縄県系移民の生活について記された部分を抜粋してみよう。[15]

儀間康英氏の回想によると、カフェーのモーソ（ウエイター）はプロピーナ（チップ）が目当て、月給なしだったという話がある。いや、それどころか、雇用主にチップの中から「献金」をして、稼ぎのいい場所を回してもらったというから、一種のバックマージン、わいろだった。

では一体いくらのチップをモーソ達は稼いでいたのだろうか。

都心か郊外か、地方都市かで違うが、当時一九一七年（大正六）ごろ、ブエノスアイレス市内の

15　アルゼンチンのうちなーんちゅ八〇年史編集委員会編（一九九四）『アルゼンチンのうちなーんちゅ八〇年史』在亜沖縄県人連合会。

一等地のカフェー・バールで月三百五十ペソ（およそ三百二十日本円）だったと、「久場同志会二十五周年記念誌」が書いている。沖縄の新任教員の八倍（当時）の稼ぎだったと言えば、その大きさが分かるだろう。

そのカフェー・バール「パウリスタ」があったという都心バルトロメミトレとサンマルティン街角にいま行ってみたら、四つの角とも銀行に替っていた。（以上七五頁）

面白いことは、初期の模合が本来の金融機関としての目的からではなく、ただ集まって雑談や情報交換のための口実につかわれたということだ。大体ブラジルから裸一貫で入植し、言葉も全然通じないまま、港湾の荷役作業や鉄道工夫になって毎日働く者にとっては、あまり金の使い道がなかったのだろう。それよりも集まって、酒を飲み、よもやま話しに花を咲かせて一日の疲れをいやすことが、最も大切だったかと思われる。

勿論模合は、昔の沖縄風に、発起人は当然最初に無利子で取るかわりに場所を提供し、当日の飲み物、食べ物を出した。また、あくまで信用を第一にしていたから、保証人無用で利子もほんの形だけだということだった。

当時はほとんどが月給取りだったから、模合の金額も小遣い銭ていどに過ぎなかった。落札して当たった者は、洋服を買ったり、小さな家財道具や身の回り品につかった。比較的に落ち着いた者は奮発して、故郷の家族へ送金するのもいたという。

これがブラジル、ペルーからどしどし転入国するに及んで県人が増え、模合の数も規模も大きくなり、また内容も模合本来の機能を発揮するようになったようである。つまり、相互扶助の金融機関としての役割を果たすようになったというわけだ。

更に一九一八年、名護出身の仲村渠盛光、仲兼久仲助が県人の先陣を切って借用地を求め、蔬菜業を始めたのが大きなきっかけとなり、県人間に独立事業の機運を高めることになって、金融機関としての模合が一層要求されるに至った。（以上九〇頁）

コラム「勤勉実直が取り柄、商人がいなかった日本移民」のテーマで、アルゼンチンの都市内部の職業について、沖縄県出身移民の例を以下のように取りあげている。

アルゼンチン入国移民の、職業別統計を見てみると、実に多様多岐にわたっていることがわか

る。中東からの移民、例えば、シリア、レバノン人などはほとんどが「商業」になっているのだ。日本旅券の「農業に従事するためアルゼンチン国に赴くに付・・・・・」とは対照的である。事実、かれらは行商からはじめて店を構える商売で通すが、日本人、とくに沖縄県人は、大日本帝国旅券が提示するように、たとえ、他の職業につくことはあっても、一度は農業に従事した。これは、かれらが農家の生れであったからであり、農業なら、飢える心配はなかったからだ。しかし、沖縄の農業とは違う。作物も、規模も、耕作、播種の方法も。しかも作れば金になる、というものでもない。前述のように、一日も早い、留守家族への送金に迫られてもいる。そこで、日傭いの仕事についた。それは、港湾労働であり、鉄工場や、冷凍肉工場などであり、いずれも肉体労働者であった。体格の大きいガイコク人労働者に伍して、ノルマを達成しなければならないのだ。カパタス（労働班長）に認められるために才覚もいる。ついで、カフェーのモーソ（給仕人）が主流になって、日本人の才能が生きてくる。瞬時に、多数の客の、それぞれ違う注文をきいて、それを間違いなくお客に届けることにかけて、この体の小さいハポネスのモーソたちはきわめて有能であった。そこで、モーソからはじめて経営者になるのが多かった。もちろん、その間にも、ムカーモ（男のお手伝いさん）、タクシーや自家用車の運転手もいたが、それらはしだいに消えていき、日本人の、もちろん県人のカフェー店も、新しい労働政策で淘汰されて、つぎつぎと店を閉めていき、残ったのは「テイントレリア（元来は染物屋の意）やラバンデリア（洗濯屋）」と花作りを含む蔬菜農業だけとなった。それが、今もつづいている日本人の、そして県人の二大職業である。日本人（沖縄県人）がなぜ、洗濯業（今はクリーニング業）に入ったかといえば、資本金が大きくない。家族だけで出来る。片言のスペイン語で間に合う―だった。が、ここでも、商人としてクリーニング店を経営しているのではなかった。ただただ勤勉実直だったのである。（以上一二三頁）

在亜邦人の蔬菜業の草分けは吉田浜吉、斎藤錠太、小田秀雄ら三氏の共営からであり、一九一〇年八月、二十五町歩（ヘクタール）の土地を借地して出発したといわれている。県人のパイオニアとしては、ペルーから転住してきた名護出身の仲村渠盛光、仲兼久仲助氏らがF・バレーラにやはり借地して野菜作りを始めたのが一九一八年という。

そのころは、道路事情も悪く雨天の日など折角のカミオン（運搬トラック）が役立たず出荷できなかったそうである。又その他の原因もあって前出の吉田氏らの農園も二ヵ年半で解散を余儀なく

ブエノスアイレス郊外の花卉栽培
石川友紀提供

フロレンシオ・バレラの野菜畑
石川友紀提供

された。その後一九一三年、石川倉次郎、鈴木芳造、渡辺寅雄、そして岩住玄信ら四氏共営で、ブエノスアイレスから南へ約十八キロメートル離れたアドロゲー駅付近で十数町歩の土地を借り受け、蔬菜園を開いた。

下って一九二一年ごろになると、邦人のキンテーロ（蔬菜業者）の数も相当増え、Ｆ・バレーラ、モロン等の地域に二十数家族を数えるに至った。しかしその当時の野菜作りは非常に幼稚で、且つ産物は各自がフェリア（露天市場）に出して直接小売りする者が多かった。だが、一九二六年ごろには段々と経験を積み改良を重ねながら栽培技術も向上し、合理的、営利的経営を確立するに及んだ。

翌々年（一九二八年）からはレチュウガ（チシア、レタス）の黄金時代を迎えるに至ったのである。（以上二〇二頁）

戦後アルゼンチンにおいて沖縄県内市町村が周年記念誌を発行している。そのうちのひとつ『在亜大宜味村人会創立四十五周年記念誌』（一九八七）のなかに、「村人とその子弟の職業」の章（一三六～一四三頁）があり、アルゼンチンにおける県系移民の生活を知るため、以下要約して列挙してみる。[16]

①キンタ（農園）　キンタというのは一般に農園と解釈され、時には収益を目的としない資産家の休養地の意味にも使われるが、最も普通には野菜を作って市場に出荷する一つの事業のことである。その事業は極めて男性的なもので、広大な敷地と莫大な運営資金を必要とする。勿論大陸での農業知識と経験が必要なことは云うまでもない。これに従事し一生をかけたのが、本会発展のためにも献身的な努力を払われた故平良武雄さんである。そのほか本会の重鎮、島袋重雄さんがこの大事業に目をつけ、本業ティントレリーアのかたわら、何年か試験的に経験されたが、現在では一人もキンタの経営にあたっていない。

キンタの経営は大きな収益を上げることもできるが、同時に天候の関係やその他で大損害をこうむり、破産のやむなきに至る場合などもあって、半ば投機的とでも云われるものである。その点平良武雄さんは経営中の洗濯店を投げ出し、この道に邁進した人であって、キンタの道でも成功者の一人であったと云えよう。平良さんは多いときには二〇人ぐ

16　在亜大宜味村人会編（一九八七）『在亜大宜味村人会創立四十五周年記念誌』在亜大宜味村人会。

らいの人夫（ペオン）と、そのペオン達を指揮する者（カパタス）を使用した。その仕事の範囲は広く、草取り・水掛け・出荷係・運転手・トラクターの運転手や、市場での専属販売人など、それぞれ専門の分野となっていた。キンタの経営にはどうしてもこれらの分業ごとに人員を上手に使いこなす技術が必要となっていた。また、銀行との取引きも盛んになるので、地方銀行から信頼される人間でなければならない。この点、平良さんは単に日本人としてだけでなく、キンタ経営業者として銀行を上手に利用した人でもあった。（一三七～一三八頁）

②ティントレリーア（クリーニング店）　日本人の職業分野中最も大きな幅を占めるものに、ティントレリーアがある。われわれ村人の大部分はこの仕事に従事しているのである。このティントレリーアという言葉は、この事業が邦人間で始まったころ、その日本語訳に困ったらしく、今日まで洗染店、染色店、洗濯店など、まちまちの言葉で言い表わしている。アルゼンチンの日本人移民社会では、本来の言葉の意味から大分かけはなれているが、内実は日本でいうクリーニング店のことである。

日本人でこの仕事に従事している人が多いため、亜国人は日本人をみると、すぐにティーントレロー（クリーニング店経営者又は従業員）と云うが、この職業を別に軽蔑しているのでもなく、賤業とみられているわけでもない。むしろ、日本人の勤勉さを表示しているのが、この業種とみなければならない。（以上一三九頁）

③花卉栽培　花卉園を経営することを意味し、花を売る花店ではない。すべて生産品は中央市場に出荷する制度で、普通温室内で栽培するので、温室業者によって代表される。わが村人の間でも温室の数も多く、盛大にやっている人もいる。

温室利用による作物は主としてカーネーションであり、ほかにばら栽培、菊栽培などもある。最近、温室内で草花の鉢植えを行い、鉢のまま市場に出すなり、あるいは卸商の買手が集荷に来るのを待つ業者、つまり鉢物業者もふえてきている。この花卉温室栽培業も日本人の特技であって、今のところ他の外国人の追随を許さない。（以上一三九～一四〇頁）

ブエノスアイレス市でクリーニング店を経営する夫婦　饒平名シルビア提供

（三）浦添出身移民の生活

戦前に移民した又吉三良は、当初はブエノスアイレスの中心部で姉カマ夫婦（カマの夫は宜野湾出身のカメホ・伊波）が営む洗濯店（ランドリー）で働いた。[17]

三良は常に、いかにして自分たちの生活をよくしていくかと考えており、洗濯の仕事を覚えて、次のステップとして独立して店をもつことを目標にしていた。一九四〇年（昭和十五）には、ブエノスアイレスの中心部から四〇〇キロ離れた小さな町、コロネルプリングレス（Coronel Pringles）で洗濯店を開業することができた。一九四〇年から一九四五年ころまでこの仕事を続けた。日本人は日本人同士で助けあっていて、三良も日本人の友達がたくさんいた。しかし、もっといい仕事をといつも考えていた彼は、コロネルプリングレスには日本人は住んでいなかったが、洗濯屋が少ないということに注目して開業し、順調であった。

近所の人は皆アルゼンチン人で、三良はことばでのコミュニケーションはできなかったが、洗濯の仕事や花屋は多くの言葉を必要としなかったと思う。三良はよく外にでかけて買い物をしたり、友達とコーヒーを飲みに行ったりと活動的だったが、妻のオトはおとなしくていつも家にいて、でかけるときは三良と一緒のときだけであったという。

長男のイサムだけがブエノスアイレスの中心部で誕生しており、二男のヤスと長女はこのコロネルプリングレスで生まれた。長男と二男は戦前に生まれているので日本名があるが、長女ジョランダは戦後生まれのため、日本の敗戦で、沖縄に帰るのは困難と考えて日本の名前はつけなかったという。また、アルゼンチンでチャンスをつかんで豊かなくらしをしていきたいと考えていた。

コロネルプリングレスはよい所であったが、子どもの教育のためには都会で育てた方がよいと考えて一九五二年（昭和二七）ごろ、長女が五才のときにホセ・セパス（Jose C Paz）に移り住んだ。そこはブエノスアイレスの中心部から北西四〇キロメートルの所にあり、ここでは洗濯店ではなく、花屋を営んだ。土地を買い、一九五六～二〇〇〇年まで花を栽培して販売した。最初は切り花のバラとカーネーションであったが、あとは長くも

17　浦添村牧港出身者で戦前移民一世の又吉三良のアルゼンチンでの生活の様子を又吉三良の孫にあたる知名・根路銘マリア（母は三良の長女　根路銘・又吉ジョランダ）により聞くことができた。

ブエノスアイレスのランドリー店で働く又吉三良（1940年頃）根路銘・又吉ジョランダ提供

コロネルプリングレスでランドリー店を始めた又吉夫妻（1944年頃）知名・根路銘マリア提供

ホセ・セパスでの花卉栽培（1951年頃）根路銘・又吉ジョランダ提供

つ鉢植えの花をビニールハウスで栽培した。三良はホセ・セパスのエリアでシクラメンを最初に栽培した人で、彼のシクラメンはとてもきれいだと評判だったという。シクラメンはスペイン語でビオレタデロスアルペス（Violeta de Los Alpes）といい、彼の店の名前ともなった。一番人気はピンク色で、このシクラメンは人気があり商売は繁盛した。最初は卸売商であったが、のちに富裕層の住む高級住宅街、ブエノスアイレスの中心部のマルティネス（Martinez）という所で花屋を始めた。裕福な人々はシクラメンを好んだ。長女のジョランダは高校を卒業すると小学校の教師の資格がもらえるので教師になりたかったが、結婚するまでこの花屋を手伝っていた。

店は長女ジョランダと二男のヤスが担当し、三良、オト、長男のイサムがビニールハウスでシクラメンを栽培した。マルティネスにも日本人はいなかった。マルティネスの仕事は長男（イサム）に任せていたが、三良は八〇歳まで花を作り続けた。二男のヤスは今でも三良の畑も一緒にして花栽培を続けている。長男のイサムは店を売って、何年後かに日本に出稼ぎにいき、一〇年くらい日本にいたという。オーナーは変わったが、今も店は残っているという。三良にはアルゼンチンの生活が合っていたようで、妻オトと一九七八年（昭和五三）に一度だけ沖縄に帰った。三良は家では常に方言で話していたという。三良は祖先崇拝を大切にしていたが、子どもたちはカトリック教徒である。三良とオトが沖縄に戻らなかった理由は、親戚がほとんどいなかったこともあると思われる。オトには姉と十九歳で亡くなった男兄弟がいたと聞いている。オトの姉もまた、アルゼンチンへ渡っている。オトの父は若い時に亡くなったが、戦後も健在だったオトの母は、娘が二人ともアルゼンチンへ行ってしまい、寂しく、よく港に行って娘たちを待っていたようだと聞いている。三良とその姉は二人ともアルゼンチンに渡っている。三良の父は沖縄で再婚して子どもが生まれていた。その子どもはブラジルに移民している。三良には沖縄に残っている兄弟姉妹はいない。

戦後移民で前田出身の佐久田朝政・キクはブエノスアイレス市街を何か所か転々とし、ホセ・セパスとサン・ミゲルで一九九〇年まで洗濯店を営んだ。アルゼンチンに来た時

佐久田朝政・キク夫妻
知名・根路銘マリア提供

右から又吉三良、ヤス、イサム、オト、ジョランダ（1961年頃）
根路銘・又吉ジョランダ提供

シクラメン栽培のようす（1961年）根路銘・又吉ジョランダ提供

は、馬車も持ってきていたという。豆腐もこんにゃくもすべて自分で作った。子どもは一男五女で、家族ではスペイン語で話す。一九九〇年（平成二）のウチナーンチュ大会へは夫婦で参加して二か月ほど浦添で滞在した。永住のつもりでアルゼンチンへ来たが、国籍は日本のままである。朝政は二〇〇八年（平成二〇）の五月に亡くなり、キクは現在娘と暮らしている。[18] 朝政の兄弟朝健も洗濯店であったというが、一九八〇年（昭和五五）帰国したという。[19]

牧港出身の又吉初子は東風平村出身の伊舎良政弘と結婚した。子どもは一男三女である。夫の政弘はランドリー（洗濯店）を営んだ。以前は日本人が経営するランドリーはたくさんあったが、子どもたちは勉強して医者や弁護士、様々な職業に就き、継ぐ者がいないという。[20]

同じく戦後移民ではあるが、ボリビアから転住したのは屋富祖出身の石川春枝である。宜野湾出身の石川脩とともに一九六五年（昭和四〇）ごろアルゼンチンに来た。五年ほどホセ・セパスでカーネーションの栽培の仕事をして、その後独立して花屋を開業した。現在は「ティントレア・ハポネーサ」（日本人のクリーニング店）という洗濯店を営んでいる。[21]

六　太平洋戦争と移民社会

アルゼンチンにおける日本人移民の歴史については、前記したように、第二次世界大戦前の場合『アルゼンチン日本人移民史』第一巻・戦前編（二〇〇二）が在亜日系団体連合会により発刊されたものを利用してきた。同書についで、同連合会により『アルゼンチン日本人移民史』第二巻・戦後編が、二〇〇六年（平成十八）に刊行された。本項のテーマの太平洋戦争とアルゼンチンの沖縄県出身移民を含む日本人移民社会の状況について、同書の記述から関係分を探ってみることにする。[22]

祖国日本の敗戦がアルゼンチンに在住する日本人に与えたインパクトは大きかった。

佐久田朝健・朝政一家（ブエノスアイレスにて撮影）佐久田アンドレス提供

18　二〇〇八年、浦添市が実施したアルゼンチンでの現地調査時の佐久田キクの証言による。

19　二〇〇八年、アルゼンチン現地調査時に浦添市民会作成「在亜沖縄県人移民一〇〇周年祝典移民史編纂委員会作成資料」により得られた情報である。

20　『浦添市移民史』証言・資料編、九一～九二頁。

21　『浦添市移民史』証言・資料編、九三～九四頁。

22　アルゼンチン日本人移民史編纂委員会編（二〇〇六）『アルゼンチン日本人移民史』第二巻・戦後編、在亜日系団体連合会（FANA）。

一九四〇年一〇月の日本領事館調査によると在アルゼンチンの邦人数は七〇九五人だった。さらに日本外務省統計では戦前最後の渡航者は一二九人となっていることから第二次大戦に突入した一九四一（昭和十六）年の邦人社会は七二〇〇人余りで構成され、その数はそのまま大戦が終わるまで維持されたはずである。

満州事変以来、日本の国家主義の高揚と真珠湾における戦果など戦勝ムードが続いた中で移住者たちの熱い思いと感動はますます強まっていった。そうした状況下で一九四二年一月、リオデジャネイロで開かれたパンアメリカン外相会議は枢軸国との国交断絶を決議したが、アルゼンチンは中立にこだわった。だが戦争末期の一九四四（昭和十九）年になると外部からの政治的、経済的圧迫が強まり、アルゼンチンは日本とドイツに対して国交断絶を宣言せざるを得なくなり、すべての通信が禁止された。さらに一九四五（昭和二〇）年三月末、邦字紙の「亜爾然丁（アルゼンチン）時報」、「日亜時事」、「南亜日報」の三紙は発行禁止され、最後に米軍の沖縄・慶良間列島上陸のニュースを伝えたあと、日本語新聞は姿を消してしまう。

それ以後一九四七年までは在亜日本人会、花卉栽培業者のニッパル花卉産業組合、野菜栽培業者の銀河畔園芸協同組合など日系団体がガリ版刷りのニュースを邦人社会に配布していた。ほかには情報源として日本からの短波放送、スペイン語のラ・プレンサやラ・ナシオンなど現地の新聞に頼るしかなかったのだ。[23]（以上十三頁）

日独に対する宣言布告は一九四五年三月二六日に公布されたが、四月一日付けで在留敵国人登録に関する大統領令が出された。その第七条に十四歳以上の者はすべて「監視下外国人特別身分証明書（Cédula especial de extranjero bajo vigilancia）」を所持することが義務づけられ、毎月一回、所轄の警察署に出頭すること、転居や旅行には内務省の許可を取ることなど行動が制限された。（十四頁）

当時、ブエノス・アイレス市の南部近郊フロレンシオ・バレーラの広い地域に野菜栽培業者の沖縄県人が散らばっていたが、米軍が沖縄に上陸し始めたころ、寄るとさわると議論していた。（十七頁）

当時、「亜爾然丁時報」、「南亜日報」「亜国時事」の邦字新聞三紙があった。亜国時事は日本からのニュースを載せるほか、日本が負けている戦況も地元の新聞から翻訳して掲載したが、それに対して「国賊」だと攻撃する僚紙もあった。

23　「戦」の誤りと思われる。

さらに敗戦後の沖縄出身者の動向についてらぷらた報知の専務を務めたこともある上原清利美は座談会で次のように述べている。

《丁度、終戦後沖縄が占領されて、そのときにアルゼンチンのラ・ナシオンやラ・プレンサをとっていたのですが、沖縄の自分の村のほうで日本兵が沖縄の住民をたくさん殺しちゃった、というニュースが新聞に出ているわけですね。自分たちの知っている人が殺された。そういう戦争の恐ろしさがあの時にはじめてわかった。（中略）

終戦と同時に沖縄が占領されたためにたくさんの沖縄の在留同胞が自暴自棄になったときがあったわけです。アメリカが沖縄を占領して沖縄人は全部殺戮したとか、いろいろなデマが飛んで本当に暗い、悲しいニュースが流れていたわけですよ。同胞は動揺して溜めた金を自暴自棄になってキャバレーに行って使ったり、飲んだり、食ったりして、本当に希望というものがないわけですよ。

そんなときに水野（勉）さんが経営されていて政府の命令で廃刊になった新聞（亜爾然丁時報）を売りたいという話があったわけです。そこで私の同胞のある県人がこれを買ってひとつ報道機関としてやったらどうかという話が出たのです。（中略）

結局新聞経営の経験がある平良賢夫を社長にして一九四八年（らぷらた報知）を創刊した。当時、ハワイにいた沖縄人を通じて情報を送ってもらったり、あちこちから来る手紙を掲載して沖縄の事情を知ったわけですよ。（中略）

それで人心がいくぶんか落ち着いて、本当の沖縄の姿がわかりはじめて、自暴自棄になってはいかん、ひとつ沖縄を再建しなければいかんということで、その当時の（帰国）二世がボツボツ来はじめていたわけです。》（『日本人アルゼンティン移住史』）（以上十七～十八頁）

つぎに、『アルゼンチンのうちなーんちゅ八〇年史』（一九九四）より、アルゼンチンにおける沖縄県出身移民の太平洋戦争当時の移民社会の状況を拾いだしてみよう。つぎの一文は「出稼ぎから定着移民へ―契機となった太平洋戦争―」と題するコラムである。

隔離収容された北米の邦人に比べれば、アルゼンチンにいる邦人の苦労などものの数ではないが、それでもいろいろの圧迫を受けている。さいわい、イタリア系がアルゼンチン総人口の中で占

める割合が大きいことや、陸軍が、ドイツに傾倒していたこともあって、ブラジル（米英側に立って出兵）やペルー（邦人を隔離強制送還）のようなことにはならなかった。外交官や特派員、商社駐在員が軟禁されたほかは、旅行や集会の制限があったとはいえ、一般邦人は普段のとおり営業ができ生活ができた。

ところで、当時の日本人男子は兵役の義務があった。外国にいれば毎年一回領事館に出頭して、兵役の延期願いを出さなければならない。日本に帰国すればむろん兵隊にとられる。それがこわさに再渡航しない人もいた。海外渡航の理由に、貧しさからの解放があったが、兵隊にとられることが戦場におくられることを意味する時代になると、海外雄飛の理由の一つに徴兵逃れが入るようになる。ただし、宗教的信条からとか、反戦平和的行動、といった大げさなことではない。ただただ、兵隊にとられて殴られた上、命まで失ってはかなわない、といったことからである。だから、戦争の行方には一喜一憂し、沖縄全島が戦場になったときは、ラジオの前にかじりついて家族の安否を気づかった。

話は変るが、大本営発表を聞くために特注した、超短波無線受信機（ラジオ）を敗戦の日に床にたたきつけた人があったが、大方は、敗戦の報をそのまま受け止めた。「あるいは?」といった期待がなかったわけではないが、かねてから戦力の差を感じ、ドイツの降伏後はいよいよ絶望を感じていたからだという。ブラジルのように、狂信的な勝ち組が生まれなかったのは、普段の情報に接している上、なによりも邦人社会に、極端に社会的、経済的格差のなかったことが幸いした、といってもいいかもしれない。

しかし戦争は、日本を変えたが、海外邦人をも一変した。錦衣帰国の宿願から生き残った家族や親族の呼寄せへ、そして、在住国への定着へと変わっていくのである。（以上七九頁）

同書本文のアルゼンチンにおける沖縄県出身移民が、前記と同様、太平洋戦争を境に出稼ぎから永住へと日常の生活が転換していく状況を、以下の一文でみてみよう。

戦前移住された多くの人々は、錦衣帰郷の目的で希望と夢に胸ふくらませ、五年、長くとも十年を目途に移住した。

しかし大戦が終わりに近づくにつれ、沖縄の玉砕、広島、長崎への原爆投下等々のニュースが伝

わるや、諦めと定着への動きが徐々に芽生えて行ったという。

一九四五年八月十五日、昭和天皇の無条件降伏の玉音放送によって遂に大戦も終焉をとげると、錦衣帰郷の夢も薄れ、代わって永住への思考が人々を支配するようになった。就中、沖縄は鉄の暴風雨に曝され、山河も変わり果て、焦土と化したとの報は徹底的に永住への決意を新たにさせたという。

幸い一九四八年から、日本で教育のために一時帰郷させていた子弟の二世たちの呼寄せが可能となり、これが拡大されて二親等まで呼寄せられるということで戦後移住の幕開けとなった。そこで沖縄で進駐軍労務者となって差別と圧迫を受けて前途に希望を失った若者たちが、親族を頼りに大量に移住してきた。

当時、実質不参戦国のアルゼンチンは、食糧をはじめあらゆる物資を参戦国へ売りさばき、したたかに外貨を獲得して、好景気に沸いていた。だから、邦人の洗染業、花卉、蔬菜業界ではどんなに大量の移住者でも吸収できる余力があった。そしてこれらの新移住者は四、五年も就労すると、独立経営できたものだ。

一九五一年は沖縄からアルゼンチンへの移住のピークだといわれているが、その受け皿としての既存移住者もそれに応じる対策で大わらわだった。先ずこれまでの掠奪農型から永住型へと転換を図るため農地の購入、住宅の建設、農耕機具及び諸設備の充実等々の基盤確立に意を注いだ。

勿論これらは先輩移住者の心温まる支援と教示によって可能だった。わけても模合という経済面での協力援助はさらに、独立への道を容易にした。（以上二〇三頁）

アルゼンチンにおける沖縄県出身移民のリーダーの一人新里平清は、戦前から洗染業を営んでいた。彼の編集により亜国洗染クラブが発行した『在亜日本人洗染業五〇年の歩み』（一九六八）がある。そのなかのクラブ長を務めた同氏の論文「考愚公移山」のなかから、アルゼンチン移民の太平洋戦争時と、その後の洗染業界の復興の状況を、以下に取りあげる。[24]

第二次世界大戦中は、日本人移民は他の移民先国に於いては非常な圧迫を受けたようだが、当ア

24　新里平清編著（一九六八）『在亜日本人洗染業五〇年の歩み』亜国洗染クラブ。

ルゼンチンに於いては、対日、対独感情が非常に良かったので、ついに一九四五年に対日宣戦布告があったにせよ、非常に安楽に平時同様に暮らす事が出来た。日本への救援物資も送ることが出来たし、戦後のペロン政権となってからは、日本人は移民局に出頭すれば誰彼の別なく呼び寄せも自由であり、戦前五、六千人の日本人が戦後五、六年の間に戦前の二倍にふくれ上がり、しかもその殆どが洗染業に従事するようになった。

二、三年もすると一人前に洗濯屋の仕事を覚えて、先輩たちの立てる頼母子講で独立するようになり始めた。最初は親兄弟の或いは親友の援助を受けた人々が四、五年うちには戦前派をはるかに追い越して行く。そのバイタリティーには我々は心強く感じたものだ。

其の後、パラグァイ・ボリビア両国からの転住者たちも、その多くが洗染業に従事するようになり、現在当国に於ける日本人同業者の数は、ホフマン社の調査によると、全洗染業者五千軒中の五〇パーセント強、ほぼ二千五百軒になると言う。（以上十七頁）

七　第二次世界大戦後の移民

戦後、日本から海外への移民は、講和条約発効後の一九五二年（昭和二七）ブラジルへの五四人から再開し、一九九三年（平成五）までの四二年間に合計七万三〇三五人が送り出されている。うち日本からアルゼンチンへの移民は、一九五四年（昭和二九）の二人から再開し、一九九三年までの四〇年間に合計二七六〇人が送り出されている。[25]

沖縄県の場合、戦後二七年間施政権がアメリカ合衆国に属していたので、日本本土とは移民統計が異なる。沖縄県の『国際交流関連業務概要』（二〇一二）によると、戦後沖縄県から海外への移民は、一九四八年（昭和二三）の三四人から再開し、一九九三年までの四六年間に合計一万七七二六人が送り出されている（アメリカ合衆国を除く）。うちアルゼンチンへの移民は、一九四八年の三三人から再開し、一九九三年までの四六年間に合計三八九七人が送り出されている。[26]

つぎに、アルゼンチンにおいて発刊された書籍より、沖縄県出身移民に関し、戦後の現地社会の状況を振り返っておこう。

中城村出身の新垣喜盛は、アルゼンチンにおいて戦前から戦後にかけて、県出身移民の

25　国際協力事業団編（一九九四）『海外移住統計』平成六年一〇月、十四～十七頁、国際協力事業団。

26　沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課編（二〇一二）『国際交流関連業務概要』平成二四年三月、一八五頁、沖縄県交流推進課。

歴史と実態を詳細に記録しつづけた。例えば、ガリ版刷りではあるが、『アルゼンティン概況』（一九六四年初版、一九六七年再版）、『来亜四十年故郷を訪ねて』（一九六五年）、『在亜久場文化体育農業者呼寄促進会』創立二十五周年記念号（一九六六年）を私家版で発行している。

新垣はまた「温古知新」というテーマで、松堂リカルド昭編の『沖連二十周年史』（一九七三年）に一文を寄せているので、以下取りあげてみる。[27]

太平洋戦争で沖縄は最後の戦場となりすべてが灰燼に帰したので、在亜県人有志の間で沖縄への慰問品送付の話が持ち上がった。これより先に家族の安否を知りたいという県人多数の願いもあって、玉城保雄氏（故人）、平良賢夫氏（故人）に私と三人が代表となって亜国郵政庁とアメリカ大使館の担当官に会い、玉砕を伝えられる沖縄にある家族の安否を気づかう在亜県人の心配を説明、郵便再開の嘆願書も併せて提出した。これに対しそれぞれ丁重な返事があった。そこで三人は金武蒲戸氏も加えて沖縄への慰問品発送について相談するため、日本人公教会のファン神父の紹介を得て、アルゼンチン・カトリック教会会長の許まで行った。（三七頁）

ちょうど時を同じくして、在亜日本人会役員有志の間でも救恤（きゅうじゅつ）慰問品発送の議があったので、県人有志の間の話も、日会役員と合同して慰問品を募集することに決めたのである。レテイロの花卉市場内の事務所を集会場に、亜国政府からの公認もあって、本格的な慰問品購入募金に取りかかった。名称は「在亜日本戦争罹災者救恤委員会」、其の中に「沖縄部」を設けた。杉田俊夫氏の作詞で救恤歌も同胞のあいだで歌われた。「皆揃ッテ橋カケロ　アノヤセキッタ同胞ノ　血ヘ同ジ血ヲ送ルノダ」

のちに、沖縄部は独立して「沖縄救済会」となり、全在亜県人がすべての点で一致した時代を出現、小学校の生徒がアルカンシーア（貯金箱）を割って寄付するという美わしい同胞愛に進展して行ったのである。こうして集まった金は物品に替えて、北米ララＬＡＲＡ（アジア救済公認団体：Licensed Agencies for Relief in Asia）の手を経て日本へ送られた。

一九五一年「その目的を達成したから各国の救恤委員会は解散せよ」という亜国政府の指令で、日本戦争罹災者救恤委員会も、沖縄救済会も解散した。（以上三九頁）

27　新垣喜盛（一九七三）「温古知新」松堂リカルド昭編『沖連二十周年史』三七～三九頁、在亜沖縄連合会。

前記の『アルゼンチン日本人移民史』第二巻・戦後編（二〇〇六）より、戦後沖縄県からアルゼンチンへの移民送り出し再開の状況などを抜きだしてみる。

戦後の沖縄から移住再開は一九四八年に始まった。この年、アルゼンチンへ三三人、ペルーへ一人が渡航し、その後移住が途絶える一九七七年までに三〇一四五人が送り出されている。渡航先はアメリカの一二七五三人、ブラジル九三五二人、アルゼンチン三八〇九人、ボリビア三三九四人、ペルー七三三人、カナダ六二人、パラグアイ三〇人、その他十二人となっている。（一二〇頁）

米軍施政下にあったことから、沖縄県における海外移住が本土と一体化して進められるのは、本土復帰（一九七二年）五年前の一九六七年以後である。一九五一年九月十五日までは日本政府の南方連絡事務所を通して入手したスウェーデン公使館発行の身分証明書、同年九月十六日から一九六七年九月十五日までは琉球列島米国民政府発行の身分証明書を使って渡航している。初期のころは一枚の紙切れだったが、のちに旅券並みのハードカバーになった。それには「身分証明書に関する注意」として以下の条項が記載されていた。（一）この身分証明書は旅券の代わりに交付されたもので、交付を受けた者が米国の施政にある琉球列島に無条件で再入域できることを保証する。（二）外国旅行中の者でこの証明書を保持する者は、国務省の指令により最寄りの米国大使館または領事館に保護援助を求めることができる。（三）この身分証明書は特に定める場合を除き、渡航先国の査証を受けて世界各国へ渡航することができる。（以上一二〇～一二一頁）

前田出身の佐久田朝政の父は、戦前浦添村長を務めた佐久田朝盛で、沖縄戦で亡くなった。戦時中朝政は母とともに宮崎へ疎開していた。戦後、浦添で教師を二年ほど勤めた後、一九五〇年（昭和二五）にリース号で母カマと一緒にアルゼンチンへ移民した。[28] 沖縄から持ってきた三線は佐久田家で今でも大事にしている。朝政は戦前アルゼンチンへ移民した又吉三良の姉伊波カマの子伊波キクと一九五三年にアルゼンチンで結婚した。[29] キクは沖縄で幼稚園の教諭であったが、一九五一年にリース号でアルゼンチンに渡っている。[30]

牧港出身の伊舎良初子（旧姓又吉）の家族は、父又吉次郎の兄又吉三郎の呼び寄せにより家族でアルゼンチンへ渡っている。アフリカ経由のテゲルベルグ号で渡航した。又吉次

又吉家の人々（1981年頃）
知名・根路銘マリア提供

28　佐久田朝政は「在亜沖縄県人移民一〇〇周年祝典移民史編纂委員会作成資料」（浦添市民会、二〇〇八年作成）によると、戦前に移民した兄佐久田朝信の呼び寄せで渡航。

29　又吉三良の孫にあたる知名・根路銘マリアの証言による。

30　前掲資料によると、佐久田キクも父伊波亀保の呼び寄せにより渡航。

郎は当時牧港で精米所を持ち養鶏業を営んでいた。しかし、戦前防衛隊として戦争を経験したことから、「また戦争があっては大変。戦争のないところへ行きたい」と願い、移民したという。[31]

同じく牧港からは又吉宜幸が家族で一九五〇年に兄の花卉農園で働くということでアルゼンチンへ移民している。[32]

アルゼンチンは戦前の移民はわずか四人と少数であるが、先に移民した親族に呼び寄せられ、戦後の移民が続いている。

又吉三良の孫娘、知名根路銘マリアによると、又吉三良と前田出身の佐久田朝信・朝政は家族ぐるみの付き合いが長く続いている。それぞれの家庭の行事に呼び合っていたといい、又吉家・佐久田家の懇親の様子がうかがえる。ともにコーヒーを飲み、語り合っている写真も提供された。

知名根路銘マリアは平成十八年度の浦添市南米移住者子弟研修生として祖父母の出身である浦添に派遣され、現在沖縄に在住している。

佐久田朝政・キクには一男五女がおり、長女ノルマの息子、米須・エステバン・ロベルトもまた、平成十九年度の浦添市南米移住者子弟研修生として祖父の出身である浦添に派遣されている。

伊舎良初子は、浦添市民会の代表として活動し、在亜県人会の婦人部の理事も務めている。[33]

このようにアルゼンチン移民の実態をみてくると、貧しい生活からの脱却、豊かなくらしを夢見てまさに雄飛していった移民の態様、常に生活の向上、家族の幸せ、子供たちの教育に気を配り、移民先地での安定した生活を築いていったことが明らかになった。今、その孫が、祖父母の故郷と現在もつながりをもつ時代へとなっているのである。

31 『浦添市移民史』証言・資料編、九一～九二頁。

32 二〇〇八年のアルゼンチン調査時に「在亜沖縄県人移民一〇〇周年祝典移民史編纂委員会作成資料」の閲覧により得られた情報である。

33 『浦添市移民史』証言・資料編、九一～九二頁。

コーヒーやマテ茶を飲みながら語らう又吉・佐久田両夫妻　知名・根路銘マリア提供

クリスマスで集まった佐久田家の人々（1999年）
知名・根路銘マリア提供

第六節　ボリビア

一　概要

（一）はじめに

ボリビアという国は新聞やテレビなどのマスコミに登場することはほとんどないので、一般の日本人にとってなじみが薄い。南米大陸の真ん中にある内陸国、富士山の高さにある首都ラパス、アンデス山脈に広がるチチカカ湖などを思い浮かべる人はかなりの南米通といってよい。沖縄の場合は、少し状況が異なる。六〇年前、琉球政府[1]時代に三〇〇〇余人の移民が渡航し、幾多の苦難を経てオキナワ移住地を建設、入植当時の大原生林地帯をボリビア屈指の穀倉地帯に変え、正式の行政単位（自治体）であるオキナワ村に育て上げた歴史があるので、折に触れてボリビアの県系人の消息が沖縄のマスコミで報じられ、多くの県民も親しみを持っている。その縁で、沖縄県はオキナワ村のあるサンタクルス州と姉妹関係の協定を結んだ[2]。また、浦添市を通る国道三三〇号などの沿線にはボリビアから導入されたトックリキワタ（現地ではトボロチという）の並木が美しい桃色の花を咲かせるし、二〇一一年（平成二三）の世界ウチナーンチュ大会では多数の県人や県系人が母県沖縄を訪問、交流を深めたように、ボリビアは身近に感じられる存在である。ただし、ボリビア全体に対する知識は多いとは言えない。

（二）ボリビアの概略

ボリビアは複雑、多様な国である。地勢、気候、人々、言語、歴史などが各地によって大きく変化するので、理解するのは容易ではない。

国の位置は南米大陸の中央部、赤道に近いから熱帯地・亜熱帯圏に属するが、国自体は大雑把に三つのグループに分類することが出来る。第一グループは南米大陸の太平洋岸を南北に縦断する標高六〇〇〇メートルを越えるアンデス山脈に挟まれた三〇〇〇メートル以上の高地平原地帯である。首都のラパス市（標高三八〇〇メートル）も含めてラパス、オルロ、ポトシ州が属し、全面積の約十六％を占める。プレインカ時代のアイマラ語を話

図１　南米大陸におけるボリビアの位置

宮内久光作成

1　終戦後、米軍占領下において沖縄住民に認められた自治組織。但し、米軍の意に反することは行えなかった。

2　沖縄県とサンタクルス州は一九九二年姉妹提携の協定を結ぶ。

す先住民が多く、全人口の約四割が住んでいる。平均気温が八．五℃という寒冷地であり、ボリビア経済の主柱である銀、錫、銅などの鉱物資源に恵まれ、国の政治経済を支えてきた。最近では電気自動車などに欠かせないリチウムの埋蔵量が世界一といわれ注目を浴びている。第二グループはアンデス山脈の中腹、二〇〇〇メートル以上の渓谷台地で、中心のコチャバンバ市の標高は二五〇〇メートルである。平均気温十七℃という温暖な気候のため、ブドウ、リンゴ、ナシなどの温帯果樹栽培が盛んで、富裕層の邸宅や別荘も多い。住民はインカ系のケチュア語を話す先住民が多く、人口の約三割、面積の十六％を占めている。州としてはコチャバンバ、チュキサカ、タリハとラパスの一部がこれに属す。第三のグループはブラジル、アルゼンチン平原につながる熱帯・亜熱帯低地平原地帯であり、面積としては国土の七〇％を占めるが、一九五〇年（昭和二五）の人口はサンタクルス、ベニ、パンド、タリハの一部を合計しても全体のわずか十五％に過ぎなかった。この地方は二〇世紀半ばまで、ボリビアの他地方からの交通のアクセスが悪く、陸の孤島のような状態であった[3]。一九五〇年代に入って、ブラジル、アルゼンチンの大西洋岸の港と直結する鉄道が敷設され、国内道路が整備されて、農業、石油、天然ガスの開発が進み、急速に発展した。当時、中心の州都サンタクルス市の人口は五万人足らずであったが、二〇一二年（平成二四）現在、ボリビアで唯一、一〇〇万人を越える大都市に変貌した。このサンタクルス州にオキナワ移住地が存在する。

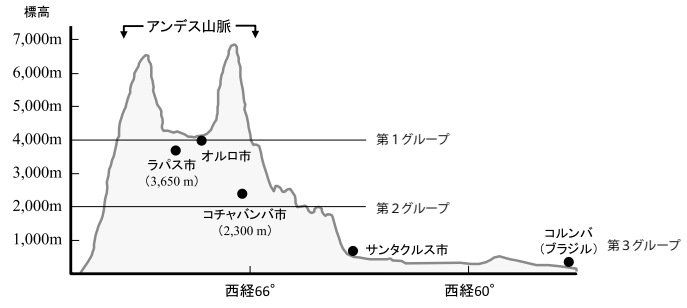
（三）行政区分と人口

ボリビアの面積は日本の約三倍の一一〇万平方キロメートルで（オキナワ移住地があるサンタクルス州がほぼ日本と同じ）、九つの州からなる。一般に州といっているが、中央政府の力が強く、日本の県に近い。かつては、九つの州と一直轄地があったが、チリとの戦争で太平洋沿岸のリトラル州を失い、内陸国になった。但し、直轄地がパンド州に昇格したので現在も九州である。

二〇一二年（平成二四）、ボリビアの人口は初めて一〇〇〇万人を越えた。一九五〇年

3　ボリビアの断面図のイメージ。図2を参照。

図２　ボリビアの断面図のイメージ



『ボリビアに生きる』（ボリビア日系協会連合会）72頁をもとに宮内久光作成。

図３　ボリビアの行政区分（州別）

宮内久光作成

（昭和二五）当時の二七〇万人から比べると三．七倍であり、自然増や外国移民の数を考慮に入れても多過ぎており、未登録の先住民の戸籍が整備されたことによる増加も指摘されている。地域別にみると**表１**が示すように増加の度合いは一．六倍（オルロ州）から一〇．八倍（サンタクルス州）まであり、全体の人口の増加ばかりでなく、地域間の増加の格差も大きい。全体の三．七倍を超える地域は上記（二）で述べた第三グループに属する低地平原地帯の四州だけであり、第一・第二グループの高地及び渓谷地域から低地平原地域へ国内の人口移動が激しいことを物語っている。さらに、地方から都市部への移動はもっと大きい。人口上位三都市の合計は国全体の三割近いし、この傾向は今後ますます強くなっていくとみられる。

表１　ボリビアの都市人口比較（2012年現在、15万人以上、上位順）

市　名	人口（千人）				所在州
	順位	2012年	順位	1950年	
サンタクルス	1	1,453,5	4	41,5	サンタクルス
エルアルト	2	842,3	不	明	ラパス
ラパス	3	764,6	1	267,0	ラパス
コチャバンバ	4	630,5	2	86,5	コチャバンバ
オルロ	5	264,6	3	58,6	オルロ
スクレ	6	259,3	5	38,4	チュキサカ
タリハ	7	205,3	6	16,4	タリハ

（出典：ボリビア国家統計局）

表2　ボリビアの人口の推移

州	人口					面積（㎢）	人口密度（2012）	増加率（2012/1950）
	1950	1972	1992	2001	2012			
合計	2,704,165	4,647,816	6,420,792	8,274,325	10,027,254	1,098,581	9.13	3.7
チュキサカ	260,479	357,244	453,756	531,522	576,153	51,524	11.18	2.2
ラパス	854,079	1,484,151	1,900,786	2,350,466	2,706,351	133,985	20.20	3.2
コチャバンバ	452,145	730,358	1,110,205	1,455,711	1,758,143	55,631	31.60	1.9
オルロ	192,356	311,245	340,114	391,870	494,178	53,588	9.22	2.6
ポトシ	509,087	658,713	945,889	709,013	823,517	118,218	6.97	1.6
タリハ	103,441	188,655	291,407	391,226	482,196	37,623	12.87	4.7
サンタクルス	244,658	715,072	1,364,389	2,029,471	2,655,084	370,621	7.16	10.8
ベニ	71,636	167,969	276,174	362,621	421,196	213,564	1.97	5.9
バンド	16,284	34,409	38,072	52,525	110,436	63,827	1.73	6.9

（出典：ボリビア国家統計局）

（四）言語と教育

ボリビアではスペイン語の他に公用語として先住民の言葉であるケチュア語、アイマラ語、グアラニー語を認めてきたが、二〇〇一年（平成十三）の国勢調査によると、スペイン語の話者は八八％、ケチュア語が三一％、アイマラ語が二一％、その他は二％弱となっている。[4] 多くの人たちがスペイン語と先住民の言語とのバイリンガル状況にあり、傾向として学校教育や都市生活を通してスペイン語のモノリンガルが増えてくるだろうが、現在はケチュア語やアイマラ語で書かれた教科書も使用されているため、先住民の言語も根強く維持されるとみられている。

学校教育は小学校五年、中学校三年、高校四年で、義務教育は八年間とし、公立学校は無償となっている。ボリビア政府はキューバ、ベネズエラの積極的な協力を得て、五万人の教師を二年九カ月投入することによって教育改革を推し進め、二〇〇八年（平成二〇）に非識字率を克服したと宣言した。ユネスコの基準に従えば、十五歳以上の成人九六％が読み書きできることになるが、ボリビアの識字率がそこまで改善されたか疑問視する向きもある。一方、高等教育をみると、一八三〇年ラパス市にサンアンドレス大学、一八九二年にポトシ市にトマス・フリアス大学が設置されてから、逐次、各州に公立大学が創設された。現在では、サンタクルス州に公立大学一、私立大学十五をはじめ全国では公立十二、私立五六、合計六八の大学が運営されている。

（五）政治・経済

ボリビアの独立は一八二五年八月六日である。シモン・ボリバル将軍[5]によってスペイン統治から解放され、その名を冠したボリビア共和国が誕生したのである。南米各国共通だが、独立を獲得したといっても、スペイン王室に替わって地元の有力者が政権を握っただけで、社会体制そのものはそのまま引き継がれた。ボリビアは建前上立憲共和制で、任期五年の大統領が選挙で選出されることになっているが、少数の富裕層が利権がらみの政争に明け暮れ、それに軍部が介入して、クーデターが多発し、長い間政治は安定しなかっ

4　参考：世界の教育（インタネットＨＰ）ボリビアの教育情報。

5　シモン・ボリバル（一七八三～一八三〇）ベネズエラ出身、南米大陸五カ国を独立させた英雄。三度大統領職に就く。大コロンビア主義者。

6　ビクトル・パス・エステンソロ（一九〇七～二〇〇一）第五四代、五六代、七六代のボリビア大統領。国民革命運動党の指導者。沖縄移民受入れを承認し、援助。「沖縄移民の父」としてオキナワ移住地に銅像が建立される。

た。独立から経過した年数と同じ数の大統領が出現したと皮肉られるくらいである。一九五二年（昭和二七）のボリビア革命により、国民参加の普通選挙、鉱山の国有化、農地改革を掲げた国民革命運動党が政権を掌握したことにより、近代国家として歩み始めた。これを指導したのがパス・エステンソロ大統領[6]であり、沖縄からの移民の道を開いた記憶すべき大統領である。この政権は一〇余年後に軍人の副大統領のクーデターで崩壊し、以後軍人による政治が続く。一九八二年（昭和五七）民政移管後の未曾有のハイパーインフレーションを経て政治は安定する。二〇〇六年（平成十八）にはボリビアの歴史上はじめて純粋のアイマラ系先住民のエボ・モラレス大統領が出現した。就任以来、公式行事にもネクタイを着用せず、特産のアルパカのセーターを愛用し、スペイン統治時代から受け継ぐ西欧流の文化に対して、それ以前の文化を再確認し、尊重しようという姿勢を示した。コカ生産では米国と対立、ベネズエラ、キューバと共に反米主義の立場をとっているが、国民の人気は高く、二〇〇八年（平成二〇）の信任投票でも六七％の支持を獲得した。その勢いで、二〇〇九年（平成二一）には憲法改正して正式国名を独立以来維持してきた「ボリビア共和国」から「ボリビア多民族国」に改称した。これまでにない新しいタイプの政治家として国際社会の注目をあびている。

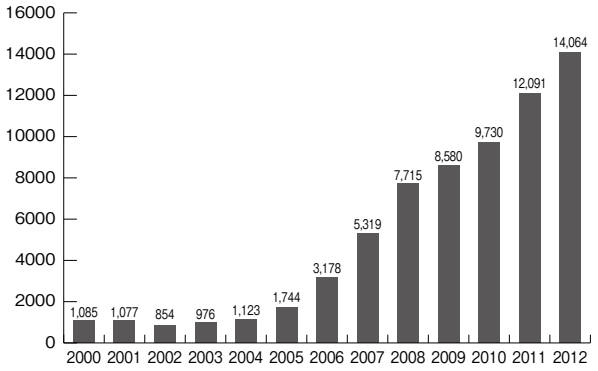
経済については地下資源が豊富にあり、十六世紀スペイン植民地時代に発掘されたポトシの銀鉱脈はスペイン王室の強力な財源となり、ヨーロッパに価格革命をもたらした。独立後は錫や銅などの輸出で大いに儲けた時代もあったが、外国資本家や一部の特権階級を潤しただけで、国民全体は南米の中でも最貧状態のままにおかれたので、周辺国から「金の椅子に座る乞食」と揶揄された。一九五二年（昭和二七）のボリビア革命における農地改革はスペイン統治時代から続いた大土地所有制度に切り込み、名目的な土地所有を認めず、耕作する農民にその土地の所有権を与えるというドラスティクなものであった。その結果、広大な未開拓地を擁する東部地方では国内道路、ブラジル・アルゼンチンへの鉄道の敷設などの社会基盤の整備に伴い、農業生産が飛躍的に発展し、農産物の輸入国から輸出国へと変貌した。その役割の一端を沖縄から移民した人たちが担ったとしてボリビア官

表４　分野別輸出実績（単位100万ドル）

分　野	2009	割合 %	2010	割合 %	増　減
農　牧　業	284,44	5.30%	278,04	4.05%	-2.25%
石油・ガス	2,086,29	38.88%	2,942,01	42.82%	41.02%
鉱　　物	1,498,49	27.93%	1,851,84	26.95%	23.58%
製　造　業	1,496,30	27.89%	1,798,63	26.18%	20.21%
合　　計	5,365,52	100.00%	6,870,52	100.00%	28.05%

（出典：ボリビア国家統計局　対外貿易統計）

表３　外貨準備高（単位100万ドル）



（出典：ボリビア中央銀行）

民から高く評価されている。

一九八五年（昭和六〇）のハイパーインフレーションは政治の致命的な失敗により八万％を記録し、国家経済は一旦は破たんしている。三度目のパス・エステンソロ大統領の就任により劇的に解決して、ようやく落ち着きをみせてきた。また、石油や天然ガスの開発が進み、ブラジル、アルゼンチンへの輸出が増大して、全輸出の四三％を占めるまでになった。ＩＭＦによると、この五か年（二〇〇九～二〇一三）の経済成長率は三．四％から六．八％に跳ね上がり、二〇一〇年（平成二二）には外貨準備金はボリビア史上初めて一〇億ドルを記録した。ただし、現政権の反米、反グローバル、資源の国有化政策が及ぼす影響に懸念を示す指摘もある。

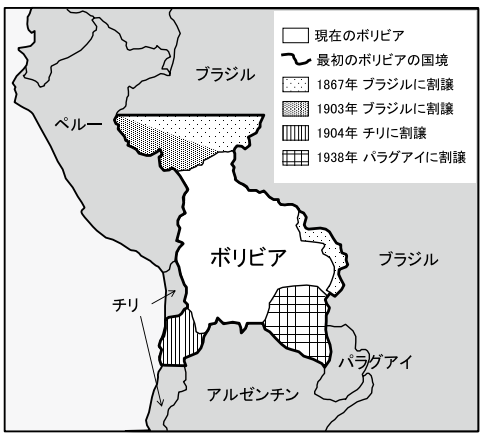
（六）ボリビアの戦争と領土の喪失

南米大陸の中央に位置するボリビアはブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、チリ、ペルーの五か国と国境を接し、建国当時、領土の広さではブラジル、アルゼンチンに次ぐ第三の大国で、その面積は二三六万平方キロメートルを越した。しかし、隣国との相次ぐ国境紛争や戦争に敗北したため、半分近くの領土を失い、現在では一〇九万九〇〇〇平方キロメートルになった（それでも日本の約三倍）。特に、重大な影響を及ぼしたのは、チリとの太平洋戦争[7]において敗北したボリビアは太平洋沿岸の領土を失って内陸国になったことである。また、天然ゴム採集地を巡るブラジルとの再三の紛争[8]では二〇〇万ポンドの補償金と鉄道敷設権で広大なアマゾン流域のアクレ地方をブラジルに割譲している。もう一つはパラグアイとの国境チャコ平原に石油の埋蔵が確認されてから国際石油資本がからんで起こされたチャコ戦争[9]で、別名飢餓戦争といわれる悲惨な戦争であった。アルゼンチンの仲介で終結したが、地域の大半は戦闘を有利に進めたパラグアイに帰属した。その他、ペルー、アルゼンチンにも国境地帯の分離を余儀なくされている（図４参照、色の濃い部分がボリビアが失った領土とされるが、各々の国の主張は異なる）。このように相次ぐ領土の喪失は、ボリビアが国家経営に未熟である上に、国内の権力闘争、国境防衛意識の希

7　太平洋戦争（一八七九―八四）一八六〇年代にペルーとボリビアの太平洋沿岸アタカマ砂漠の硝石発掘を巡って、チリとボリビア、ペルー連合が戦争。チリの圧勝によりボリビアは太平洋沿岸のリトラル州を失い、内陸国となった。

8　アクレ戦争ともいう。一八六七年アヤクチョ条約によりアクレ地方はボリビア領土となったが、ゴムブームによりブラジル人が多数侵入して再三分離独立運動を起こす。戦争を恐れたボリビア政府は二〇〇万ポンドと鉄道敷設権と引き換えに約一九万平方キロメートル（日本の約半分）の領土をブラジルに割譲した。

図４　ボリビアが隣接国へ割譲したとされる領土



宮内久光作成

薄さ、標高三〇〇〇メートルの冷涼な高原に慣れた将兵が焦熱の平地での戦闘に不向きであったことなどが原因といわれている。

二　ボリビア移民の歴史

（一）アマゾン河流域のゴムブームとボリビア初期の移民

一八八七年、アイルランドの医師ジョン・ブランド・ダンロップが空気入りのタイヤを開発して三輪車に使用してから、自動車のタイヤなど多方面に応用が広がった。その原料となるゴムはアマゾン河流域だけに自生するゴム樹から採集したので、にわかに注目を浴び、ブラジル各地だけでなく、外国からも多くの人たちが「緑の魔境」[10]といわれた辺境のジャングルに押し掛けた。その最終積み出し港のマナウス（アマゾン河の中流、河口から一五〇〇キロの地点）は十七世紀半ばまで要塞を兼ねた寒村にすぎなかったが、十九世紀の終わりごろからこのゴム景気によって急激に発展し、黄金期を迎える。建築資材をヨーロッパから運び込み、華麗な劇場や瀟洒な税関建物などを建設し、西欧風の近代都市が出現した。ゴムの集荷作業は地元や外国の企業が行い、金融や交易はイギリスが独占的に支配したので、アマゾン奥地でさえ取引は英貨でなされた。そのため、「アマゾン奥地のゴム林の川にはイギリス金貨が流れている」という風評が立つほどであった。ただし、英国人はゴム樹の種子を持ち出し、マレーシアやセイロン（現スリランカ）で大規模栽培を行ったので、第一次世界大戦（一九一四～一八年）の終わるころにはアマゾンのゴムの黄金期は終焉した。

ゴム樹から生ゴムを採集するのは全く未知の密林の中を山刀で道を切り開いてゴム樹を探し出し、樹幹に傷をつけ、樹液缶を取り付ける。半日後、溜まった樹液を集めて生ゴムをつくる作業だが、密林の中で、一人で自炊しながらする仕事は大変な孤独と忍耐を要する重労働であった。それでも、当時の農作業賃金の三倍から五倍の収入であり、その魅力が多くの人を引き寄せたのである。実際は、すべてを仕切る雇用主にいいように利用され、期待通りには成果が上がらないことも多かった。日本人移民もその一群に加わった歴

9　チャコ戦争（一九三二―三八）ボリビアとパラグアイの国境にまたがるグランチャコ平原に石油の埋蔵が確認されてから国際石油資本スタンダード・オイルはボリビア、ローヤル・ダッチ・シェルはパラグアイを支援し、戦争となった。戦死者よりも餓死死者が多く、飢餓戦争とも言われた。ボリビア死者六万、パラグアイ四万人といわれる。アルゼンチンの仲介により終結した。

10　「緑の魔境」一九五四年のイタリア映画が出所。南米大陸の長期ロケを行ったドキュメンタリー。ピラニアが動物を襲うシーンなどで世界的に知られた。

史があり、その頃伝承された歌がある。[11]

一九一八年シリンゲーロ時代の歌

一ツトヤ　人も恐るるボリビアに　深入りしたのも
二ツトヤ　只ならぬ　国家に尽くす為の身ぞ
三ツトヤ　文も通わぬ山奥に　朝夕星をいただいて
四ツトヤ　ゴムの林を駆けまわる
五ツトヤ　御国のためと思いなば　たとえ屍はつきるとも
六ツトヤ　名誉の戦死した心地
七ツトヤ　夜の目覚めのそのときに　風が持ち来る猿の声
八ツトヤ　またも聞こゆる虎の声
九ツトヤ　今の姿を見かゆれば　修羅にも勝るすさまじさ
十ツトヤ　刃や銃で身を固め
　　無常の風の吹かぬまと　心はやけにはやれども
　　げにも矢をいる月と日は
　　無くてはならぬ愛国の　心一つは夢にだに
　　忘れてくれるなわが友よ
　　やがて帰国の時至り　故郷に錦の暁は
　　今を昔と物語
　　事々変わるこの国に　変わらぬ慈愛の有難さ
　　清き尊き月ばかり
　　遠き南米の外国も　住めば都よ何事も
　　心一つのよきところ

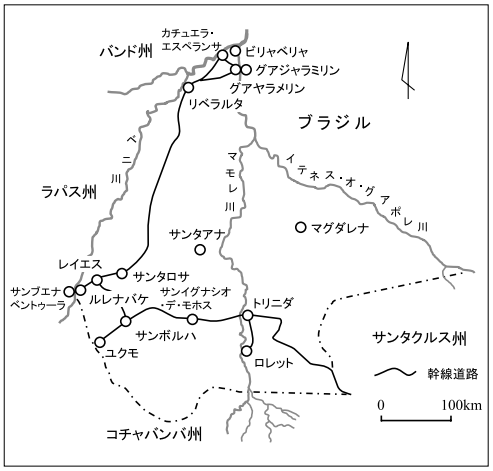
一九一八年　リオ・オールトルにて
山口県人　田村亀蔵氏とともに
佐世保重砲兵大隊第三中隊
陸軍砲兵上等兵　長尾和三郎

11　『日本人移住一〇〇周年記念誌　ボリビアに生きる』（ボリビア日系協会連合会、二〇〇〇年）二〇二頁

図５　ブラジルのアマゾン河流域

宮内久光作成

図６　ベニ州の主要河川と集落地



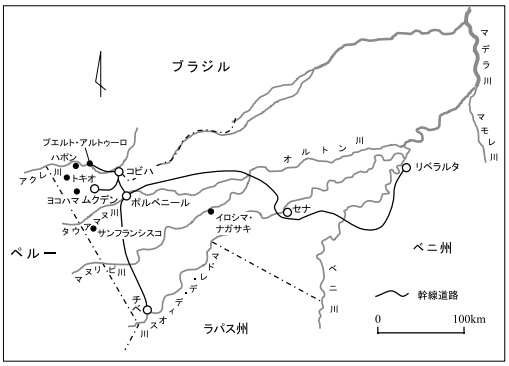
『ボリビアに生きる』（ボリビア日系協会連合会）154頁をもとに宮内久光作成。

（二）ペルー移民のボリビア転入

一九九九年（平成十一）六月三日、ボリビア共和国サンタクルス州都サンタクルス市において日本人移住一〇〇周年記念祭典が盛大に行われた。しかるに、統計資料[12]によれば、日本からのボリビアへの移住は一九一六年（大正五）の一人から始まって、一九四一年（昭和十六）まで合計二四九人（沖縄からは三七人）が渡航したことになっていて、一〇〇周年とは時期的なズレがある。ここに公式統計に表れない日本人移民の隠された壮大な物語が刻まれていた。

日本人の南米への計画的な移民はペルー契約移民から始まった。一八九九年（明治三二）、佐倉丸が南米最初のペルー移民七九〇人を乗せて、二月二〇日横浜港を出発し、四月三日ペルーのカヤオ港に着いたのがそれである[13]。上陸後、十一か所の砂糖キビなどの海岸耕地に配属されたが、劣悪な生活環境、過酷な労働、慣れない気候などにより就労一年以内に一二四人の死者を出し、大半が耕地から逃亡するか解雇される悲惨な結果になった。仲介した森岡商会はその収拾に奔走し、その一つとしてゴム景気に沸くアマゾンのゴム採集労働に従事する途を見つけた。森岡商会は希望者九一人に二人の引率員をつけて、四〇〇〇メートルのアンデス山脈を越え、国境を越えてボリビア領のゴム林地帯に送り込んだのである[14]。最初のゴム林現場でも同様な深刻なトラブルが生じ、二カ月半で逃亡・逮捕されたり、森岡商会の再斡旋で別のゴム林や鉱山に移動したり散々な辛苦を重ね、二人を残してボリビアから全員が撤退する[15]。冒頭で述べたボリビア移民一〇〇周年記念祭はこのペルー第一回移民のボリビア入国を起点にしたものである。このような結果にもかかわらず、アマゾン河源流のゴム林地帯の景気の良い話は邦人間に浸透して、アンデス越えが続いた。沖縄関係では一九一一年（明治四四）、明治植民合資会社の沖縄出身の社員八木宣貞[16]が三〇人の青年を引率してアマゾンのゴム林地帯へ出稼ぎに行ったときにはすでに沖縄県人がいたと記録しているので、沖縄出身の第一回航海者（一九〇六年）から転住者がいたことになる。八木は共同で道路工事やゴム採集、電信塔建設、山林伐開、単独の行商などの仕事を重ねながら、ボリビアの森林地帯を縦横に歩き回り、三年後の一九一四年

図７　パンド地域の主要河川と集落地



『ボリビアに生きる』（ボリビア日系協会連合会）196頁をもとに宮内久光作成。

12　国際協力事業団海外移住統計資料（平成四年三月）。

13　出身は新潟三七二、山口一八七、広島一七六、岡山五〇、東京四、茨城一、合計七九〇人であった。一八九九年から一九四一年第二次世界大戦により中断されるまで三万三〇七〇人がペルーに移民する。沖縄からの移民は第三航海、一九〇六年三八人から始まり合計一万一四六一人、全体の三五％を占めた。

14　出身は新潟七〇、広島八、岡山七、山口六、合計九一人であった。一八九九年八月三一日ペルーのカヤオ港を出発し、九月二三日現場ボリビアのサンアントニオ耕地着。出発から現地到着まで二四日を要している。

15　ペルーの第一回移民は死亡者一六二人、四年の契約終了後の帰国者一三八人という結果になった。

（大正三）十二月二九日にペルーに戻って、多くの事業を手掛け、日本人会長にも就任している。彼の回想録「五〇年前後の思い出」から抜粋してみる。

「一九〇七年から一〇年の初めまではゴムの相場も良く好景気でリマからの行商人も往来した。ある旧移民で貯金を持っていた人は入山して店を始め、また森岡商会の契約移民でタンボ耕地にいた人たちも流れ込んで行った。リマの人々も皆マードレ・デ・ディオス（ペルー領のアマゾン地帯）の好景気の話ばかりしていた。当時有名な海抜四五〇〇メートル余りのアリコマ峠[17]を日本式のわらじであるき通した話やまた同所で絶命した人の墓標が数か所にあるなどの話でいっぱいだった。（中略）私も多くの人々に勧められて視察のために入山した。リマに帰って再び入山した。一五名の予定が三〇人に増えて困ったが、とにかく入山した。移民の引受人は山城信重と仲田の二人であった」

「いよいよ世界的ゴムの暴落時代がきた。それは南洋の造林ゴムの多産が原因であった。日に日に悪いニュースばかりである。マードレ・デ・ディオス地方は非常な混乱状態に陥った。私も同様致し方なく当地に見切りをつけてカヌーを仕立て、六人がかりで漕ぎ私がかじ取りをして出発、五日目にリベラルタ[18]市に着いた。ひとまず先発隊と一緒になり、家を借りて早速仕事の請負業を開始した。私はアルコール缶四〇個位積んでベニ河、又はマードレ・デ・ディオス河に上がってゴムと物々交換の商売をしたが、あの時の蚊[19]軍に悩まされたことは永久に忘れられない」

「丁度その頃ボリビア政府との契約で電信塔を建てる契約ができた。材料はすべて英国から仕入れ、監督に来た三人の技師はスペイン語が少しも分からないので、頼まれて私が通訳することになった。これが縁となって、その後仕事の請負をしてくれとのことで、早速二〇人位動員して河蒸気[20]から陸の高い所まで塔を運搬して仕事を完了し、喜ばれた」

「次の仕事は山開拓であった。リベラルタ市のアブトン・アギレーラという大耕地主と五ヘクタールの処女林を切り開く契約をしたのである。早速カヌーを用意し、七人連れで出かけた。第一日目に途中で名城嗣頼と玉城正忠の畠に寄って一泊した。（中略）翌朝出発して、当地方は勿論のことヨーロッパでもゴム王と呼ばれていたスワレスの大きなバラック前を通りかかった時、夕方の五時頃だったが大暴風雨に襲われた。バラックの反対側の砂原にカヌーを引きずって避難している内にも稲光は激しく周囲は真っ暗くなり河水はゴウゴウと増水する。八人で命がけでカヌーを浜の方へ引き寄せたが食料品は全部流されてしまった。仕方がないので対岸のスワレスのバラックまで河を横切っていき、事情を説明して塩、砂糖、米、ローソク、マッチなどを売って貰った」

16　一九〇七年時の代議士、護得久朝惟の勧めにより明治移民合資会社扱いの第一回沖縄移民六五人の監督として渡航。一九六三年に「五〇年前後の思い出」を著す（私家本）。のちに沖縄県海外協会発行の『雄飛』第三八号（一九八二年）・第三九号（一九八三年）に転載された。

17　アリコマ峠越えについては次の新垣日記に詳しく描写されている。

18　リベラルタ市、ベニ州の市、ボリビア側のゴムの集散地として出現。

19　アマゾンの蚊の大群は人を発狂させるほど恐ろしいといわれる。

20　河川を航行する小型の蒸気船。

その他、鉄道工事で相棒のボリビア人に工事請負金を持ち逃げされ、多額の借金で苦労したり、日本移民受け入れを勧められた土地の調査でインディオに襲われたり、当時のボリビアのゴム林地帯の状況が細かく描かれていて興味深い。

また、時代は少し下るが、一九一六年（大正五）、ペルーへ自由移民として渡航し、翌年アマゾンのゴム林地帯へ三八人と共に出かけた国頭村出身の新垣庸英（当時二〇歳）が当時の経験をその時々に記録した貴重な日記[21]を残しているので、一部引用する（原文のまま）。有名なアリコマ峠越えの描写は圧巻である。

「一九一七年一〇月九日　猛獣住み人跡稀で其の間に無限の宝を蔵し居るというボリビア国へ好奇心にかられて、一攫千金の夢をみつつ住み馴れし都を捨てて立出でしは去る大正六年も夏気分漂ひ氷水など売り出る一〇月九日であった。多くの人々から勿体ない位に見送られて午後三時発のエンペリアル号でモイエンド港へ向かう。一行三八名」

「一〇月一三日　早朝の汽車にてアレキパへ向かう。（中略）ものの二時間も走ったと思う所から汽車は向きを替へ傾斜急になり、その岩山を廻りまわって登って行くのである。汽車の窓から望む景色実に爽快言わん方なしだ。余はよく活動写真などに出るアルプス山通過を聯想した。同一二時アレキパ市着、アメリカという宿屋に泊る」

「一〇月一四日　小時平坦を進みそれから少し上がりかけた所に停車場があり（中略）それからは次第に傾斜は甚だしくなり昼頃からは殆ど絶壁の様な所を汽車はゼンマイのように少時は同じ所を廻っているようであったが、次第に空気希薄になるにつれて呼吸困難になり、頭痛はするし大抵の者は横になる。昼過ぎ頂上に達し、それから平坦又は少傾を走って午後五時フリアカに着いた時は嘔吐したものも大分あった。停車場を出るとプラサがあって周囲に少しの商店や旅館がある。（中略）プラサより少し小通りへ入った所の宿屋へ泊った。土造りの長屋で豚小屋のような所に子豚のように枯葉を敷いて皆で並んで寝た」

「一〇月一五日　朝初の汽車にて一二時「ティラパタ」着、同地に一行を下した汽車は直しぐらにクスコに走っていった。同地からはいよいよ徒歩で有名なアリコマ峠を越え山林地へ入ると云うので、一六日は休んで荷物も旅行に必要なものばかりを残し、皆運送便で送る」

「一〇月一七日　一行は勇みいさんで出発したが、何分空気希薄の為とは云うものの皆相当かついでいたので　はやる勇気は撓まねど疲れし身をば如何にせん　で進むに進まれず、僅か四、五里の道も晩方ま

21　新垣庸英日記（一九一七年一〇月から一九二一年九月まで）大塚真琴著「新垣庸英と逃亡移民」（『移住研究』第二九号、国際協力事業団、一九九二年、八九～一四三頁）に収録。

でかかり、其の内四、五名のものは夜になるも着き得ず、ために馬方を雇ふてやった位だ。で皆疲れていたので明くる日は、アシーユに頼み、其のままにアリコマ越えは到底六ヶ敷しいとの事で又荷物を軽くすることに評議まとまり皆絶対必要品の外は全部まとめて運送で送らしむ」

「一〇月二六日[22]　徒歩の連中は午後七時頃各々厚着に身を固め頬冠りの上、毛布を冠って出掛けた。腰には固パンやチャンカカ他薬品など用意し万一に備え居る。少時は皆話しながら歌い乍ら登って行ったが夜が更けて坂を上がるに従い寒風はヒューヒューと唸りだし、雪は積り天は星ひとつ見えん真暗やみで道も見分け兼ね先頭の足音を追って進み、遅れれば待ち、待っては先に進み互いにあい励まして登り行くのであった。（中略）そんな事を考えながら登る程に路傍に墓標あり而して日本人の墓なりと云ふ。益々心細くなる」

「大正六年一二月　一六日より仕事に従事する。同月は一日丈休みたれども酒も無く食物とても平生の通り盛大な正月。先月一二月二〇日に同行中の山口県人二名イベリヤにて病死す[23]」

「大正七年一月　二〇日の晩同地を逃亡す[24]、途三晩山中にて泊。二四日バデラに着す。同地に沖縄県人山城君居住す。同行の四名牟田（福岡）、瓜生（福島）、辻田、向（二名は和歌山）は同日同地出発。ボリビア境へ向かう。二五日早朝同地出発。一〇時頃より山中にかくれ晩七時頃より出でて夜の一〇時頃山中泊し二六日午後四時、伊波、阿野二名のシリンゲーロの宅着。先行の四名同所にて又集まる」

「大正七年一二月　七日よりエストラードの掃除に従事す。一一日大城君を連れてボルベニールへ行く、帰り道高沢氏の所に寄りしに同行して入山したる福島県人二人来居る。八月頃来たとの事、聞けば従兄弟津嘉山秀嘉兄、ペルー中原氏許にて死亡せりと。秀嘉兄よ貧困なる家族、妻子を養い、生活難よりのがれんが為、大いなる決心を持ってはるばる万里の波路や渡来たり未だに一厘の送金も送り得ずむなしく異国の土と化すとは、ああ、増して故郷の父母妻子の心察して余りあり、如何に死亡せし所はアレルタと云う[25]」

「大正九年一二月二三日　比嘉太郎兄及び岩沢夫婦等サンフランシスコ経由にて、サンタエレナへ行くべく出発。小生は先日中原氏へ手形二〇ポンド依頼致しかばその手形は比嘉太郎兄にて受け取りそれを在リマの我部兄に渡し、兄にて故郷の父に送るよう依頼す[26]」

当時の移民は生活するのに必死であり、金を稼ぐのに精一杯で、記録を残すことなど念頭になかった時代であったから、移民が何を考え、どう行動したか、どんな生活環境であったかを記録した沖縄出身の二人の証言は、極めて感動的かつ貴重なものである。

さて、第一回航海の九三人がボリビアに二人を残して撤退した後もペルー移民が転入し

22　ペルーからボリビアへ入国する移民たちが通過した有名なアリコマ峠越えを生々しく描写している。

23　正月といっても何もないばかりでなく、仲間二人の訃報を知る極限状態。

24　契約就労中に逃亡したらしいが、ごく自然な描写で、頻繁に起こっていたのか。

25　従兄弟の死を悼む気持ちが切々と伝わる。このような例は決して少なくなかったと思われる。

26　アマゾン奥地のゴム地帯から故郷沖縄へ送金する方法があったことを示す貴重な証言。

てきたことはすでに触れたが、沖縄からの第一回移民三六人について島袋盛徳（ペルー移民、一九一七年渡航）が関係者から聞き取りした興味深いデータを残している。

貯えが出来て帰国した者六人、リマに定住した者十六人、ボリビア国リベラルタ定住者十一人、アルゼンチン転住者二人、客死（ペルー到着十二日目に死亡）一人。

すなわち、沖縄からの第一回移民は全体の三〇％がボリビアに定着したことになり、その後も、沖縄移民が高い割合でボリビアに転入し、定着したと思われる。

ペルー移民の多くが最初に目指したのはペルー領内の奥アマゾン源流地域マルドナード河周辺のゴム林地帯であったが、より高い収益を求めて同河を下り、ボリビア領内のパンド地域（当時はまだ州ではない）コビハ周辺、ベニ州リベラルタやトリニダ周辺に移っていく。どれくらい転入したのか記録はなく、大雑把な推測の域を出ないが、一八九九年（明治三二）から一九一八年（大正七）までの日本移民約二万五〇〇〇人の一割とみると二五〇〇人くらいはあったかもしれない。なにしろ、当時の移民は故郷への送金を背負った出稼ぎ移民であり、日本の面積に匹敵するような広大なアマゾン流域においても金の稼げるところはどこへでも移動したし、彼等移民の動静を把握するのは不可能であった。

ペルー国在リマ日本領事館の「在留本邦人職業別表」[27]においてボリビア関係の数字を拾うと次の通りになる。

一九一一年十二月現在　ボリビア国リベラルタ　二二〇人　（内ラパス付近二〇人）
一九一三年六月末　リベラルタ　二九〇人　（内ラパス及びオルロ付近　二〇人）
一九一五年六月末　リベラルタ　約六〇〇人（ラパス及びオルロ近傍　約二〇〇人）
一九一七年　五七四人
一九一八年　八三三人（太平洋戦争まで最大）

つまり、一九一一年（明治四四）の二二〇人から一九一八年（大正七）の八三三人に四倍以上増えたことを示す。そのほとんどがペルーからの転住者であり、資金を稼いでペルーへ戻るのもあったから、定着率を考慮した場合、実際の転住者数は二～三倍とみてもおかしくない。

27　『日本人ボリヴィア移住史』（一九七〇年、日本人ボリヴィア移住史編纂委員会編）

（三）ボリビアに定住した移民

ボリビアにおける日本人移民の歴史は三つの時代に区分される。第一期は一八九九年（明治三二）のペルー第一回移民の一部がボリビアのゴム採集労働に就労し、その後のペルー移民たちも高収入を求めてゴム林に集まってきた時代である。場所は奥アマゾンに位置するボリビアの北部であった。第二期はゴムブームが終わり、集まっていた移民が分散した時代である。ペルーや日本に戻ったグループ、国内の都市部に移って行ったグループ、そのまま居残ったグループに分かれる。第三期は全く新しいタイプの第二次世界大戦後の農業集団移民の時代である。戦前は「モーキティクーヨー（儲かって帰って来い）」で象徴されるように、ほとんどが出稼ぎ移民であったが、戦後は初めから永住が目的であった。この差は非常に大きい。

第一期の舞台はボリビアの最北端、パンド地方やベニ州のリベラルタとトリニダ周辺である。パンド地方は優良なゴム林があったため、ペルーの日本人移民たちが転入してきたのである。一九一五年（大正四）には六〇人、一九一八年（大正七）には一五〇人いたといわれて、中心部のコビハ周辺にはトキオ（東京）、ヨコハマ、ハポン（日本）など日本人に関係する名称が残っていたらしい。ゴムブームが去るとほとんどの人たちは四散していった。残留した人たち（推定約三〇人）はコビハの町に集まり、ボリビア人と結婚して、現地社会に完全に同化していった。生まれた混血二世、三世の生活様式は完全なボリビア人だが、日本人の気質（勤勉、正直、誠実）は受け継ぎ、現地社会で重要な地位を占める者が出ている。二人の州知事、四人の国会議員の他、主要都市の市長などにその例を見る。

戦前、ボリビアで一番日本人移民が集まったのはベニ州のリベラルタである。ペルーから流入するマードレ・デ・ディオス河やラパス山岳地帯から下るベニ河などの合流地点がリベラルタで、ブラジルのマナウスへ繋がる。奥アマゾン地帯では唯一の交通機関は川船（大半は筏）であり、これら河川を利用したゴム取引の集散地としてリベラルタは急速に発展した。日本人がいつ来たのかははっきりしないが、八木宣貞の著書によると一九一一

年（明治四四）同地で行われた最初の天長節[28]には四～五〇〇の招待状を発送し、二〇〇人が出席したとあるので、四〇〇人以上の日本人がいたことになる。また、堀内傳重は「聖母河畔の十六年」において一九一四年（大正三）頃、「日本人が約四百人、県別には沖縄県一〇八人、鹿児島県九八人を最多とせん。質素にして貯蓄心に富む事において、この両県が最も成績好し」と記し、さらに、時期的に差があるのだろうが、当時外国人の居住数を記録している。最大は日本人六八人、次いでドイツ人三六人、スペイン人五五人、ペルー人四八人、スイス人十七人、その他一〇人以下が十五ヵ国合計二八〇人（内女十九人）になっている。英米仏伊はもとよりデンマークやギリシャも含んでおり、こんな奥アマゾンの小さな新開地にいかに多くの国から参入したか興味深い記録である。

一九一五年（大正四）にはリベラルタ付近も入れ一六六人により日本人協会が設立されているが、その前年、沖縄県人は会員六一人をもって相互扶助と親睦を目的に沖縄県人会を組織した。リベラルタの日本人もゴム景気の動向に大きく影響された。外務省の記録によると一九一七年（大正六）四二一人、一九一八年に七〇〇人を越したのが、一九二一年三九六人、一九二三年には二六二人に減少している。移動が激しく、正確な記録は不明だが、そのまま留まったのは一五〇人前後であろう。

リベラルタに次いで日本人の数が多いのはベニ州の州都トリニダであった。町の歴史は古く十七世紀末ごろ宣教師たちが建設したのだが、交通の便が悪く、長い間停滞していた。ゴム景気はここにも波及し、町が活気づくとコビハやリベラルタから日本人移民が移ってきて商売を始めた。一九一七年（大正六）に日本人が九〇人いて主として雑貨商を営み、日本人会も組織されている。トリニダもゴムブームが去り、日本人が他所へ移って一世が減少してからは日本人会も不活発になり一九六七年（昭和四二）に解散した。

ボリビアの首都ラパスはスペイン統治時代からポトシ銀山とリマを結ぶ中継地点として発達してきた。最初の日本人はペルー第一回移民九三人の転入者の一人ともいわれ、その後、ゴム林で稼いだ人たちが転入してきた。一九〇八年（明治四一）当地を訪問したペルー領事館の野田書記生は、当時日本人十五人が在住と報告している。その頃、ボリビア

28　天皇誕生日の祝日。当時は盛大に祝われた。

日系人移民が集まったリベラルタの街並み（『ボリビアに生きる』ボリビア日系協会連合会、2000年）

は主要な鉄道建設工事が盛んで景気がよく、ペルーから直接ラパスに移ってきた人たちも事業を始めている。一九一六年（大正五）のボリビア移民第一号はその呼び寄せであった。一九二二年（大正十一）二七人の会員によって日本人会が創設される。[29] 一九三二年（昭和七）に勃発したパラグアイとのチャコ戦争による敗北で国家経済は疲弊したが、日本人の事業は伸び、シャツ工場、織物工場、貿易会社などが繁盛した。ラパスに直接進出した日本人の中には当初から日本との貿易を展開するなどゴムブームに乗せられてアマゾン地域に転入したグループとは一味違う人たちもいたのである。日本人会の会員は一九三六年（昭和十一）二〇五人、一九四〇年（昭和十五）二二七人と着実に増加した。日本からの呼び寄せ移民も一九二九年（昭和四）から一九四〇年に集中し、全体の八〇％を占めている。しかし、第二次世界大戦においてボリビアは連合国側に付き、一九四二年（昭和十七）対日宣戦布告を行った。米国政府の要求により、日本企業の金融凍結、日本人指導者の米国収容所送りが実施され、[30] 一九四五年（昭和二〇）一月日本人会は活動停止に追い込まれた。戦後、一九五二年（昭和二七）、ラパス日本人会が六八人の会員によって再開され、一九六二年（昭和三七）には日本政府は初めてラパスに独立の日本大使館を設置し、本格的な外交活動を開始する。

（四）「沖縄村」建設の夢

第二次世界大戦により幾多の犠牲者を出し、焦土と化した郷里沖縄を救済しようと一九四五年（昭和二〇）ハワイで沖縄救済運動が開始されたのをきっかけに、一九四六年ロスアンゼルスで在米沖縄救済連盟が組織され、その呼びかけに応じて一九四七年ブラジルに沖縄救済連盟が結成された。一九四八年八月にはボリビアのラパス沖縄島民会が沖縄救援会（会長比嘉繁雄）を立ち上げ、十一月にはリベラルタ沖縄県人会が沖縄戦災救援会（会長具志寛長）を組織した。当時の通信事情からすれば驚くべき迅速さであり、ウチナーンチュの愛郷心の発露というべきであろうか。リベラルタの救援会は会員や他府県人にも寄付を募って、総額一二五〇ドルを一九四九年二月一〇日に北米復興連盟へ送金した。[31] その

29　初代会長は吉田義憲であった。日本人会長を五期務める。長男はボリビア中央銀行の管理局長としてボリビアの高額紙幣にサインした。二男は空軍少将、駐日大使を務める。

30　ラテンアメリカから米国の収容所に送られたのはボリビア二九人、ペルー一七七二人、パナマ一八四人その他で、合計二二六四人。

31　三月二〇日には仲村信義事務局長からワールド・チャーチ・サービスを通して同資金による購入救援物品が送付されるとの連絡を受けている。

活動を通して、具志会長はボリビアに沖縄から移民を受け入れて沖縄村を建設する構想を導き出す。この構想をラパスの島民会やサンタクルスの有力者赤嶺亀に伝えると、折り返し両者から協力を惜しまない旨の回答があった。特に、赤嶺亀はサンタクルス州が移民受け入れの適地として推薦し、「この仕事を郷土沖縄に対する最後のご奉公として協力する」旨の表明があった。具志会長は一九四九年十二月の沖縄県人会定期総会において、沖縄村構想を提案する。

「焼け野が原と化した母国沖縄で同胞がさまよう有様を思うとき、私たちはただじっとしていることが出来ず、老いの身にありながらも出来るだけの救援金を集め送金しました。額は微々たるものだが、私たちの真心を含む尊い金である。しかし、真に沖縄同胞を救うためには郷土で苦しむ戦災民をこの外国に呼び寄せるよりほかによい方法はないと思う。それで我々が率先して将来性のある土地に沖縄村を建設し、お互いの発展を計り、愈々移民を受け入れるようになったら同胞を呼び寄せ共に民族永遠の発展を期すことが出来ると思うが会員一同のご意見を賜りたい」と提案し、さらに踏み込んで、「この事業は先ずサンタクルス州の国有地の払い下げを行い、ボリビア全土の県人を入植せしめ、沖縄村を建設することを第一に計画したいと思っており、ラパスの島民会長、サンタクルスの赤嶺氏、トリニダの仲村氏なども賛成しておられるので当県人会が主催してこの事業を進めていきたい」と具体的に説明する。この提案に対して全員が賛成した。そこで読み上げられたのが次の「移住地建設事業趣意書」であり、原文のまま掲載する。

移住地建設事業趣意書

『万里到処之我郷里』とは男子の本懐を表現せる昔人の言にして我等植民の理想とする処も又此処にある。我々が東洋の広大無辺の海上に僅かに存在を認められる程の孤島に生を享けながら万里の波濤を乗り越え地球の平面を貫き此処南米の中心地暮国に自立自営の途を求めて来た事は男子の本懐此の上なき最大快事でなければならない。（中略）

顧みるに当国における同胞諸氏の築きし足跡は最早半世紀にも及ばんとするのである。その間既に業成りし人もあろう。或いは勇途空しく既に此の地の土と化した人も多からんことを知る。

この惨憺たる先人の歴史は涙なしには聞かれざる処である。罹る我等の先駆者の犠牲により拓かれたる其の業績に対し我等後輩は深甚なる敬意を表して止まない処であります。然りと雖も今茲に我等が尊き歴史を追懐し、且つ先輩諸氏の遺跡功業を見る時、我等はその功業の永久的な基礎的植民事業に欠けたるを遺憾としてやまざる処である。（中略）

此処を我等の第二の故郷と決めて事業を興し、各人が自己のやるべきことを正確に考え善処せざりしに起因する処にして、真に利己主義を捨てて近隣相合して日暮親善に力を入れ来りたせば半世紀を過ぎし先輩諸氏の築きし功業は熟して待つべきものがあり、悔やんでも最早追いつきざる処であります。

顧みる今次戦争により我等は従来持続し来たりし思想は根底より打破なされたことを反省しなければなりません。

殊に故郷沖縄の受けし戦禍は我等の痛感する処にして総てを失したる沖縄である。廃墟の地を更生させるは我等に負わされたる任務である事を憶うとき、我等は従来の封建的思想を茲に精算し真に自由なそして新時代に即応したる思想を立てねばならん時期にあるを痛感して止まぬ処であります。

罹る機に我等は現在までに何をなし来たりしや？果たして母国沖縄より既に来たらんとする同胞を抱合して善処出来得る程の確固たる基礎的な事業が存在しあるや、惜しいかな否と言わざるを得ないのであります。

依って茲に我等は宣し相協和し利己主義を捨てて各自が自己のやるべき道を正確に認議善処し、本分に応じて精励努力し真に民族発展と言う大局より永住的移民地の建設目標を、消極的な抽象論を去り積極的な具体論を以て其れが実現に協心協和して行く事こそ我等に負わされたる急務たるを痛感する処であります。

故に我等は先ず将来に備えて土地という財産の選定が第一であり、移住者にとって土地は唯一の財産にして移植民事業は土地選定の如何によって定ることを覚醒しもってそれが選定に協心協和をもって実現せんとする処なり。

依って趣意書に替える。

一九四九年八月一日

この文章に流れる考え方は彼の当山久三[32]の名句「いざ行かん我らが家は五大州…」を思い起こさせるものがあり、その時代の沖縄移民が共有していた志であったといえよう。また、文章全体がこれまでの無為の反省をこめながらも、これからやろうとする新しい移民事業に対する強い意気込みが伝わってくる。リベラルタの移民は殆どがペルーから一九一

32　当山久三（一八六八～一九一〇）政治家、実業家。「沖縄移民の父」といわれる。「いざ行かむ　吾等が住処は五大州　誠一つの金武世界石」という名文句を残した。

○年（明治四三）遅くとも一九三○年代に転入し、ゴムブームが去って後も居残った人たちである。その大半は故郷への送金はおろか、連絡も途絶えてしまい、現地社会へ埋没していたはずである。それが故郷沖縄の未曾有の戦禍に対する救援活動を行ったことで、忘れ去られていた故郷への思いが一気に湧出し、移民受け入れ事業の実現へ駆り立てたのではないだろうか。

結成されたうるま移住組合の活動については、一九五○年（昭和二五）一月一○日の設立総会から一九五四年（昭和二九）一○月三日の解散総会までの詳しい議事録が残されており、戦後の沖縄のボリビア計画移民が実現するまでの現地における旧移民の考え方や行動が記録された貴重な資料である。[33]

それによると、設立総会で土地の選定委員具志寛長、岸本久正を決め、その費用としてラパス島民会含め約四万円（ボ貨）の寄付を集める。両人は一九五○年（昭和二五）六月から約二カ月間サンタクルス市の有力者赤嶺亀と共に馬による実地調査を行った。土地の肥沃度、健康地、交通の便も重要だが、資金の面から国有地の払い下げが可能な場所を前提にサンタクルス市から東部、北部、西部の七○キロ以内の集落を廻っての聞き込み調査である。その結果、グランデ河東側の下流二○キロメートルの地点に二五○○ヘクタールの私有地と隣接する広大な国有地を選定し、私有地は六万円（ボ貨）で購入決定した。第四回総会では第一回入植者として久場良明及び島袋庄七郎を選び、雨期明け入植と決定し、各々に開拓のシンボル山刀を贈る。久場はその心境を次の琉歌に託した。

あわりさびしさや　胸内にかくち　わしたせる仕事　世界に知らさ
金や世ぬ中ぬ　まわりむぬてやり　世間のためしようて　さたゆ残さ

一九五一年（昭和二六）四月、両人は入植、グランデ河東方五キロの移住地中央部へ伐開作業を開始する。翌年二月、うるま組合はサンタクルス州知事から移住計画の承認を受け、沖縄側へ連絡するが、具体的な反応はない。その年の五月十二日突然ジェイムス・ティグナー博士が太平洋学術会議及び米国民政府[34]の委託を受けてサンタクルス市に到着、沖縄移民の人口、職業などの実情について詳しい聞き取り調査を行った。その中で、うる

33　安仁屋晶氏（ボリビア第一次移民、那覇市在住）が写しを取って保存。

34　一九四五年米軍が沖縄に上陸すると同時に沖縄を統治する目的で設置された。正式には琉球列島米国民政府と称す。

ま移住組合が沖縄から移民を呼び寄せるため、小規模ながら移住事業を実行していることに注目する。これまでの調査では沖縄移民の生活状況や将来の移民の可能性について総合的な分析をしてきたが、具体的な移住計画の実例はなかったのである。同博士は組合に対し、三〇〇〇人を一〇か年で受け入れる年次計画や資金計画を立て、ボリビア政府の承認を取り付けるよう細かく助言する。それがあればこの移住事業のための資金は米国政府と琉球政府に出させるよう働きかけると請けあう。組合にとって大きな転機である。これまで対ボリビア政府だけで事業を進めてきたが、米国や琉球政府を巻き込んだ本格的な移住事業に取り組むことになるからである。また、ティグナー博士にとっても移住総論だけではなく、具体的な提案を示すことが可能になった。彼はそれを踏まえて一九五二年（昭和二七）九月沖縄を再訪し、ボリビアのサンタクルス州開発の展望及び沖縄移民の可能性について米琉の関係者に説明を行い、移民事業の推進を勧告したのである。

うるま移住組合は琉球政府に一九五三年（昭和二八）六月十八日付で移民受け入れ一〇か年計画がボリビア政府の承認を得たこと及び土地一万町歩の払い下げ認可書を送付し、使節の派遣要請を行ってきた。在ボリビア米国大使からも米国民政府宛に同様の情報が届く。民政府はボリビア移民事業に十六万ドルの補助金を用意し、琉球政府は独自の予算一億Ｂ円を組み移民金庫を発足させる（一九五四年四月設立）。いよいよ事業全体が動き出した。

三　新しい型の集団計画移民

（一）終戦後の沖縄の状況と移民への熱望

太平洋戦争において激戦地となった沖縄は地形が変形するほど破壊され、戦死者は住民も含めて二〇数万人に達した。戦争が終結しても生き残った住民にとっては日々の糧を求めて生きるのに精一杯であった。統計によると、一九四四年（昭和十九）の人口五九万人が一九四六年（昭和二一）には五一万人に減少するが、一九五〇年には七〇万人、一九五二年は七六万人に急増する。その大きな原因が海外からの引き揚げ者で、その数十七万人

1952年当時のサンタクルスの街並みの写真（オキナワ日本ボリビア協会提供）

とも推定された。沖縄にとって人口と食糧問題は解決を要する喫緊の問題であり、その一つとして海外移民事業が模索され始めた。一方、米国民政府も住民の生活安定や赤化運動の阻止の観点から、沖縄の伝統的海外志向に注目し、太平洋学術会議を通してスタンフォード大学教授ジェイムス・ティグナー博士に南米の沖縄移民の現状と移民の可能性を調査させた。同博士は一九五一年（昭和二六）から翌年にかけて約八カ月間の現地調査を行い、報告書を提出している。[35] それ以前に、沖縄側はボリビアのうるま移住組合からボリビアへの沖縄移民受け入れの意向が伝えられているが、沖縄にとってボリビアとは戦前戦後を通して交流がなく、重要視されなかった。沖縄側の関心はブラジルやインドネシア、南洋諸島にあったのである。一九五二年（昭和二七）九月、ティグナー博士の沖縄再訪による移民事業推進の勧告を受けて米琉双方が本格的に取り組みだしたことはすでに述べた。琉球政府は移民使節の派遣を決定し、経済局企画室長瀬長浩、琉球海外協会長稲嶺一郎を任命した。出発は一九五三年（昭和二八）十二月十五日である。この使節団の激励も兼ねて十二月五日に那覇市内のサンゴ座において「海外移民促進大会」が開催された。参加団体は沖縄市町村長会、沖縄青年連合会、婦人連合会、教職員会、社会福祉協会、軍用地土地委員連合会、商工会議所など当時の主要な二七団体である。移民事業が如何に全島的な問題として認識されていたかの証左であろう。

瀬長、稲嶺両使節は十二月十六日東京を発って、ハワイ、北米、アルゼンチン、ブラジルなどを訪問、翌年の二月十二日ボリビアの首都ラパス市に到着。赤嶺亀うるま移住組合長の案内により精力的に関係機関と交渉する。米国大使館において行われた、ポイントフォー担当官、米国大使、ベラルデ農務大臣との会見で、両使節は沖縄が戦争による壊滅的な被害を受けた状況及び現在の資金不足を説明すると同時に、沖縄移民がボリビアの農業開発に貢献し得ることを強調し、資金援助を要請したところ、農務大臣から「米国政府さえ了解してくれるなら、ボリビアは、我が国に対するアメリカからの援助資金九百万ドルのうち三千五百万ボリビアーノス（十八万ドル余）を、うるま移住組合の事業補助費に割り当てましょう。移民の住居や入植地の道路建設などは、これでできるでしょう」[36] との

35　報告書は前編がブラジル、後編がボリビア、アルゼンチン、ペルー、メキシコを扱い、沖縄系移民の人口、職業など詳しい聞取りを行っている。ボリビアはブラジル中央部に次いで移民適地とされているが、この調査報告により琉球政府はボリビア移民の実現に動き出す。

36　ベラルデ農務大臣の発言は『稲嶺一郎回顧録　世界を舞台に』（沖縄タイムス、一九八八年）から引用。

回答があった。両使節の目的の一つは米国政府の開発途上国援助組織であるポイントフォープログラム（後の国際開発庁ＡＩＤ）の資金から沖縄移民への援助を引き出すことであったから、その役目を果たすことが出来た。

瀬長、稲嶺両使節はサンタクルスに移る。赤嶺組合長たちの案内で、うるま移住地までの七〇キロを「鉄砲と食糧持参で馬に乗せられ」移動したが、雨後の道路状況が悪く難渋し、橋のないグランデ川の筏渡しに面喰いながら現地入りした。両使節は現地視察に五日をかけ、すでに入植している先発隊の営農や周辺の状況を調査した。また、うるま組合側と二日間に亘る真剣な協議の結果、次の点で合意した。①今後移民事業は琉球政府が引き継いで実施、組合は側面的に協力する　②組合員の出資で購入した二五〇〇ヘクタールの土地代は移民全員の負担とし、すでに耕作している先発隊の優先権を尊重する　③第一回の四〇〇人の受け入れについてはボリビア側の考えもあり、計画の調整をするなどである。また、ボリビア側から要請のあった受け入れ委員会については委員を赤嶺亀、具志寛長、崎浜秀行、眞栄城嘉常、比嘉良光、新垣庸英の六人の他に沖縄からの先遣隊三人を加えた九人とし、農務大臣に報告する。

最後に、両使節はパス・エステンソロ大統領と会見したが、同大統領から「現在、ボリビアは錫、金、銀などを産する鉱業国です。しかし、これらの資源は無限ではない。今後は、広大な国土を活用して農業立国に転換していく必要がある。ところが現在、ボリビア国民の八割が三〇〇〇メートル以上の高山地帯に住んでいる。鉱業に人口がかたよっているのです。政府としては鉱山閉鎖による離職者やボリビア国軍を東部サンタクルス一帯の開拓にふり向けたりと努力はしましたが、結局、定着していません。入植者には保証金を出させる法令も制定しました。それでも定着しません。体質的に低地の気候や生活環境が合わないということもあります。しかし、一番の問題は忍耐力です。農地開拓は忍耐のいる仕事です。沖縄移民なら、農業立国としての基盤をつくれると確信しています。あなた方の要請通り、入植保証金二千六百万ボリビアーノス（一四万ドル弱）も免除しましょう。独身男性ばかりでなく、家族ぐるみの移住者も歓迎します。一世帯当たり五〇ヘク

沖縄移民の父パス・セステンソロ大統領の像
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

パス・エステンソロ大統領（左端）と会見する琉球政府使節。右から、稲嶺一郎、瀬長浩（オキナワ日本ボリビア協会提供）

タールを与えます。援助資金も三千五百万ボリビアーノス（十八万ドル余）を準備できます」[37]といわれ、両使節のボリビアにおける目的はすべて達成された。この大統領こそコロニア・オキナワ入植五〇周年記念式典において〝沖縄移民の父〟として銅像が建立されるのである。

一九五四年（昭和二九）三月十三日、両使節はペルーへ出発する前に、すべての折衝が終了したとして琉球政府行政主席宛打電する。

「ボリビア政府は好意を持って沖縄移民を認可し、次の事項について通達している。即ち、ポイントフォーの署名によって、基本施設に要する三千五百万ボリビア通貨が獲得できたこと及び保証金を要しないこと。なお、土地は移住に適しているので、八〇家族と八〇人の独身者より構成される四〇〇人を八月までに、サントス経由、サンタクルスに到着するよう措置を講じられたい」。

この報告によって、沖縄側は移民送出準備が急速に進められる。

（二）選ばれた移民たちの出発

使節からの報告を受けて琉球政府はボリビア移民送出のために本格的に動き出す。一九五四年（昭和二九）三月二三日「南米ボリビア移民募集要綱」を制定して各市町村長あて第一次選考業務の依頼を行い、四月二二日には「海外移民送出審議会」を発足させ、政府側から局長級四人を含む委員一〇人を任命する。また、四月三〇日には移民対象者の資金援助を行うため米国民政府補助十六万ドル、琉球政府出資一億B円により移民金庫が設立された。

「募集要綱」によれば締切が四月一〇日であり、各市町村は二〇日足らずで第一次選考をすることになるが、ボリビア移民の募集は全島的に浸透していたのか八重山と離島を除いてほぼ全市町村から合計三五九一人の応募があった。募集人員四〇〇人に対し約九倍の競争率になり、第一次選考では一五一九人に絞り込まれて、更に「送出審議会」の選考を経て三七市町村からの四〇〇人が選出された。このような厳しい選考により合格した人た

37　パス・エステンソロ大統領の発言は『稲嶺一郎回顧録　世界を舞台に』（既出）から引用

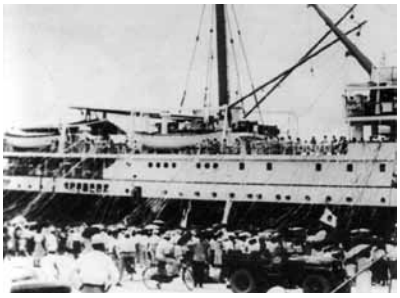
那覇港での移民団の見送り風景
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

ちは出身地だけでなく沖縄全体の代表としての誇りと自覚を持ち、これが後の凄まじい試練にも耐える精神力になったように思える。また、「募集要綱」は対象者を農業者に限定しているが、実際の職業は、軍作業四八、農業四四、商業二四、建築業十七、公務員十四、教職員六、製菓業二、医介補一、助産婦一、銀行員一となっている。最も多い軍作業は大半が農業者に含まれるだろうが、農業以外から多くの人たちが選ばれたのは現地の移住地が一つの総合的な社会共同体になることを想定していたのであれば、「審議委員」の判断は正しかった。もう一つ目立つのは海外からの引き揚げ者が多いことである。フィリピン二一、満州九、南洋諸島六、台湾六、ペルー五の他に軍人二一人となっている。この海外経験者の存在は予期せぬ災難に遭遇した場合の移民団の判断と行動に大きく影響することになる。

一九五四年（昭和二九）六月十九日、那覇港ターミナルビル屋上において、比嘉秀平行政主席、立法院議長、米国民政府副長官など要人多数の出席の下に壮行会が開催された。比嘉主席が「八〇万住民が久しく待望していました海外移住の扉が開け、皆さんはその第一陣の栄誉を担って、今日壮途に就かれるのであります。皆さんは多数の希望者の中から厳正なる選考を経た優秀なる方々でありますれば、入植後は団員の親和と相互扶助をもって、受け入れ団体のうるま移住組合を中心とする共存共栄の理想郷建設にまい進され暮国民の模範となれるよう希望します」と激励し、西平守蔵団長は「人の和、特有の勤勉をもって祖先にならい、勇気を奮い起こして頑張ります」と答辞を述べて、第一次移民団二七五人全員が乗船した。

当時、移民船は太平洋を横切る東回りのコースと、インド洋を渡ってアフリカの南端を越える西回りのコースがあったが、沖縄からの乗船はすべてオランダ船の西回りコースであった。第一次移民団の乗ったチサダネ号は香港、シンガポール、ダーバンなどを経て、八月六日、ブラジルの上陸港であるサントス港[38]に到着した。この四五日の船旅の間に三人の子供が誕生している。サントス港にはボリビアから先発隊の長嶺盛良、受け入れ委員比嘉良光、ブラジル沖縄協会の花城清安会長他の出迎えを受け、携行荷物の免税通過には仲

第1次移民団を激励する比嘉主席
（オキナワ日本ボリビア協会提供）


ボリビアへ出発する移民団
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

38　日本移民が最初に上陸する港。一九〇八年六月一八日、ブラジル最初の移民が到着した日は「海外移住の日」と定められている。

村渠パウロ州議員の協力があった。協会本部はボリビア移民の通過日程を鉄道沿線の支部に連絡している。

サントス港からは移民専用の臨時列車をチャーターして二七八人全員乗り込む。途中の駅々では連絡を受けた県人会が出迎え、食糧など差し入れ、最大の県人が集まるカンポグランデ[39]駅では列車停車時間を延長させて歓迎会が催された。八月十四日ボリビアの最終駅パイロンに到着。翌十五日にはボリビア政府から農務大臣、移民局長、州関係者は農業銀行頭取、鉄道公社支配人、他多数の出迎えがあった。農務大臣は歓迎の挨拶とともに一人ひとりと握手を交わした。このような対応はボリビア側の期待と関心の大きさを示したものであろう。移民団は用意されたトラックで〝憧れの〟うるま移住地へ移動する。

一九五四年（昭和二九）八月十五日、うるま移住地で農務大臣立ち会いの下に全員の入国査証を済ませ、晴れてボリビア移民としての第一歩を踏み出したのである。この八月十五日は沖縄移民のボリビア入植記念日として毎年移住地全体で式典を催し、併せて慰霊祭が行われる。

（三）移住地を襲う恐怖の病魔

移民団が到着した時点では宿舎の半分以上が骨組みだけで屋根も壁もない状態であった。八メートル×一〇〇メートルを真ん中で仕切った長屋形式の宿舎は現場の材料で組み立てられたものであった。到着して最初の仕事が周辺から小枝や草木を集めての寝床作りだったという。深刻なのは水であった。移住地内の井戸は塩分を含み飲用には不適であったので、飲料水は五キロ離れたグランデ河からトラックで運び、雑用水は近くの沼から牛車で運ぶしかなく、二カ月後の打ち込み井戸が完成するまで大変な労働であった。

九月十四日、第二次移民団一二五人が到着し、第一陣の四〇〇人（船中出生五人が加わる）が勢ぞろいした。九月二四日には中央の広場で総会を開き、団体の名称を「うるま移民団」として団長長山哲ほか各役員を選出する。直ちに、作業班毎に宿舎建設、道路工事、測量の実施、自給食糧の植付、医療・教育の準備など、原始林の中でのゼロからの環

39　ブラジル国南マトグロッソ州の州都、沖縄県人が多い。ティグナー報告によると、一九五〇年一〇〇〇人余が居住。

パイロン駅に着いた移民列車
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

入植当時の総会
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

境づくりに全員で取り組んだ。

一〇月三〇日、有銘乗憲（四五歳、名護出身）が急逝する。その時はかぜをこじらせたものと受け止められていたが、その後、更に十四人の尊い生命を奪う恐ろしい病気（俗に「うるま病」といわれる）の始まりとは誰も予想できなかった。ボリビア政府から三人の医者が来て黄熱病とジフテリアの予防接種を行い、入院の必要な三人をサンタクルスへ移す。また、移民団の要請により派遣された土木技師からは移住地の一部がグランデ川よりも低いと告げられ、不安材料になった。

南半球では十二月は真夏である。酷暑が続く中、開拓の厳しい労働と食糧事情により栄養バランスが崩れたのか、三〇人余が発病し、三人の若い命が失われた。その一人は浦添出身の比嘉秀明の三男貞夫（一〇歳）であった。記録によると、犠牲者の数は発生から一九五五年（昭和三〇）四月までに合計十五人となっている。浦添出身では銘苅政男の長男政和（三歳）と真栄城功（二六歳）が亡くなっている。人里から遠く隔絶された原始林の中で四〇〇人余の移民たちが次々と得体のしれない病気に襲われ、死亡者が出る状況に移住地はパニックに陥った。その時の様子を入植四〇周年記念誌は「総会招集や団葬以外に鳴ることのなかった時鐘が一二月三一日除夜の鐘として鳴り響く。衆生済度の鐘の音が深閑としたジャングルにこだまし、百八の煩悩の除去に願いを込め、伊良波尹孝と安仁屋進が交互に打ち鳴らした。一夜明ければ一九五五年の元日である。異国で迎える最初の正月であるが、新年の慶びの挨拶など口から出るはずはない。昨日と変わらず、今日も病魔と闘う一日が明けただけである。罹病者も増加し四百名の中八五名が茅屋の中で呻吟している」と記している。身の毛もよだつような情景である。

十二月六日、移民団は総会を開催して全員の移動を決議し、琉球政府に緊急事態を報告する。琉球政府はボリビア政府、米国民政府、ティグナー博士、リーディング中佐等関係者に協力依頼した旨返電し、使節の派遣を準備する。移民団は新たな土地調査を模索する。

ボリビア政府はサンタクルスの病院患者の入院治療費を無償にすると発表し、三人の医

ティグナー博士
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

グランデ河の対岸よりうるま移住地を望む
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

グランデ河の対岸よりうるま移住地を望む
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

者を派遣、二月十二日まで診療に当たらせる。しばらくは小康状態であったが（三月は死亡者ゼロ）、グランデ河の上流に降った雨の増水により、移住地全体への浸水が始まり、外部へ通じる道も遮断され、孤立状態になる。中心部は小高い地形になっていたため浸水はまぬかれたが、そこに周辺の野鼠の大群が押し寄せ、宿舎の梁や屋根を駆け巡り、あらゆるところに潜り込んできた。病人が増え始める。二月十七日、前の派遣医師が危険をかえりみず筏で医薬品を届けに来る。その他にもボリビアの三医師にアルゼンチンからの医師が参加。二月二四日、米国から医療チームが来て採血するなどの活動があったが、四月になって四人が死亡し、犠牲者は十五人に達した。

うるま移住地で原因不明の病気が発生したニュースは近隣諸国へも伝えられたので、各国の県人会から慰問団の訪問、医薬品や食糧品、見舞金などが寄せられた。ブラジル沖縄協会のサンパウロ本部、カンポグランデ支部、ラパス沖縄県人会及び日本人会、リベラルタ県人会、ペルー沖縄県人会、在ロス北米沖縄クラブなどであり、これが移民団の大きな励みになった。ウチナーンチュの絆の強さを示すエピソードである。

（四）うるま移住地を放棄してパロメティーリャへ

一九五五年（昭和三〇）四月には移住地内が移動で浮足立ち、それに備えて組組織を編成した。大組は十五組、小組は一〇戸単位で組長を置く。四月一〇日には先発隊が移住地から北西一三〇キロのパロメティーリャ[40]へ出発した。四月十六日、遅きの感があるが、琉球政府の社会局長山川泰邦、コザ保健所長照屋善助が米陸軍のリーディング中佐等関係者と一緒にサンタクルスに到着する。直ちに、受け入れ委員会を開催して、山川使節から全員移動の方針を説明する。旧移民は四か年の苦労が水泡に帰すことに断腸の思いであったが、了承する。うるま移住地内でも総会を開き、全員移動の合意を得た。米国側も米国医師団のうるま移住地不適の具申を受けて、移動のための予算措置や機材配備など具体的な支援に乗り出した（二億三〇〇〇万ボ貨相当）。ボリビア側も移動に同意し、管轄は農務省から産業開拓省に移る。

うるま移住地から移動する移民団
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

1952年のうるま移住地
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

40　サンタクルス州第二の都市モンテーロから西方へポルタチュエロまでの中間、パロメティーリャ川にそった二五〇ヘクタールの土地。

移動は上述の組ごとに六月二四日から開始する。四〇〇人余の集団が移住地の中心部からグランデ河の河べりまで徒歩と牛車で移動し、筏船で向こう岸に渡ってトラックが配置されるまで民家で待機するのだから時間を要した。移動の有様はまるで戦争難民のようであったが、八月一〇日までには事故もなくパロメティーリャへ全員移動した。

パロメティーリャに移ってからは、あの猖獗を極めた「うるま病」は完全に消滅していた。新しい土地は道路沿いにあり、移住者は病気への恐怖や閉ざされた密林の孤立感から解放されて元気になり、近くの川での炊事洗濯など日常生活も容易になって新しい土地に慣れていった。うるま移住地での災難や移動に費用が掛かり、移住者の大半は無一文状態になっていたが、ボリビア産業開拓省を通して米国の援助金による支えがあり、困窮することはなかった。ただ、ある日、子供たちのままごと遊びの中にうるま移住地の葬式ごっこを見た父兄が愕然として、急いで学校教育を始めることになった。幼稚園から小学三年までは教師経験者を中心に日本語で教育、四年以上はボリビア政府から派遣された教師[41]によるスペイン語教育で、生徒数三一人であった。

一九五五年（昭和三〇）九月八日、総会において「うるま移民団」の名称を「コロニア沖縄農業協同組合」に変更し、これまでの旧移民指導体制から新移住者による運営体制に替わった。ただし、このパロメティーリャ地域は二五〇ヘクタールしかなく、周辺には私有地や多くの集落があり、土地の拡張は難しかった。米国やボリビア側と協議の結果、再度、土地探しをすることになった。

一九五六年（昭和三一）二月には第三次移住者一二二人がパイロン駅に到着した。一〇人の花嫁移民が含まれていたため「花嫁移民団」と呼ばれたが、中には写真結婚の組もあり、数々の話題を残した。その頃日本で流行った「お富さん」が持ち込まれ、移住地内でも愛唱された。また、この移住地で入植以来初めての結婚式が二組あった。更に、移住者は後で知るのだが、パス・エステンソロ大統領が伴もつれずこの移住地に立ち寄り、移住者たちの生活ぶりを見て、後から取材するように指示したらしい。

一方、土地問題は急を要した。米国やボリビア側の協力により、空からの視察、地上の

41　ボリビア政府の派遣教師は農務省所属。農村の教育のため教師を派遣するが、施設、教材などすべて受入れ側負担。

グランデ河を渡る筏
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

太い木は二人がかりで切った（オキナワ日本ボリビア協会提供）

入植初期の授業風景
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

調査を行った結果、サンタクルス州北方の第二の都市モンテーロから東方グランデ河方向の五〇キロ地点が適地と結論し、各班から代表を出して詳細調査を行った。その結果に基づき、総会で移動を決定した。土地の配分計画はモンテーロ市からグランデ河に向かう東西幹線道路を基軸に南北直角の支線道路をつけ、その道路に沿って間口五〇〇メートル、奥行一〇〇〇メートルのロッテ割りを行って、各戸五〇ヘクタールの割り当てとした。その作業が終わったのは六月三〇日である。

土地の配分方法については種々議論した結果、兄弟、親戚、友人、同村人などでグループをつくり、抽選を受け、割り当てられた土地をグループ内で各戸の配分地を決める。グループ毎の抽選をするための順番を決めるために抽選をするという手順を踏んだ。如何に公平で、不満が生じないように配慮したか、その真剣さが伝わってくる。七月十二日、くじ引き総会が開かれ、全員の配分が決定した。移住して二年近くを経てやっと熱望していた五〇ヘクタールの地主になれる目途がついたのである。

四　新なる出発、三度目の移住地

（一）オキナワ移住地の建設と拡大

三度目の正直、新しい移住地への沖縄移民五二〇人余の移動は、一九五六年（昭和三一）九月十六日に始まり、一〇月三日には完了した。うるま移住地からの移動が約二カ月を要したのに対し、たった十八日である。移動距離、輸送手段、組織訓練などの差もあったが、それだけ皆の気持ちが高揚していたとも言えよう。幸い、米国からの援助でブルドーザー二台が到着していたので、移住地造成にフル活動した。

一九五七年（昭和三二）一月には米国防省からラーディング少将、リーディング中佐やボリビア開発庁総裁が視察に来訪した。米国もボリビアも沖縄移民の開拓状況に関心を払っていたのである。モンテーロ市から移住地に伸びる幹線道路の舗装工事（予算二三〇万ドル）の計画により、沖縄移住地の開拓がボリビア政府の東部開発計画に組み込まれていることも明らかになった。七月には米国援助のトラック二台も入り、約束の十八万ドル

移住地の道路造成工事
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

入植初期の住居
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

の援助が着実に実施されていく。最終的にはブルドーザー二台、トラクター六台、トラック二台、収穫機、製材機、精米機などが援助され、移住地の基盤造りに役立った。それを実施したのが「コロニア沖縄農業協同組合」であり、初期は農協活動よりも移住地造成、教育、医療など行政的な業務がほとんどであった。その年の十二月には第四次移民団が到着。一方、ボリビア政府からは団体地権に基づいて一八六人分の個人地券が交付されて、名実ともに五〇ヘクタールの地主となった入植者も出た。移住地の面積一万五〇〇〇ヘクタールは沼や湿地帯などで約三割が不可耕地になるため、翌年の五月に第五次移民団が入植すると、移住地はほぼ満植状態になった。

受け入れ委員会は第二の移住地として現移住地の南隣接地の払い下げを土地改革庁に申請したが、旧地主デンマーク人ファン・ブルンとの交渉が難航する。一九五九年（昭和三四）二月、旧地主との話し合いがつき、土地改革庁による面積一万六〇〇〇ヘクタールの測量を終え、第二移住地[42]が誕生した。その年の三月、グランデ河の氾濫により、第一移住地北部一帯が冠水して陸稲が全滅する被害が生じ、一部は換地を余儀なくされた。彼らは四月に到着した六次移民団と共に、第二移住地の最初の入植者となった。受け入れ準備はほとんど出来ていなかったので、土地の測量、道路伐開、土地の配分、飲料水、教育など初期の移民とまったく同じような苦労を重ねる。

一九五九年（昭和三四）一月、琉球政府のボリビア駐在事務所が開設され、移住地全体の対外交渉の窓口となる。[43]特に、米国政府からの第二及び第三の移住地に対する各二〇万ドルの援助機材の導入の他、病院建設、道路整備など総額一〇〇万ドル余に及ぶ開発援助の実施を担当したのであった。

琉球政府は新設の第二移住地が確保されると、第六次以降、第十三次移

表５　移民団資料

移民団	出港日	移住地到着日	団長	世帯数		移住者数	船名
				家族（人数）	単身		
第１次	1954.6.19	1954.8.15	西平　守蔵	60（230）	48	278	チサダネ
第２次	1954.7.18	1954.9.14	儀間　真徳	24（106）	21	127	テゲルベルグ
第３次	1955.12.17	1956.2.14	比嘉　久喜	26（109）	13	122	チチャレンカ
第４次	1957.10.22	1957.12.24	大城　良正	39（209）	5	214	チサダネ
第５次	1958.3.19	1958.5.28	宮島　　繁	41（212）	8	220	チサダネ
第６次	1958.10.18	1959.1.8	照屋　　弘	38（213）	4	217	テゲルベルグ
第７次	1959.4.19	1959.7.15	与那嶺仁助	45（243）	2	245	ルイス
第８次	1959.7.19	1959.9.25	平良　正光	33（207）	1	208	チサダネ
第９次	1960.2.19	1960.4.22	屋宜　宣栄	20（125）	4	129	ルイス
第10次	1960.4.19	1960.7.21	長嶺　　稔	29（175）	5	180	ボイスベン
第11次	1961.2.18	1961.4.20	津嘉山朝敏	23（156）	0	156	チサダネ
第12次	1961.4.11	1961.6.23	津嘉山朝照	20（139）	0	139	テゲルベルグ
第13次	1961.5.18	1961.7.20	喜友名朝市	28（186）	1	187	ボイスベン
第14次	1962.2.18	1962.4.21	仲伊部正人	30（198）	0	198	チチャレンカ
第15次	1962.3.19	1962.5.18	安里　太寿	28（193）	0	193	ボイスベン
第16次	1962.5.19	1962.7.27	城間恒太郎	21（116）	2	118	テゲルベルグ
第17次	1963.3.19	1963.5.20	金城　珍春	17（120）	0	120	テゲルベルグ
第18次	1963.4.19	1963.6.23	金城　亀助	14（71）	5	76	ルイス
第19次	1964.4.19	1964.6.20	徳永　盛永	19（98）	4	102	ボイスベン
合　　計				555（3106）	123	3229	

42　第二、第三移住地の行政区はサンタクルス州ワルネス郡トコメチ村に属す。

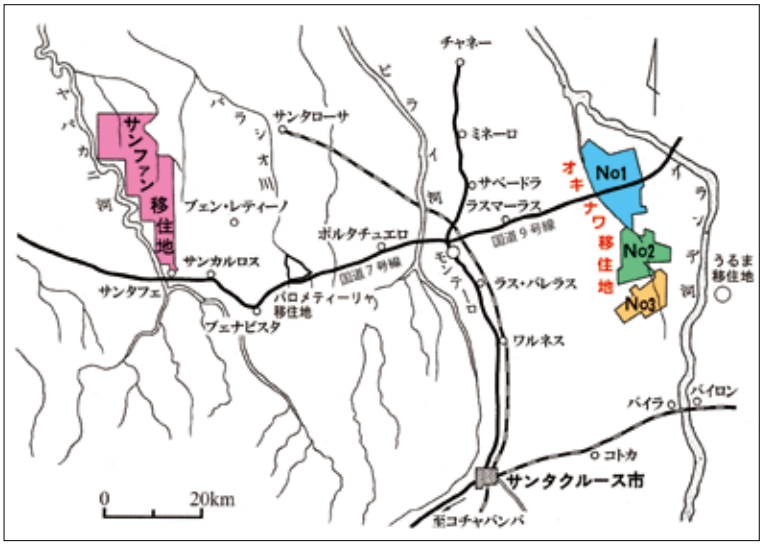
43　琉球政府ボリビア駐在所は一九五九年一月から一九六九年六月まで設置。歴代所長は伊集朝規、赤嶺隆、比嘉賀光の三人。

民までの三年間、八回にわたって、続々と移民を送出してきた。現地の受け入れ体制を無視した送り出しだが、現地側は自分たちの営農に追われながらも、最大限の受け入れ準備を行っている。第一移住地をモデルにして、「（沖縄第二移住地）ヌエバ・エスペランサ農業協同組合」が組織された。組合の役割や機能は行政的業務も含めほぼ同じである。この第二移住地も一九六一年（昭和三六）七月、第十三次移民団一八七人が到着してほぼ満植になり、一部は新しく設定される第三移住地に入植する。

一九六一年（昭和三六）九月、受け入れ委員会は沖縄第三移住地として第二移住地に平行する南側の隣接地一万六〇〇〇ヘクタールの土地の団体地権を取得する。これによって沖縄移住地の総面積は第一、第二、第三合わせて四万七〇〇〇ヘクタールに達した。長さが南北五〇キロ、東西十七キロに及ぶ広大な面積である。琉球政府は一九六二年（昭和三七）二月第十四次移民団から第三移住地向けに送り出し、第十三次移民の一部が加わって入植を開始した。同じ年に続いて第十五次、第十六次移民団が到着したので、六七戸をもって「沖縄第三農業協同組合」を結成し、米国からの援助機材を活用して移住地造成に取り組む。第三移住地の場合、琉球政府計画移民の最後となる第十九次移民団（一〇二人、一九六四年六月）が入植した頃は組合員八三人に増加したが、その後は転住者が出て組合員の数は減少する。更に、一九六〇年代後半から沖縄自体の経済復興が進み、後続する移民が減少したため、第三移住地には未配分地が残った状態が続く。そこへボリビア人の農民団体が侵入し、勝手に耕作を始める。農地改革法では未利用地を耕作する者に地権を与えることとなっているので、法律的に排除することは出来ず、一九七〇年（昭和四五）に四〇〇〇ヘクタール、一九七五年（昭和五〇）に三四〇〇ヘクタールを割譲し、総面積は八六〇〇ヘクタールに縮小した。

一九六七年（昭和四二）、日米交渉により、沖縄の日本復帰を前提に海外の沖縄出身者の管轄は日本政府に移り、移住事業は日本政府の下に行われることになって、琉球政府ボ

図８　サンタクルス州におけるオキナワ移住地の位置図



宮内久光作成

沖縄移民の像
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

リビア駐在所及び琉球海外移住公社ボリビア出張所業務は一九六七年六月三〇日をもって終了し、[44]海外移住事業団が管轄することになった。事業団は「沖縄移住地総合対策五か年計画」を策定し、移住地全体の指導に取り組んだのである。

（二）移住地の農業の変遷

沖縄移民の使命は農業開拓である。最初の瀬長・稲嶺使節にパス・エステンソロ大統領が述べたように、[45]沖縄移民に対しては東部サンタクルス一帯の農業開発の先導的役割を期待して、入国が許可され、移住地の無償払い下げが認められた経緯がある。米国政府もボリビア政府も移住地を何度も訪れ、その進捗状況に注意を払っていた。

三度目の移住地の中に各々の配分地が確定したといっても原始林そのままであり、入植者はそこを切り開いて仮小屋のような住処をつくり、周りを伐採して米や野菜を作り、自給体制を整える必要があった。乾期の間に樹林を切り倒して乾燥させ、火入れをする原始的な焼畑方式である。これらの作業はグループで行われた。焼き払われた切り株の間に主として陸稲、トウモロコシ、ユーカ（タピオカ）が植えられ、よく実ったが、換金できるのは米だけであった。人力による開拓は遅々として進まないように見えたが、毎年開墾面積は増え、移住地全体の米の生産は着実に伸び、一九六七～六八年にはサンタクルス州全体の一〇％（四〇〇〇ヘクタール余）を越えた。「アロス・オキナワ（オキナワ米）」のブランド名が全国に知られたのはこの頃である。しかし、一九六八年（昭和四三）二月第一移住地の大半が水没する未曾有の大洪水が起こり、更に、その後三か年干ばつが続いて、移住地の農業は壊滅的な打撃を受ける。[46]そのため、多くの離農者が出て、近隣諸国へ転住した（その頃の推定家族転出一〇〇戸余、単身二三〇人余）。移住地は海外移住事業団の協力を得て代替作物として当時サンタクルス地方でブームになりつつあった綿作を基幹作物として選定した。二五〇ヘクタールの試作の結果が良好で、全移住地が綿作に傾斜した。一九六四年（昭和三九）に組織された三移住地の農協の連合会（一九六四年に組織）は任意団体から法人組織に移行し「コロニア沖縄農牧総合協同組合」（ＣＡＩＣＯ）

44　琉球海外移住公社はオキナワ移住地の融資業務を行い、ボリビア出張所は一九六三年六月から一九六七年六月まで設置。所長は上原盛毅。

45　『稲嶺一郎回顧録　世界を舞台に』（既出）。

46　サンタクルス地方の気候は通常、五月から八月までが乾期、一〇月から二月までが雨期となっている。

当時の焼畑農業
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

機械化された大豆畑
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

が誕生する。一九七二年（昭和四七）、五〇万ドルの借入金により繰綿工場が完成し、植付面積も四四〇〇ヘクタールまで伸びた。移住地は綿ブームに沸き、焼畑農業から一気に大型機械化農業へ進展する。しかし、綿の値段の世界的暴落の上に、天候異変による大雨や浸水被害が出て、一九七〇年代後半から減反が続き、ついに、一九八一年（昭和五六）繰綿工場の閉鎖に追い込まれた。一〇〇万ドルを超える多額の借金が残った[47]。窮地に陥った移住地は大豆作を中心とする三度目の営農転換を行った。一九七〇年代末に大豆工場がサンタクルス市北方に建設されて、買い入れが始まると、営農経費の安さや耕作の容易さにより、大豆栽培が沖縄移住地にも拡がる。綿作の失敗から大豆一辺倒ではなく、裏作に小麦を導入、これが成功した。当時、この地方では小麦の栽培は困難視されていたので、移住地の成功はボリビア農業界から注目を浴び、後に政府から「小麦の首都」の称号を授けられる。大豆の生産増強により、組合も組合員も息を吹き返した。その後も干ばつや浸水など厳しい試練が続くが、それを乗り越え、現在は成熟期に入りつつある。入植当時の大原始林は見渡す限りの畑作地帯に変貌している。

第一次移民で浦添村屋富祖からボリビアへ移民した山城興喜さんは、最初にトラクターを購入した一人である。三年ほどいた第一移住地は水害が多かったため第二移住地へと移り、主に米を作った。一九七四年から一九七五年間に第二ヌエバ・エスペランサ農業協同組合長も務め、一時は八〇〇ヘクタールの農地を所有していた。同じく第一次移民の比嘉秀明さん（港川出身）家族はうるま移住地から転住の際、移民団と離れてコチャバンバ近郊で農業を始めたが失敗の連続だった。トウモロコシ、ミカン、サトウキビと作物を替え、養豚業まで始めたが家計は苦しく、結局長男の秀充さんと二男の健男さんは日本企業に職を求めた[48]。

一九九一年（平成三）、ＣＡＩＣＯは創立二〇周年記念祭典を開催したが、パス・サモラ大統領はじめ内務大臣、農務大臣、商工大臣他政財界の要人たちが出席する盛況さであった。ＣＡＩＣＯの最近の資料によると、二〇一四年（平成二六）現在組合員一二〇人、二〇一二～一三年の大豆の作付面積二万五二六六ヘクタール、小麦一万八九六二ヘクタール、ソ

47　移住地の多額の借金は一九八〇年代のハイパーインフレ時に返済でき、ＣＡＩＣＯも移住者も救済された。

48　『浦添市移民史　証言・資料編』九七～一〇四頁。

第二移住地に住む山城さん夫妻。夫興喜は第1次、妻徳子は第4次チサダネ号でボリビアに渡った。（山城徳子提供）

上空から見た第一移住地内にあるCAICOの工場（オキナワ日本ボリビア協会提供）

ルガム二〇七二ヘクタール、砂糖キビ一〇九九ヘクタールとなっている。畜産では牛一四九八八頭、豚七一二四頭の飼育の他に、一日一万リットルの牛乳を生産している。ＣＡＩＣＯは製油工場、十一万トンの貯蔵サイロ、製麺工場、給油所二カ所などを所有し、総合組合としての基盤を固めた。サンタクルス州内では優良組合として評価を高めている。また、最近では新しい農法として不耕起栽培[49]が注目され、移住地全体に広がりつつある。

（三）移住地の教育

入植して直面するのは教育の問題である。配分を受けた土地は全くの原始林であり、食糧の自給を確保するためには家族全員が森林の伐開作業に取り組まなければならなかった。一方、子供たちの成長は早く、教育を停滞させるわけにいかず、かつて教職にあった人たちの力を借りて、入植一年足らずのうるま移住地でもパロメティーリャでもすぐに幼稚園や小学校の教室を開いている。教育に対する熱意は高く、教材教具がそろわなくても終戦直後の沖縄の学校のような粗末な教室で授業を始めたのである。沖縄移住地に移ってからは、広大な土地に各戸が分散入植したので、道路が整うまでは学校を分散したり、校舎の建設、教師の確保、教材の整備などすべてゼロからはじめたため、運営の中心である人農協は苦労した。当時のボリビア政府の教育制度は、都市部は教育省、農村部は農務省の管轄で、移住地は農務省に属していた。農務省は教師の給与だけ負担して派遣する状態で、給与レベルも低く、遅配がちであったから、ストライキも頻繁に起こった。授業日数二〇〇日の内三分の一しか行われない年もまれではなかった。移住地では派遣されてくるボリビア人教師の宿舎や教材費、給与の補てんなどを行って優秀な教師を確保すべく支援した。基本はボリビア人によるスペイン語の授業であったが、補完的に日本語教育も並行して行われた。第二移住地では沖縄系ペルー二世のボランティア四人を数年間招へいする試みもなされ、効果を上げた例もある。ボリビア二世たちも第三移住地の学校を中心に十数人が参画している。また、学校運営に対する宗教団体の役割は大きかった。カトリックやプロテスタントの設置する学校が子供たちの学力ばかりでなく、情操面での指導に良い

49　作物を栽培するのに、土地の耕耘をせず、前作物の根・株を残したまま、作物を栽培する方法。米国からブラジルに伝わり、パラグァイの日本人移住地で成功を納める。それが沖縄移住地にも波及してきた。

入植当時の移住地の通学手段
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

移住地の学校
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

影響を及ぼした。琉球政府時代には移住地の校舎建設やサンタクルス市寄宿舎建設補助などが行われたが、日本政府に移管されてからは教育面に対する支援は現地教師給与の補助、日語教師の指導育成、教材整備、奨学金などきめ細かく行われ、農村地帯の学校としては最高のレベルに達した。卒業後、都市の中学、高校へ入学しても遅れはなかったのである。最終的には第一移住地に三校（カトリック、新教、組合校）、第二移住地に一校（組合校）に集約されている。浦添市出身の山城徳子さんは、第二移住地にあるヌエバ・エスペランサ小中校で、一九九〇年から十一年間校長を務めた。[50]

移住地の発展により、日本政府の援助は内容が変わり、漸減していくが、特筆すべきは沖縄県が一九八六年（昭和六一）から他府県では見られない独自の「教員派遣事業」を実施して、[51]合計三〇人の教師が派遣された。移住地の生徒たちが派遣教師を通して常に日本や沖縄の新しい知識に接し、沖縄との絆を強める意識を育まれる一方、赴任した教師たちにとってもボリビアの県系人の子供たちと接触することにより視野が広がり、沖縄の教育界にその体験が生かされるので、この制度を沖縄県が終了させるのは双方にとって大きな損失といえよう。

（四）移住地の医療

移住地では医療は死活問題なので、うるま移住地においても入植と同時に医療班を編成して緊急に備えたが、移民団に正規の医師の付き添いはなかったので、団員の中の医介補と助産婦が担当した。[52]うるま移住地の病気発生の時は昼夜をおかず看病に忙殺された。そのお陰で多くの人が救われたといわれる。沖縄移住地に移ってからは一九五八年（昭和三三）に診療所を準備して現地の医師を雇用して対応したが、翌年に琉球政府から初めて正規の医師が一～二年間交替で派遣された。以来、八年間に九人の医師が派遣され、[53]移住地の診療に当たっており、海外移住事業団に移管後も医師の派遣は継続された。診療所は当初、各移住地に設置され、米国の援助では第二移住地に中央病院が建設されたが、患者数が圧倒的に多い第一移住地に中心機能を移すなど試行錯誤を重ねて、現在の第一移住地に

50　二〇〇九年九月聴き取り調査による。

51　沖縄県は一九八六年「ボリビア国沖縄県民移住地教育施設への教員派遣に関する要綱」を定め、二か年交替で三〇人の教員を派遣した。

52　医介補は徳田満、助産婦は神谷ヨシ。

53　琉球政府派遣医師は高良健、野原雄介、當間恵三、吉田朝啓、金井孝雄、普天間弘、山里将成、外間章、赤嶺康夫、以上九人。

オキナワ第1診療所及びスタッフ
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

集中整備することになった。海外移住事業団は診療所運営の支援策として医師や看護師の給与、診療所施設、医師・看護師の宿舎の建設、救急車の配置、高度な機材器具の整備に資金を投入して、地方病院並みの設備を整えた。常勤医師二人（移住地出身）、看護師等医療スタッフ十数人、救急車一台の規模で、運営はオキナワ日本ボリビア協会が当たっている。患者の数は年間八〇〇〇人を越えて、非日系人が半数以上を占め、更に増加傾向にある。一方、事業団では移住者子弟の中から医師や看護師を育成するために奨学資金制度によって援助したので、後には日本からの医師の派遣なしに移住地出身の医師で診療所を運営できるようになった。ユニークなのは、一九八〇年代に派遣された医師の指導の下に移住者自身による「保険組合制度」が組織されたことである（会員数約六〇〇人）。一定額の掛け金によって診療費の四割を補助する制度であるが、その成果は日系社会にも大きな影響をもたらすことになると思われる。また、今後の課題としては、病院の健全経営の他に老人問題が深刻化しつつある。移住地は広く、隣に行くにも車がなければ簡単に移動できないので、老人は集会の機会が少なくなり、孤立する恐れがあり、老人福祉や介護の観点から、早急に取り組むべき課題となっている。

五　成熟する移住地社会

（一）オキナワ村の誕生と日系社会

開拓初期の頃は広大な原始林の中に一五〇から五〇〇家族が各々の配分地（道路沿い五〇〇メートル、奥行き一〇〇〇メートル）に入植していたので、全体を統括する各農業協同組合は道路維持管理、学校、医療、戸籍事務など社会生活に必要なあらゆる業務を担わされ、組合職員が休暇をとれたのは一九五八年（昭和三三）の正月三が日が初めてだったというくらい多忙であった。その費用はすべて入植者全体で負担した。

すでに述べたように、一九七一年（昭和四六）「コロニア沖縄農牧総合協同組合」（ＣＡＩＣＯ）が法定組合として認可されると、組合活動に専念することになる。それに対応するため移住地全体の資産の整理を行いながら、一九七八年（昭和五三）「オキナワ日本

オキナワ村役場。右から2人目が平良初代村長
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

学童検診の様子
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

ボリビア協会」が設立された。これにより行政と農協活動が混在していた変則形態は完全に分離され、合理化された。オキナワ日ボ協会は行政関係の事務をすべて引き継ぎ、移住地の呼称を「オキナワ第一移住地」「オキナワ第二移住地」「オキナワ第三移住地」に統一し、六つの行政区画を設定した。因みに、二〇一四年（平成二六）四月現在の会員数は一区一三五人、二区一八四人、三区九二人（以上第一移住地四一一人）、四区九一人、五区一六七人（以上第二移住地二五八人）、六区一五二人（第三移住地）、合計八二一人である。

そして、一九九八年（平成一〇）四月十八日、ボリビア政府はオキナワ三移住地とその周辺の集落を包含した行政区「オキナワ村」を承認した。これまでのボリビア国サンタクルス州ワルネス郡ロスチャコス村コロニア・オキナワから独立してワルネス郡オキナワ村[54]となった。日本人の特殊な移住地からボリビア社会の中の正式な自治体として認められたのである。一九五〇年（昭和二五）一月一〇日ボリビアの片田舎リベラルタの沖縄県人会が具志寛長の提唱する「沖縄村」の建設を決議してからまさに半世紀、その夢が実現したのである。米国、ボ国、日本の協力援助は受けつつも、ウチナーンチュだけで集団移住地を造り上げ、オキナワ村の誕生を見るに至ったことは沖縄県の移民史上最大の成功例として評価されるべきものといえよう。

なお、サンタクルス州内にはオキナワ移住地と同じ時期（一九五五年）に建設されたサンフアン移住地[55]がある。一九九二年（平成四）までに長崎県はじめ全国から二九九家族一六七六人が入植し、入植五〇周年を迎えた二〇〇五年現在、約七五〇人が居住している。主として米、大豆、養鶏、果樹を生産して営農も安定しているが、入植初期は沖縄移民と同様の辛苦を経験した経緯がある。現在はサンフアン日ボ協会（行政活動）とサンフアン農牧業総合組合（農協活動）が中心になって診療所、学校、公民館、電気、電話などの社会基盤も整備され、サンフアン村としてボリビア政府の行政区に登録されている。

また、ボリビア全体の日系団体としては「ボリビア日系協会連合会」があり、構成団体としては「オキナワ日本ボリビア協会」、「サンフアン日本ボリビア協会」、「サンタク

54　最初の村長選挙により第四次移民団として入植した小禄村出身の平良勝芳が選出された。その後にも村議や収入役として沖縄系移住者が参画している。

55　戦前、南洋諸島で製糖経験を持つ西川利通がサンタクルス州イチロ郡サンカルロス村（サンタクルス市より北西一三〇キロの地点）において製糖業と砂糖キビを経営する目的でボリビア政府から土地の払下げと移民の入国許可を取得し、八七人の入植を行った。種々の経緯から西川が手を引き、日本海外協会連合会がその後を引継ぎ、移住を推進した。

豊年祭での三線演奏（2012年）
仲村美幸提供

オキナワブランドのパスタや米（2012年）
仲村美幸提供

ルス中央日本人会」、「ラパス日本人会」等一〇団体があるが、実際に活動しているのは「ラパス日本人会」までの四団体である。他は殆ど名目だけなので、日系コミュニティーはサンタクルスの三団体が中心になって活動している状況である。その他に、ボリビア沖縄県人会（サンタクルス市沖縄県人会を含む）や他の県人組織、スポーツクラブ（フラテルニダ・フジ）や趣味の団体（三線、琉球舞踊、琉球国祭り太鼓、エイサーなど）も盛んである。

かつてはボリビア浦添市郷友会が活動しており、その推薦を受けた二世が、一九九一年（平成三）に南米移住者子弟研修生として浦添市へ派遣された。浦添出身者は、今は家族単位で浦添や沖縄とのつながりを大切にしている。二世・三世の多くが、日本で働いたり、結婚して生活したりしている。

（二）変わりゆく移住地の生活

移住初期、配分地を割り当てられたといっても本部に繋がる道路だけで、五〇ヘクタールの土地は原始林のままであったから、入植者は自分で森林を切り開いて仮小屋を建て、その周りに野菜やコメ、パパイヤやバナナを植え自給体制を整える必要があった。当初一番苦労したのは水で、手掘り井戸は塩分が多く、飲料に適しないため、近くの沼か、敷地内にブルドーザーでため池をつくって飲料水を確保した。ドロで濁った水は生卵かミョウバンで濁りを取り除いた。一九六〇年代後半から米国のＡＩＤ資金援助で二～三戸に一基の割合で、掘り抜き井戸（平均七〇メートル）を掘削し、続いて残りを海外移住事業団が助成したので、水の問題は解決した。移住地の市街地では水道組合が結成されるまでになっている。炊事は自家製の窯に薪を使う時代が長かったが、一九七〇年代に石油コンロが入り、ガスコンロへと替わる。ランプも石油缶を利用したカンカランプから石油ランプ、マントルランプに替わり、電気が導入されるまで続く。移住地の電化はボリビア政府に対する日本政府の食糧増産援助見返り資金によって実施され、一九七九年（昭和五四）に始まり、一九八二年（昭和五七）に全移住地の電化が完了する。移住地内が電化される

移住地の運動会
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

移住者の現在の住宅
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

入植当時の住宅
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

とすべての生活が一変した。住宅も恒久的な煉瓦建てになり、電化製品が揃えられ、文化的な生活が享受できるようになる。また、電話架設も一九九一年（平成三）に沖縄第三移住地まで導入されると日本を含めた外国との連絡が身近になり、一九九八年（平成一〇）にＮＨＫの衛星放送が各家庭でも受信できるようになると日本との距離感が一層縮まった。交通手段としては入植当時は徒歩か馬や馬車しかなかったが、道路が整備されるに従い、オートバイ、半トラックが主流になり、現在では子供の送り迎えの車まで所有するようになって、日本の農村と変わりはない。また、入植以来、毎年欠かさずに行われているのが運動会で、全移住地の最大の行事となっている。最近では、ゲートボールやカラオケ、エイサーなどの大会が盛んに行われるようになった。三線や琉球舞踊、太鼓などの沖縄伝統芸能も継承されており、移住地の生活にゆとりが出てきたといえるであろう。

移住地では歴史の節目ごとに記念行事を行っているが、次のように特徴付けられるように思う。

入植一〇周年祭（一九六四年）　試練に耐えた時代
入植二五周年祭（一九七九年）　模索と基礎固めの時代
入植四〇周年祭（一九九四年）　安定と世代交代の時代
入植五〇周年祭（二〇〇四年）　発展と成熟の時代
入植六〇周年祭（二〇一四年）　新しい展開への時代

特に、四〇周年記念式典には沖縄移民に対して最初の導入の時から理解を示し、協力援助を惜しまなかったビクトル・パス・エステンソロ元大統領が八七歳の高齢にもかかわらず出席し、感動を与えた。移住地の公園には彼の功績をたたえ、「沖縄移民の父」として銅像が建立された。この式典において友利金三郎祭典委員長は「この式典は一世から二世への世代交代の節目であり、ボリビア国民との尚一層の調和を図る新しい時代の幕開けとして、また、これらの施設は、移住地の歴史が一世から二世へ移る象徴として考えられ、我々の子孫が大事に活用されることを願ってやまない」とあいさつした。その通りに時代は移っていくのである。

移住地のゲートボール
（オキナワ日本ボリビア協会提供）

主な参考文献
「日本人ボリヴィア移住史」（一九七〇年、日本人ボリヴィア移住史編纂委員会編）
「ボリビア・コロニア沖縄入植二五周年誌」（一九八〇年、コロニア沖縄二五周年祭典委員会編）
「うるまからの出発」（一九九五年、コロニア・オキナワ入植四〇周年記念誌編纂委員会編）
「ボリビアに生きる」（二〇〇〇年、ボリビア日系協会連合会他編）
「ボリビアの大地に生きる沖縄移民」（二〇〇五年、コロニア・オキナワ入植四〇周年記念誌編纂委員会編）
「五〇年前後の思い出」（一九六三年、八木宣貞、Ａ４版プリント）
「新垣庸英とボリビア逃亡移民」（一九九二年、『移住研究』第二九号）

第七節　南米からのデカセギ

一九九八年（平成一〇）九月であったと思う。移民調査でブラジル・アルゼンチンを訪れ、帰国手続をサンパウロ市グァリュロスにある国際空港で行った。グァリュロスは一九八〇年（昭和五五）頃まで県出身移民が小農場シャーカラの借地で蔬菜を生産し、その生産物を露天市のフェイラで売っていた。その土地が現在ではサンパウロ国際空港となっている。帰国当日、空港内は日系人出稼ぎの往来が多く、出国手続のため日系人がビッシリとつめかけ異様な雰囲気につつまれていた。琉球大学法文学部地理学教室が南米における沖縄県出身移民調査を実施したのは一九七八年（昭和五三）のブラジル日本移民七〇周年記念式典が行われた六月であった。

その後、数回の移民調査につづいて一九八五年（昭和六〇）のボリビア国の調査の際は南米をハイパーインフレーションが襲った。調査中、サンタクルス市のホテルで週一度のホテル代金を支払うのに輪ゴムで束ねた紙幣をさし出した。受け取る側も一束の金額をこちらの示す通り納得して詳しく紙幣を数えることなく受け取ったことにはおどろいた。このような事態は日本では想像もつかない情景であった。

沖縄移住地（コロニア・オキナワ）の農業の経済活動について調査中、ある晩、移住地在住の若者たちに声をかけられた。コロニア・オキナワの実態と若者がかかえている意見を聞いてほしいという。彼等若者は幼児時代に移民し現在ではりっぱな青年に成長している。自分達の親は若者の意向にかまわず無視したような立場をくずさずにいる。自分達をいつまでも子供扱いにする親に対抗するすべもなく一九五〇年から一九六〇年代を経験した。世代間の意識あるいは認識のずれは確執となって苦悶し、親に強くつめよることもできずコロニアを脱出し日本へ出稼ぎに出た。集まった若者の中には出稼ぎ経験者もいた。出稼ぎで儲けた金で農地を購入し自営農として独立している者もいた。では、コロニア・オキナワからの出稼ぎはいつから出現したのだろうか。彼等の体験によれば、既に一九八〇年代初期から始まっていたことがうなずける。さらには、海洋博建設工事当時から始まっていたという指摘もきかれた。

話題をサンパウロに戻す。私は特に一九七〇年代から一九八〇年代にかけてサンパウロ市を中心に各地域で沖縄県系人の代表的な職業といわれた露天市の活動を調査した。県系人の活気にあふれた、露天市のフェイランテといわれた市場はどこでも賑わっていた。県系人の家庭に共に居住しフェイラの仕事の一部始終に参加して早朝から夕方まで調査させていただいた。蔬菜、果物、肉類、パステスなどについて詳しく勉強することができたのは幸であった。ところが、南米のインフレーションは一九八〇年中期から顕著となり財政の動向は困難を極めた。一九九〇年代に至り、サンパウロ市街地の露天市におけるフェイラもかつての活況はうすれ以前のような日系人の姿が目立たず静かなフェイラのたたずまいとなってしまい、その様変わりに圧倒された。このようなフェイラの変貌の背景にはかつての元気な働き手が加齢したこともさることながら高インフレが大きく原因していた。各国でデノミが行われ通貨改称が実施された。ブラジルでは長期にわたって親しまれたクルゼイロがレアル（ヘアル）と改称された。

一方、日本では一九八〇年代から一九九〇年代にかけバブル景気が続き、特に製造部門において外国からの労働力の導入を強く刺激した。インフレでうわついた南米からの労働者の日本への流入をもたらした。しばらくは短期の労働者の往来から労働人口が増大するとその頻度も加速していった。これは、その初期は南米移民の還流といわれた。南米ではこれを「日本への出稼ぎ」と呼ぶようになり、日本の各地の都市に居住する南米人の人口が急増した。しかし、一九九二年（平成四）からバブルがはじけ景気後退と不況により出稼ぎを巡って新たな状況が出現するようになった。それでも出稼ぎは続き出稼ぎ労働者の流入は続行した。出稼ぎ労働者の日本入国への手続は複雑なルートを変え雑多な問題が指摘されつつ、また出稼ぎの経済的条件も変化していった。出稼ぎ労働者の「３Ｋ」[1]へのかかわりが広く流布されたことは衆知の通りである。そして各地に居住する南米労働者は「出稼ぎ」労働者と呼ばれた。出稼ぎの最も多いブラジルでもブラジル語の外来語として「Dekassegui」が定着している。

日本政府は労働者往来の激しい南米からの日系労働者の入国を容易にすべく入国管理法

サンパウロ市のパステス売り（1998年）石川友紀提供

パステス。肉や野菜など、いろいろな具が入っている。（2008年）前津政廣撮影

1　３Ｋ（きつい、汚い、危険）の分野の職場が嫌われた。『ｉｍｉｄａｓ一九九二』集英社

を改正し入国をより弾力性をもつ制度にした。この制度改正により日系二世、三世及びその配偶者には必要な経済条件を満たすためという立場から就労可能な一年～三年の滞在査証が与えられるようになった。その結果、日本における外国労働者に占める南米からの労働者数は急速に増加した。特に日系人の最も多いブラジルでは一九九〇年（平成二）から急増し一〇万人レベルまで増加した[2]。二〇〇七年（平成十九）の在留者数は三一万人ほどに増加し、韓国人、朝鮮人、中国人につぐ外国人集団となった。日本経済が一九九〇年に下降したにもかかわらず南米から労働者は流入し続けている。ブラジルにおいてブラジル日系社会が大きく変動したことも直接間接に連動している。特に一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけての変動である。一九二七年（昭和二）サンパウロ市郊外で設立された日系移民の農業協同組合があった。この組合は南米の日系経済組織に成長した。ジャガイモをはじめ、ブラジル人に多様な蔬菜を提供してきた。ところが日本移民一〇〇周年を迎える時代にいたり、一世移民が形成した「コロニア社会」内部から変動が渦まいていた。その結果、一九九四年（平成六）にはコチア産業組合や南伯産業組合中央会などが大破局を迎えコロニア社会が空洞化していった。つづいて一九三〇年（昭和五）に誕生した日系の南米銀行が一九九八年（平成一〇）には他の銀行に吸収合併に追いこまれた。かつては東京にも支店をもつ銀行であった。ブラジルの日系社会に世代交替が深く進行していたのだ。世代間の齟齬は予想しがたい事であった。

南米から日本本土への出稼ぎについては移民を多く送りだしている沖縄県は、その動態に敏速に対処すべく沖縄県に関する調査報告書を出している[3]。

一九九〇年に日本政府が行った入管法改正の実施を契機にブラジル日本文化協会は「『出稼ぎ』現象に関するシンポジューム」を催し、一九九一年（平成三）にポルトガル語、さらに一九九三年（平成五）に日本語による報告書[4]を出している。新しい入国管理法のもとに両国は具体的な法制度による協力体制の確立を実施した。たとえば、労働者の国外移住のための「国外就労者情報援護センター」の設立、「日系人雇用サービスセンター」の開設などがある。また、各主要都市の役所においても国外移住者の便宜を計る部

2　渡辺雅子編著『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人　上　論文編［就労と生活］』明石書店　一九九五年

3　『南米移住者子弟の「出稼ぎ問題」に関する実態調査報告書』国際交流財団　一九九〇年

4　二宮正人編『「出稼ぎ」現象に関するシンポジューム報告書』ブラジル日本文化協会「出稼ぎ」現象に関するシンポジューム委員会　一九九三年

署が新設された。出稼ぎ労働者が最も多く居住している名古屋市にはブラジル総領事館の新設が行われた。

この報告書（二宮正人編）のなかで森幸一（サンパウロ人文科学研究所員・サンパウロ州立大学社会学教授）による出稼ぎに関する統計分析を行ったレポートがある。このレポートによると、一九八五年（昭和六〇）から一九九一年（平成三）までの統計では、ブラジルからの日本入国者数は南米全体の五〇％を占めていたことが判明した。このことは、ブラジルに日系人数が最も多いことに起因している。次に出稼ぎ募集の就労部門の変化についてみると、一九八五年は自動車部品組み立て及び自動車部加工の部門が多かった。一九八七年（昭和六二）には電気製品組み立て、食品製造・加工、包装などによんだ。一九八八年（昭和六三）には木工加工、建設作業員、看護員、機械整備、廃品処理と多様化し、この時代に既に「３Ｋ」が出稼ぎの中で顕在化している。一九八九年（平成元）になると石材加工、庭師、トラック運転手、警備員、料理人などの分野に拡大し、やがて、キャディー、ホテル・旅館の接待係、客室係、ウェイトレス、パチンコ店店員、新聞配達などの業務まで及んでいる。出稼ぎの職種は時代とともに日本の都市社会の細部にまで浸透している。このような事態は日系人であるが故の職業の生態的拡大と普遍化が可能となったのであろう。

日本各地における出稼ぎ労働者のかかえる問題やトラブルが複雑かつ多様化した諸問題に対して手をさしのべる活動が出現したのはごく自然のなりゆきといえよう。ここで沖縄において立ちあげられた活動について言及しておきたい。衆知の通り沖縄県は移民県である。日系出稼ぎ労働者の急増するなかで、沖縄を拠点とする日系出稼ぎ労働者のための情報ネットワークづくりがあった。民間団体が沖縄で組織された。一九八九年十一月のことである。南米と日本へ連絡として国際電話がよく使用された。これら南米からの出稼ぎ労働者へ後援としてＫＤＤが積極的に民間団体によるネットワークづくりに参画して「沖縄日系インフォメーション」が設立された。このインフォメーションを設立したのは若い沖縄青年とそのブラジル二世の妻であった。出稼ぎ労働者が各地で言葉の障害や生活習慣の

第４回「出稼ぎ」現象に関するシンポジュームのロゴマーク。配布されたノート等にはこれが付されていた。「デカセギ」が南米において広く認知されていることがわかる。島袋伸三提供

違いから地域社会とのコミュニケーションが困難をきたしていることを手助けすべく団体の設立を行った。ここに沖縄国際情報センター（Okinawa International Information Center, OIIC）は人と情報を理念の下に設立を次のように定めた。

（一）海外に移住したウチナーンチュとその子孫との交流を物心両面で援助する
（二）外国文化と沖縄文化の交流の促進
（三）海外のウチナーンチュとその子弟を含む外国人との交流の拠点にし親善、交流活動を展開する
（四）海外ニュース情報の提供

沖縄国際情報センターは運営員の下に事務所を愛知県豊橋市におき、活動として以下のようなことを行った。

（一）手紙や日本での生活に必要な書類の翻訳（英語・ポルトガル語・スペイン語）
（二）日本滞在に必要なビザ更新手続きに関する情報
（三）生活情報の提供、就職の相談、健康に関する相談
（四）ＫＤＤの協力により割引き料金（十五％引き）で国際電話がかけられる電話機の設置、電話をかける人々のための通訳
（五）日本語、ポルトガル語、スペイン語の語学教室
（六）スペイン語、ポルトガル語新聞『ＣＥＥＮＴＥ（ジェンテ）』の発行

そして、これらに加え、一ヵ月に一～二回のバザー、パーティー、コンサート、ボウリング大会、バレーボール大会、運動会やピクニックなどを行ない、各地域の人々と外国人そして日系との交流を目的とするイベントを実施し、支援活動の実績を積み重ねていった。

この組織は沖縄県から社団法人の認可をうけ活動を始めた。活動開始ははれやかにセレモニーをパレット久茂地の広場で催され、大衆の期待を受けつつ、大型ジープで活動をめざし愛知県へ出発した。

その後、一九九〇年代初期までいろいろと活動の報告があった。しかし、一九九〇年の

浜松市内で輸入雑貨や食品を扱うスーパーマーケット（2009年）前津政廣撮影

店外の掲示板に貼られたポルトガル語のチラシ（2009年）前津政廣撮影

入管法改正など社会は大きく変動した。のちほどＮＩＣと改名した。この組織はその活動が民間ボランティア団体として限界のうきめにいたった。

付記：石川友紀教授と私は設立当初よりアカデミック活動の立場から支援者となったが具体的な活動への参画はなかった。琉球大学地理学教室は南米における移民研究を続行することに平行して出稼ぎ現象に関しても研究することを期待していた。

日本社会における南米のブラジル・ペルー・アルゼンチン・ボリビアからの出稼ぎ労働者がつくる「出稼ぎコミュニティ」は各地域に形成されている。[5] その殆どは一九八〇年から今日までかなり定着しているようである。二世・三世とその子供達は文化的にはいつか母国に帰って生活することを希望している。しかしそのなかで帰国をあきらめ定住を決意した人がいる。かつて日本語に苦労した子弟がなかには高校を卒業しかつ大学卒業者が出現している。これまで日本人研究者による「出稼ぎ」研究は極めて豊富に報告されている。いくつかの博士論文がある。日本における新しいカルチュラル・スタディーズに研究者は直面している。この南米の出稼ぎコミュニティが新しいエスニック集団を形成するのだろうか。

主な出稼ぎコミュニティは各地に発生している。愛知県豊橋市、静岡県の浜松市、群馬県の大泉町などにおけるコミュニティはつとによく知られている。そこでは南米出身者の諸活動が催されている。ちなみに、群馬県大泉町の人口動態をみると、二〇一四年（平成二六）三月三一日現在において人口の十五％は外国となっている。

『百年の水流』[6]で日系社会の移民百年に際して六〇〇頁におよぶ大著を二〇一二年（平成二四）に出版（改訂版）した新聞ジャーナリストの外山脩の著書はブラジルの日系社会の歩みを見事に網羅していることで大いに評価されてよい。ポルトガル語版も出版されているという。ブラジルにおける貴重な歴史的著書といえよう。長い百年の日本移民社会を克明に記述説明しているとつい近年の日系社会の中で大きな変動が惹起したことにさほどの関心を示す気配がみられなかったのだろうか。それは一九九〇年代において、ブラジル日系社会の大きな結実あるいは成就の象徴であったコチア産業組合と南米銀行の落城と破

5　委託調査報告書（委託先／東洋大学社会学部研究室／研究代表　喜多川豊宇）『浜松市における外国人の生活実態・意識調査―日系ブラジル・ペルー人を中心に―』浜松市企画部国際交流室、一九九三年

6　外山脩『百年の水流』トッパン・プレス印刷出版有限会社　二〇〇七年

局であっただろう。この動向とほぼ同時にインフレ頃向に伴い移民の若者に緊迫した動きがみられた。一九八五年（昭和六〇）頃からゆらいだこの動向は一九九〇年代に超インフレーションが進行し、経済活動が活発に日本へ出稼ぎが行われたことである。三〇万人ともいわれた若者が日本へ流出し、ブラジルの日系社会は空洞化の恐怖におちいった。かつて最も賑わったサンパウロ市の日系人街の通りであったガルボン・ブエノ街は今までは日本語の看板はすたれ韓国のハングルが景気よくはばをきかせている。

二〇〇〇（平成十二）年以降、南米各地で移民調査していると、いずれの国でも沖縄系家族の中ですくなくとも一人ないし一家族が出稼に出ていることが判明した。

出稼ぎの大半を送り出しているブラジルで出稼ぎが大きな話題となったことは自然の動きである。この時代に山里繁アウグスト著「七人の出稼ぎ」が邦字新聞『ニッケイ』に二年にわたって連載された。名前で分かるように著者は沖縄二世で、一九二五年（大正十四）サントス生まれである。青年時代に奮起して京都の龍谷大学で仏教学仏教史を専攻し親鸞の研究を行い、大学院生で僧籍に入った人物である。同時に作家として日系社会では広く知られている。ちなみに「七人の出稼ぎ」はニッケイ新聞社より二〇〇五年（平成十七）に出版された。ポルトガル語版も同時に出版されたという。[7] 山里は「七人の出稼ぎ」はフィクションであると強調する。しかし、宗教学者らしく彼は著書の「序」において「出稼ぎ」について次のように説明する。

> 出稼ぎとはある個人、または集団が時代の経済的不況、政治的不安定、社会的な排斥などをひきおこす現象で、急速に人種、生活、文化、精神、情緒面に変化を及ぼすプロセスである。この混合・変化、または進化現象にはともすれば抵抗、葛藤、排他、独善、無関心、自棄などがともなって摩擦や軋轢が生じ、受け入れ側の住民や社会の排斥の原因になる点がある。

その結果、このような違和感が生ずると、出稼ぎはその社会に溶け込めず、つねにのけものにされて低い社会的位置におしやられ、いわゆる三Ｋ労働にまわされ、安賃金に甘ん

7　山里アウグスト『七人の出稼ぎ』ニッケイ新聞社　サンパウロ　二〇〇五年

じなければならない。そうなると、出稼ぎの目的である「資金を稼ぐ」「一旗上げる」ことはいやになり、ただ「おもしろおかしく暮らす」ことへ走り、希望もわかず、意気もあがらずすたれた生活におちいる。そこに落ちこむと家族、子弟へ影響をおよぼし、若い世代の意欲をそぎ、登校拒否や不良化にいたる。そこでブラジル人でもない日本人でもないプライドに欠けた子孫がはびこることになる。そして筆者は「日系出稼ぎよ、日本に新たな差別される集団を形成するなかれ」と期待をこめた警句を送っている。

「七人の出稼ぎ」には文字通り七人の人物が登場する。初めに、ブラジル最高学府（サンパウロ州立大学）の工学出身の青年富田パウロ圭司が登場し、結婚資金を得るために日本にやってくる。祖父が部落民出身の藤原は自らの葛藤をいやすべく出稼ぎに出る。日本人の母と黒人の父をもつ混血児は日本の大学への入学を希望してやってくる。パラナ州のロンドリーナで中学校の教師をしていた日系女性はドイツ系の恋人とままならず出稼ぎとなり日本へ向かう。サントス生まれの沖縄系二世は金髪の離婚女性とつきあうが父親に猛反対され半ばやけになり出稼ぎに向かう。木戸カルロスの父親は日系二世、母親はブラジル原住民グァラニ族の酋長の娘である。従兄弟にすすめられ好奇心から日本へ向かう。これら人物がそれぞれのしたたかなドラマを展開していく姿が描かれている。

これまで、出稼ぎが日系社会にのこしたものはプラス面であれ、マイナス面であれ、決して無視出来ないものがあることは『ボーダレスになる日系人』[8]で宮尾進は厳しくかつ冷静に見つめている。

8　宮尾進『ボーダレスになる日系人―ブラジルの日系社会論集』サンパウロ人文科学研究所　二〇〇二年

ハワイで出会ったウラシーンチュ

津波　清

二〇一〇年（平成二二）一〇月、ハワイ諸島はオアフ島、マウイ島、ハワイ島で調査を実施した。調査は石川友紀琉球大学名誉教授、矢部・ドミンゴ・久美子ハワイ東海インターナショナルカレッジ職員、津波清浦添市立図書館長の三人で実施した。矢部さんにはハワイ沖縄連合会、浦添市人会との連絡調整、聞き取り調査時の通訳、運転手として大変お世話になった。矢部さんは沖縄で生まれ育ち、琉球大学を卒業後、イリノイ大学で修士号を取得した優秀な人材である。沖縄で高校の英語教師として教鞭をとっていた頃、ハワイから「ＡＬＴ（assistant language teacher）」として沖縄に赴任していたドミンゴさんと結婚し、ハワイに移住した。矢部さんは私の娘と友人という縁もあり、快く現地調査員を引き受けてくれたのである。

ハワイ島での調査後の記念撮影（向って左より矢部さん、宮城盛吉さん、息子さん、石川調査員）2010 年　津波清撮影

ハワイ諸島への浦添からの移民は一九〇四年に開始された。シュガープランテーションが全盛の頃、大勢のウラシーンチュが労働者としてハワイへ渡ったのである。しかし、残念なことに戦前に移民した一世はすべて他界している。

オアフ島には現在二百名余の浦添出身者が生活している。今回の調査では六人に面談する機会があった。粟国亀子さん（一九二二年十二月十七日生）、上地芳子さん（一九二六年年三月十五日生）は高齢にもかかわらず元気に調査に応じてくれた。粟国亀子さんはハワイ生まれの二世であり、上地芳子さんは通訳兵として沖縄に派遣されていた上地賢一さんと恋仲になり、花嫁としてハワイに渡った。当時ハワイの新聞にも大きく報道された。

我如古ツル子さん（一九三〇年六月二日生）は呼び寄せによる花嫁移民である。夫の我如古幸助さん（故人）は先妻を亡くした後、後妻は沖縄からということで嫁さがしに浦添にやって来た。字城間の親戚をたよりに嫁さがしに奔走していたところツル子さんを知ることになった。ツル子さんは幸助さんの熱心さに心打たれてハワイへ嫁ぐ決心をしたということであった。現在幸せな老後を送っている。オアフ島ではモイリリ墓地も訪問したが、浦添出身者の墓碑を数多く発見し、先人たちの足跡を偲ぶ哀悼の思いに深い感慨の念を禁じえなかった。

マウイ島にはオアフ島同様りっぱな「沖縄カルチャー会館」があり、沖縄出身者がさまざまな文化的行事やサークル活動、集いの場として活用している。マウイ島ではレイモンド・トシオ・我如古さん（一九四八年十二月一日生）、レイチェル・ハナコ・城間さん（一九二七年四月二七日生）、パ

ウリン・オトメ・宮平・サイキさん（一九三〇年二月十一日生）の聞き取り調査を行った。マウイ島も他の島々同様「シュガープランテーション」が崩壊し、新しい産業の創出になかなか名案がなく、かつての繁栄を取り戻すのも並大抵ではないと思った。しかし面談した三人はとても元気でそれぞれが生活をエンジョイしている様子がうかがえた。

ハワイ島では五人の聞き取り調査を行った。中でも津波清範さん（一九二一年一月十九日生）、宮城盛吉さん（一九一九年十一月五日生）は共に年齢を感じさせない程元気であった。宮城盛吉さんは県立二中を卒業後ハワイに渡り、真珠湾攻撃の直後、米軍人となり、第百大隊に編入され、イタリア戦線に参加したとのことであった。この第百大隊は日本人二世で構成した軍隊で大いに戦果をあげた部隊として知られている。激戦の中、多くの戦死者を出しながら、無事生還し、戦後はハワイ島で生活することになった。津波清範さん、宮城盛吉さん両名とも、年老いた現在、常夏の島で家族と共に悠悠自適な生活を楽しんでいるようであった。

ハワイ諸島の調査では浦添市人会の宮城会長、西原副会長が積極的に協力してくださった。西原副会長は同郷の城間出身であること、又、戦後米国軍人として沖縄に勤務した経験、『城間字誌』作成の際に面談した経験もあり、今回の調査でも熱心に応援してくれた。

シュガープランテーションの全盛時代を偲ばせるマウイ島で唯一操業する製糖工場（2010 年）
津波清撮影